

ペルソナカグラ FESTIVAL VERSUS —少年少女達
の真実—

ゆめうつつ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

忍の定めは死の定め。影に生まれて影に散る。

忍の命は儂い。忍の命は報われない。それは誰も知らない名も無き花。

だがここに、忍達は邂逅する。

同じく死の定めに捉えられた、一人の少年と――

これより始まる物語は、決して有りえない筈であった運命の宴。

忍とペルソナ使い、少女と少年。

限りある未来の輝きを、守らんとする者達よ。

1年間――

その与えられた時の果てに、少年少女達は何を見るのか。
何を感じ取り、何に涙するのか。

目次

#1 Encounter of Spring

1話	Burn My Dread	1
2話	善の務め	11
3話	国立半蔵学院 忍学科	18
4話	Crisis	27
5話	Mass Destruction	42
6話	戦いのあと	50
7話	この不思議な感覚	57
8話	過去と運命と	68
9話	求む！強い奴！	76
10話	避けられぬ戦い 前篇	89
11話	避けられぬ戦い 後編	107
12話	Mr. Easy Going man	122
13話	そうだ、忍部屋に行こう	136
閑話 I	心の力 side：半蔵学院	144
14話	飛燕使いの器	161
15話	狂気の境界線	176
16話	I'll Face Myself	186
17話	やすらぎ	205
18話	任務と葛藤の狭間	216
19話	父のため母のため	232
閑話 II	心の力 Side：街の記憶	248
20話	Deep Breath Deep Breath	

21話	忍修行 前編	289
22話	忍修行 後編	301
23話	悲しみのリボン	314
24話	己が必要とされる為に	328
閑話Ⅲ	心之力 Side:街の記憶 その2	348
25話	シャドウクライ	368
26話	覚悟と向き合う	390
27話	覚醒	408
28話	Overdrive	422
29話	絆	438

#1 Encounter of Spring
1話 Burn My Dread

2009年 3/5 深夜——

「うわあああああつー！」

闇の中で、一人の少女の叫び声が木霊する。

夜も更けた午前零時過ぎ、普通の人間ならば目にするこことさえ憚られるような路地裏での出来事だ。

少女の姿は奇妙そのものであった。

歳の頃は17歳程であり、容姿は年相応の可愛らしさを備えた美少女である。

その長い黒髪を結び上げたポニーテールによって、活発そうな印象を感じさせるであろう。

服装は、この地より遠く離れた東京に存在する進学校『国立半蔵学院』の制服姿であり、首には赤いスカーフが巻かれている。

体付きの方は驚くことに、全国の女性が羨む様な卓越したスタイルをしていた。俗っぽく言えば、男好みをするバストを備えていたのだ。

だが、本当に奇妙なのは、少女に握られている二振りの脇差である。

模造刀でもなんでもなく、真正銘カタナの切れ味を備えたそれを構えている様は、時代錯誤も甚だしいだろう。

しかし、彼女にとってはそれこそが日常である。

忍——、それは遙か昔、戦国の世にあった影の存在。

人の中に隠れ、探り、煽り、騙し、壊し、そして殺す——

あらゆる闇の仕事を引き受けていた陰の存在。

いつしか人々の記憶から消え去り、おとぎ話のように語られるだけになってしまった翳の存在。

しかし、彼らが人々の心から消え去ろうとも、人々の業が変わることはない。

いまだ闇の世界に生きるものは必要とされ続けている。

忍は今も存在しているのだ。

そして、彼女こそが現代に生きる忍の一人。

学生数1000人を抱える名門マンモス進学校『国立半蔵学院』の知られざる裏の姿。

『内閣特務課報部課報一課付特殊機密課報部員養成所』——通称、忍学科。

その選抜メンバーの一人であり、名を『飛鳥^{あすか}』といった——

その日、飛鳥にはとある試験が課せられていた。何のことはない、彼女の忍としての昇段試験である。

さらに昇段試験のついでに帰省し、自身と同じく忍である祖父に稽古をつけてもらうという修行の一環でもあった。

その為に彼女は本拠地である半蔵学院から離れ、出身地に近い地方市街地で試験を行っていたのだ。試験内容は、密書の受け渡しという、忍にとっては有り触れた任務を想定した簡単なモノである。

だが、闇に紛れてビル街の屋上を跳んでいた時にそれは起こったのだ。

「あれは……、人？」

よく目を凝らさなければ分からないほどの暗がりの中、飛鳥はあるモノを目にする。

どうやらそれは人間であったようだ。今流行の服を着た成人男性である。尤も、金色に染められた髪やピアスを見る限り、真つ当な人間でも無いのだろうか。

しかし、地べたに座り込み、ビル壁を背にしたまま虚ろな目で宙を見上げているという様子は明らかにただ事ではない。

忍という裏社会の人間としての勘により、言い知れぬ不安を感じると、試験中にも関わらず飛鳥はその男性の下に降り立った。

「あの、大丈夫ですか……？」

「……ああああ……、……うううううう……」

その優しさから飛鳥は気遣うように男性に話しかけるが、彼には全く届いていない。

だらしなく半開きになった口からは呻き声が漏れるだけであり、意思疎通すら不可能だ。

「一体どうしたんだらう、この人？　もしかして、『悪忍』の仕業なのかな？」

飛鳥は考えられる可能性として、自分と同じであり、しかし決して違う存在である『忍』の姿を思い浮かべる。

「……とにかく、連絡してこの人を保護して貰わないと」

自分一人だけで悩んでいてもしょうがないと考えた飛鳥は、担当試験官へと連絡を取る。

状況の通達、および彼の保護申請をした後、息つく暇もなく周囲を警戒する。試験官が来るまでの僅かな時間であっても、異常事態である為、忍としては当然の心構えだ。

だがしかし、それは突然起こったのだ。

カチリと、何処かで時計が鳴らすような歯車の音を、飛鳥は確かに聞いた——

始めに感じたのは、寒さ。体の芯まで、心の底までを凍てつかせるような寒さを飛鳥は感じた。

気付けば、辺りは真の暗闇に包まれている。表通りからわずかに届いていた街灯は全て失われ、残ったのは狂気的なまでの月明かりだけだ。

足元の水溜まり——ビルの配管から漏れ出したモノだ——は血となり、死臭が蔓延する。

そして、先程まで飛鳥の目の前にいたはずの男性は、漆黒の棺桶へとその姿を変えていた。

異常——全てが異常だった。

突如として変貌した死の世界に、飛鳥は対応することが出来ず、頭が真っ白となる。

そしてそれは間違いなく、飛鳥の決定的な隙となる。

彼女の知覚を超えて、突如として暗がりから現れた“それ”に体当たりを仕掛けられ、飛鳥は成す術もなく吹き飛ばされたのだった。

そして舞台は、冒頭へと至る——

飛鳥は“それ”に吹き飛ばされ、地面を何度もバウンドした後、コンクリートのビル壁に勢いよく叩き付けられる。

背中から体当たりを仕掛けられた為に軽く息を詰めたが、すぐさま立ち上がって体制を立て直す。

それでも身体には幾ばくかの痛みが走り、集中を阻害する。手足には擦り傷や打撲の跡が痛々しく残り、制服もあちこちが解れ、擦り切れていた。

その所為で下着を露出した状態という色気を感じさせる姿となつてしまっているが、残念ながらその点を指摘する者はこの場には存在しなかった。

「……そんな、なんでこんなところに『妖魔』が……」

独り言ちて“それ”を見やる。おそらくは、この存在こそがこの死の世界、或いは結界を作り出したのだろう。

彼女の目線の先にある“それ”は、まさに異形そのものであった。姿形は真っ黒なスライム状だ。ねちやりねちやりと気味の悪い音を滴らせながら地面を這い、見る者に嫌悪感を与えるだろう。

そこからさらに不細工な腕が二本伸びており、その手を飛鳥に差し向けているが、友好の証などではないのは明白だった。

そして、そのスライム状の身体には青い仮面が貼り付けられている。額に『I』と描かれた、その無表情の仮面を飛鳥に向けると、一声戦慄いた。

「ツー」

粘液状の身体とは思えぬほど素早い動きで飛鳥へと肉薄し、攻撃を仕掛ける。その指先は鋭く尖っており、人間を引き裂くことなど容易だと示していた。

飛鳥は咄嗟に脇差を交差させ、盾代わりにして受け止めるが、異形の尋常でない膂力により間も無く圧倒させられる。

その事実を飛鳥は信じられなかった。彼女たち忍は忍術という能力を使い、人間の限界を遥かに超えた力を発揮できるからだ。

この化け物がその飛鳥を圧倒したことは即ち、忍すらも超える存在であることに他ならなかった。

「……………くうっ、……………やあっ!!!」

このまま押し切られる訳には行かないと判断した飛鳥は、防御を取り止めて攻勢に転じる。

脇差を寝かせ、身を屈めることで力の流れを逸らさせると、化け物は体制を崩し、地面から僅かに浮いた状態となる。

それを確認すると一気に脇差を跳ね上げ、異形を宙へと投げ飛ばした。

いくらこの化け物が尋常ならざる膂力を持っていても、足掛かりのない空中では完全な無防備だ。そして、その絶好の隙を見逃す飛鳥ではない。

「貰ったー!」

眼にも止まらぬ斬撃を放ち、二刀の脇差で異形を十字に切り裂く。狙ったのは、顔と思しき仮面そのものだ。

彼女の手には、間違いなくその化け物を切り裂いたという手応えを感じていた。

———そう、確かに感じていたはずであった。

「……………えっ?! きゃあー!」

突如として、飛鳥の居た空間が爆ぜる。それは、直径1メートルほども達する爆炎だ。

回避する間も無く、熱と衝撃波を全身に受け、再び壁に叩き付けられる。今度は運の悪いことに当たり所が悪かったらしく、飛鳥は一瞬意識を失いかけた。

気力だけでなんとか持ち直すが、身体に力を入れることは出来ず、脇差も取り落としてしまった。

(そんな、新手!?)

霞む視界に映ったのは、暗がりから現れた新たな異形だった。

宙を浮遊する女性の生首にティアラを乗せた異形は、先のスライム擬きと同じく不気味な容姿をしている。

姿形以外の相違点を上げるならば、その仮面であろう。目元のみを覆う赤色の仮面には『II』の文字が書かれていた。

だが、彼女の驚愕はそれだけに止まらなかった。

「嘘でしょ……」

ねちやり、と聞きたくもない音を確かに耳にする。

飛鳥へと継るように這ってきたその化け物は、今しがた彼女が確実に切り捨てた筈のモノであった。

その証拠に、その仮面には剣筋に沿った十字傷が刻まれている。だが、その傷は瞬き程の一瞬で塞がってしまう。

つまりは、自分ではこの異形たちに一切のダメージを与えることが出来ないという事だった。

今の飛鳥は考えるまでもなく、不味い状況に陥っている。

試験官には既に『妖魔』に襲われている」という救難信号を送ってはいるが、先程から通信機器は沈黙し、その機能を果たしていなかった。

例え到着したとしても、一切の攻撃が通じないという化け物にどう対処すればいいのか。

もしこんな存在が表社会に出てしまえば、混乱は必須である。だからこそ、この化け物を何とかしなければならぬ。

それこそが、彼女たち『善忍』の意義でもあるというのに——
彼女は自分が今だ忍としては未熟だと思っている。日々修行に明け暮れ、仲間たちと切磋琢磨し、忍としての技術を鍛え上げてきたが、それでも足りないと感じていた。

それは謙遜ではなく、さらなる高みを指すための向上心だ。それこそが飛鳥の『忍』としての原動力であり、美点でもある。

だが、今この場においては、彼女の無力感を加速させるにしか至らなかった。

（——ううん、駄目、諦めちゃ！）

しかし、それでも彼女の心は折れない。

最後の気力を振り絞り、懐から巻物を取り出し構えると、宣言する。

『忍転身』——！

その言葉に呼応するように光が飛鳥を包むと、彼女の姿は一新していた。

破れたブラウスは一瞬にして真新しくなり、その上にベージュ色の

カーデイガンを着ている。

青色のプリーツスカートは緑色のチェック柄へと変貌し、拾い上げた二振りの脇差を握るその両腕には、新たに籠手が装備されていた。これこそが『忍』の本当の力を発揮するための力、『忍転身』であり、この姿こそ彼女の忍装束なのだ。

「一気に決める！ 『秘伝忍法』！」

立て続けに、飛鳥は惜しむことなく自らの手札を切り続ける。

『秘伝忍法』、それは文字通りに秘伝の忍術であり、今の彼女が持てる切り札の一枚だ。

手を抜く必要などない。全力を以って、目の前の異形を排除する！

「『二刀繚斬』！ やああああああっ!!！」

二刀の脇差を持ち、腕を交差させて深く構える。強大な力を両足に溜め込み、一気に解放。そのまま二体の異形に向けて突撃し、全力で振りぬく！

忍術による気を纏った脇差は緑色の剣筋を残して、二体の異形を同時に切り裂いた。無論飛鳥は、今度は警戒を怠ることなく異形に行く末を見つめている。

両断された二体の異形どもは呻き声を上げてもがき苦しみ、やがて内一体のスライム擬きの異形が泥の様に溶けていった。その様子を見て、飛鳥は確信する。

（よし……こいつらは『秘伝忍法』なら倒すことが出来る！）

どうやら、単純な物理攻撃は全く効果が無いが、忍術の気を纏わせた『秘伝忍法』なら効き目があるという事らしい。

しかし、その『秘伝忍術』の攻撃でも100%のダメージが通る訳では無いようだった。ティアラの方は、今だ健在であるのだから。

「くっ、だったらもう一度！ 秘伝——!?!」

——此処で、飛鳥は致命的なミスを犯した。

止めの一撃を放とうとしたとき、ティアラが再び戦慄いたのだ。彼女はそれを、先程と同じ魔術めいた火炎の攻撃だと判断し、回避行動をとった。

後ろに跳躍し、ティアラから大きく離れる。しかし、熱も爆風も何

も感じることはなかった。何故ならば、ティアラの魔術が効果を及ぼしたのは、傍らのスライム擬きの方であったのだから。

「……………え？」

今度こそ飛鳥は、完全に思考停止した。

無理もないだろう、倒したと思っただけのスライム擬きが復活し、その傷が塞がっていくのだから。

そう、飛鳥のミスとは、スライム擬きの方を倒したと勘違いしたことであった。

確かにスライム擬きは、彼女の秘伝忍法によって大きなダメージを負い、その身体はヘドロの様に溶けてしまった。

しかし、ただそれだけだ。それはただ体制を崩しただけのダウン状態だったのに過ぎないのだ。

焦り故のミスであった。普段の彼女ならば、このようなミスなど決して犯さなかったであろう。

だが、そのたった一度のミスによって引き起こされたのが、目の前の現実である。

復活したスライム擬きが、呆けた表情で見つめたままの飛鳥を一瞥すると、戦慄いた。彼女への憎悪が籠められた、怨嗟の声だ。

「——っ?! きゃああああああっ!!!」

飛鳥を襲ったのは、鋭い爪でも爆炎でもなく、身を裂くほどに冷たい吹雪だ。スライム擬きの魔術によって引き起こされた冷気の攻撃は、残酷なまでに靦面であった。

飛鳥は全身を凍えさせ、脇差を取り落とし、体力の限界でついに地面に倒れこむ。そればかりではなく、身体の各所に張り付いた薄氷が行動を阻害させる。

つまりは、逃げることさえままならないのだ。最早彼女はまな板の上の鯉でしかない。

(……)まで……、なの?)

自身に迫る化け物を見て、飛鳥はついに心が折れる。迫りくる死の恐怖により、心が絶望へと染まっていく。

彼女は忍である。今まで数多の死線を潜り抜け、死にかけたことも

1度や2度ではない。元より、忍というものは常に死と隣り合わせにあるモノだ。

しかしそれでも、彼女の本質は17歳の少女でしかない。何より、自分が今日死ぬなどと想像できる人間がどれほどいるのだろうか？

飛鳥は自分の不甲斐なさから、一筋の涙を零す。今まで感じた事も無いほどの無力感に苛まれているのだ。

眼前には既に、化け物が迫っている。スライム擬きが手を振りかざし、ティアラは髪を撓らせる。

そして彼女は、理解する。

自分は、ここで、死ぬ——

(ごめんなさい……………、みんな……………)

飛鳥は、ゆつくりと目を閉じ、己の『死』を受け入れた——

「——驚いたな」

不意に、誰かの声が聞こえた。

「え？」

鈍い音が盛大に響き、二体の化け物が大きく吹き飛ばされる。そして飛鳥の上に、一つの影が落ちた。

それは一人の人間であった。灰色のコートに黒のスラックスという有り触れた服装であり、その首にはMPプレイヤーと耳かけ式のイヤフォンが掛けられている。

そんなどこにでもいるような人間が、飛鳥に接近していた異形を二体同時に蹴り飛ばし、間際の彼女を救ったのだ。

飛鳥を庇うようにして立っているが、彼女からは見上げるような構図である為、その顔を窺うことは出来ない。少なくともこの人間は、飛鳥の知る誰でもない。

だがそれでも、彼がこの胸の内の恐怖すらも焼き尽くしてしまうような存在であることを、飛鳥は確信出来ていた。

「この世界で俺以外に、コイツらに対抗できる人間がいるなんてね」

彼は——声質から、恐らくは男性だと思われる——地面に倒れ伏した飛鳥を一瞥する。

「けど、まあ——」

しかし、彼はすぐさまその視線を異形どもへと移し、呟いた。

「——『どうでもいい』か」

その声には自身への興味が一切含まれていないのを、飛鳥は確かに感じとっていた。

2話 善の務め

一筋の閃光が駆ける。銀色に煌めくそれは、彼の手に握られた、月明かりに照らされる一振りのナイフだ。

忍などと比べればその技量はあまりに拙く、未熟だった。それだけで飛鳥は、彼が忍などでないただの一般人であることを理解する。

あまつさえ、一瞬垣間見た彼の武器も忍が握るような業物ではなく、有り触れた既製品であったのだ。

(あんな武器で、対抗できるはずが——)

だが、飛鳥のその思考は容易く打ち破られることとなる。

ティアラの髪がうねり、数多の槍となつて飛来する。その速度は凄まじく、人間を容易く串刺しにするだろう。その力を、飛鳥は身をもって知っている。

彼女の驚愕は此処からだ。彼はその攻撃に真正面から突っ込んでいき、難なく回避したのだ。髪の毛を逸らし、往なし、時にはそのナイフで触手を切り裂いて、ティアラへと肉薄する！

「ふっ」

そして、軽く息を吐いてナイフを一閃——。真一文字に仮面を切り裂くと、ティアラは闇に溶ける様にして、雲散霧消する。今度こそその異形は、完全に消滅するに至つたのだつた。

その様子を、飛鳥は信じられないようにして見つめていた。

(もしかしてこの人は、この『妖魔』たちと戦い慣れているの？ ううん、それだけじゃない)

あの攻撃を回避し、接近し、一撃で屠つたその技量は見事の一言に尽きるが、彼女の興味を引いたのはそこではなかった。

飛鳥が思い至つたのは、一切の物理攻撃手段が通じず、秘伝忍法でさえ倒すに至らなかつた異形を倒した武器、或るいは能力である。

「……………む」

ティアラが消え去っていく様を無感動に見ていた彼だが、ふとあることに気付いたように、ちろりと視線だけを横に動かす。

その先には、這いずるようにして暗がりへと消えていくスライム擬

きの姿があつた。どうやら力量の差を悟つたらしく、恐慌状態のまま逃走したようだ。

追いかける素振りを見せない彼に対し、逃がす訳には行かないと飛鳥は伝えようとするが、その心配も杞憂に終わる。

「ん」

やる気が微塵も感じられない声を出して、彼は空を撫でる様にして軽く腕を振るう。

しかし、ただそれだけの動作で真紅の火炎がスライム擬きを包み込み、塵一つ残す事無く焼き尽くす。

その異能はまさしく、先の異形らが使つた魔術と同一に他ならないではないか。それを見て、飛鳥は確信する。

（間違いない！ この『妖魔』たちを倒すことの出来る能力を、この人は持つているんだ！）

毒を以て毒を制す様に、忍には忍で以て対抗する様に、同じ能力であるからこそ倒すことが出来るのが道理である。

しかしその場合、何故彼がその能力を持つているかという疑問に帰結する。尤も、今の彼女にはその考えまで至らなかつたのだが。

飛鳥の心の内にあるのは、命が助かつたことの安堵と、彼をどうやって引き込むかという打算と、何故かもやもやとした正体不明の感情であつた。

再び何処かで、歯車が鳴る。

ぴしり、ぱきぱき、がらがら————続いて聞こえたのは、影の天盖が碎ける音。

そうして世界には色が戻り、月は暖かい明かりを取り戻す。

飛鳥たちは、元の世界へと帰還したのだ。どうやら、彼がああの化け物を殲滅したことで、この影の世界もその役目を終えたいらしい。

おそらくこの世界は、先の化け物が獲物を襲うための『結界』であるのだろう。飛鳥はその恐ろしさに身震いする。

そしてそれは、その化け物を屠つた彼にもであつた。

「……………」

「……………」

痛いほどの静寂が場を支配する。つい先刻まで、忍と化け物と異能者による闘争があったとは思えないほどだ。

その異能者は飛鳥の方に身体を向けると、彼女に向けて手を翳す。瞬間、飛鳥はびくりと身を竦ませた。

尤もそれは、かの炎や冷気の魔術を向けられると思った故の恐怖ではない。彼女が反応したのは、もっと別の要因である。

彼が手を翳すと、淡い光が彼女を包み込みその傷を癒す。どうやら、あのティアラも使った治癒の魔術を、彼女に対して行使したらしい。

謎の異能という不可思議な能力を使われることに一抹の不安を感じなかった訳ではないが、その効果は絶大であった。

「……凄く——」

先の戦闘で付けられた全ての傷が、瞬く間に塞がっていく。

その凄まじさに呆けてしまうが、ふと自分の身体に影が差したことに気付く。少年が飛鳥の傍に歩み寄り、手を差し伸べていたのだ。

飛鳥はその意味を理解するのに一瞬の時間を要したが、気恥ずかしくも手を差し伸べ、助け起こしてもらった。

そして、彼は用は済んだとばかりに踵を返すと、路地裏の出口を指して歩き始める。

「あ、……ありが——えっ?! ちょ、ちよつとまって下さーい!」

——その場に、飛鳥を残したままで。

まさか声すら掛けて貰えないとは思ってもよらず、飛鳥は声を張り上げて彼を呼び止める羽目となった。

「……何?」

相も変わらずやる気のない声で彼が返事を返す。その声に含まれている感情も、拒絶や困惑ではなく、心底どうでもいいという無感動であった。

その違和感に飛鳥は気付くことなく、何とかして彼の気を引こうと必死である。彼女は何としてでも、彼から化け物とその能力に関する情報を引き出さなければならぬのだから。

「あの！もしよかったら、お話を聞かせてもらいたいんだけど……」
「……何を？」

言葉だけ見れば逆ナン紛いと誤解されかねない台詞で彼に問いかける飛鳥だが、それに対する彼の返答は素っ気無いものであった。と言うよりも、先の台詞から一字増えたのみである。

そこで漸く飛鳥は彼の異常性——齒に衣着せずに言えば、絶望的なまでの意志薄弱、そしてコミュニケーション能力の欠落に気が付く。

「えつと、その、あの……」

「何も無いなら、帰っていい？」

その雰囲気には圧され、二の句が告げないでいる飛鳥を見やると、興味が失せた様に——元より無かったのだろうが——その場を後にする。

遠ざかっていくその背に慌てて言葉を投げかけるが、その返答も当然の如く、無味乾燥な言葉であった。

「あ！その、あの化け物のこととか、貴方の能力は何なのかとかを教えてください——」

「悪いけど、話せることなんて何も無いよ」

そして今度こそ彼は、振り返ることなく歩み始める。

その耳にイヤフォンを掛けて、外界からの干渉を遮断し、一人きりの世界へと埋没するのだ。

飛鳥には去っていくその背中が、酷く寂しそうに見えるのだった。

先程、治癒を掛けられたときに一瞬垣間見た彼の顔を飛鳥は忘れられない。

暁の夜空の様な、濃紺色の長い前髪によって半分ほど覆われた中性的な顔立ち。年頃は飛鳥とさほど変わらないだろう。

その中に満月の如く浮かぶ、銀灰色の瞳。それはさながら、一種の芸術品の様な美しさがある。

だが、飛鳥はその瞳に、生気を感じることが出来なかった。彼が生きた人間であることを、断言できなかった。

彼という存在は、『死』に満ちている——

(どうして、貴方はそんなに)――)

飛鳥は最後まで遠ざかる彼の背中を見続けていたのだった。



その後、漸く到着した試験官に事の顛末を話し、倒れていた男性も保護して貰う。当然試験は中断となり、飛鳥の昇段はお蔵入りとなった。

その上、件の異形について忍学科本部に報告する為、今後の修行も早めに切り上げて、半蔵学院に帰還することを命じられる。

半蔵――、伝説の忍とまで謳われた祖父の稽古が無くなってしまったのが、飛鳥には何よりも痛手だった。

彼女にとつては踏んだり蹴ったりな話であるが、忍は基本的に縦社会である。部下が上司に逆らえないのは、何処の組織も同じなのだ。

よつて飛鳥は、学院に帰還するための準備に急遽追われることになり、こうして慌てて荷物を纏める羽目になっているのだった。

忍装束、刀、手裏剣、苦無、忍法書――、そういった「裏向き」の荷物を嚴重に保管し、その筋のルートから運んでもらう。

最低限度の装備だけは自分で持つため、帰還の道中は無くても困らない物ばかりを詰め込んでいるが、そんな事態が起こるなどそうそう有りはしないだろう。

よつて飛鳥は、太巻き――寿司職人でもある半蔵作だ――という弁当兼土産を手荷物として、学院へと帰って行くこととなった。

その太巻きを手渡された際、半蔵に言われたとある言葉が彼女の中で燻っていた。

『「力」とは、剣と盾が一体となつて初めて意味を持つモノ――』

飛鳥はまだ未熟じゃが、その意味は理解できているじやろう。

……だがのう、お前の話を聞く限りその少年は、危ういモノを感じさせる。

もしその少年に会うことが有るのならば、ワシからこう伝えておいてほしい。

決して力の「意味」を履き違えるのではないぞ——、とな』
そう語った祖父の姿は、飛鳥にはどこか弱々しく見えた。

普段から「女の子は太巻きを食べている姿が良い」等とのたまひ、セクハラを繰り返す不遜な態度は何処へやら。

其処にあったのは、孫の命を救ってくれた少年に対して不安な気持ちを寄せる、一人の老兵の姿であった。

飛鳥自身も、半蔵の言葉が分からないでも無い。

確かにあの少年が振るう『能力』は、強力無比な力である。だがしかし、飛鳥はそれ以上にあの少年の存在が気に掛かっていた。

碌に実戦経験も無い、自分自身ですら感じ取れるほどの濃厚な『死』の匂い。おそらくは、一般人ですら彼のその雰囲気を感じ取ることが出来るだろう。

故に飛鳥は、彼が力に溺れてしまうよりも、その『死』に呑まれてしまうのではないかという恐れがあった。彼を唯一、間近で見た飛鳥だからこそ、そんな懸念を抱いてしまった。

その雰囲気を纏う彼は、果たして何者であるのか。そんな思いが彼女の頭にこびり付いて、離れることが無い。

今、飛鳥は水上バスに乗り、東京・浅草を目指していた。

幾ら忍とは言えど、交通機関を頼りにするのは現代人の性なのである。

甲板に出て東京の街並みを眺めていると、浅草名所の一つである『炎のオブジェ』が見えてくる。

それを見て漸く、飛鳥は帰ってきたという気持ちになるのだった。「予定より随分と早く帰ってきちゃったけど、始業式に参加できるのは良かったかな？」

半蔵学院の始業式は明日、4月7日である。尤もこれは忍学科の始業式ではなく、進学校としての半蔵学院の始業式だ。

それでも年頃の少女としては、忍の世界だけでなく学生気分も味わいたい為、こうしたイベントは積極的に参加したかったのだ。

しかし、表側の生徒ではない彼女が実際に参加できる訳ではない為、気分だけになるのだが。

「じっちゃんの修行は受けられなかったけど……。飛鳥、立派な忍を
目指して頑張りますっ！」

そう意気込み、半蔵手製の太巻きに齧り付く飛鳥。

……傍目からには、かなりアレな光景となってしまうているのだ
が、誰にも目撃されなかつたのは幸いといえよう。

こうして、学院までの道中は、何事も起こらずに帰還することが出
来たのであった。

時は2009年4月6日、半蔵学院の始業式は直ぐそこまで迫って
いる――

3話 国立半蔵学院 忍学科

2009年 4/6 朝

通い慣れた、しかし懐かしくもある半蔵学院の校門を飛鳥は潜り抜ける。

学院を離れていた期間は一月程度の時間だったが、確かなホームシックの様な感情を彼女は抱いていた。

足取りも軽く、学院の敷地内を意気揚々と歩きながら、飛鳥はある場所を目指していた。

まだ学院が始まっていない為か、人影は疎らである。それでも学業や部活で僅かに登校している生徒たちの間を彼女は歩いていく。

途中、気配を消し忘れた為に眼を惹いてしまった彼女に声掛けしようとした男子生徒が数名居たが、一般人に忍を捕まえろと言うのは土台無理な話だろう。

学院の片隅に存在するその部屋は、何も知らない者から見れば只の『和室』としか映らないであろう。

精々が「茶道部が部室として使う」などという予想を立てて、其処で完結してしまうに違いない。だが、この和室こそが彼女の目的地であった。

念入りに辺りを見まわし、盗聴やら監視やらの類がないことを確認すると、床の間に飾られている掛け軸を背にする。

瞬間、飛鳥の姿は掻き消えてしまう。もしもこの場に第三者の目があつたならば、そう映ったことであろう。

実際には、壁に施されていたどんでん返し——忍の世界での一般的な隠し扉である——を潜り抜けただけだ。

つまり彼女が目指していたのは、半蔵学院の『表側』から『裏側』——、即ち忍学科へと至る道である。半蔵学院内には、こういった隠し扉などが幾つも設置されているのだ。

「飛鳥、ただいま帰還しましたっ！」

障子戸の形をした自動ドアを開きつつ、部屋中に響き渡るような大声で飛鳥は宣言する。

浅草に着いたのが帰ってきたという「感覚」であるのならば、このただいまという宣言は「実感」を齎すモノだ。

まだ1年程度しか通っていない半蔵学院忍学科だが、彼女にとっては既にもう一つの実家とも呼べる場所なのである。

「お帰りなさい、飛鳥さん。……一般生徒に見られるとは感心しませんね。気配を消すのは忍として基本ですよ？」

「うっ……、見てたんですか斑鳩いかるがさん。すいません油断してました……」

椅子に腰掛け、優雅にお茶を啜っていた少女、斑鳩。飛鳥と同じく忍学科の生徒であり、同時に先輩にあたる人物だ。

半蔵学院女制服に身を包む、黒髪ストレートの長髪が印象的な少女であり、彼女のプロポーションも飛鳥とまた同じく、或いはそれ以上に豊満であった。

彼女は飛鳥に帰還の挨拶をしつつ、登校時の失態についてダメ出しをする。

忍学科の三年生にして、クラス委員というまとめ役故に、後輩への指導も彼女の役目だ。勿論、それに伴うべき実力も彼女は身に着けている。

やや厳しい言葉かもしれないが、後輩を案じる故の言葉である為、憤りなどは感じない。

しかし、斑鳩のこういった厳しいお言葉も一月ぶりなので、飛鳥の心中には懐かしさと嬉しさが込み上がって来ていた。

それ故に、反応が遅れるのだった。

「おつかえりい……、飛鳥……！」

「ひゃあっ!？」

気配を消して飛鳥に後ろから掴みかかったのは、斑鳩と同じく忍学科の三年生である葛城かつらぎであった。

長い金髪と制服の胸元を開け豊満な胸を晒した姿が特徴的な、活発な少女である。

しかし、そんな外見よりも印象的であるのが、彼女の性格だった。

「おお……。暫く見ない間に、またデツカくなっただんじやないか、飛

鳥？ うへへ〜〜♪」

「ちよ、かつ姉！ 一か月も経ってないんだから大きくなる訳無いよ！ いや〜〜〜！」

……ご覧の通り、女の子へのセクハラを趣味とする、オッサンの心を持った変態少女である。

抱き付いた際に飛鳥の胸を鷲掴みにし、揉みしだく姿は圧倒的に変態そのものであった。

尤も、これが彼女なりのスキンシップである為、飛鳥はこれまた懐かしさを感じていた。

葛城はひとしきり飛鳥の胸を堪能し、彼女から離れると、今度は斑鳩の方へと向かっていく。

言うまでも無く斑鳩の胸を揉むための行動であるのだが、斑鳩とてそれをあつさりと許す訳ではない。

忍特有の歩法、体捌きを駆使し、葛城の魔手から逃れる——。対して葛城も同じく忍の技術を使い、斑鳩の胸を揉もうとする。

段々とその動きは激しくなっていく、遂には飛鳥ですら眼で追うのがやっとだという程までにその動きは昇華していく。

一月前よりも洗練されているその動きに、よもやこの争いは自分がない間毎日続けられていたたのだろうかと飛鳥は複雑な思いを抱き、斑鳩に同情する。

そうして、この果てしなく不毛な争いは、突如として現れた闖入者によって断ち切られるのであった。

取っ組み合いをしていた二人の間に、何やら不審な物体が転がってくる。

それは煙玉と呼ばれる、忍具の一つであった。本来は逃走や攪乱に使われる煙幕を排出する道具のだが、忍学科においてこの忍具を多用する者は一人しかいない。

ドカン！ と派手な音を立てて煙が噴出し、飛鳥たちは一時的に視界を奪われ激しく咳き込む。そして煙が晴れると、其処には一人の人間が現れていた。

「ふむ、無事に帰ってこれたようだな。お帰り、飛鳥」

短かい白髪に上下とも黒いスーツ、忍として熟練の雰囲気を漂わせた壮年の男性。

飛鳥たちの忍としての教師、霧夜^{きりや}だ。全員がすぐさま姿勢を正して霧夜へと向き直り、彼の言葉を待った。

「まず初めに、飛鳥、修行と試験を中断させてしまつて済まない。迷惑をかけたな」

「い、いえいえそんな！あの状況じゃ仕方ないですよ」

自身の師にして上司でもある霧夜からのいきなりの謝罪に飛鳥は面食らう。

確かにそれらの事項は残念ではあつたのだが、謎の妖魔らしき存在に襲われたこともあつて、その命令を彼女は受け入れているのだ。

それ故に、霧夜が頭を下げたことに飛鳥は戸惑いを隠せない。

「いい、これは私なりのケジメだからな。」

教え子に適切な指導を行うのが教師の仕事である以上、それを變えてしまったことに、私にも一端の責任があるからだ」

「霧夜先生……」

そう言われてしまつては飛鳥もこれ以上口を挟む事など出来ない。

観念して霧夜の謝罪を受け入れる事にするのだった。

「では飛鳥、話してくれるか？君が見た全てを」

「……はい」

そして一転、顔を引き締め『忍』となつた霧夜に向け、飛鳥は語りだす。

あの夜、彼女に起こつた出来事を――



『謎の妖魔』、『謎の少年』、『謎の能力』――か。解からないことばかりだな……」

「う、ごめんなさい……」

一通りの出来事を話し終えた飛鳥であつたが、不確定要素ばかりの情報に対する霧夜の言葉は辛辣とも取れた。

無理もないであろう。むしろ、たった一度の遭遇でこれだけの情報を獲得しただけ僥倖とも言える。そのため、霧夜は慌てて前言を撤回する羽目となった。

「いや、済まない。責めている訳ではないが……。こうも情報が少なくてはな……」

「ええ。やはり、その少年を探し出して、接触するべきでは？」

対して斑鳩は、その少年を探すべきだと進言する。現状では、それが最善の手段だろう。

謎の妖魔に自分達の攻撃が効かない以上、そちらを優先するのはあまりにも危険であるからだ。

「ああ。だが、件の少年を捜索してはいるのだが、結果は芳しくないな……。」

情報が少ないこともあるが、それらしい少年の足取りがぷつりと途切れてしまっているのだ

「途切れている、ですって？」

「その飛鳥を救ったと思しき少年は、早い段階から発見できてはいたのだよ。」

しかし、それを断定する前に姿を消してしまった。

身辺調査すら済んでいなかったから、学校や親族の情報も無い。勿論、何処へ移り住んだのかも、な」

そう言っつて霧夜は、懐からある写真を取り出す。

其処に映っていたのは、見間違えるはずもない、あの日飛鳥を救ってくれた少年の姿が有った。

「この人、間違いないです！ 私を助けてくれたのは、この人です！」
「やはりか……」

隠し撮りと思われるその写真に写る少年は、相も変わらず濃い死相を映している。

横から盗み見た斑鳩と葛城でさえ、その陰鬱な雰囲気ギョツとし、身体を仰け反らしていた。

「こ、この方ががそうなのですか？」

「それにしちやあ、何と言うか……」

「あく、うん。言いたいことは分かるよ、斑鳩さん、かつ姉」

二人が何を言いたいかを察した飛鳥は、続きを促す事無く黙殺する。

彼の持つ負の雰囲気は飛鳥ももちろん理解しているが、何だかんだで命の恩人である為、悪い意見を聞きたくないという思いが有ったのだ。

普段の彼女らしからぬその行動に二人は首を傾げるが、飛鳥が少年の写真に熱っぽく見詰めているのを見て、どういう心境なのかを理解した。

(飛鳥さん、貴女はもしかして……)

(おく、こりや飛鳥にも『春が来た』ってヤツか?)

写真を見つめていたまま暫く呆けていた飛鳥であったが、自身を見つめる斑鳩、葛城、そして霧夜の視線にようやく気付き、慌てて写真を付き返すのだった。

「——はっ!? あ、あ、あ、ごめんなさい! コレ返しますよ霧夜先生!」

「ははは、いい、そのまま持つておけ」

「そうだぜ、飛鳥」

霧夜は微笑みながら写真の返還を拒み、葛城は顔を真っ赤にする飛鳥を茶化す様に写真を持ち続けるよう促す。

飛鳥は暫く葛藤するように視線を交互に写真と周囲へと向けていたが、やがて意を決し、写真を確認することに決める。

斑鳩たちから身を背け、写真を懐に——何故か、その豊満な胸の間へと——仕舞い込む飛鳥の姿を、三人は生暖かい視線で見つめるのだった。

「と、兎に角! この人が例の異能者だということがあったから、この人を探すようにして下さい!」

「はは、分かっているさ。ならば、私は作業に取り掛かる。席を外すぞ」

霧夜はそう呟いて、文字通りにドロンとその場から消え失せる。

残された少女達は重苦しい雰囲気から、約一名は羞恥心から解放さ

れた安堵からか、各々が盛大に溜息を吐いた。

「はあ、疲れた……」

「お疲れ様でした、飛鳥さん。ですが、仕事はまだ終わってはいませんよ」

「そうだけ、飛鳥のことも気になるけどそつちは後回しだ」
「え？」

やっと解放されたと安堵の溜息を吐いた飛鳥であったが、斑鳩と葛城の二人の言葉に疑問を覚える。

記憶を探るが、自身に課せられた仕事など一体何が――

「歓迎会の準備ですよ。明日、柳生さんと雲雀さんが入学してくるのですから」

「あつ！ そうだった！」

柳生、そして雲雀の二人は、彼女たちの後輩にあたる忍生徒である。

この春に半蔵学院に入学する新入生であるのだが、飛鳥たちはそれ以前から彼女たちとの交流が有った。

具体的には、およそ数か月前に行われた、半蔵学院への体験入学などだ。

仲間内での絆を重んじる傾向にある善忍は、こういった交流会を開くことなど珍しくもない。

加えて、飛鳥、斑鳩、葛城の三名全員がそういった繋がりを大事にする性格という後押しもあった。

しかし、羞恥心によつて脳が沸騰していた飛鳥は、一時的に記憶を喪失していたらしい。

これから新たな仲間となる二人のことを失念してしまう程に、彼の存在が強烈だったのだと言えるだろう。

「ふふ、しょうがないですね飛鳥さんは。ほら、作業に取り掛かりますよ」

「はーい」



準備を終え、始業式前故に任務なども無い彼女たちは明日まで完全なフリーである。

姿勢を崩し、楽な体勢となった彼女たちは雑談に花を咲かせていた。

「……それにしても、謎の妖魔騒ぎか。アタシたちにもそんな任務が回ってくるのかね?」

「いいえ、本当に妖魔の仕業であるならば、私たちに御鉢が回ってくることなどありませんよ。」

そんな任務が与えられるのは、卒業をして、更に経験を積み、一人前の忍となつてからです」

「やっぱりな……。強い奴と戦えそうだから、興味はあつただけどな」

「もう、かつ姉つたら相変わらずなんだから」

内容こそ非日常染みているが、其処に悲壮や悲観などといった感情は感じられない。

それは油断や慢心などでは無く、仲間たちと力を合わせれば負ける筈が無いという、絶対的な信頼関係の表れである。

事実、彼女たちは、そうやって数多の困難を乗り越えて来たのだから。

しかし、その楽観的ともいえる彼女たちの態度に、飛鳥は僅かな不信を感じてしまう。

あの時、飛鳥へと迫ってきた『死』の恐怖を、彼女たちは知らないのだから――

「飛鳥さん、大丈夫ですか?」

「――あ、い、いや、うん。大丈夫だよ!」

その心の内を見透かしたように問うてくる――正確には、呆けていた飛鳥を心配した言葉だが――斑鳩に対し、飛鳥は必要以上に威勢を見せてみせる。

しかしそれでも、忍仲間としての付き合いから何かを感じ取ったらしく、斑鳩は飛鳥を気遣うように言葉を掛けるのだった。

「そうですね……。もしかしたら、まだ妖魔に襲われた怪我が響いて

いるのかもしれないね。

この後は自主練の予定でしたが、飛鳥さんは大事を取って、今日は療養にしますか？」

「あはは、そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

斑鳩は飛鳥の身体を案じて、休息に務めるよう進言するが、飛鳥はそれを断る。あの妖魔に襲われた傷は既に癒えているからだ。

そもそも、傷自体がああの際の彼の治癒魔術によつて完全に回復している為に、これ以上の療養のしようが無いのだった。

だが斑鳩は、飛鳥のそれが空元気だということに気が付いていた。忍仲間として、伊達や酔狂で一年近い付き合いが有る訳では無い。

もしも飛鳥に問題があるとすれば、それは身体ではなく、心の問題であるのだろうと、彼女は理解する。

そしてそれは、葛城とて同様であった。彼女もまた、後輩を気遣うべき先輩としての立場であるからだ。

飛鳥は斑鳩と葛城に不信を抱き、斑鳩と葛城は飛鳥に不安を抱く。彼女たちの認識の齟齬が果たして、一体どのような結果を齎すことになるのか。

それは、そう遠くない未来の出来事である――

4話 Crisis

2009年 4/7 朝

始業式——、それは学生生活において一年の始まりを示すと言っても過言ではないイベントである。とはいえ、その内容自体は極めて退屈なものだ。

朝早起きして学校へと赴き、全校生徒が体育館へと集合し、有り難くも無い演説を聞かされて終了する。概ね、何処の学校もこのような段取りで行われるのだろう。

それは無論、ここ半蔵学院においても変わり映えのしない光景である。尤もそれは、『表側』の生徒のみにおいてという意味であるのだが。

「うひゃあー、今年もすごい人数だなあ」

その『表側』に属さない『裏側』の人間、つまり忍である飛鳥は、その光景を校舎の屋上に立って見下ろしていた。

午前九時前、始業式の開始時間となった半蔵学院の校門は、生憎の雨模様の中集合する生徒たちでごった返している。そして、そのおよそ三分の一が今年の新入生だ。

言うまでも無く、彼ら三分の一の生徒は難関試験を乗り越え、見事この国内有数の進学校半蔵学院へと入学することとなった優秀な生徒たちである。

「——あれ？」

そして、そろそろ切り上げようと思った矢先、飛鳥は不可思議なものを目にする。

雑多に往来する生徒たちの中で、視界の端に捉えた一つの“それ”。気のせいにも満たない様な、極々僅かな違和感。

それは、『青』であった——、彼女には何故かそう感じられ、それだけしか感じることに出来なかった。

それが何であったのかを確かめるために身を乗り出して『青』を探すが、既に群衆に紛れてしまい、見つけることは叶わない。

「……今のは、もしかして——」

しかしその答えを口にする前に、タイムリミットが訪れる。

始業式が有るのは、忍学科とて変わり無い。内容も『表側』と比べれば遥かに小規模であり、生徒数も新入生を含め現在五名でしかないのだが。

それでも、一年の始まりを告げるイベントを彼女がすっぽかす筈が無い。何より、彼女にとって初めての後輩が出来るのだ。

「それじゃあ今日も、飛鳥、頑張りますっ！」

飛鳥は気を引き締めると、一瞬垣間見た『青』に後ろ髪を引かれつつも、踵を返し忍学科の校舎へと帰っていく。

暫く経てば、まるで白昼夢の様な存在であったその『青』を、彼女は忘れてしまうのであった。



2009年 4/7 放課後——

新入生である柳生と雲雀の歓迎会は、概ね成功であったと言える。誰も彼もが、笑い、喜び、仲間であることを認め合うことが出来た交流は、全員にとって忘れられない思い出となることであろう。

仲間内での信頼関係を重視する彼女たちにとって、こうした交流は必須のイベントなのであった。

今、飛鳥たちは活動拠点となる半蔵学院の周辺、浅草市内をパトロールがてら柳生たちを案内している。

その内容は浅草の観光名所、人気スポット、よく利用する商店などといった基本的なモノから始まり、

不良の溜まり場、人気の無い裏路地、悪忍と遭遇した地点という忍視点での案内もある。

飛鳥たちでさえ今だ把握し切れていない程に膨大なそれらを、確認も含めて見回っていた為に、何時の間にもやら空が薄暗くなっているのだった。

「そろそろ切り上げ時ですね。今日はこれまでにして、寮へ帰りましょう」

引率者である斑鳩は、案内兼パトロールを切り上げることにする。時刻は午後七時を過ぎており、春先でまだ日の没する時間が早いために、仲間たちに帰還を命じたのだった。

しかし、葛城や柳生といった好戦的、義務的な面々は帰還命令に渋っており、まだまだパトロールを続けるべきだと思いを露わにしていた。

「ええーっ!? もう切り上げるのか? アタイは最近悪忍ともやり合ってなかったから、パトロールを続けてーぞ!」

「……葛城の言い分は兎も角、探索を終えるにはまだ早い時間帯ではないか? 私はまだこの付近を確認しておきたいのだが」

葛城の悪忍退治をしたい発言をスルーしつつ、柳生は午後七時という忍にとってはやや早すぎる帰還時間に疑問を抱く。

忍である彼女たちに門限など無いも同然であり、寧ろ夜こそが忍の本来生きるべき時間であると言えるからだ。

しかし、斑鳩の提案が覆ることはない。

「最近が悪忍たちの活動も大人しいですし、今日一日くらいは大丈夫でしょう。」

そもそも、柳生さんたちに寮の案内をしなければなりませんし、何より帰ったら歓迎会の続きが有りますよ?」

「あん? なんだよ、そうならそうと早く言えよな!」

「かつ姉ったら、朝の歓迎会で斑鳩さんがそう言ってたでしょ……」

歓迎会の続きをすると聞き、手のひらを反した葛城に呆れるように飛鳥は言う。

所謂快樂主義者の気が有る葛城は、在り来たりな任務よりも歓迎会の方に興味を移したらしい。

柳生は忍としての責務を全うしようとする為やや渋っていたが、もう一人の新生である雲雀が歓迎会への参加を望んだ為に、あつさりと意見を変更した。

冷徹なまでに忍らしい彼女ではあるが、この様に雲雀だけには甘いのが、柳生という少女の性格であった。

「まったくもう、みんな——」

そんな微笑ましい光景を見て、紡がれるはずであった飛鳥の感嘆の
眩きは不意に途切れることになる。

帰宅ラツシユの時間帯である故に、多くの学生や会社員が行き交う
中で行われていた少女たちの喧騒のすぐ脇を通り抜けて行く一つの
人影。

その影が、飛鳥の心を果てしなく揺らすのであった。

「飛鳥さん、どうしました?」

心配して声を掛けてくれた斑鳩の言葉も耳に入らない程に、飛鳥は
放心して人波の中を見つめている。

いや、放心という言葉は正しくは無い。一瞬だけ垣間見た、自分の
すぐ傍を通り抜けていくその姿を必死に想起しようとしているから
だ。

自分よりわずかに高い細身の体躯、長い前髪によって隠された銀灰
色の瞳、そして身に纏う『死』の雰囲気――

そう、その姿はまさしく、およそ一月ほど前に自身を救ってくれた
少年その者であったのだ。

「見つ、けた――!」

その事実が気が付いた瞬間、飛鳥は一も二も無く駆け出していた。
仲間の制止も気にも留めず、ひたすらに彼を追いかけたので
あった。

◆
2009年 4/7 夜――

彼を探し始め、既にかかりの時間が経っていたが飛鳥は未だに彼を
見付けられないでいた。

あの時一瞬すれ違った彼はすぐさま人混みの中に紛れてしまい、何
処へ行ったのかも検討が付かなかった為だ。

故に飛鳥は、彼を探すためだけに周辺地域すべてを虱潰しに探し回
る羽目となっていた。

飛鳥はビルの屋上から薄暗い路地裏に降り立って辺りを見回すが、
それでも彼を見付けることは出来ない。

「此処にも居ない……、一体何処に——」

「飛鳥さーん！ 見付けましたよ！」

「へっ!？」

突如として上空から掛けられた言葉に、飛鳥は間の抜けた声を出す。勿論その声の主は、勝手に飛び出した自分を探し回ったであろう斑鳩のモノである。

彼のことで頭が一杯となっていた飛鳥は始め『見付けた』という単語に反応したのだが、次の瞬間には自身の行いをハッキリと思い出し、顔面を蒼白にする。

大切な歓迎会をすっぱかして単独行動を行っていたなど、言い訳の仕様も無いほどに愚の骨頂であるのだから。

よって飛鳥がとった行動とは、斑鳩に向かって思い切り頭を下げることだった。

「す、すいませんでしたー!」

「はあ……、謝るのはいいですし、そもそも謝る相手が違います。柳生さんと雲雀さんには、後で謝っておいて下さいよ」

飛鳥の隣に音も無く着地した斑鳩は怒る訳でなく、しかし己の行いを諭すようにして告げる。

確かに飛鳥が謝るべき相手は彼女では無く、歓迎会を潰されたその二人であろう。この後のことを想い、気が重くなる飛鳥であった。

「それで、一体どうしたんですか。いきなり走り出すなんて?」

「そ、そうですよ! あの人を見付けたんですよ、あの人を!」

説教もそこそこに、早めに切り上げて斑鳩は気になって疑問を飛鳥にぶつける。対する彼女の答えは要領を得ない息巻いた物であったが、大体の意味は斑鳩に伝わった様だ。

斑鳩はその意味を察すると、すぐさま仲間内に連絡を取り、この場への集合を指示する。そして、忽ちの間に残り三人の忍学科メンバーが集まった。

初めの内は葛城や柳生が飛鳥の勝手な行動にやや憤っていたのだが、飛鳥の言う彼——つまり件の妖魔事件に関しての最重要人物の発見を伝えられ、一旦は矛を収める。

歓迎会が流れてしまったことに文句が無い訳では無いが、現在の問題である妖魔事件の解決も重要な任務の一つである為に、忍メンバーたちは彼の捜索を優先することになったのだ。

尚、歓迎会の件に関しては、飛鳥がすぐさま柳生と雲雀を筆頭にメンバー全員に謝り倒し、後に埋め合わせをすることで決着になるのであった。

「それで、件の少年とやらをどうやって探す？」

「うん。取り敢えず、もう少しだけこの辺りを探してみようと思うよ」

柳生が発した疑問は当然であった。

既に時刻は午前零時直前となり、人影も疎らになってきている所為で一層彼を見付けることは叶わなくなっている。

そもそも、普通の人探しであるならば、このような場所や時間帯まで探すことなど有り得ないのだ。

少なくともあの時、彼を発見したことをすぐさま斑鳩などに伝え、忍メンバー全員で捜索していれば、単純計算で彼が見つかる確率は五倍までに上がっていただろう。

だが、生憎と飛鳥が以前彼と出会った時間帯こそが今この時である。その為、彼女はある意味でこの状況になることを待ち望んでいたのかもしれない。

「……そういえば、あの人と出会ったのもこんな風に、この時間、路地裏に居て——」

飛鳥の言葉が、最後まで紡がれることはなかった。

——カチリと、音が響く。

突如として襲った悪寒。その場にいた全員が、余りの環境の激変に身を激しく震わせる。

しかし、飛鳥だけは違った。彼女はこの身に纏わりつく悪寒を、狂氣的なまでに輝く悍ましい月を、ありとあらゆる負の感情が渦巻く世界を既に識っていたからだ。

「そんナツ!? これって、あの時の——」

彼女の言葉が紡がれるのはまたしても無かった。

突如として暗がりから飛び出してきた異形——後に『マーヤ』と名

付けられる、偶然にもあの時と同じ粘液の身体と青い仮面を持つモノだった——が、襲い掛かって来た為である。

その異形もまたあの時の光景を再現するかのように、飛鳥の知覚範囲を超え、対応できない速度で迫ったのだ。しかし、今とあの時とは決定的に違う点がある。

「はあっ！」

「オラアッ！」

剣と足甲による一閃——、言わずもがな斑鳩と葛城の武器による反撃だ。二人ともが既に、忍転身を終えている。

飛鳥と比べても遥かに研磨されたその攻撃は、彼女の背後から襲い掛かった異形を両断し、その身体を弾き飛ばした。

無論、今の襲撃を防ぐことが出来なければ、飛鳥の命は無かったであろう。凶らずも、彼女が異形から身を救われるのは此れで二度目となった。

「大丈夫か、飛鳥!？」

葛城が飛鳥に駆け寄り、彼女の安否を確認する。

勿論、異形の指一本——果たしてアレに指という器官が有るのかは甚だ疑問だが——すら触れていない為、肉体的には何の問題も無い。

よって葛城が懸念しているのは、精神面での問題だ。誰だつて殺されかけるなどすれば、多かれ少なかれショックを受けるのが普通の反応である。

そしてそれはこの戦場において致命的な隙となり、死を招くだろう。彼女たちが生き残るためには、ここで誰一人欠ける訳にはいかないのだった。

「——っは、あ……、うう、ぐ……。だ、大……丈夫だよ……」

果たしてそれは、葛城の予想通りであった。

全身を震わせ、血の気の引いた唇で平気であることを伝えようとする飛鳥の姿は、憐れみを覚えるほどに痛々しかった。

最後の気力で構えた二振りの脇差も、隠しきれない程に震えており、とても振るうことなど出来ないだろう。

やがてその脇差も取り落としてしまい、それと同時に飛鳥は膝から

崩れ落ちる。

これでは、とても戦うことなど出来ないだろう。異形に襲われたことによるトラウマが、最悪の事態を齎していた。

「飛鳥ッ！ しっかりしろッ！」

勿論それを責めるような輩は存在しない。誰もが今にも発狂しそうなほどの恐怖に抗っているのだ。

これまで経験してきた、忍の任務などとは根本から違う、異形との戦い。その現実が、彼女たちの精神を削り取っていく。

しかし現実には、その恐怖に浸る暇すら与えない過酷なモノであった。

「なっ!?!」

その叫びは、果たして誰のものであったのだろうか——否、全員が等しく叫んでいた。

現れた異形は、一体だけでは無かった。まるで闇が染み出すかのように、あちこちの月明かりの影から異形どもが立ち上っていく。

飛鳥たちは既に全方向を包囲され、逃げることは叶わなくなっていた。

「……は、ははは。相手にとって不足なしといったところだぜ！ 行くぞ！」

その恐怖を払うかのように、葛城は無理やりに己を奮い立たせる。バトルマニアの気質を持つ彼女は、強者との戦いを望んでこそいるが、流石にこの状況ではその信念も揺らぎかけていた。

そもそも望んでいるのは戦いによる己自身の向上であり、命のやり取りではないのだ。そして、その恐怖心が次なる隙を生む。

「■■■■——!!!」

「ッ!?!」

斑鳩に両断され、葛城に吹き飛ばされた筈の異形が吠えた。その事実には、葛城は身体を硬直させる。

その異形が生きているのは秘伝忍法以外ではダメージを通さない謎の強靭性にあり、飛鳥から前もって知らされていた情報の一つであった筈だ。

だが、飛鳥を除いてこの場の誰もが異形などとの戦闘は未経験であり、心の何処かで今だ忍にんげん相手としての意識のまま戦っていたのだ。た。

そして、飛鳥によつてもたらされた情報が確かであるならば、この異形が次にとる行動は——

「かつ姉！ 引いてッ！」

後ろから掛けられた声に、脊髄反射で反応する葛城。固まりきっていた身体を無理やり動かし、飛鳥を抱えて空へと跳ぶ。

次の瞬間、一瞬前まで二人が居た空間が巨大な氷塊に閉ざされる。その魔術めいた攻撃は言うまでも無く、異形によつて起こされたものだ。

葛城がそれを避けることが出来たのは、彼女に攻撃が有ることを呼びかける声があつたからこそだ。

「……今のは、もしかして雲雀が？」

「う、うん。何だかよく解らないけど、『危ない』って思つて……」

その声の主とは、現在柳生の後ろに隠れるようにして戦況を見守つていた雲雀——正確には柳生が雲雀を後ろに隠している——のモノであつた。

なるほどと、傘に仕込まれた銃によつて異形を攻撃していた柳生は思う。雲雀は感知能力においてこの場の誰よりも優れている。

その源は彼女の両目に宿る『華眼』と呼ばれる能力に起因するものであり、それによつてあの正体不明の攻撃も感知できたのだろう。

——或いは、あの能力と『華眼』は同じ能力であるのかもしれない。そんな考察が柳生の脳裏に浮かび、すぐさま消えていく。

兎にも角にも、今は形振り構っている状況ではないのだ。使えるモノが多いに越したことはない。

「雲雀！ お前はその能力で皆のフォローに回れ！ あの攻撃を察知できるだけでもだいぶ楽になる！」

「うん！ 分かつたよ柳生ちゃん！」

間髪入れず柳生から出された指示に、雲雀は一も二も無く従う。それは雲雀に対して過保護な面がある彼女なりの気遣いであるが、もう

一つの理由が存在する。

そもそも、雲雀を除くこの場の誰もが異形に対して武器、忍術で攻撃を行っている。一目見た瞬間から、アレに直接接触するのは絶対に不味いと、全員が本能的に理解した為であった。

雲雀はこのメンバーの中では武器を持たず、攻撃スタイルも素手による近接戦闘である為、あの異形に触れるのが躊躇われた故の指示である。

そしてそれが間違いではないことを、彼女たちは直ぐに知ることとなった。

「ひいつ!? な、なんだよコレツ!」

突如暗がりから現れた闖入者は、およそこの場には似つかわしくない一人の男性であった。

怯えきつた眼で此方を見るその態度さえ見れば、彼が何の力も持たない一般人であることは瞭然だ。

愛刀・飛燕による斬撃で、複数の異形たちを切り捨てて——だがそれでも、異形どもを倒すには至らない——いた斑鳩は、その人物を見て手が止まってしまう。

そのあまりに異常な光景は、彼女を混乱させるのに十分であったのだから。

彼女はそもそもこの風景の激変を、何らかの結界の形成による異界化なのだと考察していた。

忍が扱う忍法の一つに、《忍結界》というものが存在する。その名の通り、普通の人々から見れば存在しないも同然な、隠された世界だ。

忍たちが主に決闘用として使うこの忍法は、例え一般人を発動領域に巻き込んだ場合であっても、忍以外の人間が取り込まれない様になっっている。

この死の世界が結界であるならば、忍の自分たちが取り込まれるのは当然であり、一般人はそうではないという法則が、《忍結界》と同じように働いていると考えていたのだ。

事実、一月前に飛鳥がこの世界に取り込まれた際、一緒にいた一般人は取り込まれることが無かったと彼女は話していた。

既に男性の眼に光は宿っておらず、異形に体内を侵される苦しみも感じていない様だ。

やがて全ての粘液が侵入し終わると、まるで逆廻しの映像の様に、男性の身体から泥の様なナニカが溢れだしてきた。

しかしその体積は先の異形一体分よりも増大しており、見積もっておよそ二倍ほどの量になるだろう。

その泥も忽ち再び異形としての体を取り戻すが、先程とは違う点の一つある。其処には、二体目の新たな異形の姿が有ったのだ。

そして、その二体目の異形を眼にしたことにより、ようやく何が起こったのかを臆げに把握するのだった。

これは、捕食だ——

異形が存在する理由や理屈などは分からないが、それだけは理解できた。人を襲い、人を喰らうその姿はまさしく、異形と云う他無いと、斑鳩は何処か自嘲気味に想う。

飛鳥と同じように己の武器を取り落とし、崩れ落ちる。いや、彼女だけではない、既に誰もが戦闘意欲など失っていた。

葛城は飛鳥を背に守りながら戦っていた為、全力を出すことが出来ず、追い詰められた。

柳生も同じく雲雀を守りながらの戦いであり、遠距離戦闘の為葛城よりは消耗は軽いが、最早それも限界に等しい。

攻撃は通じず、残弾も残り少ない。そして何よりも、守るべき雲雀自身の心が既に折れていた。感受性の高い雲雀は、異形に襲われた男性を見て誰よりも早く何が起こったのかを察していたのだから。

そもそもこの二人は、入学してまだ一日と経っておらず、妖魔襲撃事件を臆げにしか把握していないこともあった。

既に周囲は、数十体の異形によって囲まれている。

飛鳥たちはせめてもの抵抗として、輪になって身を寄せ合い、敵に背を向けることこそしなかったが、その行動にどれほどの意味が有るのだろう。

最早それは、ただの意地にも満たない惨めな足掻きでしかない。彼女たちの運命は、何も変わらない。

「……ここまで……、なのかな？」

眼に涙を浮かべたまま、雲雀はぽつりと呟く。それは誰しもが胸中に思い描いていたモノだが、こうして口に出されることよってハッキリと実感を伴う。

想像する。自分たちもあの異形に侵され、新たな異形を生み落す苗床となる様を。

私たちは此処で、死ぬのだろうか——？

「……嫌だ」

その言葉を発したのは、斑鳩でも、葛城でも、柳生でも、雲雀でもない。

その呟きは、涙を堪え、今だ震えの収まらない身体を叱咤激励しつつ立ち上がった飛鳥のモノであった。

「私は……、私たちは死なない！ 絶対に死なない！ 忍の道を極めるまでは！」

それは飛鳥の魂の叫びだ。数多の異形に囲まれるという絶対絶命の窮地にあつても、彼女は未だ自分の命を諦めてはいなかった。

「飛鳥さん——ふふっ、そうですわね」

「へへっ！ そうこなくっちゃな！」

「ふっ……飛鳥、やっぱりオマエは大した奴だな」

「飛鳥ちゃんががんばるなら、雲雀もがんばるよ♪」

それに呼応するかのよう、斑鳩たちもまた、己の武器を握りなおす。

仲間が立ち上がるというのに、どうして自分だけが座っていられよう？

折れた筈であった彼女たちの心は、信念を取り戻したことよって再び奮い立つ。

「飛鳥っ！ 正義のために、舞い忍びますっ！」

取り落とした脇差の代わりに苦無を握り、異形へと向けて突撃する。最早その心に迷いはない。もう逃げないと決めたのだから——

「やあああああ——！——！」

「■■■■——ツツツ!!!」

そして、異形が爆ぜる。真紅の爆炎に包まれ、跡形も残さずに夜の闇に溶ける様に消えていった。

その快挙を見て、葛城が絶賛するが、当の飛鳥本人は当惑気味であった。

「おう！ やるじゃねえか、飛鳥！」

「いやっ？ 私はまだ何も——」

其処で飛鳥は何か気付いたように、表通りに続く路地へと目を向ける。

まさか、まさか、まさか——!!!

飛鳥は其処で漸く、どうして此処まで自身の心が折れなかったのかを理解した。

彼女は気付いていたのだ。自分は此処で、待ち焦がれた『彼』に再会することを。

故に、逃げず、退かず、折れず、敗れず、負けずにいることが出来たのだから。

——やがて、表通りから一人の男性が歩んでくる。

傍目には、猫背気味のままポケットに手を入れて気だるそうに歩くという不健康そうな印象を与えるだろう。

青い前髪が顔を半分覆い隠しており、垣間見える表情も生気の抜けた陰鬱な雰囲気を思わせる。

だが、その人物が現れた瞬間から空気が一変する。まるで辺り一帯が深海へと引きずり込まれたかのように、温度も、呼吸も、圧力も、全てが重々しくなったのだ。

しかし飛鳥たちは、それらを苦痛と思うようなことはない。彼女たちの中に在る恐怖や絶望といった感情すらも、その雄大な海に包まれ、鎮めてくれるような気がしたのだから。

「……やっぱり、君だったのか——」

やがて『彼』は飛鳥を見て、どこか納得した様に呟く。まるでこうして出会うのが必然的であったという、捉え方ではロマンチックとも感じられる吐露だ。

しかし飛鳥には、彼にとって殆どつながりが無いであろう自分に対し、どうしてそんなセリフを吐くのか疑問であった。

それでも、ただ二つだけ理解出来るのは、彼が居れば何とかなるのであるだろうという安心感。

そして、あの時の「どうでもいい」という興味を示さないセリフではないのが、自らの胸の中でより一層大きくなる正体不明の感情を齎すのであった。

5話 Mass Destruction

「前よりも人が増えてる……」

忍メンバー全員で行動していた彼女とその仲間を見て『彼』の口から零れたのは、戦場には似つかわしくない純粹な疑問だった。以前の飛鳥との出会いで、自身以外に異形に対抗できる忍という存在を、彼女しか眼にしなかった故である。

緊張に包まれていた空気が弛緩してしまう程に気の抜けたその言動は、彼女らにいつもの調子を取り戻させた。

「……飛鳥さん、彼は確か、貴女を助けてくれたという例の？」

「はい！……どうして此処にいるのかは知りませんが」

「なら、救援に期待していいのかよ？ こっちはアイツのことなんざ何も知らねーぞ」

飛鳥は兎も角、斑鳩や葛城はまさかの人物の登場により、動揺を隠せないでいた。

それは、柳生と雲雀の二人も同じくだ。柳生は彼の持つ暗い雰囲気、雲雀は探知能力によって、彼が得体のしれない存在であることを既に把握している。

「あの人、なんだかよく解らないけど……怖い」

「くっ、雲雀を怯えさせるなど……。だが、救援だとしても、この数相手をどうやって——！」

柳生の懸念は尤もであった。飛鳥らの反応を見る限りでは、彼が異形に対し何らかの対抗手段を有しているのは理解できる。

しかし、それでも多勢に無勢だ。おまけに、忍メンバー側は既に限界が近付いている。いくら彼が何らかの能力を持つと言っても、柳生はそれを信用できないでいた。

だが——

「……………」

異形どもの様子が明らかにおかしい。彼を取り囲むようにして様子を窺ってはいるが、それだけだ。

決して襲うようなことはせず、さりとて逃げ出すこともせず、ただ

遠巻きにして観察しているだけだった。

それはまるで、彼という存在を畏れ、その場に縛り付けられてしまったかの様ではないか。

「何者だ？ 一体、アイツは——」

その異様な雰囲気呑まれ、一瞬気を緩めたのが不味かった。

彼を包囲していたものとは別の、新たな異形が彼女らに向けて飛び出してくる。

柳生は咄嗟に仕込み傘を構えるが、その引き金を引くよりも異形が達する方が圧倒的に早い。

「(しまっ、間に合わな——)」

せめて雲雀だけでもと思い、柳生は彼女の身体を庇うようにして覆いかぶさる。

柳生ちゃん、という雲雀の驚愕の声が聞こえるが、彼女には其れが心地よい。

恐らくこれが最後の聞き納めになるだろうと思いつつ、柳生はゆっくりとその瞬間を待った。

しかし、何時まで経つてもその瞬間は訪れない。

訝しげに思いつつ異形の方へ顔を向けると、其処には先程と同じく、融ける様に消え去っていく異形の死骸があった。

顔を背けていた柳生や、彼女に覆い被さられていた雲雀は気付かなかったが、飛鳥らにはハッキリと目に映っていた。異形が彼女らに飛び掛かるまさにその瞬間、彼がその異形に手を翳すことで爆炎が発生し、焼き尽くしたことを。

彼女たち忍が使う忍法とは根本的に違い、そして異形らが使うモノに近い、摩訶不思議な異能力。それはまさしく、この状況を打破するのにこの上ないモノではないか。そう判断した斑鳩は、恥も外見もかなぐり捨て、彼に向かって叫んだ。

「その人！ 申し訳ありませんが、失礼を承知でお願いします！

この化け物どもを、如何にかして下さいー！」

「……分かりました」

「って、早い?!」

一瞬逡巡する様子を見せたものの、あっさりと懇願を受け入れてしまった彼に斑鳩は驚愕する。

最低でも拒否、良くて対価などを求められるのを予想していた彼女にとつて、その言葉は想像外にも程であったが、それは忍メンバー全員に共通した思考でもあった。

「——っ！」

そうして彼女たちが気を抜かしている間に、彼は異形へと向けて突撃する。

彼が異形の集団に突撃したことによる、異形どもの反応は大きく二つに分けられる。即ち、迎撃か撤退だ。

一体の異形が彼へと向けて迎撃する。人間を容易く引き裂く爪は、粘性の体躯によって不規則な軌道を描き、彼を翻弄する。しかし彼はそれを完全に見切っており、皮膚から僅か数センチを通り過ぎる爪に動じる事すら無い。

やがて異形が大振りな攻撃を行うが、彼はそれを当然の如く回避する。そうして生じた盛大な隙を、彼が見逃すはずも無かった。

「よつと」

「?! ■■■——……」

手に握られたナイフを異形の身体に突き立て、一閃。寸断された異形は闇に溶ける様にして霧散する。その武器は相変わらず平凡なナイフであり、どう鼻真目に見ても異形相手には心許無い。

しかし、その平凡である筈のナイフで異形の泥の様な身体を易々と切り裂いてしまう為、彼女たちは目の前にある光景が果たして現実であるのかと疑ってしまう。

戦闘時間は、異形が攻撃を行ってからほんの十秒も経っていないかった。

「■■■■——っ！」

次いで、新たな異形が彼に攻撃を行う。かつて飛鳥も体験した、氷の異能だ。鋭利な氷塊を交えた吹雪が彼を襲う。

しかしその吹雪もまた、彼を傷つけることは叶わない。彼が腕を振るうと爆炎が巻き起こり、その熱によって吹雪を相殺する。異能の炎

と氷の接触は水蒸気爆発を引き起こし、発生した噴煙によって飛鳥たちは彼の姿を見失った。それは異形の方も同じである。

だが、彼の方は違った。立ち込める噴煙の向こう側の異形の姿をしつかりと見据えており、それに向けて再び腕を振るい、発生した爆炎が異形を焼き尽くす。

噴煙が晴れ、飛鳥たちが彼を発見した時には、彼に攻撃した異形は既に消え失せていた。

「な、なんだよアレ……」

葛城がどこか呆れたように呟く。彼女らを苦しめた異形が僅か三十秒足らずで二体も倒されれば、無理も無いことであるのだが。

しかし彼女は、彼のその戦い方にふと違和感を覚える。苦も無く異形を倒す強さを誇る彼は、強者との戦いを求める葛城にとって願っても無い人物だ。

だが、彼の強さと葛城の求める強さとはどこか違うような印象を感じてしまう。

葛城がそんな感慨を抱いている間にも、彼は異形の一、二体を殴り倒し、蹴り碎いていた。

飛鳥たちの見解では、撤退を選んだ異形こそが賢い行動をとったと言える。それ程までに、彼の持つ戦闘能力は圧倒的だ。

当初は二十体以上もいた異形どもは既に半数が逃走し、残っていた内五体も彼によって討伐されている。残る異形はあと六体だ。

しかし、異形どもも決して馬鹿ではない様だ。次第に統率のとれた行動をとるようになり、一撃離脱を行うことで彼の反撃を極力喰らわない様になっている。

さらには輪になって彼を取り囲むことで、彼の逃走を防ぐ。それらの作戦行動を取れる知能を持つということは、この異形どもが決して侮れない存在であることを証明していた。

そしてついに――

「……………」

異形の攻撃を受け止めたことによって、彼のナイフが根元から砕け折れる。顔を顰めつつ、残った柄を投げつけることでナイフはその役

目を終えた。

彼は徒手空拳での戦い方も心得ているようだが、武器を失ったことによる攻撃力の低下は免れないようであり、眼に見えて押され始めていく。

遂には手痛い反撃を喰らい、腹部に強烈な体当たりを受けて吹き飛ばされる。そのまま彼は、先の氷の魔法によって発生していた氷塊に背中を強かに打ち付け、苦悶の声を漏らした。

「危ないッ！」

六体の異形が一齐に飛び掛かるのを見て、飛鳥が叫ぶ。背中側に氷塊が存在する為、逃げ場が無い——！

そこで彼は、まさかの行動を起こす。背にした氷塊に手を添えると、そこで炎の魔法を使い、氷塊を爆発させたのだ。

辺りには一気に噴煙が舞い、何も見えなくなる。だが、異形どもが彼を取り囲むようにして攻撃を行った以上、逃げ場が存在しないのは覆しようの無い事実だ。

無論異形どもはその攻撃を止めることなく、彼に飛び掛かっていく。飛鳥たちには、その光景だけは見えてしまっていた。

飛鳥は今になって、あの凄まじい戦闘風景に介入出来ないでいることを悔やんでいた。

解つてはいる。自分があの場に飛び込んだ所で、足手纏いにしかならないであろうことは。

飛鳥の心中はかつてない程に無力感に苛まれていた。先程奮い立った心など、とうに消え失せている。

尤も、例え誰が飛び込んだ所であっても、あの異形を倒すことなど出来なかったであろう。

だが——、だがせめて、一矢報いなければ、彼に合わせる顔が無い——！

「飛鳥さんッ!？」

突如として駆け出した飛鳥に、斑鳩は困惑の声を上げる。その声が飛鳥に届くことなど無い。

早くはやくハヤク——、彼の下へ！

使い慣れた脇差は無い、先程取り落としてしまった。手に構えたのは、粗末な苦無一本だけだ。

その程度で何が出来るというのだろうか。飛鳥の行動は愚かな蛮勇に過ぎない。そんなことは、彼女自身が一番理解している。

だがそれでも、この脚が止まることはない。全身全霊を以て、前へ進めと心が叫んでいる。その感情を、果たして何と呼べばいいのだろうか。

ただ一つ言えるのは、今の飛鳥は己の命を投げ出してでも、彼を助けたいのだった。

「今度は、私が貴方を助ける——！」

だが、噴煙が晴れて其処にあった光景に、飛鳥たちには今日何度目になるのかも分からない沈黙が流れた。

其処には、彼が異形どもに取り囲まれた光景が有る。其処までは当然だ。ただ一つ違ふとすれば、異形の一体が脇差に刺し貫かれていることだろう。

彼はそのまま脇差を薙ぎ払い、その場で美しい真円を描く。その竜巻の様な斬撃によって、取り囲むようにしていた異形どもを纏めて両断してしまつたのだ。

斬撃によつて屠られた異形は五体、残り一体となつてしまつた異形は其処で漸く撤退を行い、無様に逃走しようとした。そして、それこそが最大の悪手であつた。

戦闘中に背を向けるという行為が、どれ程愚かしいのかを異形は理解しているのだろう。だが、そうせざるを得ない程に異形は恐怖という感情を植え付けられてしまつた。

彼は脇差を改めて握りなおすと、最後の異形に向けて跳躍する。大上段に振りかざした脇差に、重力を上乗せして振り下ろすという、今の彼が持てる最大限の攻撃力を以て異形を両断する。

哀れにも左右真つ二つに絶たれた異形は、断末魔の声すらなく夜の闇に霧散してく。こうして、異形と異能者の戦闘は呆気無く終了したのでつた。

「……あ、私の脇差——」

其処で飛鳥は、彼の手に握られた脇差の正体に気が付いた。何のことはない、それは先程彼女が取り落した二刀一対の脇差、その片割れであったのだ。

思い返せば彼が背にしていた氷塊は、先の戦闘で自身が脇差を取り落した際に氷の魔法攻撃を受け、葛城と共に撤退した地点だった。

氷塊に喰らわせたあの炎の魔法も目くらましなどでなく、氷塊の下敷きになっていた脇差を拾うためであったのだと察しがついた。

だがその場合、脇差を拾ったのは偶然では無いということになってしまふ。それが意味することは――

(――あの化け物を誘い込んで、一網打尽にした?)

その結論に至った飛鳥の背中に、冷たいものが流れる。それは戦術というモノではなく、自分の命をベットにした博打であるからだ。

今回は偶々全ての歯車が上手く噛み合い、異形を殲滅することが出来た。だが、何かしらの不具合があったならば、倒れていたのは彼であった筈だ。

飛鳥は勿論、他の忍メンバーもそのような戦術を取ることはないだろう。ならば、その戦術をとった彼は、一体何者であるというのか。

異形を殲滅し、散り散りになったことにより、影の世界はその存在を保てずに瓦解する。

月は本来の安らかな明るさを取り戻し、世界に色が戻る。飛鳥たちは、其処で漸く一息を付けることができ、気疲れからか誰もがへたり込んでしまった。

そればかりではなく、飛鳥たちの身体は異常なまでに衰弱している。どうやら、あの世界は取り込まれた人間を弱らせるという効果もあつた様だ。

尤も、彼は顔色一つ変えず、平然としたままであつた。しかし、やはり先の戦闘でのダメージが多少残っているようであり、足取りが何処か危なっかしい。

「ふあ……」

(あつ、違ふ。アレは只の眠気だ)

そんな能天気さを見せる彼の様子に、飛鳥は緊張を解かれてしま

い、完全に気が抜けてしまった。

やがて彼は、治癒の魔法を使って自身の怪我を回復し、飛鳥の傍へと歩み寄る。様々な差異こそあれど、それは彼女にとって一ヶ月前と全く変わらない光景だ。

しかし、今はあの時とは違う。仲間が居り、覚悟が有り、そして何よりも、彼自身に此方への興味があつた。

一ヶ月前には何も映していなかった筈のその銀灰色の瞳は、明らかに此方を見据えている。果たしてそれは、どういった心境の変化であるのだろうか。

だが飛鳥には、今そんなことよりも重大な使命が有る。一ヶ月前には果たせなかった、彼女にとって大切な行為だ。

「あ、ありがとうございます！」

『ありがとう』、かつてその一言が言えなかったことが、彼女にとって心残りとなっていたのだ。

丁度、飛鳥を引き起こそうとしていた彼はその言葉を聞いて身を硬直させる。それは彼にとって、余りに予想外の言葉であつたのかもしれない。

「っ、どう、いたしまして……」

相も変わらず表情を変えない彼の瞳の奥に、あの時とは違い、確かに自分へと興味が注がれているのを飛鳥は見逃していない。

間髪入れず、飛鳥は次の言葉を紡ぐ。

「私は飛鳥。あなたの名前も、教えてくれる？」

「……………結城理」
ゆうきまこと

そして飛鳥は、あの時知ることが出来なかった彼の名前を、この時初めて知るのだった。

6話 戦いのあと

2009年 4/7 深夜――

「……………」

「……………」

「……………」

「(く、空気が重い…………)」

沈黙が全てを支配していた。

異形の襲撃を退け、被害者を保護した後、件の少年こと結城理は半蔵学院の裏の顔、忍学科の校舎へと案内された――であったのだが、この有様である。

忍学生の全員が、理の雰囲気呑まれてしまい、嫌でも理解してしまふ。

彼は、まさしく『異常』なのだ――

不可思議な『能力』を持っていると言っても、彼はつい先程まで『表』の世界で生きていた人間だ。

それなのに、いきなり『忍』や『忍学科』といった半蔵学院の裏の顔を説明されても、眉ひとつ動かさず、その言葉を受け入れた。

尋常でない程に肝が据わった大物であるのか、或いはそれを理解できない馬鹿であるのか――、彼女たちには今だ判断が付かなかった。

なお、霧夜は理に忍学科の簡単な説明を行った後、緊急の用事が入った為少しの間だけ席を外すと言い、この場に彼らを残したまま退室してしまっている。

残された面々でコミュニケーションをとってもらおう目的だったのかもしれないが、明らかに失策であった。

「……………ねえ?」

「は、はい、なんででしょう?」

そんな最中、沈黙を破ったのは理からであった。

話しかけられた飛鳥が飛び跳ねんばかりに驚き、上ずった声を上げる。彼女の奇妙な行動に僅かに眼を瞬かせるが、気を取り直して、理

は問いかけた。

「もう帰っていい?」

「い、いやいやいや! 駄目だよ早すぎるよもう少し頑張ろうよ!」
そして告げられたまさかの言葉に、慌ててツツコミを入れることとなる。尤も、こうも沈黙が続いては仕方のない言葉であるだろうが。

肝心な話も無く、益体も無い時間が続く以上、理がここに留まる必要性は無いのである。

「ほら、やっぱり黙ってばかりじゃ駄目だよ、うん! そうだ、お話で
もしよう!」

「はあ……」

飛鳥は理を引き留めるため、無理やりにもコミュニケーションを
図ろうとする。

まずは何から話すべきだろうか——と、其処まで思い到って、
根本的なことを思い出した。

「——っていうか、私たちがまだちゃんと自己紹介すらしていない
じゃん!」

「「あっ!」」

どうやら事ここに至って、飛鳥以外の四名は挨拶の一つすら交わし
ていないことに気が付いたらしい。それ程までに理の纏う雰囲気
異常であつたとも言えるのだが。

「という訳で、まずは自己紹介から行うね。じゃあ改めて私から!

名前は、飛鳥っていいいます。将来の夢は立派な忍になること。好き
な食べ物はいちぢちゃんの大巻きだよ!」

「……結城 理です、よろしく」

その天真爛漫な——半ばやけっぱちだが——自己紹介に気圧され
たように、理も漸くコミュニケーションを行う。

ただ簡単に挨拶した程度ではあつたが、それだけでも大きな一歩
だ。その事実には斑鳩たちの緊張も解れ、自己紹介を行うのだった。

「斑鳩です。この忍学科のクラス委員を担当しております」

「アタイは葛城だ。趣味は、女の子へのセクハラだぜ!」

「……柳生だ。雲雀は私が守る」

「えつと……、雲雀だよっ」

「……よろしく。(……なんだこれ?)」

理も返事を返すが、いろいろとツツコミどころの多い自己紹介である。

斑鳩と名乗った少女は良い、見た目も中身も優等生タイプの人間なのだろう。が、その後が問題であった。

女の子へのセクハラが趣味だと豪語する葛城。『雲雀を守る』と言うがその眼つきが危なっかしい柳生。警戒心を露わにする雲雀。

正直、理ですらこの様な状況でなければ関わり合いになりたくないメンツであったが、こうなった以上は腹を括るしかないであろう。

(……まあ、どうでもいいか)

——その決意もまた、思考放棄という結果でしかないのであったが。

「ゴホン、ではいい加減に話し合いを始めましょう。よろしいですか？」

漸く話し合いの場が進展し、発せられた斑鳩の言葉に理は頷く。状況さえ進行すれば、彼が帰る理由が無くなるのだから。

「結城さん、単刀直入に言えば私たちは『情報』を求めています。

具体的には、飛鳥さん、そして私たちが襲われた化け物——私たちは『妖魔』と呼びます——と、貴方が持つ『能力』についてです。

既にご存知かもしれませんが、あの妖魔には私たちの攻撃が殆ど通じません。……あまつさえ殺されかけてしまいました」

飛鳥がびくりと身体を震わせる。彼女は忍学科メンバーの中で唯一、あの異形にただ一人で対面した経験を持つ。それ故に、あの異形に殺されかけた瞬間を思い出しているのかもしれない。

斑鳩は彼女に向け「すみません」と軽く呟いて、続きを話し始める。

「ですが、そこに現れたのが結城さん、貴方でした。

貴方は妖魔に立ち向かい、私たちを救ってくれたばかりではなく、妖魔と同じような能力でもって倒しました。

それ故に、貴方が何かしらの情報を持っていると踏み、こうしてお呼びいただいたわけです」

斑鳩は其処で一旦言葉を切り、理の顔を正面から見据える。

その眼には、どこまでも強い決意が揺らめいていた。

「厚かましいお願いかもしれませんが、それを我々に教えてほしいのです。」

勿論、それなりの謝礼をさせていただきます。……結城さん、どうか私たちに力を貸していただけないでしょうか」

そして斑鳩は、その場で深々と頭を下げる。

脚を正座の形に組み、三つ指を付いてのその姿勢は誰がどう見ても土下座の形であった。

「アタイからも頼むぜ。その妖魔の奴らはかなりヤバイみてーだからな」

「頼む。雲雀を——もとい、人間を守るのが忍の使命なのだ」

「うんうん、ありがとう柳生ちゃん！ 私もいっっぱい頑張るからねっ♪」

次いで、葛城、柳生、雲雀が思い思いの言葉を口にする。

葛城は先程までの砕けた態度は何処へやら、年長者としての雰囲気纏わせ、理へと協力を乞うた。

柳生の言動は相変わらずアレだが、内容こそまともであるし、雲雀の態度もその彼女を信頼しているからこそなのだろう。

理には、彼女たちが、忍というものが、それ程までに異形の情報を欲しているのかを伺えた。

それは当然だろう。彼とて、あの異形がどれ程人間社会に多大な影響を与えるのかを気付いている。

「……事情は分かった」

「っ、ではー！」

「———だけどそれでも、君たちの力になることは出来ない」

「そんな、どうして!？」

「飛鳥、俺は言ったよね。『話せることなんか何も無い』って」

理がかつて、別れ際に放った台詞を思い起こしながら、理は飛鳥に問う。

なお、彼が飛鳥を呼び捨てにするのは、単に彼女の苗字を知らない

為だ。尤も、『飛鳥』という名はあくまでも忍としての偽名である為、苗字など存在しないのだが。

それでも名前を呼ばれたことに僅かに胸を高鳴らせつつ、彼の言葉に反論する。

「確かにそうだけど……。でも、少しくらい奴らの事を教えてくれても——」

「……？ ああ、もしかして勘違いしてない？」

勘違いしている、だって？ そう言われた忍学科メンバーが、皆一様にして首を傾げる。

そして、唯一彼の言葉を聞き、僅かに違和感を覚えていた飛鳥だけが、その答えにたどり着く。

だが、飛鳥がその回答を発する前に、当の理自身によってその答えが、そしてこの場の爆弾になりうる言葉によって紡がれるのだった。

「俺はあの『化け物』も、この『能力』も——、一体何であるのか、何も知らないんだから」

「「「「……ええええええ——————————」」」」
!!!???



『能力』が使えるようになったのは、十年くらい前だ」

彼女たちがひとしきり驚き通した後を見計らって、理は語りだした。

誰も彼もが、理が肝心な情報を持っていないことに驚愕し、放心状態のまま聞き入っている。

「それからあのバケモノに毎夜襲われるようになったから……、自分の周辺の奴らを『掃除』するようにしているんだ。……飛鳥と出会ったのも、その所為だね」

あの異形の討伐を、彼は『掃除』と表現した。彼女たちは彼が見せた流れるような戦闘から、その技量の高さを知っている。

十年近く行っているその行動は、彼にとってもはや『作業』となつてしまっているのだろう。

そして、その言葉に深く納得したのは葛城であった。彼女が理の強さに違和感を感じていたのは、こういった事情が有ったのだ。

「だけどその十年の間、この能力に関する情報は一切手に入らなかった。

あと、君たちみたいな組織が接触してきたり、同じような能力者も見かけなかったな」

「……じゃあ、あの妖魔の名前すらも分からないって言うのか？」

「……名前？ そっか、名前も必要だよな……。……。『シャドウ』でいいんじゃない？」

「今決めたのかよ!？」

いち早く硬直から復活した葛城が異形について情報を聞き出すのが、そもそも名前すら定まっていなかった様だ。その場のノリで名前を決めてしまった理にあきれる様に、彼女たちは天を仰ぐ。

しかし、そのネーミング自体に反論は無い。地面を這いずる黒き姿はまさしく、『影』^{シャドウ}というに相応しい存在であったのだから。

そして、十年近くシャドウに付き合っている理ですらこうなのだから、彼及び彼以外の人間が、シャドウや能力の情報を持っていないのは確からしい。

かといって、彼以外にシャドウや能力に精通する人間が居ないのも、また事実であるのだ。

「どうすんだよ、オイ」

「想定外だ……。まさか当の本人ですら、能力の詳細を知らないとはな……」

「だけどっ！ あの力が無いと、たくさんの人が困るのも事実だよっ？」

ひそひそと囁き合う少女たちは、無益な情報を掴まされた恨みつらみを含めた視線を理に送る。

されども、そんな姑息な真似をしたところで事態が好転する訳でもなく、当の本人もどこ吹く風であった。

完全に手詰まりとなってしまうた忍メンバーは、理の様子を見て暗い影を落とす。だからこそ、そんな最中でぼつりと眩かれた斑鳩

の言葉に、その場の誰もが耳を疑ったのだ。

「——結城さん、私たちの仲間になつていただけじゃないでしょうか？」

飛鳥たちは、始めは斑鳩のその言葉を冗談だと受け取った。その直後に、彼女の眼を覗いて、その言葉が本気であることを悟った。

そもそも斑鳩が、この様な場で冗談を言うような性格ではないことを彼女たちは知っている。そのことを失念するほどに、彼女の言葉は衝撃的であったのだ。

「一般人である貴方に、このような提案をするのは筋違いだと理解はしています。

しかし、我々が妖魔——いえ、シャドウから人々を守るためには、どうしても力が足りません。

………貴方の力が必要なのです。どうか、今一度お願い申し上げます」

そう言つて、斑鳩は再び頭を下げる。当たり前だが、忍学科のクラス委員長を務める彼女の頭というのは、決して安いものではない。尤も、理が持つシャドウに対抗できる能力は、それを補う程の対価があるのもまた事実だ。

だが、それを言われた理自身は何と——、何時もと変わらぬ無表情であり、そうして紡がれた彼の言葉に今度こそ誰もが言葉を失つた。

「……………分かりました」

あつさりとして、理は死地へと足を踏み入れるに等しい言葉を答える。それこそ、斑鳩自身すら驚愕するほどに。

果たして、その眼に浮かんでいるのが驚愕なのか、納得なのか、或いは諦観であるのか。それすらも、彼女たちには判断が付かないのだった。

7話 この不思議な感覚

それは、忍学科が理との共闘の契約を取り付け、更に細かな話し合いを始めようとした矢先の出来事であった。

「……あう」

「えっ? きゃあ!」

なんと、理はいきなり倒れ込むようにして、斑鳩の胸に身を預けたのである。

向かい合って座していた為に、理の顔が丁度斑鳩の双丘の谷間に挟まれるような形となり、図らずも彼を優しく受け止めていた。

そして突然の出来事に斑鳩はらしくない悲鳴を上げ、身を硬直させる。それがいけなかった。

「ええ!? なにやってるの、結城くん!」

「おおお! なんだなんだ、いきなりどうしたってんだ結城イ! 羨ましいぞコンチキショー!」

飛鳥が戸惑いの声を上げ、葛城が面白がって囁し立てる。

柳生は無言のまま「やらかしやがった」とでも言いたげな表情を浮かべ、雲雀の目を塞いでその場面を見せない様にしていった。

一瞬にして場は混沌とした状況に包まれ、先程までの真剣な雰囲気は何処に行つたと思いたくなるような光景だ。

斑鳩もようやく再起動し、不埒な行動に出た理を張り倒そうとして、その両肩に手を添えて――

「……ねむい」

そんな彼の呟きを聞いて、はたと己の行動を制する。

理の肩を抱いたまま時間を確認すると、既に深夜一時を過ぎ、彼らの様な学生が起きているには相応しくない時間帯となっていた。

しまったと内心思い、斑鳩は眉根を寄せる。始めの呆けていた時間が、今では余りに惜しい。

人類の敵シャドウを討伐するには、彼の力が絶対的に必要である為、今は直ぐにでも彼との契約内容を押し詰めたのである。

しかし、流石にこうなってしまうては話し合いを続けるなど不可能

であろう。

いや、それだけではない。そもそも、ついさつきまで彼はシャドウとの戦闘に身を投じ、自分たちの命を救ってくれたのだ。

理の能力とて、少なくとも代償を必要とするのは斑鳩たちに説明され済みである。

彼の説明では、能力の発動は『精神力』を対価とするという。つまり、現在の理は精神を疲弊しきっているのだ。

今回は、その疲弊が眠気となって表れているのだろう。そう気が付けば、この様な役得くらいはさせてしまってもいいのではないかと思おもする。

……するのだが――

(は、恥ずかしすぎる――！)

いくら何でもそうはいかない。

周りの全員が彼の疲弊を察し、無言のままに休ませるべきだという意見で一致はする。

故に、誰も手を出さない。生暖かい視線で斑鳩たちを見つめるだけだ。

約一名が剣呑な視線で見つめてくる。

約一名が好奇の視線で見つめてくる。

約一名が無表情のまま、残り一名の目を塞いだまま見つめてくる。

そんな雰囲気、斑鳩の羞恥心が蓄積されていく――

「ん……やわらか……、まくら………？」

そこで斑鳩の羞恥は臨界に達し、理を思い切り突き飛ばして、この騒動は収束するのだった。



「……すいませんでした、今回は此処までと致しましょう。飛鳥さん、彼の送迎を」

「はい、任せてください！ えっと、結城くんは何処に住んでいるの？」

「……ん」

理はもはや意識朦朧であるのか、のろのろとした動きで懐から何かを取り出す。

どうやらそれは、彼の学生証であつたらしい。実家通いにせよ寮住まいにせよ、コレに記載された住所を見てくれということだ。

しかし、その学生証を見た飛鳥が突如として顔色を変え、叫んだ。「えっ、これってウチの学生証じゃない！ 結城くん、半蔵学院に通つてたの!？」

「何ですって（だって）（だと）!?!」

三者三様の叫びが木霊する。まさか今事件の渦中にいる彼自身が、我らが半蔵学院に通つていようとは想像だにできなかったからだ。彼女たちとて、このマンモス校に通う全ての生徒たちを把握しているわけではないが、理がその生徒の一人であるなどは寝耳に水もいところである。

「そういえば、朝の登校時に結城くんみたいな人を見たような……」

飛鳥はつい朝方の登校時間帯、入学式での人混みに紛れて、『青』の存在が有ったことを思い出す。それはつまり、理はこの半蔵学院に入学してきた生徒だということであった。

しかし、其処で新たな疑問が彼女たちに生じる。即ち、彼がどうしてこの半蔵学院に入学してきたのか、ということだ。

一月前の理と飛鳥の会合では、彼女は自身が半蔵学院の生徒であることなど一言も発しておらず、彼が飛鳥と半蔵学院を結びつけることは有り得ない。

もしくは、表向きは普通の進学校である半蔵学院に編入してきた可能性もある。

だが、かつて彼らが遭遇した地から遠く離れた、ここ以外にも進学校が多数あるこの東京の半蔵学院にピンポイントで編入してくる可能性など限りなく低いだらう。

結局、彼女たちがどう頭を捻つても納得の行く回答が出ず、当の理自身は既に寝息を立て始めている始末だ。

斑鳩は一旦思考を打ち切り、この後で学院の資料を徹底的にかき集

めて彼の履歴を調べることに決める。恐らく、今夜は完徹になることだろう。

そんな人の気も知らずに、ぐーすかと惰眠を貪っている理に僅かな苛立ちを感じつつ、この場を収めることにするのだった。

「はあ……、もういいです。飛鳥さん、お願いします」

飛鳥は夢うつつな理の手を取って外へと引つ張り出していき、暫くすると「おおっ」という理の短い困惑の声が全員に届き、そして聞こえなくなる。

忍学科の校舎の窓からは、理を所謂お姫様抱つこの形に抱えた飛鳥が、忍の跳躍力を以て、月明かりの指す街へと彼を運んで行った。

なお、その役目に飛鳥を指名したのは、彼女の理に対する思いを汲み取ったことである。

しかし、斑鳩たちは一度彼と相対して、色々と思うことが出来てしまった。

「……どう思います、彼を？」

何処か遠くを見つめる様にして、斑鳩は仲間たちに問いかける。だが、その答えなど解りきっているも同然だ。

「あー……、何て言えばいいのか……」

「直接顔を合わせて思ったが……」

「悪い人じゃないようだけど……」

葛城、柳生、雲雀の三人は言葉を濁しつつも、斑鳩の問いに答える。即ち——

「「「分かり辛い」」」

——人物評価としては、余りにも程遠い答えを。

ハッキリ言つて理は、どう考えても『怪しい』に分類されるべき人物であるだろう。

だが、それは必ずしも彼が『悪』という存在であることの証明にはなり得ず、逆に『善』であることの証明も出来ない。

飛鳥や自分たちの命を救った——、だがそれは単なる作業の一環であつた。

『シャドウ』や『能力』の詳細を教えてくれなかつた——、だがそれは

彼自身も与り知らぬ事であった。

そして何よりも、彼の『眼』は彼女たちを恐怖させた。その『眼』には、余りにも何も浮かんでいないからだ。

分からない、分からない、分からない……。結城理が一体何を考えているのか、斑鳩はまるで分からなかった。

決定的であったのが、斑鳩たちがシャドウに襲われて理に救援を申し出た際、彼が何の躊躇いもなくそれを受け入れたことだった。

あれではまるで、ただ指示に従うだけの『傀儡』の様ではないか。そこまで考えて、斑鳩は結城理の持つ危険性に気が付く。

（危なかった——もし、私たち『善忍』よりも先に『悪忍』が彼に接触していたら——！）

『悪忍』、それは彼女たち『善忍』と対を成す、己の欲望を最優先とする者たち。

もしもこの世に混沌を望む者たちが彼を先に確保していたのならば——、理は文字通りにその者の傀儡となっていただろう。

それこそが『善』でも『悪』でもない、『中庸』^{ニユートラル}に位置する彼が持つ危険性であった。

「——い、おい、斑鳩！ 何時までボーっとしてるんだよ！」
「っ、すいません。少し考え込んでいたようです」

「……やはり、アイツは危険か？」

其処で葛城に声掛けされ、思考の渦へと沈んでいた斑鳩を現実へと引き戻す。

そして、深刻な表情で思い悩んでいた彼女に絡んできたのは、彼はどこか危険視する様子の柳生であった。

「いえ、少なくとも今の状態ならば危険は無いでしよう。……我々が、彼の手綱を握っている限りは。」

……これからは、交代制で彼の監視を続けることにします。間違つても、悪忍などに彼の存在を漏らす訳にはいきません」

斑鳩は重々しい口調で宣言するが、内心で我ながら酷い話もあったものだと思う。仮にも命を救ってもらった相手だというのに、まるで信用できないとは。

尤もそれは程度の差はあれど、この場に居る誰もが抱いている思いでもある。例外は、自分たちよりも先に命を助けられた飛鳥ぐらいのものだ。

斑鳩は、そんな風に人を信用できる飛鳥を少しでもだけ羨ましく思うのであった。



「……すまない、遅くなっちゃった」

斑鳩が理の資料を纏めるために、移動を開始しようとしたところで、それに待ったをかける声が聞こえた。

虚空から煙幕をまき散らし、悲痛な顔をして現れたのは、緊急の用事で席を外したはずの霧夜である。

「霧夜先生、お疲れ様です。緊急の用事とは、一体何が有ったのですか？」

「ああ、件の妖魔に関しての被害報告なのだが……。想像以上に厄介なことになっている様だ」

霧夜はそう言って一度目を伏せ、苦虫を噛み潰したような顔をしたまま言葉を紡ぐ。

「お前たちが保護した妖魔の被害者を検査したところ、彼は『無気力症』と診断された。

恐らく、ここ最近の無気力症の原因は、ヤツらにある」
「なんですって!?!」

その言葉を聞いた斑鳩たちは顔を青ざめる。
『無気力症』——、それは最近流行し初めている疾患である。患者

はある日突然、何事にも無気力となってしまふ様子からこの名が付けられた。

だがその実態は、患者は介護なしでは生きられなくなってしまう程の恐ろしい病だ。巷では既に衰弱死、孤独死による死亡者が多数出ており、深刻な社会問題となっている。

一月前に飛鳥が保護した男性も無気力症と診断されていたが、発見

された時点で発症していた為に、無気力症とシャドウとの因果関係が成立しなかった。

しかし今回、健常者であった筈の男性が彼女たちの目の前でシャドウに襲われ、保護した直後に無気力症を発症していた為に、原因がシャドウだと特定することが出来たのだ。

「もはや、我々に残された手段は無い。一刻も早く彼との協力を取り付け、妖魔討伐に繰り出さなければ——」

「……結城さんとの協力は既に取り付けました。後は、細かい契約内容を押し詰めるだけです」

「何？……いや、そうか」

霧夜は理解したとばかりに溜息を吐く。霧夜は理とはまだ面識は少ないが、彼もまた、理の意志薄弱ぶりに危ういものを感じていたのだ。

それでも、共に戦ってくれることとなった理に感謝と、申し訳なきを募らせていた。

最上忍という高い実力と地位を有する霧夜であるが、彼は基本的に生徒たちに手を貸す等という直接的な行動をとることは出来ない。

今回の妖魔襲撃という場合であっても、その掟が覆ることはなかった。故に、どうすることも出来ない自身に歯噛みをしている。

(すまない、皆。そして結城くん……。君たちに重い役目を負わせることになってしまった……)

それでも、彼は信じている。飛鳥たちが、結城 理が、この悪意に満ちた現状を打破してくれることを。

だが、窓から見た外の町は夜の闇に染まり、暗澹とした彼の心情を表しているようでもあった——



——時間を少し遡る。

理を抱きかかえた飛鳥が向かった先は、半蔵学院高等科の男子寮であった。学院付属の寮である為、大した時間もかからずに到着したの

だが、ここからが大変である。

深夜一時を過ぎているとは言えども、巡回中の警備員が居り、今だ起きている生徒も少なくは無いだろう。飛鳥はそんな寮内を、理を抱えたまま、高度な隠密行動をとる羽目になっていた。

しかし、飛鳥とて忍である。この程度の潜入任務ならば幾度もこなしており、ましてや忍などでない寮内の人間に、彼女が後れを取る筈が無かった。

尤も、色々な意味で気になっている男性を抱えているという状況に飛鳥は、心臓の鼓動を高鳴らせっぱなしであった。その音が誰かに聞こえやしないだろうと、内心ビクビクとしていた程である。

兎にも角にもそんな障害を乗り越えて、漸く理の部屋の前まで到達し扉を開けようとするが、その時になって飛鳥はあることに気付く。

「おっと、鍵を開けないと。……結城くん、起きてー?」
「……すー」

当然と言えば当然だが、部屋の扉には鍵がかかっている。理を起こして開錠を頼もうとしたのだが、完全に熟睡している為それも叶わない。仕方なく飛鳥は理の懐を探り、鍵を探し始める。だが、真っ先に眼についたあるモノが、彼女を捉えて離さなかった。

「これって……、『鍵』だよな?」

それは、彼の首から細いチエーンで下げられていた『鍵』であった。青一色の本体に、柄に彫られた仮面の彫刻が高級感を漂わせる、アンティークな逸品だ。しかし、見た目からしてとてもこの部屋のモノとは思えないし、実際に違うのだろう。

好奇心から手に取ってみると、硬い質感と冷たい温度がぼんやりと伝わってくる。この不思議な感覚をどう表せばいいのか、飛鳥には分からなかった。

「……ううん」

「ひゃっ!」

突如響いた声に、飛鳥は飛び上がらんばかりに驚いて、思わず辺りを見回してしまう。

それは単に理が寝ぼけた声を出したただだったが、彼女を正気に戻

らせるには十分だ。どうやら、たかが鍵一つに気を取られすぎていたようである。

気を取り直して飛鳥は再び理の懐を探るが、依然として部屋の鍵は発見できない。ならば、ズボンのポケットに仕舞われているということだと気付き、ズボンへと手を伸ばすがふとそれが止まる。

……流石に、男性の股間に近い部位を探る勇氣は出なかつた様だ。その為飛鳥は、ピッキングによる開錠を行ったのであった。

「そういえば、父さんやじっちゃん以外の男の人の部屋に入るのって初めてかな？」

うわ、ちよつとどきどきして来た。それじゃあ、お邪魔しまー……、す………？？」

飛鳥は理の部屋の様子を見て——最早何度目になるのだろうか——言葉を失う。

理の部屋は、テレビや冷蔵庫といった家電に始まり、巨大なベッドに衣装棚、簡素なキッチンが備え付けられているという、一学生に与えられる部屋としては相当に上等な代物である。今飛鳥たちが居るこの場所も、男子寮の最上階なのだ。

しかし、飛鳥が驚愕したのは、それらに何の変わりも無い——、変わりが無さ過ぎる、人間が住むには余りにも生活感が無い内装であった。

部屋の内装というものは、純和風であったり、ぬいぐるみ塗れの可愛らしい部屋であったり等、多かれ少なかれ人間性が出るものだ。

だが、この部屋はそんな人間性が全く感じられない無味乾燥な内装である。そこで飛鳥は、この部屋の違和感の大本に気付く。

(この部屋……、結城くんのモノが殆ど無いんだ)

例えば漫画や小説などの蔵書、或いはゲームといった娯楽品。そういった彼特有の物品がこの部屋には存在しないのだ。

精々が最低限度の衣服や制服、参考書、机の上に置かれた学業用と思われるノートパソコンといった程度だった。

果たして理は、一体どのような人生を歩んできたというのだろうか。飛鳥は熟睡している理を、そつとベッドに寝かせ、その顔を見つめた。

「ん……」

ベッドに横たわり、月明かりに照らされ微睡む理の姿は、男とは思えない程の色気を発している。

収まったはずの飛鳥の鼓動が、再び早くなる。もう何度も味わった、不思議な感覚だ。それが良いモノなのか悪いモノであるのか、飛鳥には今だ判断が出来ない。

だが、ただ一つだけ確実な事が有るとすれば――

（――私は、結城くんを■■■■たいと思っている）

そんな、内に秘める欲望だ。

どれぐらいそうしていたのだろう。飛鳥はふと我に返ると、そんな感情を抱いた自分を信じられないでいた。

それはまるで“もう一人の自分”が存在するかのようになり、有り得ない妄想であつたのだ。

（な、何を考えてるの！ 結城くんはそんなんじゃないんだから！）

一体誰に言い訳しているのか。飛鳥は頭を振り払うようにして、そんな感情を追い払ってしまう。

暫くそうして頭を冷やしていると、時刻は午前二時過ぎとなつてしまつていた。いい加減飛鳥も休息を取らなければ、明日へと響いてしまう。

「じゃあ、私も帰るから。おやすみなさい、結城くん」

既に寝入っている為、理には聞こえないだろうが、飛鳥は別れの挨拶を伝える。それが微妙に気恥ずかしかったりするのだが。

これで全ての用を済ませた飛鳥は部屋の窓に足を掛けると、其処から一気に跳躍し、彼女自身の寮へと戻っていくのであつた。



暗い部屋の中で、少年は薄目を開け、窓の方に顔を向ける。

そして、誰に聞かせる訳でもなく呟いた。

「……………おやすみ」

やはりその呟きは誰にも届くことなく、夜の闇夜に溶けていくの

だ
っ
た
—

8話 過去と運命と

2009年4月8日 朝

朝、飛鳥が忍学科へと登校し、真っ先に眼についたものは、何らかの書類に目を通したまま唸り続けている斑鳩の姿であった。

一瞬、邪魔をするべきではないだろうかという考えが頭をよぎるが、斑鳩が見ている書類の中身に心当たりが有った為、そちらに近づく。

「斑鳩さん、おはようございます。あの、その書類つてもしかして……？」

「あら、おはようございます飛鳥さん。ええ、この書類は全て、結城さんの資料ですよ」

机の上にぶちまけられた書類の山は相当数に上り、これまでの彼の人生に関するあらゆる情報が集められたのだろうと想像がつく。

ほんの数時間でよくこれだけの情報が集められたものだと感心すると同時に、プライバシーも何もあったものじゃないと、理に同情するのだった。

今、斑鳩が主に眼に通しているのは、彼が能力に覚醒したという十年ほど前の記録であるようだ。

飛鳥もそちらが気にはなるが、取りあえずは最近の記録を確認することにし、半蔵学院に入学してからの資料を手取る。因みに、この膨大な書類は入学からの資料が最も集められているようでもあった。「げっ!」

しかし、ほんの一ページ目から凄まじい情報が記されているのを眼にし、思わず声が漏れる。

斑鳩が声に驚いて目を向けるが、「ああ、やっぱり」と納得された顔をされたので、この驚きようは想定内であったらしい。

其処に記されていたのは、こんな情報であった。

・結城理。半蔵学院高等科二年。特待生制度により奨学金を受け取っており、編入試験において全教科満点という成績を収めている。進学校である半蔵学院では、優秀だが金銭的な事象によって入学す

ることの出来ない生徒などに対する、特待生制度が存在する。

ただし、その見返りに対する成績は当然の如く最優秀の物を必要としている。理は半蔵学院高等科において、その最優秀の生徒の一人であり、この奨学金を受け取っているのであった。

忍である彼女たちは一般的な学業にあまり縁が無いが、この進学校において最優秀の成績がどれほどのものであるかは勿論理解できる。「お蔭で、結城さんの資料はあっさり見つかりましたよ」という呆れるような言葉は、斑鳩の弁であった。

そんな理の一端に触れつつも、飛鳥は資料を読み進めていく。ある程度の資料を読み進め、獲得できた情報は以下のようなものだ。

・家族構成は無し。十年ほど前に事故で家族が死亡し、天涯孤独の身となった。その後、親戚中を盪回しにされ、数多くの転校を繰り返している。

・しかし、中学生の半ば頃から親戚との折り合いが悪くなり、学生寮の付属する学校を選んで入学。それ以降、一人暮らしを行っている模様。

・成績面、運動面、芸術面において秀でた生徒だが、一方で生活態度、コミュニケーション能力に難有り。

特筆すべきは、この様な情報であろうか。そのあまりにも数奇な人生の歩み方に、飛鳥は眩暈を覚えるほどであった。

そしてこの中で、最も重要な項はやはり、彼が家族を失ったという十年前の事故だろう。丁度、彼が能力に目覚めた期間とも合致している。

しかし今だに十年前に関する資料は斑鳩の手の中に在り、飛鳥はそれを見ることが出来ないでいた。

「そういえば、かつ姉は？」

「葛城さんなら、結城さんの資料を確認した後、彼の監視に行きましたよ」

飛鳥は理の半蔵学院に来てからの資料を一通り確認し終えた後、葛城の姿が無いことを斑鳩に問いかけた。

対して斑鳩は、やはり資料から目を離さないまま淡々とした口調で

述べる。因みに、葛城もまた、理の成績を見て絶句した一人である。

「そういえば、結城くんの監視をすることにしたんですね……」

「気になりますか？」

「……まあ、気にならないと言えば嘘になりますけど」

そんな風にむくれる飛鳥を、斑鳩は微笑ましい目つきで見つめる。

彼女は今、自分の後輩がどのような思いを抱いているのかをある程度は理解しているつもりだ。

忍である少女と、命の恩人にして監査対象である少年——、それが許されるものであるのかは、今は分からない。

というかそもそも、そういった感情が未経験である自分が、いくら考えても理解できるものではない筈なのだ。

……取り敢えず斑鳩は、そうやって忍の責務と自身の感情に振り回されて頭を抱える後輩を眺めつつ、この辟易とする資料の確認を行うのであった。



結城理は学生寮から一步踏み出したその瞬間から、自身を見定めるような視線に気が付いてしまった。

それはいわば《心眼》とでも呼ぶべき、彼の十年にも及ぶシャドウとの戦闘で培われた気配察知の能力だ。

本来はバックアタックを防ぐためのスキルであるが、こういった風に自身への視線なども察知できるスキルでもある。

「それも当然か」と、理は思う。彼とて、自身が信用に値する存在ではないことを理解しており、彼もまた『忍』という存在を信用しきれないのだから。

そしてそれをおくびにも出さず様子も無く、平静を取り繕っている。だからこそ今、理を監視している葛城は、己の尾行が気付かれたなどと思ひもしなかったのだ。

「朝六時半起床、その後朝メシと弁当を並列して作って、学校の支度。んで、七時半に登校……か。なんつーか、この上ないほど、健康的だ

ねえ……」

そう言つて理の行動を逐一観察し、メモしていく葛城の姿までは流石に気付けないが、理にはおおよその予想はついている。

尤も、それを咎める気など理にはさらさらない。経緯はどうあれ、忍学科と共闘することになった以上、こうなることはあらかじめ想像できていたからだ。

これが互いの信頼の為に必要とあらば、好きなだけ監視すればいいというのが、理の感想である。……別段、自身の生活が監視されようと、どうでもいいというのも理由にあるのだが。

理が半蔵学院に登校すると、葛城はより一層気を引き締める羽目となる。

この監視は理の人間性を見極めるといっただけでなく、不可思議な能力を持つ理が悪忍に接触されないかという護衛の意味もあるからだ。

その為葛城は、今日一日の理に近づく人間などの見極めも必要となっている。理に近づく人間を一人一人観察するのは骨だろうが、気合を入れ直し、監視を続けるのだった。

2009年4月8日 昼休み——

「……………暇だ」

正直、舐めていたかもしれない。それが結城理の監視という任務を請け負った、葛城の感想であった。

その理由はたった一つに尽きる。——変化が無さ過ぎるのだ。半蔵学院の最優秀生徒というだけあって、理の行動は真面目が過ぎるほどに真面目だった。

朝のホームルーム前に着席した理は、質疑応答や離席などの場合を除き、殆ど微動だにしていない。動きらしい動きは、教科書やノートを捲り、シャープペンを走らせるだけだ。

しかしそれらは、勉強一辺倒の進学校だからという理由でまあ通るモノだ。それだけであるならば、葛城も納得できる。

だがしかし、理に近づく人間というのが皆無であったのが解せない

かったのだ。

授業と授業の合間の小休憩の時間帯、彼は常に一人きりというのを貫いている。彼に近づくのも、彼から近づくといいものも、どちらも存在しなかった。

「あいつまさか、ぼっちキャラか？」

中々に酷い言い分の葛城の言葉は、ある意味では正鵠を射ていた。単純に編入したての理に知人友人がいないだけなのだが、彼のコミュニケーション不足もそれを助長しているのだ。

何より、普段から陰鬱な雰囲気を発する理に近づこうとする人間自体、そうそういないだろう。

こんな只の監視以下の任務では、武闘派かつアクティブな葛城が飽きを感じてしまっても仕方のないことであつた。

「——つと、やべーやべー。また見失う所だつたぜ」

そんな監視体制ではあるが、気を緩めることなどは出来ない。

昨夜の八面六臂な活躍ぶりからは到底想像しにくいが、どうも彼は有事だろうと平時だろうと常にローテンションを保っている様だ。

少しでも気を抜けば、その存在感の薄さから見失ってしまうことすら有つた。おかげで葛城は、こうして一時も気を抜くことの出来ない緊張状態に晒されている。

これはこれで鍛錬にはなつたりするが、流石にその程度では彼女の退屈は紛らわせない。こういう場合は趣味のセクハラで気を紛らわせるのだが、その相手も居ない。

よつて葛城は、その溜まった鬱憤を晴らさせる相手として、理を見据えていた。

「そうだな……、今日の鍛錬相手は、アイツにしてもらうか。うっしっし」

尤も、強者との戦いを望む彼女である為、それは理の強さを期待したモノでもある。単なる憂さ晴らしとどっちが性質が悪いのかは判断が難しい。

故に理は、遠くから此方を睨む視線に殺気とも好感とも付かぬ、言い知れぬ感情が混ざり始めたのを察し、背筋に冷たい何かが流れるの

を感じるのだった。



2009年4月8日 放課後――

「つーわけで、アタシとの組手を頼むぜ！」

「分かりました」

「……相変わらず悩まないねえ、お前」

放課後、忍学科へと案内された理へ葛城は、早速組手の相手を要求する。しかし、理のその即断に驚かされるのは何度目になるのだろうか。

彼がそれを当然の様に受け入れるため、初めから受け入れるつもりだったのではと葛城は勘ぐってしまう。理自身も、ある程度は何かしらの要求はされるだろうと予想は付けていたのだが。

なお、既に理は斑鳩との対談により、今後自分がどのように忍学科へと係わっていくのかをある程度話し終えている。

尤も、彼にとつては今まで行っていたシャドウ討伐にスポンサーが付いたようなものであり、本質的に変わるものなど何もない。

理に言わせれば、精々が今まで難儀していたという、武器の調達をすることが出来るのが変わった点であるらしい。

今まではナイフや素手に限らず、包丁や拾った鉄パイプ、果てはデッキブラシやグラブ代わりのパペット人形で戦っていたという彼の言葉に、誰もが呆れかえる他なかった。

「何で色々な武器を使うの？ 一つに絞った方が闘いやすくない？」

「別に拘りとか無いし、拾ったらタダだ」

「……ああ、そういう」

飛鳥の素朴な疑問は、何時もの如く感情を感じさせない声で答えられる。理は武器を選ばないという性質では無く、彼の懐事情によるモノが原因だったようだ。

恐らく以前、武器を砕かれた際に顔を顰めたのも、そういった事情

が有るのだと飛鳥はそつと察するのであった。

「ま、それなら体術勝負でいい試合が出来そうだな！」

そう言つて笑顔を浮かべる葛城は、既に思考が理との手合せに逸らされている。

対して理は何時もの様に無表情であり、これから行われる試合に対する不安や高揚といった、一切合財の感情を見せることが無い。

葛城の様にバトルジャンキーになれとまではいかないが、飛鳥がそれに怪訝を感じてしまうのは仕方のないことであつた。

「結城くん、別にかつ姉の組手を断つても良かったんだよ？ アレはかつ姉の我儘なんだから、キミが付き合う必要なんて無いんだし……」

飛鳥は理にこそそそと耳打ちし、彼の真意を確かめようとする。これが単純に、仲間内での親睦を深めようとする行為であるなら理解はできる。

しかし、飛鳥から見て彼にはそう言つた思惑が見て取れず、何を考えているのかが全く理解できないのだ。

「……教えて。結城くんは、どうしてそこまで——」
「おーい！ さつさと行くぞー！」

だが、その心の内を探る前に、葛城によつて中断させられてしまう。後ろ髪を引かれつつも、飛鳥と理は会話を終え、葛城に従つた。しかし、組手を行う訓練場へと歩みを進める葛城に追従しつつ、理は口を開くのだつた。

「……理由なんて無いよ」

「え？ ちよつ、待つ——」
下手をすれば、聞き取ることが出来ない程のか細い声を、飛鳥は確かに耳にした。

その真意を語ることなく、理は訓練場へと歩みを進める。飛鳥はその背に問いかけようとして、それが出来なかつた。

纏う雰囲気が変わつた訳では無い。相も変わらず、超然とした雰囲気。言葉を重みが有つた訳でも無い。何時もの如く、無味乾燥な物言い

のままであつた。

何一つ変わらない、只の一言。飛鳥には、それが堪らなく恐怖を感じさせた。

飛鳥はその理の背に何一つ問いかけることなく、彼に追従するまま、訓練場へと向かうのであつた。

9話 求む！強い奴！

最早何合目になるのだろう——

二人の少年少女の身体と身体、技と技。

打ち合わされる肉体が鳴らす轟音は、訓練場である体育館内に響き渡る。

肉を裂き、骨が軋み、全身を痛みによって支配される。

しかしそれこそが、少女——葛城の血を湧かせ、魂を震わせる——

（そうだ、此れこそがアタイが求めてやまないモノだ）

対峙する少年——理は一瞬だけ身を屈めると、まるで爆発したかのような瞬発で葛城に肉薄する。

無論、技量で勝る彼女に真正面から突っ込む愚を犯したわけではない。カウンターで振るわれた旋風脚を、当たる寸前で突っ込んだ速度と同じままに後退し、回避する。

すぐさまサイドステップによって葛城の振るわれた脚の側——今の彼女の死角だ——に回り、攻撃を行う。

対人戦の経験がほぼない理ではあるが、人体の構造などは理解しており、それによって導き出される急所部位なども把握している。

今回彼が狙ったのは、内臓へとダメージを通しやすい脇腹であった。そして、彼の足が的確に、彼女へと振るわれる。

だが——

「疾ッ！」

「——っ」

信じられない速度で引き戻された彼女の脚が、彼の蹴りを受け止め、そのまま拮抗状態に入る。

これでまたしても、何合目かの打ち合いだ。それがまた彼女を悦にさせる。

単なる訓練では得られない達成感。

格下を打ち倒しただけでは得られない満足感。

自分が確かに強くなっているという充実感。

強者との手合せの、何と甘美なることか。

(ああ、堪らない——)

そして、拮抗はいつまでも続かない。先に音を上げたのは、理の方であった。

「オラアッ！」

「くっ！」

打ち合わされたままであった脚に気合一閃、理はそのまま強く弾き飛ばされる。

——否、彼は葛城の脚力が自身に伝わる寸前で軸足の力を緩め、彼女の力でワザと弾き飛ばされたのだ。

あのまま力を入れ続けていれば、自分の脚が折れていた故の判断であり、同時に葛城から距離を取るための回避行動であった。

しかし、葛城も馬鹿ではない。忍として理以上に戦いの年数を重ねているため、今、理が行った行動の真意を正しく理解しているのだ。

忍——、そう、忍である。

忍として生まれ、忍として育ち、忍として生きる覚悟を持つ葛城は、当然その肉体や技量を鍛え上げている。

そのレベルは勿論理の上を行き、本来ならば彼が敵う道理も無いモノであった筈だ。

だが、其れが今、葛城と渡り合えているモノとなっているのは——

(——はッ！ 良い勘をしている！)

例え筋力が低くとも、例え技術が叶わなくとも、例え戦いの年数が少なくとも。理の中に在る、十年もの間ほぼ毎日行ってきたシャドウとの戦闘——、殺し合いの経験。

その経験は、忍という闇に生きる彼女たちのソレを、遥かに上回る。彼の戦場では、常に『死』と隣り合わせにあった。それ故に、『死』に対する直感や脅威を感じ取る力は、この場の誰よりも優れていたのだ。

他者の敵意や殺意を感知し、攻撃を見抜く《心眼》^{しんがん}。それこそが彼が持つスキルの一つなのであった。

故に、葛城は攻めあぐねていた。純粋な戦闘能力では、自身を10の値とすれば、理は3か4程度にしかならないと葛城は予測を立てている。

これは仮に彼が武器を持ったとしても、そうそうは縮まることの無い数値だ。なにより、彼は『能力』を使わずに戦っているのもある。如何に俊敏な動きが出来る葛城であっても、ほぼノータイムで発動する炎の魔法を躲すことは難しい。其れを使われれば、恐らく負けるのは葛城であろう。

しかし、理は初めからこの手合せで『能力』を使わないと宣言している。理由は「アレを人間相手に使う気は無い」とのことであった。

「———と」

弾き飛ばされた理が、漸く地面に降り立つ。十数メートルも吹き飛んだ筈だが、その様子ではダメージも無い様だ。

理は今度は自分から動くようなことはせず、ファイティングポーズをとったままその場に鎮座している。その構えから、どうやら、葛城へのカウンターを狙っているようであった。

彼の素手での戦闘スタイルは、両手両足を使うキックボクシングを元に我流でアレンジしたものであり、やはりこれもシャドウとの戦闘経験で培われたものである。

「ははは！ 上等だ、いくぜえっ！」

喜色満面の笑みを浮かべた葛城は、その理に対抗する為、あえて正面から突っ込んでいく。

この試合を観戦していた飛鳥たちから見ても、葛城がわざと楽しむためにその行動をとったのだと理解できた。

理もそれは理解はしているのだろう。しかし、眉一つ動かさず、表情を変えることの無い彼は、努めて冷静に葛城への迎撃態勢をとっていた。

「オラアッ！」

「ふっ！」

突撃の勢いのままに繰り出された葛城の右足による踵落としと、迎撃した理の右拳が交錯する。

それはまるで柳に風を受けるかの如く、葛城の圧倒的な力を技術によつて抑え込んでいた。

彼の身体は忍程に頑丈ではない為、正面から決して打ち合うことはなく、必ず往なすような動きで迎撃するのだ。

「だったら、これでどうだあッ！」

葛城の右足に更なる力が籠められる。もしここで先程の様に、力を抜いて拮抗を緩めようものならば、次の瞬間には理は地面に叩き付けられるだろう。

文字通りの力技によつて、下手な小技などで逃げられない様にしたのだ。それこそが、理の『技』すらも押さえつける、葛城の『力』であった。

だが、力押しというだけならば理にとつては想定内である。

葛城たちも後に知ることになるが、彼が闘つてきたシャドウの中には人間型かつ葛城以上のパワータイプの存在もあり、こうした場面も一度や二度ではない。

一方向、かつ地面へと向かうという力の受け流し方も、彼は心得ていた。

「ッ！」

「っ、があっ!?!」

次の瞬間、葛城は突如として側頭部に激しい衝撃を感じると、先程の理を再現するかのように吹き飛ばされた。

脳震盪と身体を叩きつけられた痛みで意識を朦朧とさせるが、すぐさま回復すると、何が起こったのかを把握しようとする。

しかし、さつきまで自身と彼が立っていた位置には理が立っているだけであり、それだけでは推察が出来ない。

だが、観客である飛鳥たちからは何が起こったのかはハッキリと見えていた。

葛城が脚に力を籠め、理を押しつぶさんとしたまさにその瞬間、その力を受け流す様に、理はその場でくるりと一回転したのだ。

突如として理の腕という支えを失った葛城は、その場でたたらを踏み——実際に体育館の床を踏み抜いた——、一瞬彼の姿を見失う。

そして理は、回避の為の回転行動をそのままに、葛城の側頭部に上段回し蹴りを叩き込んだのだ。その様は、まさしく『柔よく剛を制す』という言葉に相応しいモノであった。

暫くは頭を抱え、自身に何が起こったのかを考察していた葛城であつたが、いい加減頭を切り替え、攻勢に転じることにする。

これは彼女が現実逃避や考えるのをやめたという訳では無く、自身の感覚を信じ、それによって理の戦術を見抜こうという考えが有つた。

元より葛城は理論派では無く、頭よりも身体を先に動かすタイプである。そして幸いにして、それこそがこの状況を打破する最適の策となっていたのだ。

「オラオラオラオラアッ!!!」

「——ぐッ、う!?!」

改めて説明するまでも無いが、戦闘面での技術や経験、根本的な基礎能力などは葛城——否、忍メンバー全員が理に勝るのだ。

理が唯一優れているのは、シャドウとの戦闘による正真正銘の死地での戦闘経験であり、それによる気配察知のみなのである。

葛城の己の身体能力に任せられたラッシュ攻撃は、技術に劣る理を封殺してしまっていた。

しかし理は、それでも冷静にこの状況を観察している。寧ろ、状況が悪化すればするほど逆に頭が冷えていく。

(そろそろ潮時か……?)

初めから理には、この試合に勝とうなどという意思は無い。そもそも、この手合せ自体が命の危険など無い単なる試合である。

葛城がこの手合わせを楽しめば楽しむほど、次第に試合という面が浮き彫りになっていき、理の死に対する察知能力も鈍り、押され始めていくのだ。

彼は相対した時点で、自身と葛城の戦闘力を見切っており、絶対に勝てないだろうということを淡々と受け止めている。

適当に試合をし、適当に終わらせるという幕引きを、理は勝負が始まった時点で決めていたのだった。

——だからこそ葛城は、表に出すことはないものの、内心で理に苛立ちを感じていた。

「だあッ！」

「うおっ?!」

葛城の足払いによって理は地面へと倒れ込む。誤解無いように伝えれば、これはワザと彼女の攻撃を喰らったのではなく、単純に反応できなかったのだ。

足蹴によるラッシュ攻撃から一転、足払いによる攻撃のため突如として身を屈めた彼女を、理は見失ったのだ。

不意を突かれたというよりも、それは理の油断が生んだ隙であり、葛城もそれを理解していた。

——故に、彼女の次の攻撃に僅かばかりの殺気が入り混じるのは、必然であった。

倒れ込んだ理の頭部に向けての踏み付け。言うまでも無くそれは、彼の頭蓋を砕くのに十分な威力が籠められている。

しかし、その殺気を含む攻撃にこそ、彼の危機察知能力は発動するのだ。

理が映す視界は、スローモーションのように流れ、迫りくる彼女の足裏を含めた全ての光景が見えていた。

……地面に倒れ込んでいる以上仕方ないのだが、葛城のすらりと伸びる眩しい太ももと、その先にある水色ストライプは、ハッキリ言っ
て眼に毒どころではない。

男勝りな性格とはいえ、彼女もまた美しい美少女である以上、ある程度の慎みを持って欲しいと理は切に思う。

よもやこの殺気は、それを見てしまった自分を抹消する為に放たれているのではあるまいかなどと、理は勘ぐってしまう。

そんな間の抜けたことを考えているからであろう。

初撃の踏み付けこそ首を横に傾け、躲すことは出来たが、その後が続かない。

葛城は攻撃を躲されたことを気にするまでも無く、その勢いのまま、足を床へと叩き付ける——

「うおりゃあッ！」

「!?」

踏鳴ふみなり、或いは震脚しんきやく。日本や中国の武道・武術において、単に地面を強く踏みつけるだけの技であるが、この場におけるその技を放つたものは、生憎と普通ではない。

体育館の床を踏み抜かんばかりに打ち付けられたはずの彼女の足は、何故か木製の床を傷つけることなく、壮大な轟音と衝撃波を生み出すだけに留まる。

無論それは、彼女の長年磨き上げられた技術によって行われたものであり、これを怠れば先程理によって攻撃を受け流された際の様に、床を踏み抜くという結果に終わったであろう。

体育館の床——正確には、攻撃対象であった理の頭——を破壊する筈であったエネルギーは、葛城の絶妙な技術と力加減によって、ある一点へと向かう衝撃へと変換されたのだ。

するとどうなるか。元より、理が攻撃を躲すことを織り込み済みであつた葛城のその一撃は——

「これで、逃げられねえなあッ！」

——理の身体を、宙へと跳ね上げた。

如何に理が攻撃を察知出来ようと、それを活かすことの出来ない状況に追い込まれば宝の持ち腐れである。今、身動きの取れない空中に居るのがまさにそれだ。

そして既に葛城は、その理を迎撃しようと力を籠めている。理と違い、彼女の攻撃はわざわざ急所という部位を狙う必要は無い。何処を攻撃しようと、その圧倒的な筋力を以て粉碎するからだ。

尤も今回の場合は、彼女の目線や体の動かし方から、どうやら鳩尾のあたりを狙うのだと理は察しがついた。せめてもの抵抗として腕で防御の姿勢をとるが、そんなものに意味が無いことなど彼は解りきっている。

最早葛城の眼には、当初あつた理への期待や戦闘の悦楽といった色は無い。今では、失望や侮蔑といった物が入り混じり、濁った色と化している。

人の機微に疎い理はそれを理解した訳ではなく、どちらかと言えば共感と表すのが正しい。その眼は、もう十七年もの付き合いになる自身の眼に、よく似ていたのだから。

葛城の攻撃はもう放たれようとしている。それを止める術は理には無い。しかし彼は恐怖などを微塵も感ずることなく、それを受け入れていた。

そして、それを察した葛城は怒気をさらに強め、違うことなく理へと足蹴りを放とうとして――

「そこまでです！ 攻撃を止めなさい、葛城さん！」
斑鳩によって、止められるのであった。



斑鳩の制止により、葛城は不服そうにしながらも攻撃を中断する。そのすぐ傍で地面へと無様に落下した理が居るが、葛城は気にも留めようとしなかった。

なお、理は脳震盪でも起こしたのか、床に伏せたまま動く様子がない。

恐らくは落下の際に頭を打ち付けたか、或いはその前段階である葛城の攻撃の際、発生した衝撃波と轟音でダメージを受けたのだろう。そんな風になりながらも放っておかれる理を不憫に思いながらも、流星にあのような態度で手合せに臨まれては、仕方のないことだと斑鳩は思う。

だがしかし、いくらなんでも今の葛城の攻撃は見過ごせないほど危険であった。もしも攻撃を止めなかったのならば、……想像したくない。

「……葛城さん、少々やり過ぎです。頭を冷やしてください」「ッ、解ってるよ……。アタイも少し、ムキになり過ぎた……」

斑鳩に諫められたことによってクールダウンしたのか、葛城はバツの悪そうな顔をして謝罪の言葉を口にする。

勿論、その言葉を向けるべき相手である理に対してもだ。葛城は腰

を屈めて、今だ寝そべっている理に顔を近づけると、同じ様に謝罪を述べた。

「その……、悪かったよ。大丈夫か？」

「……たんこぶ出来た」

「はは、平気そうだな」

理は意趣返しのつもりなのか、僅かに懽然としながら抗議を唱えた。

尤も、声色に怒りといったものは感じられないので、葛城も軽口で応答する。

しかし、すぐさま顔を引き締めると、理に問いかける。

「……なあ、何でお前はそんなに淡々としてられるんだよ。――

正直、薄気味悪いぜ」

齒に衣着せぬ言い方ではあるが、それは葛城の偽らざる本心であった。

自身の様に力を振るうことに悦楽を見せないのはまだいい。だが同時に、彼は他人を傷付けるといふ行為、或いはそれを自身にされることに何の感情も見せていなかった。

苦も楽も、一切の反応を示さない。彼のそれは明らかに、異常とも言つていい精神性だ。

別段、葛城はそういう扱いをされないことに異論は無いが、仮にこれが飛鳥相手だった場合など、ショックを受けるのではあるまいか。そんな風に場違いな心配をしてしまう程、彼という存在はズレている。その一線が枷となつて、葛城はこの手合わせを心底からは楽しむことが出来ないでいたのだ。

「……どうでもいい」

だが、それに対する返答もまた、彼への不信感を助長させるものでもしかなかった。

死んだような虚ろな瞳で、宙を見上げながら呟く理に、葛城はぞつとしたモノを感じられずにはいられない。

彼は先程、葛城の昏い瞳を自身に似ていると評したが、彼女が聞いたなら全力で否定しただろう。

「はあ……。お前は、楽しいとか嬉しいとか、……………死ぬのが怖いとか無いのか？」

故に葛城は確認する。結城理という人間が、何を見て、何を感じているのかを。

そのあまりに歪な精神性を持つ彼を、彼に足らしめるものが、果たして何物であるのかを。

そして――

「……………『死ぬ』って、そんなに怖いこと？」

ああ、と葛城は、その場に居る五人の少女たちは、理のその言葉を聞いて理解してしまった。彼と自分たちが、違う存在であることの証を。

――『死生観』が違うのだ。

忍である自分たちは、いつ訪れるとも分からない『死』の中に居る。危険な任務であったり、敵勢力との戦闘や暗殺、命に係わるほどの修行を行うことだってある。

だが、その中であつても自分たちは命を諦めることなど決して無い。たとえどんな危機にあつても、それを乗り越え、生き残ることにこそ彼女たちは重きを置いていた。

対して理は、彼もまた『死』の渦中に居る者だ。

シャドウと文字通りの意味で生死を賭けた戦いの中に居る以上、あの意味では、『死』に直面する度合いは彼女たちよりも上かもしれない。

そしてそれ故に、『死』というものを身近に感じすぎてしまっている。『死』というものが、不意に迫り来る狩人に非ず、元より隣に存在する物であることを彼は識っている。

だからこそ『死』に直面した際、躊躇うことなくそれを受け入れてしまう。言い換えれば、諦めが早いということであつた。

『memento mori』――、でしたっけ……」

傍に歩み寄つて、その様子を見ていた斑鳩の口から思わず呟きが漏れる。

memento mori、死を覚え、自分がいつか死ぬことを忘れ

るな。そのような意味を持つラテン語こそ、今の彼を表すのに最も相応しい言葉だろう。

「……俺たちは、明日必ず死ぬのだから」
だからこそ、理は生きる。

誰にも聞こえない程小さく呟かれた筈のその言葉は、しかしはつきりと彼女たちへと届き、その胸の中に刻み込まれた。

脳震盪からようやく回復し、上体を起こす理は、周囲を見回して宣言する。

「さあ、試合を続けよう——」
何時か死おわりが来るその日まで、生き続けるために——



その後、理は残り四人の忍メンバー全員と試合を行った。元よりこれらの試合は、理の実力を図るために催されたものである。

幸いであったのが、彼が炎の魔術を使わないという制限を掛けていた為に、その分を治癒の魔術へと回すことが出来たことであった。

彼の精神力を糧として発動するそれは、この場に居る六人全員を回復させてもまだ余りある。

理は最初の葛城との試合で互いに負った怪我をすぐさま回復させると、矢継ぎ早に次の試合へと臨んだのだった。

以下、その試合内容と結果だけを簡素に表示する。
・VS斑鳩。互いに竹刀一本を獲物とし、試合開始後すぐさま高速の剣閃が打ち合わされる。

その後、七十二合目にして理の竹刀が弾き飛ばされたことにより、理の負けで試合終了。

・VS飛鳥。二刀使いである彼女に対し、理は変わらず一刀で挑む。そして、先の斑鳩戦と同じように剣閃が打ち合わされた。

ただし、斑鳩と比べ戦闘技能の差が縮まった為か、彼女の場合よりも長く剣閃は続いていた。

しかしやはりそれでも敵わないのか、九十二合目にて竹刀を弾き飛ばされ、三度彼の負けで試合終了。

・VS雲雀。互いに素手で試合に挑んだのだが、試合が始まってすぐさま彼女を心配する柳生の途中乱入が発生し、無効試合に。

なお、理は彼女と試合をする際に、「雲雀とは一番相性が悪い」といった発言をしている。

・VS柳生。雲雀を傷つけられそうになった為か、殺気を交えながら銃撃を行う。

だがしかし、持ち前の察知能力も相まって、飛来する銃弾を回避するという驚異的な体捌きを見せる。

その回避行動は彼女の銃弾が尽きるまで行われた為に試合終了。引き分けという結果に終わった。

成績は0勝1分3敗1無効という、結果だけ見れば散々たるものだった。

しかし試合を行った本人である彼女たちからしてみれば、理は忍である自分たちにこうして喰らい付いてくるという、決して侮れぬ存在である。

例えば異能力を使わずとも、その状況判断能力、武器の扱い、培われた技量、そしてその精神性は、全てが高水準で纏まっているのだ。そうした人材は忍の世界でも多くはない。

その中でも特に高評価であったのが、状況判断能力である。

彼の一挙一動が絶えず戦況を動かし、忍の技に肉体が反応出来なくとも、その眼が最適な行動を見据えていたのを、彼女たちは見抜いていた。

そしてそれは、今の彼女たちには無く、これからの彼女たちに必要であった能力だ。

結城理が、対シャドウ戦での後方支援兼、現場指揮官としての役目が決定した瞬間であった。

この決定で本日の活動は終了とし、明日から本格的にシャドウ討伐を開始するという決定を斑鳩が宣言して、一同は解散する。

なお、理は明日の深夜零時前に、半蔵学院学生寮——忍学科側ではなく、普通の男子寮だ——の屋上で飛鳥たちを待つように指示された。

わざわざ『表側』である場所を集合場所としたのは、進学校故に厳しい門限が有る理に配慮した、斑鳩の判断であった。

半蔵学院最優秀生徒である彼であっても、生活態度が悪ければ内申へと響いてしまうからだ。これからのシャドウ討伐も、日によって行うか否かを彼の判断に委ねている。

あくまでも理は協力者という立場である以上、必要以上に此方から干渉せず、此方側と係わらせない様にするというのが、忍学科で一致した意見であった。

こうして、漸く彼女たちは初めの一步を踏み出したと言えるだろう。

シャドウという化け物に対峙することに、今だ不安を覚えずにはいられないが、それでも大きな一步だと確信を持って言える。

結城理という新たな仲間と共に、この道を進むのだと彼女たちは希望を胸に抱いていた。

———それこそが、他ならぬ油断そのものだというところに、彼女たちはまだ気付かない。

時は、待たない。全てを等しく、終わりへと運んでゆく。

2009年4月9日、『全ての始まり』と『全ての終わり』は着実に近づいているのだった———

10話 避けられぬ戦い 前篇

2009年4月9日 夜 『満月』 ——

夜の帳が下り、月が中天に差し掛かる頃、飛鳥たちは半蔵学院学生寮へと向かっていた。

当然の如く、誰もが緊張した趣きでその足を進めている。彼女たちがこれから向かうのは、真の意味での死地であるからだ。文字通りの意味での命懸けの任務となるのは、飛鳥たちとて左程の経験が有る訳でもない。寧ろ、雲雀などは初めての経験となるだろう。常に今日死ぬかもしれないという心構えを持つ理とは違い、彼女たちは心中穏やかではないのだった。

「……そう怯えることなど有りませんよ」

そう言つて不安を和らげようとする斑鳩にも、緊張の色が見え隠れしていた。

飛鳥や雲雀よりも命懸けの任務経験が有る彼女とて、これから向かう任務の危険度は理解している。いや、彼女たちよりも多い経験からその難度が理解できる故に、恐怖は彼女の方が上かもしれない。しかし、斑鳩はその恐怖を押さえつけて、後輩たちを気遣っているのだ。

自分たちだけが恐れてはいけないと、飛鳥たちは気を引き締めなおし、目的地へと向かうのだった。



飛鳥たちが目的地である、半蔵学院男子寮の屋上へと到達したときには、既に理が待っていた。しかしその佇まいは、月を見上げながら呆けているという、およそ人を待つ態度とは思えないものだった。

飛鳥たちが屋上へと降り立ち、傍へと近づいても、彼はまだ月を見上げたままであった程だ。その姿はさながら亡霊の様であり、彼女たちが思わず身構えたのも無理からぬことである。

「……結城さん？」

「……………」

動揺を抑えつつ、代表して斑鳩が理へと問いかけるが、彼が応えることは無い。黙って月を見上げたままだ。

それはまるで自分たちが、引いてはこれからのシャドウ討伐が、それ以下の価値であるのだと言われた様な気分を抱く。斑鳩は激昂こそしなかったが、隠しきれない苛立ちを覚えつつ、理へと再度話しかけるのだった。

「っ、結城さん！ いい加減にしてください！」
「……………ん」

そこで漸く理は、斑鳩たちが到着していたことに気が付いたように、ゆっくりと顔を向ける。

相変わらず感情の色が見えない瞳に睨まれたことにより、目線を逸らしそうになるが、今回ばかりは憤りの方が上回っている為、その眼を見据えることが出来た。

満月の様な銀灰色の瞳、やはりその視線は、自分を見ている様には感じられないと斑鳩は思った。

こうして彼の眼を見据えてみても、何処を見ているのか全く判断が出来ない。いつそ憐れみすら覚えるほどだ。

「……………結城さん、我々はこれからシャドウ討伐を行うのですよ。」

その様な心構えでは困ります。……………頼みますから、ちゃんとして下さい」

「……………ああ、……………すみません」
「……………？」

心此処に非ずとといった感じで、理は投げやりに返答を行う。

流星にここにきて、誰もが彼の態度におかしいモノを感じ始めていた。

「ゆ、結城くん……………？ どうしたの……………？」
おそろおそろと、飛鳥が理に問いかける。

だが、その言葉に反応した訳ではないのだろう。そして紡がれた彼の言葉に、誰もが首を傾げる他なかったからだ。

「…………………………『月』だ」
「へ？」

やはり理は月を見上げたままに、その言葉を発したのだ。

思わず飛鳥たちも月を見上げるが、其処にあるのは真円を描く美しい満月が有るのみであり、別段彼女たちの気を引いた訳でもない。

しかし理は、まるでそこに『何か』が有ると確信しているかのよう
に、視線を逸らさない。

無表情ながらも、その真摯な眼差しは月明かりに照らされ、普段は長い前髪に隠されている彼の美貌を引き立てていた。

ほう、と誰かが溜息をもらす。或いはその場にいた少女たち全員であつたかもしれない。

幸いであつたのが、その溜息が全く同時に発せられたために誰のものか特定が出来なかつたことと――

「――来るッ！」

ほぼ同時に、シャドウの襲撃によつて、有耶無耶になつてしまったことであつた。

時刻は午前零時、シャドウの時間である――



その声を発したのが彼であると、飛鳥たちには信じられなかつた。焦りという感情が多分に含まれたその叫びは、完全に彼の雰囲気
に合致していなかつたからだ。

まだ短い付き合いながらも、徹頭徹尾マイペースを崩さないのが彼女たちの知る、結城理という人物なのだから。

月に陰りが帯びる――

月食？ と、飛鳥たちは思い、それを瞬時に否定する。

少なくとも、満月の中心部から徐々に黒く染まっていくという現象は、部分月食にも皆既月食にも当てはまらない。

尤も、地球の影によつて月が欠けゆくという現象がこの結界内においても適用されるのかは定かではない為、何が起こつても可笑しくは無い。

――しかし、その『影』を飛鳥たちが認識した瞬間、彼女たちは自分が『死んだ』と錯覚した。

「後ろに跳べッ！」

再び、似つかわしくない叫びが理の口から轟き、無意識で身体が反応をする。

次いで、一瞬前まで彼らが居た地点に『ソレ』が轟音を響かせ降り立った。コンマ一秒でも遅れていたのなら、無残な挽肉の出来上がりだっただろう。

全員が間違いなく、今まで生きてきた中で最速の反応を以て動かされたのは、修行の成果か彼の功績か。恐らく9割方は彼のお蔭だと、彼女たちはぼんやりと思う。

だが、それが何の慰めになるのか。相変わらず『死』は、其処にあるのだから。

「……シャドウ、なのか………？」

葛城の呟きは、その場の全員の気持ちを代弁していた。

身の丈は3く4メートル。胴体は無く、長く伸びた無数の手足が複雑に絡まり合っただけの漆黒の身体。その手の一つに掲げられた、青い仮面。

体色と仮面という特徴を見れば、『ソレ』がシャドウだというのはい目瞭然だ。しかし、『ソレ』が纏う濃厚な死の気配は、昨日のシャドウと比較することさえ馬鹿らしい。

撤退だ——、斑鳩は早々に結論付け、理に進言しようとする。しかし彼は、何故か忙しなく辺りを見回しており、焦りの気配をより濃くしていた。

「……結界の範囲が広すぎる？　もしかして、地球ごと結界に包まれているのか？　これじゃあ、逃げ場なんて——」

そんな絶望的な呟きが、全員に届く。

そもそも、シャドウが人間を襲う結界——以後、『影結界』と呼称する——とは、午前零時になると同時に出現する特殊な異空間だ。影結界の内部では時間が停止し、全ての機械は動かなくなり、この世の何人も認識することは出来ない、……結城理を除いて、だが。

午前零時から約一時間の合間のみ存在するこの空間に侵入するには、シャドウの餌食となるか、先日の彼女たちの様に偶然囚われるか、

恐らくこの世で唯一影結界を認識できる理が外部から侵入するのみなのである。

しかし影結界は、忍の扱う『忍結界』と同様、範囲の限られた物であった筈だ。その為、シャドウたちが存在している場合でも、結界を離脱して逃走が可能で有った為、撤退は作戦の一つに数えられていたのだ。

無論、その情報ソースは理自身からであり、彼女たちもそれを疑いようも無く受け入れていた。と言うより、シャドウの情報を彼しか持たない以上、疑う意味が無い。

しかし、それらの前提条件は全て無に帰った。ならばこそ、彼女たちがとれる選択肢は、このまま戦闘するという一択のみだ。

けれども、『死』に挑むという、そんな恐怖を抱くくらいならば、いっそ――

飛鳥たちは、己が持つ武器に目を走らせる。其処にあるのは、人命を容易く奪う刃だ。後はそれを、首筋でも心臓でも、好きな部位に滑らせれば、それで終わり――

「こつちだッ！ 来いッ!!」

三度、彼の絶叫が響く。しかしその叫びは、今度こそ「結城理らしくない」叫びだった。

何時の間にか理は、飛鳥たちから遠く離れた位置に移動し、大型シャドウを引き付けていた。大型シャドウも迷いなく彼に突進する。

思わず飛鳥は理を助けようと身体を動かすが、恐怖から足が纏れ倒れ伏す。まるでコントの様な扱けっぷりで、この様な状況でなければ笑いを誘ったはずだろう。

しかし、その観客である筈の理は歯牙に掛けた様子も無く、眼だけで飛鳥たちに伝える。

逃げろ――、と。

馬鹿な、と誰もが思う。

例えるなら飛鳥たちは、あの大型シャドウにとって、往來を行く人に踏みつぶされる羽虫の様なものだ。そもそも、あのシャドウは初めから飛鳥たちなど目もくれない。

大型シャドウを倒すには、自分たちはあまりにも力不足であり、その役目が結城理へと委ねられるはまだ分かる。

だが果たして、理ですらあのシャドウに対抗できるというのか。飛鳥には、とてもそうは思えなかった。

「……駄目っ、結城くん………、逃げ——」

「逃げますよ、飛鳥さんッ！」

震える喉で飛鳥は叫ぼうとするが、その声を遮り、彼女を抱え上げる姿が有る。

斑鳩だ。その向こうでは、既に逃走の体勢に入った葛城と、雲雀を抱えた柳生の姿が有る。つまりは、理に従い、彼を残したまま撤退するというのだ。当然、飛鳥には許容できるものではない。

「そんなッ、斑鳩さん！ 結城くんを見捨てるんですか！」

「私たちではあのシャドウに敵いません！ 此処に残れば、彼の邪魔になるんですよ！」

嘘だ。斑鳩も理がああシャドウに敵うとは露ほども思っていない。そんな建前を用意しなければ、飛鳥を、そして自分自身を動かすことが出来ないのだ。

心底自己嫌悪する。何が忍だ、何がクラス委員長だ。目の前の人間一人——否、二人の命と心を救うことすら出来やしない。

斑鳩は命が惜しい訳では無い。本来なら、貴重な能力と情報を持つ彼を命に代えても保護するべきなのだ。

だが今ここには、守るべき後輩が3人もいる。そして、自分の力ではシャドウ相手に足止めすらならないのを理解している。

自分の命で後輩3人を危機に晒すか、彼の命で全員を逃がすのか。それは、単純にして残酷な算数であった。

だからこそ斑鳩は思う。そんな決断をあつさりとした結城理という人間を、恐ろしく感じる。彼女の心の中では、感謝よりも恐怖が勝っていた。

「待っ——！」

もう、飛鳥の叫びなど耳に入らない。一刻も早くこの場所から離れたかった。

だが、離れる理由がシャドウからの逃走なのか、彼からの逃避なのか。

斑鳩には、もう分からないのだった――



(……行っただか)

視界の端で、闇夜に消えていく少女たちの姿を見ながら、結城理は異形に相對する。

それは、彼が能力に目覚め、今までの十年間で討伐してきたどのシャドウとも比較にならない巨体と重圧を持つていた。

だからといっても、理の心は落ち着いている。寧ろ、今までに無いくらいに平静になり、同時に騒めいているという奇妙な感覚だ。

奇妙と言え、もう一つ。

それは先程、理が彼女たちに対し、下がれや逃げろと命じたことだった。

気が付けば叫んでいた。それは、自分の命や他人の命も「どうでもいい」と考える彼には有り得ないことだ。逃走したところで、目の前にいる大型シャドウ以外にも、数多のシャドウが蠢くであろうこの死の世界で、彼女たちが生き残れる保証は無い。

死ぬのが早いか遅いかという程度でしかないのだ。彼にとっては、ただそれだけの違いでしかないというのに。

「――ッ」

思考は中断される。大型シャドウによる攻撃が開始されたのだ。

無数の手足に幾重もの剣を構え、同時に魔法の発動を理の感覚は感知する。当然、脳が命令を発するよりも先に身体は動いていた。

爆炎――、弱いシャドウはおろか、理すら及ばない程に巨大なそれは、しかし理に届くことはない。

この十年で培われた『死』への予感、《心眼》は伊達では無い。何処に居れば死に、何処に居れば死なないのか、理には手に取るように解る。

手足を伸縮させて飛来する剣閃も、合間を縫って飛んでくる火球も、彼に届くことはない。しかしまた、理の攻撃がシャドウに届く事も無いのだ。見たそのままに、物理攻撃の手数は圧倒的にあちらが上。確認すれば、理の炎の魔法には耐性を持っている様だ。

とどめに今の理は武器を持っていない。今夜の合流の際に忍学科が用意する手筈だったのだが、その前にシャドウが襲撃し、飛鳥たちは撤退した。

さて困ったぞ、と理はぼんやりと考える。このまま待っていれば、理のスタミナが先に切れて、シャドウに押し切られることになる。つまりは、このままでは理は絶対に死ぬのだ。

しかし理は悲壮することはない。彼にとっては、いつか来る『終わり』が目の前に在るといっただけなのだ。

だがせめて——と、理は思う。シャドウは人間を襲う。それは、この大型シャドウとて例外では無い筈だ。偶々今回は、獲物が自分だけだという話なのだ。

そして自分が死んだ後、このシャドウは何処へ向かう？ 明白過ぎる答えに、思考する気すら起きない。つまりは、撤退した飛鳥たちにこのシャドウが向かう可能性がある以上、出来る限り引き留めておく必要があるのだった。

「■■■■■■—— ツツツ!!」
「おっと」

シャドウが雄叫びを挙げ、剣閃と火球が同時に飛来する。運の悪いことに躲しきれず、剣が肩を掠め、炎が肌を焼いた。

何も問題は無い。回復魔法で痕も残さず治せる程度の怪我であり、そもそも足をやられなければ行動に支障はない。故に、精神力を温存する。

既に理の思考は、出来るだけ永くこのシャドウを引き留めておくつもりでいた。まるでらしくないと、彼は自分でも思う。

だが、結城理は自身の命を賭してでも、彼女たちの生存を望んだのだ——

それは決して、不快な感覚では無い。尤も、それが何故という答え

は出ないのだが。

(どうでもいい、のか……?)

何時もの様に思考を打ち切ることには出来ない。家族が死に、流されるままに生きてきた十年で初めての経験だ。

果たして、この問いに答えを出すことが出来るのだろうか——
その前に、彼の命が終わるであろうが。

「がッ?!」

突如、炎を躲したはずの右足に激痛が走る。瞬時に回復魔法を施し、回復させてその場から離脱するが、理の目に映ったのは信じがたい光景だった。

男子寮屋上の床が砕けていたのだ。その抉れたコンクリートを見て、先程の攻撃の正体を看破する。

(……ワザと屋上を砕いて、その破片をぶつけてきたのか。炎はその目くらまし。器用な事をするな)

一瞬で攻撃の正体を看破する彼も大概だが、その攻撃を行ったシャドウも大概だ。

そして、この攻撃は武器も防具も持たない理には致命的だ。飛んでくる破片が殺気の無い偶発的なものである為に、《心眼》も通用しない。

偶然ではないのだろう。この大型シャドウは、他のシャドウに比べ明らかに知能が発達している。

あのナリで人間並みか、それ以上に頭が良いのだ。以前読んだホラー小説に、そのような怪物が登場していたなど理は何となしに思う。

この攻撃方法をシャドウが身に着けたことで戦局は一気に傾いた。最早理に出来ることは、受けた傷を速やかに治し、また傷を負い、そして傷を治すというループを出来るだけ長く持たせるだけだ。持たせれば持たせるだけ、飛鳥たちが遠くへ逃げ延び、生き残れる確率は上がる。

だが、目の前のシャドウを倒さない限りこの世界から脱出は出来ないという確信を、理は抱いていた。

再び、石礫が飛来して理の身体を傷つける。

学習が進んだのか、飛来する石礫は多くなる一方だ。実に嫌らしく、合理的な戦術だと関心すらする。

魔法で傷を塞ぎ、石礫の弾幕を躲し、躲しきれなかった石礫で傷を受ける。その繰り返し、延々と続く。

それも何時までも続かない。魔術の糧となる理の精神力は無限ではない。そして、ついには発動すらしなくなった。

そう、これこそがシャドウの狙いであったのだ。いたぶる様な攻撃は、理の精神力を消費させ、能力の封印を目的としていたのだった。

身体力が抜け、膝を付いてしまう。怪我こそ治癒できている為肉体的にはほとんど無傷だが、呼吸は荒く、半蔵学院の制服はボロボロになり、脂汗が全身に浮かんでいた。

確実などめを刺すためだろうか、シャドウは火炎魔法を使うことなく、わざわざ理に歩み寄ってくる。全く持って要らない気遣いだった。

後ほんの数秒もしないうちに、手に持った無数の剣で全身を刺し貫かれることになるであろう。

しかし、理の心中は相変わらず平穏平静だ。それに相反する騒めく心もそのままであったが、理にはそれが何であるのか見当がついていた。

それはきつと、渴望なのだ。結城理が永らく求めていた、今眼の前に在るモノ。これこそが、この騒めきの正体。

剣閃が飛来する。この身体では避けることもままならない。避けるつもりも、無い。

理にとって、『死』とは恐怖ではない。彼が恐れるのは、本当に怖いのは――

「結城くんッ!!!」

……あり得ない声が、聞こえた気がした。



理がシャドウと戦闘を始めた頃へと、視点は移動する。

そこには、彼に命じられるまま戦線から離脱し、飛鳥を抱えて闇夜の街を往く斑鳩の姿があった。

「斑鳩さん、斑鳩さん！戻って下さいッ!!」

駆ける、翔る、カケル——

闇夜の街を一心不乱に跳んでいく斑鳩は、完全に普段の冷静さを欠いていた。

その腕の中の、飛鳥の悲痛な叫びさえ耳に入らない程に。

「このままじゃ、結城くんが——!」

その眼はただ前だけを映し、他の一切を映そうとしない。

眼下の街で、同じくシャドウによってこの世界へと墮とされた、哀れな犠牲者達の姿さえも。

恐怖と寒さで震える唇から洩れる言葉は、一つだけ。

もっと早く、もっと遠くへ——!

逃げるために、生きるために。斑鳩は前だけを見て、足を動かし、この死の世界を駆けていく。

嗚呼、でも——、一体何処へ行けばいいのだろう——

「すみません、斑鳩さん!」

「んあっ!」

ぱしん、と小気味よい音が響く。それは、飛鳥が斑鳩の拘束から無理やり抜け出し、その頬を叩いた音だった。無理な体勢での攻撃で有った為、威力はそれほどでもないが、彼女を正気に戻すには十分であつたらしい。

斑鳩は何処かの道路の真ん中に降り立ち、改めて飛鳥と相對した。彼女の眼には、非難めいた色が見え隠れしている。その眼に睨まれた斑鳩は一瞬身を竦め、しかしクラス委員長としての責務から、冷静に飛鳥を説得しようとする。

「……飛鳥さん、気持ちは分かります。ですが、結城さんの様な能力を持たない私たちでは、あのシャドウ相手では——」

「そんな事は分かってます! それに、私が言いたいのはそれだけじゃありません!」

飛鳥の言葉に斑鳩は眼を見開く。彼女はしつかりと己が戦力外であることを認識し、それでもなお理を助けようとしているからだ。

「——斑鳩さん、結城くんを怖がってましたよね？」
「それは……」

そして、続く飛鳥の言う『それだけではない事』に、自分自身の不甲斐なさを恥じた。飛鳥にさえ、当たり前前のように見透かされていたのだ。

斑鳩は結城理を恐れている。武力でも能力でもなく、その精神性をだ。

何時かの明日、自分が死ぬということを忘れぬ『死』への想い。それ故に彼は、あっさりと己の命を囮に出来る。

だが、少なくとも斑鳩——否、きつと飛鳥や葛城だって、その『何時か』は『今』ではない筈だ。

彼女たちは理の様に、今だに『死』を理解できていない。もしかしたら、理解できる日など来ないのかもしれない。

だからこそ、斑鳩は飛鳥に問う。

「……飛鳥さんは、彼が怖くないのですか？」

対して飛鳥は、僅かに苦笑しながら答える。

「……すいません、偉そうなことを言いましたけど、私もよく分からないんです」

「でも」と、飛鳥は紡ぐ。彼女の脳裏に浮かぶのは、あの運命の日——

「結城くんは、優しい人です。それだけは、間違いないと思うんです！」

「……あ」

眩しい、と斑鳩は思う。結城理が影ならば、飛鳥はまさしく太陽という光だ。

飛鳥自身、今だに彼を信用しきれていない所は有るのだろう。そうでなければ、よく分からないという言葉は出てこない。

それでも、彼女のその苦笑から強い意志の力が見て取れた。

「ッ、飛鳥さ——」

そんな中、空気の読めないシャドウの襲撃が起こる。

それは本来なら、飛鳥には到底迎撃することも出来ないものであった筈だ。

だが――

「――ふっ！」

居合抜きの要領で解き放たれた飛鳥の二刀、柳緑花紅りゅうりよくかこうが、シャドウを切り裂く。

仮面を縦横に切り裂かれたシャドウは、もがき苦しみ、やがて闇夜に溶けていった。斑鳩はその光景を、呆然と見ている。

「飛鳥さん、貴女は――」

「……行つてきます。結城くんを逃がすくらいなら出来ますし、伝えたいことだつてありますから」

飛鳥が理の様にシャドウを倒せる力を得たのは、彼女の意思の力による物なのか。

既に斑鳩には、飛鳥を止める術を持たない。その資格も覚悟も無い。理の居る場所、半蔵学院男子寮に向けて跳びだしていく飛鳥の後姿を、斑鳩は何もできないまま見詰めていた。

自分は何と臆病な事だろう。彼の『死』への精神性というものに目を曇らせ、彼自身というものを欠片も理解できていなかった。斑鳩とて、彼に救われた一人であるというのに――

無力感から佇む斑鳩に射す影が有る。その気配には勘付いていた為、斑鳩はそれに向けて慥然としたまま不平を漏らした。

「……ずるいですよ皆さん。これじゃあ私だけ、悪者みたいじゃないですか」

「そんなことねーよ。アタイだって、結城やシャドウにビビって逃げたんだからな」

その影とは、斑鳩と共に逃走した筈の葛城であった。当然、彼女の傍に寄り添う形で、柳生と雲雀の一年生コンビの姿もある。

そして、三人が全員ともバツの悪そうな顔をして飛鳥の駆けた方向を見ている。先程の飛鳥の言葉は、彼女たちにも聞こえていたのだ。

「……それで、どうする？ お前は行かなくていいのか？」

「そういう柳生さんはどうなのですか？」

斑鳩は柳生へと問いかけた。忍らしく冷徹な彼女がどうするのか、斑鳩は分からなかったからだ。

柳生はまず「質問に質問を返すな、と言いたいところだが……」と前置きしながら、彼女の問いに答える。

「正直言つて、飛鳥の様に結城はまだ信用出来ない。雲雀が怯えていたからな」

「柳生ちゃん、それはっ」

「だがな——」

そこで柳生は首を回し、隣に寄り添う雲雀を見る。

そして、不安そうな表情を浮かべる雲雀を安心させるように、柳生は己の覚悟を告げた。

「アイツには、雲雀を救ってくれた借りが有る。それを返すために、今回だけは手を貸してやるさ」

柳生は彼と出会った深夜、シャドウに襲われそうになった自身と雲雀を救ってくれたことを覚えていた。そんな柳生の言葉を聞き、雲雀も顔を輝かせ、同調するように自身もまた覚悟を決める。

「柳生ちゃん——！　うん、雲雀も結城さんのこと、助けるよっ」

これで残るは葛城と斑鳩だけだ。しかし二人もまた、既に覚悟を決めている。

恐れが消えた訳ではない。彼女たちの様に借りが有る訳でもない。

だが、それでも——

「——行きましょう、皆さん！」

「「おう！（ああ！）（うん！）」」

今だけは、結城理を信じる飛鳥を信じてみよう——

「正義の為に、舞い忍びます！」



時は戻り、再び理たちの場面へと移る。

「結城くんっ、助けに来たよ！」

「……飛鳥？」

重い身体を起こし、目の前を確認すれば、其処に居たのは決して幻覚などでは無い。

無数の剣群をその二刀で以て防ぐ姿は、誰がどう見ても飛鳥そのものだ。そんな驚愕の光景に、当然の如く理の思考は停止する。

何故だとか、逃げなかつたのかとか、助けてくれてありがとうという言葉すら浮かばない。それ程に、理にとっては馬鹿げた光景だった。

「くっ、このおっ！」

鋭い剣閃が走り、シャドウの腕を叩き切る。巨体とはいえ、飛鳥の技量でも切断は可能であった。

一閃、二閃、三閃——！ 激しい斬撃がシャドウの体軀を切り刻み、眼に見えてシャドウの攻撃の手が鈍っていく。

だが、その代償は飛鳥の体力だ。そして何よりも、飛鳥はシャドウとの戦闘に慣れて無さ過ぎた。

「……く、分かつてはいたけど！」

切断された筈の腕が再生する。切断面から闇が染み出す様にし、腕を形作る。

その腕が再び剣を握り、飛鳥へと飛来する。体力を消耗し、理を背に庇う彼女では、それを躲すことが出来ない——

「や、ああああああああっっっ!!！」

最早飛鳥は、気力だけで戦っているという状態だった。

防ぐ、逸らす、弾く、往なす、掃う、薙ぐ——

彼女の技量の限界を超えた筈の防御は、どんな想いで行われているのだろうか。

そして、長いようで短い、攻防の時間は突如として終わりを告げる

「結城くん、逃げ——がっ!？」

飛鳥の身体が、唐突に横に弾き飛ばされる。その攻撃を行ったのは、言うまでも無くシャドウの腕であり、それも切断された筈の腕で

あつた。

どうやら、この大型シャドウは切断された体をも動かすことが可能であり、腕を再生させることで地面へと落ちた腕に意識を向かわせない様にしていたのだ。

そして、攻防の中で飛鳥が理へと逃亡を勧め、ほんの僅かに意識を逸らした隙を狙つての不意打ち。呆れるほどに、知能的だ。

屋上の床に叩き付けられた飛鳥は起き上がる様子が無い。呻いてはいるので、死んではいないが殆ど気絶しているようだった。そこでシャドウは飛鳥を標的に定めたのか、眼前の理を無視し、彼女の方へ近づいていく。既に能力の使えない理よりも、得体の知れない闖入者の排除を優先したのだろう。どこまでも合理的である。

「……………何で？」

理はそんな光景を、呆然と見ている。

自分が死ぬはどうでもいい。命への執着など、彼は当の昔に――

―あの『十年前の事故』の日に捨てている。

無論、他人の命にだって関心は無い。例え、誰かが目の前で死んだとしても、彼は眉根一つ動かさずにそれを見届けることの出来る人間だ。

飛鳥は、理の『選択の結果』によってこの死地に舞い戻り、そして死へと誘^{いそ}われている。彼が『選択』したからこそ、彼女は『死ぬ』のだ――

『我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん』。かつて理が半蔵学院へと編入する際、交わした『契約』の一節が浮かぶ。彼は確かにその言葉の意味を理解し、署名した筈であつた。……だからこそそれを、受け入れることが出来ない。

そして、結城理は漸く気付く。何故自分が、彼女たちの生存を望んだのかを。

――結城理という人間は、死^{それ}が自身の手による『選択の結果』であるのならば、絶対に許容できないのだ。

理の脳裏に、家族を失つた『十年前の事故』の光景がフラッシュバックし、今までの人生が走馬灯のように流れていく。

燃え盛る車に取り残された家族。自分もまた大怪我を負い、初めて『死』というモノを実感したあの夜。

親戚中を盥回しにされ、大人たちに嫌気が差し、一人だけで生きていくと決めたのは何時頃だっただろう。きつと、どんな子供よりも早い筈だ。

何時の間にか使えるようになっていた不思議な『能力』。夜の街を徘徊する異形『シャドウ』。そして出会った『忍』という存在。

そしてとうとう、走馬灯は今眼の前の光景にすら到達しようとしていた。

満月の夜、半蔵学院付属の男子寮／月■■学■■付属の■■戸台■■寮、その屋上で大型シャドウ／『■■術師』に相對している――

其処で理は、ベージュ色のカーデイガンの少女飛鳥／ピ■■ク色のカーデイガンの少女■■■■に守られている――

大型シャドウ／『■■術師』の攻撃により、飛鳥／■■■■が弾き飛ばされ、理にもう打つ手はない／地面の『■■■■』を拾い上げる――
(……なん、だ、コレ?)

それは、理の知らない記憶。結城理ではない■■■■の記憶。ノイズに阻まれ、断片しか識ることの出来ない記憶。

だが、今ここにいる結城理と、記憶の中での■■■■とは、決定的に違う点がある。

理の手の中には、『■■■■』が存在しない。■■■■を■■■■する為の『■■■■』が存在していない。

――果たしてそうだろうか？

焦燥感から胸を掻き筆らんとしていた手が、何かの鼓動を感じ、懐を探る。

――鍵だ。かつて理が契約を結んだ際、契約書に付属していたそれを、彼は何となしに手放せないでいたのだ。

理は鍵を繋ぐチェーンを首から外すことすらもどかしく、力任せに引き千切り、自らの右手にその鍵を収めた。

そして鍵は眩い光を放ち、一瞬にしてその形態を変える。

其処に有ったのは理にとって、見慣れない『銃』だった／見慣れた

『召喚器』だった。それを見て、理の心臓がドクンと跳ねる。彼はそれを、『召喚器』と呼ぶことを識っている。

当然、結城理／＼■■■■は、その『召喚器』の使い方を、何時の間にか識っていた／言うまでも無く知っている。

『召喚器』を右手に構え、ゆつくりと自分のこめかみへと押し付ける――

「結城くん、何をッ?!」

最早理には、飛鳥の叫びは届かない。

シャドウは何時の間にか理へと標的を変え、此方へと突撃している。彼にはその光景が、まるでスローモーションのように見えていた。

「――っ、あ、……は、あ」

呼吸は荒く、身体が震える。『召喚器』を握る手も覚束無く、今にも取り落としそうだ。

恐怖、なのだろうか？ 生物が当たり前のように抱く筈の感情を、理は今初めて感じている。

(違う)

これは『歓喜』だ――、そんな感情を抱くのも、結城理にとって初めての経験だ。

故に、彼は嗤う。ゾツとするような狂気的な笑みを浮かべ、目の前にいるシャドウを嘲笑する。

――殺されてたまるか

死ぬのは俺じゃない

お前の方だよ――

そして理は、その引き金を引く――!

「――ペル……ソ……」

11話 避けられぬ戦い 後編

まるでガラスが砕けるような音を響かせて、結城理は己の頭蓋を撃ち抜いた。

その光景を、飛鳥はどのような思いで見っていたのだろう。

結城理が、拳銃で自らを撃ち、狂気的笑みを浮かべたその姿を。かの特徴的な銀灰色の瞳も、今では青く染まっている。

——否、穿つは頭蓋に非ず、心の外殻だ。

発狂しての自殺、などという考えを浮かべる者はいない。

恐ろしい程に破滅的でありながら、神秘的なまでに美しい行為であつたからだ。

それは正に、死と再生の儀式なのだと言ふ飛鳥は本能的に理解した。

撒き散らすは脳漿に非ず、結城理の心の片鱗。彼の中に在る『もう一人の自分』。

青い光が理を中心にして渦巻き、その光は彼の頭上背後にて構成され、異形の姿を織り上げる。

『我は汝、汝は我——。我は汝の心の海より出でし者——』

理によく似た顔付きと白髪。しかしその眼は、人間ではない異形であることを示す紅。

首から下は、神話にて引き裂かれた己の身体を補修する為に機械染みたモノとなっている。その背には巨体に見合った豎琴を掲げている。

本来ならば無意識の海のみで形作られるそれを、現実世界にて構成し、物理的干渉能力を与えるその異能。

『幽玄の奏者《オルフェウス》なり——！』

「ペルソナ……」と、飛鳥の口から無意識で紡がれる。それこそが、結城理の能力なのであつた。

そして理は、唐突に狂気染みた笑みを引つ込め、何時もの無表情に変わる。それはまだ短い付き合ひの飛鳥でも解る、彼が戦闘態勢に入った証だつた。

背後に浮かぶオルフェウスをちらりと一瞥すると、すぐさま視線を

戻し左手をマジシャンに向け、小さく呟く。

「……《突撃》」

理は短く命令する。オルフェウスが持つ『スキル』は、精神を通じて理解は出来るものの、やはり実際に使用しなければ判断がし辛いからだ。

オルフェウスが豎琴を掲げ、躊躇いもなくマジシャンに向けて振り下ろした。

マジシャンも黙ってやられる筈が無く、それを剣で防ぎ、両者の鏖迫り合いは拮抗する。力は、ほぼ互角といった所か。

《アギ》

次いで紡がれるのは、ペルソナ能力に覚醒したことによって、正しく発現した《火炎魔法》であった。それにより、以前と比べ威力も練度も更に引きあがり、マジシャンを包み込まんとするほどの爆炎が発生する。しかし、マジシャンは元より《火炎耐性》を持つシャドウだ。全くのダメージが通らない訳ではないが、この攻撃はやや分が悪いようだった。

両者の間で発生した爆炎がお互いを——理はワザとその爆風に乗り——吹き飛ばし、間合いという戦闘において絶対的な要素がりセツトされる。

ついでに理は、こういった使い方もアリだなと、頭の片隅にメモをしておいた。

「■■■■■■——!!!」

「防御性能は、っと……」

マジシャンが無数の腕を撓らせ、伸ばし、その剣群を以て理を串刺しにせんとする。ペルソナという遠隔攻撃手段を手に入れても、向こうが攻撃のリーチが上なのは変わりない。

理は、そしてオルフェウスは慌てず騒がず、両腕を広げ、その腹を見せつける様にして晒す。何処かで悲鳴を上げるような声が聞こえた気がするが、それに構うのは後だ。

次の瞬間、先の《アギ》の破壊音にも匹敵する轟音が鳴り響き、マジシャンの剣先を押し戻す。

それは、スピーカー状となったオルフェウスの腹部から発生した——正しくは、ハウリングや共振現象とも呼べばいいのかもしれないが——音響波だった。

そこでオルフェウスは今の役目を終え、霞の様に消えていく。理の意思で自在に戻すことが可能であるようだが、やはり長時間の召喚は負担が掛かっていた。

攻撃、魔法、防衛——。この僅か三手で、理はオルフェウス、引いては己自身のスペックを理解し、マジシャンとの戦力差を改めて吟味する。半蔵学院トップクラスの明晰な頭脳を持つ理は己の能力を、そしてマジシャンの能力を、過小にも過大にも評価しない。それが齎した最終的な勝率を、理は冷静に受け止める。例えそれが、残酷な結果であったとしても、だ。

(……勝率は二割も行けばいい方か。やっぱり、《アギ》が効き辛いのが痛いな)

足りない——、と理は判断する。

武器を持たないことによる基本攻撃力が足りない。

魔法による火力が足りない。

それを発動する為の精神力が足りない。

そもそもペルソナを使った戦闘経験が足りない。

このままでは、先程までよりはマシとはいえ、ペルソナ覚醒前の展開と何ら変わらないことになってしまう。

ならばどうするか？　思考をフル回転で巡らせる。彼に出来る

のはそれだけなのだから。

人間には『知恵』というモノが有る。それは、人間を人間たらしめる原罪にして、人間をこの地球の覇者とした最強の武器。

何時の間にか、先の理とは打って変わって、諦めるという思考は存在していなかった。その為には、まず——

「……オルフェウス、《突撃》」

再び召喚器の引き金を引き、オルフェウスを召喚する。今度は豎琴を振りかぶることはなく、マジシャンとがっしり組み合っつてその行動を制限した。理はその隙に、ある地点へと向かう。ペルソナ能力に覚

醒したことにより、元から高い身体能力が更に引き上げられ、瞬く間にその場へと到達する。

その地点とは、言うまでも無く――
「ひあつ?! ゆ、結城くん……?」

倒れ伏した飛鳥の下へであった。理はすぐさま彼女に《回復魔法^{ディア}》を施し、彼女の怪我を治すと、その身体を抱え上げる。残念ながらもその体制はお姫様抱っこなどというロマンチックなモノでなく、腕を腰に回して脇に抱えるという、殆ど荷物扱いだ。飛鳥が驚く暇も有ればこそ、オルフェウスをマジシャンの下から己の内へと還し、すぐさま再召喚。そしてその肩へと飛び乗り、一気に距離を離す。「飛んだー!」等と飛鳥が驚く声が煩いが、一応の安全確保は出来たのだった。

「あ、ありがと……」
「……」

オルフェウスを還し、飛鳥の感謝の言葉に返答することもなく、理は再び思案を巡らせる。シャドウは例外なく仮面を弱点とする為、それを碎ければマジシャンを倒すことが出来る。

そして、《アギ》による遠隔攻撃に火力が見込めない以上、理に残された手札は近接攻撃による一撃のみであった。

しかし当然、あのマジシャンに近接戦闘を挑むとは、その無数の剣群に身を晒すということであり、危険度は計り知れない。つまりは――

「《死なばもろとも》、かな」

「ちよつと!? 何か物騒すぎる言葉が聞こえたんだけど!? 危ないって〜っ!」

理の腕に抱えられていた飛鳥が、彼の呟きに耳聴く反応する。

其処で漸く理は飛鳥に反応し、その行動を制しようとする彼女に諭すよう、懇切丁寧に説明した。

「……兎に角、こっちは遠距離攻撃の火力が足りない。近づいて一撃、大きいの見舞えば勝機はある」

「それは……、そうかもしれないけど……」

というよりも、それ以外に方法が無いのが現状だ。そもそも彼が持

つ近接戦闘のスキルは、己の肉体かオルフェウスの《突撃》のみである。幸いにしてマジシャンに残された体力では、オルフェウスの攻撃を耐えられないのを、理の知覚は感知出来ていた。

ペルソナ能力に覚醒し、理が元より持つシヤドウへの解析能力もまた成長した。相手の耐性やスキルなどは手探りだが、残りの体力程度ならば把握できるのだ。

飛鳥とて説明されれば、残された手段がそれしかないのは理解はでき、それ以前に先の自分の行動がまさにそれである為、咎めることも出来ない。

だが、またしても自己犠牲に走ろうとする理に苦言を申すくらいならば許されるだろう。

「けどそれは、結城くん一人で戦おうとするからでしょ?」

「……? そんなの当たり前だろ?」

飛鳥の言葉に、理は理解できないとばかりに首を傾げる。どうでもいいことだが、彼は時折、何処か子供っぽい反応を見せるのに飛鳥は気付いた。

それはそれとして、理の作戦は兎に角、独り善がりと言っているのだ。それは結城理が、今までそうやって戦ってきたことの証だ。

しかし今ここに居るのは、決して彼一人ではない――

「結城くんは、もう少し誰かを頼っていいと思うよ」

「……っ――」

理が一瞬だけ表情を強張らせるのを、飛鳥は見逃さなかった。飛鳥にはそれが、理が抱える心の傷なのだと理解する。

結城理は、孤独に生きようとしている。他者を忌避するという彼のトラウマ。だからこそ起こった、斑鳩たちとの擦れ違い。それを見過ぎることなど、飛鳥には到底出来ない。

「貴方は一人じゃない、『仲間』が居る。……今だけでもいいから、それを信じてほしいの」

「……俺は」

思考の海に沈む。理は此処に至っても尚、忍というものを信用できずにいる。……正確には、忍なのが問題なのではなく、他者というの

が原因なのだが。

自分以外に信用できないという生き方をしてきた彼が、一朝一夕どころか、飛鳥の一言二言で変わる筈が無いのだ。

そして、そんな様子を晒す彼らをマジシャンは、いい加減焦れた様に攻撃を仕掛ける――！

「はあっ！」

「オラアツ！」

――無論、彼らが何の考えの無くそんな隙を晒す筈が無いのだが。

飛鳥よりも洗練された鋭い剣閃で、理たちに向けて飛来する剣を弾き飛ばす、長刀の担い手。

強大な旋風脚によって発生した突風により、マジシャンの巨体を吹き飛ばした剛脚の担い手。

それらは紛れもなく、忍学科三年生にしてクラス委員長の斑鳩と、同じく忍学科三年生葛城の姿だった。次いで、忍学科一年生、柳生と雲雀の姿も現れる。

「あはっ♪ ありがとうみんな！ 来てくれるって、信じてたよ！」

「……斑鳩先輩に葛城先輩？ 柳生や雲雀まで……」

飛鳥自身は期待していたと言わんばかりに笑顔を見せるが、理はやはり何故という困惑の表情を見せる。斑鳩はそんな理の心情を汲み、その眼を見据えて、ハッキリと宣言した。

「結城さん。今、私達がここに居るのは、貴方を助ける為です。……私達が愚かでした」

理は斑鳩の謝罪を黙って聴いている。流石の彼も、ここで水を差すほど他人の心が読めない訳ではない。

「シャドウを、そして貴方を恐れて逃げ出した臆病者です。今すぐ信用しろとは言いません。罵詈雑言など幾らでも受け入れましょう。

……ただそれでも、貴方と共に戦うことを、そして謝罪を、お許しください」

斑鳩は、この場に居る忍メンバーの代表として宣言する。

「――申し訳ありませんでした」

そうして頭を下げる斑鳩を、理は黙って見つめている。敵から目を離し、命の危険があるというのだ。そうするまでに、斑鳩は理を見捨てたことを悔いているのだろう。自身がそうさせたのだから、彼女が気に病む必要は無いのだが、と理は思う。

しかし今、彼女達はここに居る。その後悔を呑み込み、糧にし、この死地へと舞い戻って来た。結城理を、助けるために――

これこそが、飛鳥の言う『仲間』なのかと、理はぼんやりと理解し始めていた。

それでもまだ、理は信用出来ない。他人という存在を、忍という組織を、それらを忌避する己の心そのものを信用できない。それは最早、ただの意固地だった。

――だが今は、それらを信じる飛鳥を信じてみよう、と、理は思う。

信用ではなく、信頼を。形式上の繋がりではなく、心と心の繋がりというものを、飛鳥に託してみよう――

それは奇しくも、斑鳩達が飛鳥に抱いた想いと全く同じだった。飛鳥という少女こそが、忍とペルソナ使いを結んだのだ。

ふと、理の纏う雰囲気と和らぐのに飛鳥は気付いた。眼を閉じ、顔を伏せ、全くの無表情であるというのに、確かに感じた。

理はゆっくりと歩みを進め、斑鳩の傍へと近寄り――、彼女に目を与えることもなく、その脇を通り過ぎた。やはり信用されないか、と斑鳩が落胆したその時、彼は信じられない行動に出た。

拳銃を取り出し、躊躇いも無くこめかみに押し付け、引き金を引こうとする。斑鳩達には、それを止める術は無く――

「ペルソナツ――！！」

「なっ?！」

無論それは、シャドウに対抗出来るもう一人の自分を呼び出すための儀式。ペルソナという理の真の能力を、彼女たちは初めて目にし、そして理の意図に気が付いた。

召喚されたオルフェウスは、斑鳩の頭上を駆け抜け、豎琴を振り回し、跳躍で接近していたマジシャンを吹き飛ばしたのだ。奴への警戒

を怠った訳ではないが、自身と葛城とで攻撃したにもかかわらず、リカバリが余りにも早い。やはりシャドウを倒すには、理の力が必要なのだと、斑鳩は改めて理解した。

「あ……つと、駄目だ斑鳩！ コイツ、アタイらの攻撃なんかじゃビクともしてねえっ！」

ペルソナを見て一瞬呆けていた葛城だったが、すぐさま意識を取り戻し悲鳴を上げる。葛城の一撃ならば、並のシャドウであつたなら一時的にでも行動不能に陥らせることは出来たかもしれないが、大型シャドウ相手ではそれも意味を成さない。『魔術師』^{マジシャン}という名は伊達ではなく、所謂魔法属性攻撃に全般的な耐性を持つのだろう。故に、葛城の風の忍術は無効化された。

ペルソナ能力を持つとうと理ただ一人ならば、ペルソナ能力を持たない忍メンバーだけならば、それで手詰まりであつただろう。しかし彼らは今、飛鳥という少女を通じ、志を同じくとした。互いを仲間と認め、このシャドウを倒すのだと——

不意に、理の脳内で新たな記憶がフラッシュバックする。それは■
■が、マジシャンを倒すという光景だ。

満月を背にした『死神』／■
■が、圧倒的な力で以てマジシャンを蹂躪する。切り裂き、刻み、潰し、そして屠る、紛うことなき虐殺行為。しかし理にはその力は無い。結城理は■
■ではなく、■
■は結城理ではないのだから当然だ。だからこそ——

「……皆、聴いてくれ」

「結城さん……？」

理は静かに宣言する。周囲を見渡し、忍メンバー一人一人にしつかりと眼を合わせる。それは理が、初めて彼女達に興味を持った証だ。斑鳩など、その美しい銀の瞳に射抜かれて僅かに頬を紅潮させ、慌てて頭を振る羽目となっている。

「……アイツを倒す。俺に力を——、貸してくれ！」

「っ！ ええ、勿論ですー！」

「ははっ、そうこなくっちゃな！」

「元より、こっちはそのつもりだ」

「うんっ♪ 雲雀、頑張るよ〜」

忍メンバー全員が、理の言葉に同調し、心を一つにする。

飛鳥もまた、心を通わせる理達の姿を見て、嬉しくなった。やはり、彼は優しい人間なのだと思えて思い、動悸を激しくする。戦場にも拘らず、心地よいその感覚に身を委ねそうになる。

しかし、それに浸るのは後だと思ひ直し、彼女もまた武器を構え、決意を露わにした。そんな飛鳥の隣に、理が並ぶ。

「え、えつと……？ 何かな、理くん？」

「悪いけど、武器、有る？」

「……あ〜」

苦笑いしか浮かばないとはまさにこの事だろう。手持無沙汰に掌を開閉する理を見て、彼は何処か抜けていて、完璧ではないちやんとした人間なのだ、飛鳥は苦笑する。其処で彼女は、己が構えた二刀の脇差・柳緑花紅、その片割れを理へと渡した。流石の彼も、自分の獲物を渡されるのは予想外だった様だ。

「……いいの？ 別に苦無とかでもいいんだけど」

「いいの！ 前も私の武器を使ってたし、使えない武器を渡されるよりはマシでしょ〜！」

「無手じゃなきや、武器とかどうでもいいんだけどなあ……」

「どうでもよくない！ なんだったら、私が扱い方でも教えてあげるから、ちゃんと——」

「『イチチャついてないで戦闘に集中しなさい！（しろ！）（してよ！）』」

まさかの総ツツコミである。斑鳩や葛城、柳生は言うに及ばず、普段は温厚な雲雀からもだ。イチチャついていると言われた飛鳥は顔を赤らめるが、理はどうでもいとはかりに無反応である。

そんな漫才紛いのことをしていても、シャドウは待つてくれない。体勢を立て直し、此方へ攻撃を仕掛けてくる——！

「っ、と。じゃあ、全員散開。指示は追って出す」

「『了解！』」

意識を切り替え、迎撃へと転ずる。誰もが理の指示に淀みなく従

い、信頼されているのを理は感じた。ならば、その信頼に応えられるよう、己の役割を全力で全うさせてもらおう。

(まずは、その威力を削ぐ——！)

召喚器を当て、引き金を引く。唱えるは、新たに発現した能力——

「オルフェウス、《タルンダ》！」

マジシヤンを淡い光が包み込む。すると飛鳥達からも、マジシヤンの攻撃の威力が眼に見えて下がったのが解った。

理が唱えたのは、対象の攻撃力を低下させる《弱^{ンダ}魔法》だ。こうすることで、飛鳥達でも十分にマジシヤンの攻撃を迎撃出来るようになる。そして、奴はこの魔法を解呪する魔法を持っていない様だった。これではばらくは、飛鳥達のリスクを減らすことが出来る。

次いで理は、斑鳩と葛城の二人に指示を飛ばす。

「斑鳩先輩は隙を見て、ヤツの腕を切り裂いて攻撃手段を奪って下さい。葛城先輩は——」

「了解です、任せてください！」

「分かったけど……、イイのかよ、オイ？」

「構いません。俺が合図したら、指示通りをお願いします」

理から与えられた指示に、葛城が渋い顔をする。有効だが、とんでもない作戦なのだ。納得できないでいる葛城を尻目に、理と斑鳩が前衛に出る。その勇ましい姿を見て、葛城も腹を括った。

マジシヤンは理だけでなく、斑鳩という対象が増えた為に攻撃の腕が鈍るかと思っただがそんなことはなく、あくまでも理を最優先とするらしい。

無数の剣閃が、彼に向けて放たれる。———それこそが、理の狙いだ。

「オルフェウスっ、ぐあっ！」

オルフェウスを召喚し、マジシヤンの剣群をその身で以て掴み取る。しかし、数本は両手で掴むことは出来たが、残りはオルフェウスの身体を貫き、そのダメージは本体の理へとフィードバックする。だがこれで、斑鳩がほぼフリーとなった。彼女自身は理が身を挺して囹

上であるコンクリート片も瓦礫となつて束縛の一役にかつていた。

無論、闇雲に乱射するだけでは、ここまでの効果は見受けられなかっただろう。それを可能としたのは、雲雀の補助あつてのことであつた。

「柳生ちゃん、次は右だよつ、再生しかけてるから。その次は、後ろ側の方。其処を固めちやえば、アイツはもう動けなくなつちやうよつ！」

「ああ！ よしよし、凄いで雲雀！」

「えへへ〜♪」

理は柳生が氷の弾丸で攻撃する際、感知能力に長けた雲雀をその補助に回す様に指示し、マジシャンを確実に拘束できるようにしたのだつた。それは云わば、狙撃手を補佐する観測手であり、二人の相性の良さも補つて、この上ない遠距離攻撃コンビとなつていた。

氷と瓦礫、理と斑鳩に付けられた傷も相まって、マジシャンは完全に動けなくなつてしまつていた。しかし勿論、それだけではシャドウを倒すには至らず、いずれは再生しては再び動き出すことだろう。そうならぬよう、止めの手はペルソナ使い結城理へと委ねられた。そして、その隣には飛鳥が居る。彼と同じく、シャドウを倒せる能力を得た飛鳥にもその役目が与えられたのだ。

二人は、互いの武器を構える。柳緑花紅、元々は二刀一对の脇差であり、二人に分けられた今でも、その刃は惹かれあう様に傍に在つた。

「……行くよ、飛鳥」

「うん！」

言葉は少なく、二人は同時に飛び出す。

「っ、危ない！」

突如として、その戦況を見守つていた雲雀が叫ぶ。彼女の鋭敏な感知能力は、理よりも先にマジシャンが発しようとした何かを捉えたのだ。

そして、マジシャンが起死回生の一手として使うそれが発動する。

それはまさに、地獄の業火というに相応しい強大な炎だつた。離れた箇所居る斑鳩達ですら、その熱量で全身が焼け爛れそうになるほど

だ。理ですらいまだ及ばぬ、上級炎魔法《アギダイン》。始まりの炎を示す『魔術師』の名に恥じぬ魔法であり、彼が持つ最強の魔法であった。

その魔法は二人が居た地点で発動し、一瞬で二人は見えなくなってしまう。炎の中心には、今まさに灰塵と帰す二つの人影が有った。

「飛鳥ツ!? 結城!」

「お、おい!? やべえぞツ!」

柳生と葛城が、慌てて二人を助け出そうと飛びますが、やはり圧倒的な炎熱で近付くことさえ出来ない。

それでも何とかしようとする二人を、斑鳩と雲雀がそれぞれ抑える。

「斑鳩、放せッ!」

「落ち着いて下さい、葛城さん。柳生さんもです」

「悠長なことを言ってる場合か! あの二人が!」

「柳生ちゃん落ち着いてっ、大丈夫だからっ!」

雲雀のその言葉を聞いて、葛城と柳生はたと動きを止める。

大丈夫だ、つて——?」

「ええ。結城さんと飛鳥さんが、これしきの事でやられる筈が無いと、私は信じています」

斑鳩は、雲雀の言葉に呼応するよう自らの信頼を告げ、そして上空を見上げた。

雲雀も確信をもって見上げ、葛城と柳生は釣られるようにして上に視線を向ける。其処には——

「ほら、やつぱり」

其処には、理と飛鳥の姿が在った。飛鳥が左腕で、理を抱えている。

マジシヤンの《アギダイン》が発動する一瞬前に、飛鳥は理を抱えて跳躍したのだ。

「《空蟬の術》、だよ!」

《空蟬の術》、忍の最も基礎的な身代わりの忍術。自身の衣服を脱ぎ捨て、囮にすることで、敵の目を欺く技法。

マジシヤンの《アギダイン》で焼かれたのは、この二人の衣服だっ

たのだ。理は半蔵学院制服の上着を、飛鳥は忍装束を空蟬としていた。ついでに、飛鳥の豊満なバスト、それを覆う扇情的な虹色ストライプも晒され、あまつさえ理の胸板に押し付けられてさえいた。尤も、彼は今それに気を裂く余裕は無い。

そして、この一手こそが、理が飛鳥に指示した最後の作戦であった。突撃する前に理は飛鳥に向け、火炎魔法による遠距離攻撃を警戒するよう伝えていた。尤も、もし攻撃が来た場合には、自身を抱えてそれを躲すように指示しただけであり、「……まさか俺まで脱がされるとは」とぼやく少年がいたかは定かではない。

大型シャドウには知性が有る。そして、知性が有るということは、『だまし討ち』も立派な戦術となるということだ。確実に仕留めた筈が、その予想を外され、マジシャンは動揺したように此方を見上げたまま動きを止めてしまっていた。

二人が狙うのは、その仮面。

ペルソナ使いと忍、二人の刃は、今届く——！

「おおおおおおおおおつっつ!!」

ずぶりと生々しい手応えを感じさせながら、二刀の脇差は狙い違わずマジシャンの仮面を貫いた。突き刺した個所から仮面の全体に罅が走り、ボロボロと崩れ落ちてく。それを支える身体もまた、じわりと滲む様に融解していく。

「これで——ッ、まだ余力を!」

だが、最後の足掻きなのだろう。震えながらも、飛鳥達を囲い込もうと数本の腕が立ち上ってきたのだ。その腕は、僅かに残された余力であろうと、人間を縊り殺すには十分だった。

逃げられない——と、飛鳥は覚悟する。しかし、理はまるで慌てることもなく、つまらなそうにマジシャンを見下ろしていた。

「……いいや、『終わり』だ」

ベルトに差し込んでいた召喚器を引き抜き、緩慢な動作で喉元に押し当て、引き金を引く。初めて間近でハッキリと見るその異常な行爲に、しかし飛鳥は何処か見惚れていた。……まあ、流石にその笑顔(狂)はやや頂けないが。

「——ペルソナ」

そして、オルフェウスは召喚される。二人の背後に浮かび上がり、彼らを祝福するかのようになり、豎琴を弾く。

「……《紅蓮刀》」

短い声で紡がれるスキル名、その途端、飛鳥は手元から膨大な熱を感知した。

すわマジシャンの攻撃魔法かと身構えるが、杞憂に終わる。その熱を発していたのは、マジシャンを貫く柳緑花紅であったのだから。

《紅蓮刀》、理が得たもう一つのスキル。その名の通り、己の武器に《火炎魔法》を纏わせて攻撃するスキルだ。例えば《火炎耐性》もつ存在であろうとも、内側から身を焼かれれば無事でいられる筈が無い。やがてその炎はマジシャンの全身へと広がり、焼き尽くしていく。

「……お前も、俺の『死』じゃない——」

そんな理の言葉を手向けとして。

何も、残すことはなく——

12話 Mr. Easy-Going man

「終わっ……、たの……？」

「……ん」

呆然と呟かれた飛鳥の言葉に、理は短く答える。

そんなかなすかな呟きであっても、飛鳥の、そして忍メンバー全員の耳にはしっかりと届き、漸く彼女たちに喜色の笑みが浮かぶ。

「……や、ったあああああー……っっっ!!!」

そんな中、第一声を上げたのは飛鳥だった。諸手を目一杯に挙げ、ぴよんぴよんと飛び跳ねて、全身で喜びを表している。

この戦闘で、彼女は確かに理と協力してシャドウを倒したのだから、その喜びは如何程であるのか。更には駆け寄ってきた斑鳩たちに順番に抱き付き、その興奮を分け与えているようでもあった。……約一名が、だらしのない顔をしていたが野暮は言うまい。

「結城くんも、ありがとうっ!!! ……あれ？」

そして、当の本人にも感謝を述べるのだが、肝心の理の姿が見えない。——いや、すぐそこに居た。ただしそれは、屋上に開けられた穴から自分の部屋に入り、そのままベッドに倒れ込んでいるという、色々な意味でツツコミどころ満載な光景であったのだが。

「あの一、結城くん？ 何やって……？」

「……疲れたから寝る」

「それは分かるけど……。いや、それなら病院行こうよ！」

うつ伏せに寝そべったまま、今にも寝落ちしそうな声で理は応える。

というか、文字通りの死闘を繰り広げた彼は、凄まじい負担が掛かっているはずだ。すぐさま飛鳥達は病院へと連れて行こうとするが、理はそれを制する。

「……俺がこの部屋を離れるのは都合が悪いし、それにもう時間が無いと思うよ」

掠れるような声で呟かれた理の言葉に、彼女達は首を傾げる。一体どういう事なのだろう。

「気付かないの？ シヤドウを倒したのに、『影結界』が解けていないのを」

「え——、っ、そういうええ!?」

彼女達は其処で周りの異変、影結界が今だ展開されたままであることに気付き、再び身構える。あの大型シヤドウを倒したというのに、何故——!?! 混乱する彼女たちに向けて、理はゆつくりと告げる。

「この影結界——いや『影時間』は、普通のシヤドウが展開する物とは違って、時間経過で解除される、……と思う」

「いや、思うと言われましても……」

「……自分でもどうしてかは解らないけど、何故かこの影時間のこと が理解できるから」

再び、理の脳裏に自分のものではない記憶が流れる。

『実は一日■24時間■■ない、……なんて■つたら君たちは■■る かい?』

『あ■は“影時間” 一日■一■の狭間に■る “隠された時間” だ——』

『お前■も見た■、 “怪物” を! ■たちは“シヤドウ” と呼ん ■ ■る——』

まるで要領を得ない、チグハグでツギハギな記憶。いや、果たしてそれを記憶と呼んでいいものだろうか。

理は現状、この記憶のことを飛鳥達に説明する気は無い。それが例え、影時間やペルソナに関連する重要な記憶であっても、だ。そもそも“自分ではない自分”の記憶が有るなどと、果たして彼女達が信じ るのか? 取り敢えず斑鳩は、一応の納得の形を見せることにする。

「まあ、シヤドウ関連の情報については、結城さんを信用しますけど ……」

「……すみません」

「いいえ、お気になさらず。では、時間が無いというのは、どういう事 なのでしょう?」

「……影時間が空けたら、『象徴化』していた人達も動き出すようにな

ります。だけど、さっきの戦闘で破壊された寮は元に戻らない。

きつと、寮内の人たちがこの部屋にすつ飛んできますよ」

『象徴化』とは、影結界・影時間の内部で棺桶のオブジェと化した、ペルソナ使いや忍ではない人間達のことだ。普通の人間は影結界・影時間を認識できず、しかしシャドウに襲われることもない。だがそれは、防衛とは違うのだと理は予測を立てていた。

単純に、その時空間に適性を持っていないということなのだろう。この世界に存在できるのは、シャドウとペルソナ使い、そして忍だけなのだった。そして影結界・影時間で破壊されたものは、現実世界に回帰してもそのままだ。それは、空間の位相をずらして現実世界に影響を及ぼさないことが出来る『忍結界』と大きく違う点である。

「……そういうことですか。それなら私達は、お暇した方が良いでしょうね」

「事後処理に関しては、そっちに任せても？」

「勿論です。寧ろ、そういった作業に関しては、私達が適任ですしね」「なら……、後は……、たの——」

理の言葉がだんだんと尻すぼみになっていく。眠気の限界が来たのだろう。大型シャドウとの戦闘による疲労だけでなく、ペルソナ覚醒のショックもあるのだ。今彼に必要なのは、休息だ。ゆっくりと目蓋をおろし、夢の世界へと旅立っていく理を、彼女達は苦笑しながら見守っていた。

「けどなー、この部屋でゆっくり休めれるのかね？」

葛城が部屋の中を見回す。辺りには、天井に開けられた大穴の破片がそこかしこに散らばり、落下したシャドウの巨体で押し潰された家具が散乱している。理の指示とはいえ、この惨状を作り上げたのは間違いない彼女の一撃である。その何処か引き攣った表情を、飛鳥達は極力見ない様にしていた。この状況でベッドが形を残していたのは、まさに奇跡としか言いようがない。ある意味、其処で眠りこける理も含めて。

「——つと、影時間が開けましたね」

影時間が開けたことにより、天井の穴から差し込む月明かりが正常

な色に戻り、街中は元の明かりを取り戻していた。

そして、寮内がにわか騒がしくなる。時間が動き出したことにより、シヤドウトの戦闘で男子寮が地震の如く揺れたのを寮内の人間達は感知できたのだ。

「おい、なんだか今地震が起きなかったか?」

「ああ、ホンの一瞬だったけどな。それより、どっかで爆発するような音も聞こえたぞ」

「この部屋か? 確かオレツチのクラスの結城ってヤツの部屋だけだ。……おい、結城さんよー、起きてたら返事してくれー」

その音源とでもいうべき、理の部屋の前に学生達が集まり始める。飛鳥達もそこで、天井の穴から脱出した。この部屋に理を残していくことに不安を感じない訳ではないが、どうやらそれも杞憂に終わってしまう。

「お、開いてる。不用心な——って、何じゃこりやあ!」

「うおっ、隕石でも落ちたのか? 結城、大丈夫か?」

「ちよっ、こいつボロボロだぞ! 救急車呼べ、救急車! しつかりしろよオイ、死ぬんじゃないぞっ!」

そんな必死の様子の子を見て、飛鳥達の口には自然と笑みが浮かぶ。どうやら、理の部屋を覗きに来た男子達は、かなりのお節介らしい。瓦礫が散乱した部屋をかき分け、ぐったりとした——単なる熟睡状態である——理をベッドから背負い上げると、慌ただしく飛び出していく。

しばらくして、男子寮の前に救急車が到着し、理を搬送していくのだった。なお、この救急車は忍学科御用達の病院行きの、斑鳩が手配した物である。



——夢の中で、『僕』は思う。

果たして、日常と非日常の境界を超えたのは、何時のことなのだろう——

ペルソナを召喚した時？ 飛鳥と出会った時？ 十年前に能力を認識した時？

いいや、屹度それは—— もっともっと、前——

——振り返るまでも無く、解る。

夢と現実の境界は、自分の中にあることを——



2009年 4月10日 昼——

ぱちり、と目蓋を開ける。

眠気を残さない、電気のスイッチを入れるかのような唐突な目覚め方が、結城理にとつての当り前だ。彼はペルソナを使った後には強い睡眠欲に襲われる常であるが、起床さえすればその眠気を残すこともない。生まれ変わったような新鮮な気持ちで、理の一日は始まる。

(……待て、何処だココ?)

正確には、柔らかいベッドで、の時点で気付きはしていたのだが、首を動かし辺りを見まわし改めて確認する。こんな場合は洒落て「知らない天井だ」等と呟けばいいのかもしれないが、生憎と彼には似合わないセリフだろう。

部屋の内装はどう見ても病室のそれであり、理が寝るベッドもシートも白一色で清潔感が漂っている。その広さもかなりあり、大層な個室が与えられたモノだと彼は思う。壁一面に広がる大窓の隙間から心地よい風が差し、カーテンと彼の前髪を揺らす。窓から差し込む日の当たり方からして、時刻は昼の頃だろうか。

そして、ベッドの傍でこっくりこっくりと船を漕いでいる飛鳥を発見した。シャドウとの戦闘で見せたあの勇ましい雰囲気は何処へやら、そうしていれば只の女の子にしか見えぬ、理は拍子抜けして彼女を見やる。その視線に気付いたのか、飛鳥はハツとして目を覚ますと、酷く慌てた様子で理に詰め寄るのだった。

「ふあっ!? ……お、おはよう結城くん！ 調子はどう!？」

「飛鳥、涎垂れてる」

「んひいつ?!」

だらしなく垂れている涎に理がツツコミを入れると、飛鳥は顔を赤くして顔を拭う。もう馬鹿じゃないだろうか、と理は思った。そうして涎を拭い終えた飛鳥は、改めて理に向き直り、彼の安否を確認した。「ええつと……、気が付いたみたいだね、良かった♪」

話の戻し方がやや強引な気がしないでもないが、文句は言うまい。話を進めたいのは、理とて同じである。

「ここは……、病院？」

「うん、私達忍がお世話になってる総合病院だよ。結城くん、あの後倒れちゃったから、この病院に運んだんだ。……あ、でも、救急車を呼んだのは寮の人だから、ちゃんとお礼を言っておいてね♪」

「……そうか。俺はどのくらい眠っていたの？ 一週間ぐらい？」

「あはは、いくらなんでもそこまでじゃないよ。ほんの半日ぐらいだから」

「そう……なのか？」

飛鳥が応えた時間の経過に、理は首を傾げる。そこで彼は何故か、余りにも時間が経っていないと判断したのだ。

『まっ■く……、何■まで寝■る気■。今■■一週間だよ?』

(また……、この記憶……)

そしてまたしても流れる、自分ものではない——『向こう側』とでも呼べばいいのだろうか——記憶に、理は翻弄される。

理にとって、確かにこの記憶は有用だ。得体の知れない化け物シャドウ。その存在の情報を知ることが出来るのだから。しかしそれでも、ペルソナとも違う“もう一人の自分”ともいうべき記憶。有体には言えば、いい加減鬱陶しくなってきたのだ。

そんな風に気分を悪くする理をどう解釈したのか、飛鳥はちゃんとした休息をとるように宣言してくる一幕も有るのだった。

「……飛鳥は」

「え？」

「何で……、俺を助けに？」

和気藹々とは言えずとも、それなりに会話が弾む中で、理は唐突に、

飛鳥に語り掛ける。

彼はあの時、自身の身を挺して彼女たちを逃がしたことに、後悔も反省も無い。故に、理は確認しなければならぬ。何故飛鳥は、自分を助けに来たのかを。次また同じことがあり、理が命を捧げたとしても、今度こそ彼女は死ぬのかもしれないのだから。

飛鳥の答えは、彼女自身どうしてか分からないような困惑を交えたままに紡がれるのだった。

「私のじっちゃん、結城くんに伝えてほしいって言ったの。『力の意味』を履き違えるな』って」

「……わざわざ、そんなどうでもいいことを伝える為に？」

拍子抜けしたと言わんばかりに理は嘆息する。しかし飛鳥は、そんな彼の言葉を否定するように大声で叫ぶ。

「どうでもよくなんかないっ！　じっちゃんは言ってた、『力』って言うのは『剣と盾』だって！」

今の結城くんは能力は『剣』だけで『盾』が無い。だからみんなに怯えられているっ！」

祖父の言葉に、飛鳥は自身の想いを乗せる。そんな彼女の脳裏に浮かぶのは、あの運命の日、自身へと差しのべられた理の手であった。彼の『シャドウの掃除』という行動理念からは外れた筈のその行為は、確かに飛鳥の心に刻まれていたのだ。

彼は、結城理は——、『優しい心の持ち主』であるのだと。……まあ、流石にその後の無視は頂けないのだが、其処は言わぬが華である。

「私を助けてくれた優しい貴方が、私達を助けるために死ぬなんて耐えられないよっ！」

「……俺は、死ぬのなんて怖くない——」

釣られるようにして言葉を紡ぐ理を遮るように、飛鳥は自身の想いを吐露する。

「私は怖いよ。でも、私が何もしないで、仲間の皆が死ぬ方がもっと怖い！　結城くんだって、仲間なんだから……」

絞り出すような声には、飛鳥の本気の想いが込められているのを、

理は確かに感じた。

『仲間』——、昨夜も思ったことだが、理にとってそんな繋がりを持つことなど、果たして何時以来だっただろう。

そして、理が応える前に——
「失礼します。ああ、結城さんも起きられたのですね、おはようございます」

斑鳩、そして残りの忍メンバーが入室し、有耶無耶のうちに話は終わるのであった。



斑鳩達は見舞いに來たと思つたら、実はあのシャドウとの戦いの後街中で起こつたシャドウの被害に関する資料を持つてきたのだった。昨晚あんな大立ち回りをしたばかりだというのに、随分とタフであると理は感心する。

「無気力症——、実際にはシャドウの被害者ですが、あの大型シャドウを倒した所為か、大多数の患者が改善方向に診られます」

淡々と報告を述べているように見える斑鳩だが、その口元に隠し切れない微笑を浮かべているのを理は見逃していない。分かりきつたことだが、彼女は責務が強い人間なのだろう。理の力添えが有るとはいえ、人々を守れたことに喜んでいいるのだから。

「ええ、『影人間』は精神をシャドウに食われた人間です。俺達がシャドウを倒せば、食われた精神が元の人間へと戻る、ということなのでしょう」

「影人間？ ……ああ、無気力症患者のことですね。言い得て妙です」
「……そうですね」

またしても『向こう側』の記憶に引つ張られる理だ。訝しげな顔を斑鳩にされたが、シャドウ絡みの情報において全幅の信頼を寄せられている為か、特に何も言われることも無かつた。

理としては、昨晚の影結界・影時間の相違の様に、必ずしも自身の知る情報が一致する訳ではないので警戒して欲しいのだが。

「それと、昨晚の影時間で——」

「なるほど、それはおそろく——」

その他の報告を受けつつ、理と斑鳩のやり取りは進んでいく。尚その合間、飛鳥は葛城達に先の理との会話について弄られっぱなしであった。会話の内容こそ聞かれなかったようだが、年頃の少女達には絶好の話のタネになるのだろう。

飛鳥は顔を真っ赤にして、根掘り葉掘りと会話の内容を聞き出そうとする葛城と小競り合い、柳生と雲雀は何処か興味津々にし、斑鳩がこめかみに青筋を立て、理はどうでもいいとスルーする。

遂には、斑鳩が報告書を放り出してまで葛城を諫めようとしたため、全員で宥める羽目となった。病院でこんなに騒いでいいのかと思ったが、忍の病院なのでよくあることらしい。それでいいのかと悩む理である。

「——以上で、ご報告を終了します。何か質問は？」

「ええ、大丈夫です」

「……では、もう一つ」

報告を終えた斑鳩であったが、深刻そうな表情を浮かべ、懐からそれを取り出した。

「これは……、『召喚器』ですね。これが何か？」

「申し訳ありませんが、結城さんが眠っている間にこれを調べさせてもらいました」

斑鳩は召喚器に関する資料を取り出し、無然としながらその紙片を睨みつける。僅か数枚にしかならない資料に、どんな情報が記されているというのか。

「率直に聞きます。……これは、一体何なんですか？」

「……俺が安定してペルソナを召喚させるのに使う道具……ですが、聞きたいのはそういうことではありませんよね」

「この銃は材質こそ普通の銃と変わりありませんが、グリップに埋め込まれた青い部分が解析不可能な物質です。少なくとも、地球上のものではありません」

「へえ……」

ほんの僅かな時間でそこまで解析して見せた忍学科の科学力に、理は改めて感心する。その後も斑鳩は資料を読み上げて、調べあげた情報を網羅していった。

「拳銃のベースはスタームルガーMk3」、「銃口には樹脂が詰められ、通常の弾丸の発射は不可能」、「銃身に彫られた『SEES』という名の単語は現在調査中」等々。

だが生憎と、彼女達が一番欲するであろう情報に関しては、理は答えを持たないのだ。

「結城さん、貴方はこれを、一体何処で手に入れたんですか？」

「……此処に来るまでは、これを用意してくれたのはそっち側だと思っただよ」

「は？ どういうことですか？」

「一ヶ月前、丁度飛鳥と出会った後すぐに、俺のところに半蔵学院の入学案内書が届きました。召喚器は、それに付属していた『契約書』に添えられていたんです」

正確には、契約書に付属していた時は召喚器はまだ鍵の形態をしていたのだが、話がややこしくなるので割愛する。

理が言う、半蔵学院の案内書が彼に届けられたのは忍学科側も裏が取れている。しかし、それを一体誰が出したかまでは調べられなかったのだ。案内書こそ正式な手続きな物である為、彼の入学そのものには不備は無い。だが、案内書に添えられた契約書とは、彼女達も初耳だった。

「では、その契約書の内容を覚えていますか？」

「ええ。Contract I choose and accept
t no kind of endings personal
y」

「日本語でお願いしますっ?！」

一言一句正確に読み上げたのだが、斑鳩はお気に召さなかったようだ。その傍では「美声だ……」と思っっている少女達が居るが、それは兎も角として、理は適当な日本語訳を伝える。

「……まあ、用は『自分の選択に責任を持って下さい』と、書いてあり

ました」

「うーん……」

「当たり前すぎる契約だ、と斑鳩は思う。書面にして態々交わすべき契約でもない。」

理も訝しげに思いながらも入学に必要なものだと言明し、そして契約書はいつの間にか消えてしまっていたそうだ。

だが、ただ一つ分かることが有るとすれば――

「入学案内書と契約書、そして召喚器を俺に送ってきた人物は、あの大型シャドウと無関係ではない」

「そういうことですね。余りにもタイミングが良すぎます」

大型シャドウの撃退は、理がペルソナ能力を覚醒し、同時に忍学科の協力があつてこそ成し得たものだ。どちらが欠けても、マジシャンを退けることは出来なかつただろう。

（目的は何だ？ 俺のペルソナ能力の発動？ マジシャンの撃退？

『向こう側』の記憶だつてそうだ）

情報が少なすぎて、相手が何を考えているかが全く想像つかない。結局、理達は出方を待つて受け身に回るしかないのだった。

斑鳩とああでも無いこうでも無いと話し終わる頃には、すっかり日が傾いて、病室は夕闇に閉ざされる。理は今日一日入院するよう指示され、彼自身も回復すれば明日からでも登校するつもりでいた。

理はもう回復したつもりだが、彼女達から休養の為に仮眠をとるよう勧められ、余り眠くない頭を無理矢理に休眠させる。不承不承とベッドに倒れ込む理を見届けると、飛鳥達も名残惜しそうに退室するのだった。



理の意識は、不意に覚醒する。

ベッド脇の時計を確認すれば、時刻は測った様に午後11時59分だ。アナログの秒針が刻々とその時を刻み、頂点へと達しようとしていた。

(……5、……4、……3、……2、……1——)

——そして、時計は12の時を刻み、

『影時間』は訪れないのだった——

(……やっぱり、あの影時間は大型シャドウが——)

それを見届けることで、安心した様に理は意識を再び微睡ませる。

……薄れゆく意識の中で、彼が最後に見届けたのは、青白く輝く、美しい『蝶』であった——



2009年 4月11日 朝——

朝、快調に復帰し、半蔵学院へと登校した理は、淡々と己の席に着席する。

入学して早々に欠席した為か、此方を見てひそひそと囁く声が聞こえるが理は気にも留めない。

そうだ、それでいい——

どうせ俺には必要ない——

「よっ、転校生——」

「っ?!」

突如として声を掛けられ、柄にもなく動揺する。

理に話しかけてきたのは、クラスメイトの一人であり、帽子と顎鬚が印象的な少年だ。名前は確か——

「なあんだよ。そんなマジビツクリした顔すんなって」

「……えーと?」

「ん? オレツチのこと覚えてねえのか? なんだよー寂しいなー、せつかく救急車を呼んでやったつてのにサー」

「キミが……?」

理はそこで、飛鳥の話进行を思い出す。確か自分が倒れた際、救急車を呼んで運んでくれた生徒が居たという。どうやら、目の前の少年がそれらしい。

「しっかし、お前も不運だよなー? 転校してきたばかりだつてい

うのに、ガス爆発だっけか？ 部屋ムチャクチャじゃないか」

「……別に、どうでもいい。学院側が、新しい部屋を用意してくれるから」

当たり前だが、彼の言うガス爆発とは、忍学科が情報統制をしてくれた為であり、実際の事実とは異なっている。

さらに理は、今後は別の寮に移ることが決まっていた。話はそれで終わりだと言わんばかりに、理はそっぽを向くが、やはり帽子の少年は理に話しかけてくる。

「そんなつれない態度取るなよな。そもそもお前、部屋だけじゃないけども、いろいろ大変だろ？」

いや実はさ、オレも中学の時ここに転校してきてさ。転校生の先輩としてオレが最初に声かけなきゃってな。イイ奴だろ？」

「……そういうことを言う時点で、イイ奴とは言えなくない？」

「うおっ!? 手厳しーな、オイ？ もしかしてツツコミキャラだったのか？」

「……まったく。好きにしなよ、もう——」

理はそこで、彼との会話を打ち切るのを諦めることにした。

こっちの都合など知ったことではないと、絶えず話しかけてくる人物に、理は初めて出会ったからだ。

「……ん。それと、救急車の件、ありがと」

「はは、どういたしまして、だ。じゃあまずは——」

今、結城理の心の中には初めての感情が渦巻いていた。

飛鳥達に抱くその感情を『仲間意識』と、帽子の彼に抱く感情を『友情』と呼ぶことを、理はまだ気付いていない——



「それにしてもよー理、お前、何かイイコトでもあったのか？」

「うん？」

「だつてさ、初日の頃と比べると、明らかに雰囲気が変わってるぜ。初めてお前を見たときは、何と言うか……、こつちくんオーラ出して

たからな」

「……かもね」

「けど、一日休んで登校してくりや、随分と見違えたぜ。今はそんな
オーラ出してねーからな」

「そうか……」

「ま、詳しくは聞かねーよ。なんつーか、今のオマエを見ると、その
こと聞くのは無粋だつー気がするからな」

「……」

「はは、なーんだ照れてんのか？ ちくしょー、やつぱ気になって来た
じゃねーか。教えるよー、なーなー」

「どうでもいい……」

13話 そうだ、忍部屋に行こう

2009年 4月11日 放課後——

「ここが、半蔵学院忍学科の寮か……」

放課後、理は飛鳥達に連れられ、彼女達の住居である寮に案内されていた。

学院からさほど離れた位置ではなく、十分に学院まで歩いて通える場所にあるその寮は、傍目には少し古ぼけた程度の何の変哲もない住宅である。

「……なんかシヨボイ?」

「「ぶッ?!」」

率直な感想を理は述べるが、この寮に住む当の本人である彼女達はその言葉を聞いて、大きく咽込む。

「い、いや……何でいきなりシヨボイなんて言うんだよ?」

「忍の住む寮だっていうから、そのまま忍者屋敷みたいなのを想像してた」

「……この都会のど真ん中に、そんなモノが有るものか」

葛城と柳生が、そんな風にボケる理にツッコむ。

一応、見た目は古くとも、忍の住む寮なのでセキュリティはしっかりとっているし、侵入者用のトラップも少なからずあるのだが。

其処を丁寧の説明すると、理は改めて寮を見やる。その眼に僅かながらの羨望が混じったことに、彼女達は苦笑した。やはり彼も男の子なのか、そういった仕掛けには心惹かれるのだろう。

そして、飛鳥が玄関の前に立って、理の方に振り向く。

「あはは……じゃあ、改めて——ようこそ! ここが私たち半蔵学院忍学科の寮で、結城くんの新しい家でもあるね」

花開くような笑顔を魅せて、彼女は宣言する。

「今後とも宜しく! 結城くんっ♪」



先日的大型シャドウの襲撃で自室を破壊された——自らの手で破壊したとも言おう——理は、新たな住居として忍学科の寮の一室を提供されていた。

そもそも、半蔵学院側の本来の男子寮から彼が引き払われたのも、シャドウの襲撃そのものが原因だ。

半蔵学院の上層部は勿論、忍側の手のものであり、シャドウ襲撃の件も伝えられている。いつまたシャドウの襲撃に会うかもわからない彼を、普通の人間が住む寮に置いておくことなど出来ないからだ。

もしもあの時、マジシャンが彼になりふり構わず男子寮を破壊する行動を取っていたならば——

故に、理は被害を最小限にかつ、迅速にシャドウを討伐できる手段を取った。それこそが、自室を犠牲に使ったトラップ戦法であったのだった。

結果として、男子寮の被害状況は屋上と理の部屋の全壊のみであり、あのような化け物が襲撃してきたのにかかわらず最小限で済んだと言えるよう。

居住の提供は、彼にとっても渡りに船の話である。居住の問題となつては、流石の理もどうでもいいと割り切ることなど出来ない。男子寮を追い出された以上、彼とて金のかかるホテル暮らしや野宿は御免だからだ。

そして、街中に悪戯に被害を増やすような真似が許される筈も無いと、忍学科側は判断する。

そう、言わずもがな、これには忍学科の思惑や監視、報酬を含めた、歯に衣着せずに言えば下心満載の誘引でもあるのだ。直接的な原因が理に無いとはいえ、不憫な話である。

昨日の病室で、それらの説明——下心云々を除いて——をした斑鳩へ二つ返事で了承し、彼は今ここに至るのだった。

「では、此処がキミの部屋となる。一通りの物資は揃えているが、もし必要な物が有れば言ってくれ、全て此方で手配しよう」

「ええ、ありがとうございます」

新たな自室へと霧夜に案内された理は、一歩中に入って全体を見回

す。忍という者が利用する寮である為か、内装は襖に畳の純和室だ。半蔵学院男子寮ではフローリングにベッドの洋室で有った為、もしかしたらその方が良かっただろうかと霧夜は危惧するが、その心配は無いと理は言う。

数多くの転校を繰り返し、様々な寮室を渡り歩いた彼が、この程度で文句を言う筈が無かったのだ。寧ろ、この部屋は中でも中々に上位らしい。

「外観が古かったので、内装はちよつと心配でしたけどね」とのたまひ、霧夜を苦笑させる一幕すらあつた。

入居前とはいえ、一応は男の部屋である為、飛鳥達は部屋への案内を遠慮して辞退していた。よもや、婦女子に見せられない様なシロモノを持ち込んでいるなどと思われたのかと理は邪推する。

尤も、彼の持ち込んだ手荷物は殆ど無い。いつそ体一つと言ってもいい程だ。元々彼は私物が少なく、その僅かな私物すらもマジシャンの巨体に押し潰されてしまっていた。

部屋に残っていた家具や教材は勿論、衣服や所持金も一緒くたにペシャンコになり、シャドウを倒しても、全てを失って明日からどうするつもりだったというのだろう。

彼は言う、「……………忘れてた」と。

……後に、もしやと思つた斑鳩が理の財産を調べさせた際、唯一残されたであろう彼の貯金残高さえも、人間一人が生きていくには余りにも心許無い金額だったという。

予想以上の貧乏暮らしをしていた彼に、飛鳥達は涙を流して同情するのだった。

「結城くんっ！ 私が毎日ご飯作ってあげるからー！」

「上に掛け合つて、報酬金を増やして貰うようにします……………」

「メシ食いに行こうぜ、メシ！ 美味しいラーメン屋を知ってるんだ、奢ってやるぜー！」

「…………スルメ食うか？」

「ひばりが持つてるパソコンやゲーム、結城さんに上げるよっ！ 一緒にあそぼっ♪」

理が忍学科の寮に入居して、最初に難儀することになるのがこれらのプレゼント攻勢になることを、この時点の彼はまだ知る由もない。「それと、一つキミに言っておかなければならないことが有る」「……何でしょう？」

部屋の中へと入り、男二人きりとなった室内で、霧夜は理に向けて話しかける。彼は深刻そうな表情で目を伏せ、悲壮な雰囲気を漂わせていた。

そして、一呼吸置いた霧夜は理へと、深く深く頭を上げるのだった。「本当に申し訳ない。我々は今回の件で、この程度のことではしか君のサポートが出来ないことを許して欲しい」

「……別に、構いません。仕方のないことだと、解っていますから」理はこの展開に、ある程度予想をつけていた。というよりも、病室で既に斑鳩からこの件は報告され済みである。

——霧夜は、そして善忍陣営の忍は、その殆どが影時間への適性を持っていないという事を。

正確には、善忍の中で二十代頃からの年齢の者は、全員が適性を持っていなかったらしい。

大型シャドウ『魔術師』マジシャンとの出現と同時に全世界へと展開された影時間において、彼らは非適性者の証である『象徴化』を起こしていたのだ。

言うまでも無くこれは、由々しき事態である。当初彼らは、理への支援として優秀な忍を派遣させるつもりでいたからだ。そして、その殆どが長い経験を重ねた者、つまり成人した年齢であったのだ。

だがしかし、その彼らでさえ影結界・影時間の中で象徴化してしまう。思えば、今まで忍側がシャドウの存在を感知できなかったのも、この象徴化にあるのだろう。象徴化した者にとって、影結界・影時間の世界は無いも同然であるからだ。

逆に、経験の浅い若い忍では、シャドウの餌食となる。実際に、先日の影時間の中でシャドウに襲われた忍学生——半蔵学院以外に所属する善忍だ——が少なからず居た。未だに影人間になったままの者も居るらしい。

故に、高い実力を持ち尚且つ若い忍は、その実力不足の忍学生の護衛へと回されるという。既に影時間が毎夜訪れる訳ではないのは把握済みであるが、それこそ逆に影時間がいつ訪れるのか分からないという事である為、戦力を分散させる訳にはいかないのである。

つまり理は、今いる戦力——自身を含め、飛鳥、斑鳩、葛城、柳生、雲雀の計六名——のみで、このシャドウ事件の解決を任せられたのだった。

「……情けないことだ。君たちの様な若者を助けるのが、大人の役目だというのに、な」

霧夜は本当に苦しそうにその言葉を口にする。彼にとってみれば、一昨日のマジシャンと生徒達との戦闘は、自分が一切知らないままに行われ、終わっていたからだ。

彼は立場上その戦闘に、一切係わることが出来なかったのを後悔している。尤も、この時点では大型シャドウと影時間の存在が認知されていないので、仕方のないことなのだが。

だが最早、霧夜はシャドウとの戦闘に立場上はおろか物理的にすら干渉できないのだ。それは責任感が強く、生徒を愛する彼にとって、身を裂かんばかりの傷心である。

今の霧夜に出来るのは、こうして理に頭を下げて、誠心誠意彼への謝罪を送ることであった。だが理は、そんな霧夜の謝罪を受けると溜息を一つ吐き、彼へと向けて言葉をかける。

「……顔を上げてください、霧夜先生。そんな風に頭を下げられても、正直迷惑です」

「結城くん……、だが！」

「俺達が信じられませんか？」

「——っ！」

「……いや、付き合いの浅い俺を信じてくれと言っても無駄ですよ。ならせめて、霧夜先生の生徒は——、飛鳥達の事は信じてあげて下さい」

理のその言葉に、霧夜は頭を殴られた様な衝撃を受ける。

彼の言う通り、霧夜は結城理を、自分の生徒達の事を、信じ切れて

いなかったのだろう。だからこそ、こんなにも不安を抱いたのだ。

シャドウという未知の存在を相手にする未熟な生徒達。それに干渉できない自分。歯痒い思いは、実を結ぶことは無い。

「俺は、彼女達を死なせない様に、全力を尽くしますから」

淡々とした口調のまま、理は自身の覚悟を口にする。霧夜は其処で漸く頭を上げ、理へと視線を合わせた。彼は相も変わらずの無表情であるが、その眼には確かな覚悟の表れが有った。

「……一つ、いいだろうか？」

霧夜は理へ問い掛ける。彼の覚悟は確かめられた。ならばあと一つだけ、訊ねなければならぬことが有る。

「キミは何故、そこまでして我々を——彼女達を、助けてくれるのだ？」

「……それは——」

ほんの数日前まで、結城理という人間は自身を含めた全ての人間に無関心だという印象を、霧夜は抱いていた。

理自身、それを否定する気は無い。寧ろ、自身の命を軽視する価値観は、未だに残ったままだ。だがそれでも、理が彼女達の為に命を賭けると断じれるのは——

「……………あれ、何でだ？」

「は？」

思わず素に戻った口調の理のその言葉に、霧夜は思いつきり脱力する。胡乱な眼で見詰めだした霧夜に構うことなく、理はあーでもないこーでもない、なんだかんだと自問自答を繰り返していた。

駄目だこりゃ、と霧夜は天を仰ぐ。いつそ、惚れた腫れたという話であるならば、あっさり納得できただろう。

念のために其処を理に確認すると、「それは無いですね。俺、そういうのまだよく分かりませんから」とバツサリである。霧夜は、それを飛鳥達には絶対に言うなよと念押しするのだった。

実際には、飛鳥達に感じ始めた仲間意識を理が自覚していないというのが真相なのだ。

そうして霧夜は、嗚呼と納得する。要するに結城理は、未だ子供で

あるのだ、と。

その育ち故に必要な以上に大人にならざるを得なかった理は、友人を得て、仲間を得て、閉ざされていた筈のその心は、本当の意味での成長を体験しているのだろう。

成熟した精神と身体に、未熟なままでいた心。そのギャップが生み出したのが、今眼の前で混乱している少年であるのだ。

「くく……、まあいいさ。キミの本心は、よく分かった」

「……そうですか？」

「オレ達の協力者が、結城くん、キミで良かったよ」

「はあ……、ありがとうございます？」

未だ自分自身で答えを見つけられずにいる理に、霧夜は最高の賛辞を贈る。今は届かずとも、きつとこの少年は、その答えを掴むはずだ。

果たして理は、その答えをどうやって見つけるのだろうか？ 自分自身で掴むのか、飛鳥達と共に見つけるのか、はたまた別の道か――

――霧夜は今、結城理の行く末を見届けたいと感じていた。

いくらペルソナという強力な能力を持つとうとも、忍学生と同じく理もまた子供。霧夜達、大人達が愛で、庇護し、導くべき存在なのだ。

そして、自身に出来るのは――

「彼女達を宜しく頼むぞ、結城くん」

「……ええ。こちらこそ、宜しく願います」

結城理という少年を信じて、生徒達を託す事だ――



「ところで結城くん、キミは飛鳥達の中で、誰が一番好みなんだ？」

「……はい？」

「いや、なに。仕方の無いこととはいえ、これからキミは女所帯の中で生活することになるんだ。そういった浮ついた話も、無くは無いだろうと思うてな」

「……ハニートラップ推進？」

「いや、そういう意味ではないのだが……」

「今さつき、まだよく分からないと仰ったはずですが……」

「今は『まだ』だろう？　そうでなくとも、容姿や性格的に好みの娘が居なくはないのか？」

「そういう意味なら……、全員とも魅力的だと思えますけど……」

「チツ、つまらん」

「……意外と口悪いですね」

「おっと、これは失敬。だがオレが求めている答えは、そんな煙に巻くような一般論ではないのだよ。大事な生徒達を任せる男だ。こういうことは速めにハッキリさせておかなければ——」

「（お父さん？　いや、オヤジか……）」

閑話Ⅰ 心の力 side：半蔵学院

さて、そうしてこうして忍学科の寮に移り住む事となった結城理であるが、当然の如くその生活模様は激変することとなる。

今までは男の一人暮らしだった者が、いきなり5人の少女が住む寮内に放り込まれたのだから当たり前だ。

そして、一つ屋根の下で男と女が生活する以上、多少のトラブルは避けられないものである。

それでは、とある日の理と彼女達との生活ぶりを、ご覧頂こう――



～飛鳥の場合～

「じゃあ結城くんっ、私と一緒に特訓しよう！」

「いきなり何、飛鳥？」

あくる日、自室で休息していた理は、突如として部屋に乗り込んできた飛鳥にそう宣言される。

イヤホンで音楽を聴きつつくつろいでいるという、彼にとつてはそれなりに至福のひと時を邪魔をされたのだが、相手が飛鳥ならそれも許容範囲内だ。

無論それはある程度といった所までであり、少なくともこれがアポイントを取らずにの提案であるならば、その時点で理はにべも無く拒否しただろう。

しかし――

「前に約束したでしょ、結城くんは武器の扱い方を教えてあげるって！」

「……ああ、マジシャンの時か」

記憶を探り、飛鳥のその提案が確かに以前交わしたものであると思いつく。確かあれは、マジシャンとの戦闘中、彼女の武器を借り受けた時のモノである筈だ。

尤も、理はその約束に「はい」か「いいえ」等と言う前に、斑鳩達の「イチヤつくな!」という罵倒により中断させられた筈でもあるが。とはいえ、現状でほぼ唯一シャドウを倒すことの出来る理が成長することに、忍学科に居る全員が異論は無い。理は知らないが、葛城もまた彼に稽古をつけることを密かに企んでいたりするのだ。

理自身もまた、特訓することに異存は無い。並のシャドウ相手ならば兎も角、忍とでは絶対的なまでに戦力差が有る。ペルソナ能力に覚醒したとはいえ、依然彼女たちに挑んだとしても敗北するのに変わりはないのだった。

「それじゃあ訓練場に行つて、稽古をつけてあげるね♪ うーん、まずは何からすればいいかな?」

「……前みたいに、竹刀で打ち合うだけでいいんじゃない?」

「それもいいけど、そもそも私達と結城くんとじゃ身体能力が違いうぎるんだよね……。それなら、技術の方を鍛えないと。……うん、そうしようっ♪」

「能力的に、俺は後衛向きの筈なんだけど……」

なお、武器の扱い方や基礎スペックの違い、ついでに飛鳥自身の趣味もあるが、理の戦闘技術の拙つたなさも飛鳥に彼との特訓へと走らせた原因の一つである。

飛鳥の『半蔵流剣術』の様に、彼はしっかりとした流派を持たない、我流の剣術であるからだ。

いや、それは剣術と呼ぶべきものではなく、愚直なまでの『戦闘術』とでも言うしかない。広く浅く、武器を選ばず、魔法を駆使し、己の命すらも賭けとして使う、危ういまでの彼の戦い方。

何時果てるとも知れぬその戦い方を、彼女は見過ごす訳にはいかないのだった。

「言つたでしよ? 私は何もしないで、仲間が死ぬのが怖いって」

「……なるほどね。つまりはお節介つてワケ?」

「あはは、手厳しいっ♪」

飛鳥は、本当に屈託なく笑う。理を鍛えるために——死なせない為に、本気で特訓しようと考えている。その朗らかな笑顔は、観てい

て飽きることが無いだろう。

理はその笑顔を見て、胸の内に言い表せれない感情が渦巻く。今の彼には、それを言葉にする術を持たない。だが、それでも――

「……行く?」

「うんっ!」

今はただ、飛鳥と共に、彼女達を守り抜く力を得るとしよう――

その後、訓練場にて、飛鳥に完膚なきまでに叩きのめされた理が居るが、それはご愛嬌である。

↳斑鳩の場合

場所は、半蔵学院忍学科。この日斑鳩は、結城理に関する資料を纏めるために、資料室へと赴いていた。

彼女の目的は、彼に対しての報酬金の増額である。先日彼女が理の所有財産を調べた際、その少なすぎる財産に危機感を覚えた故であった。

今回用いる資料は、これまでの彼女達が受け取った報酬金に関する帳簿であり、それと照らし合わせて彼への適正な――斑鳩は、それにやや色を付ける心算で――報酬金を算出する為だ。

しかし資料室には、意外な先客が居た。

「結城さん?」

「……ああ、斑鳩先輩。失礼しています」

帳簿以外にも、雑多な資料が詰め込まれた忍学科の資料室には件の少年、結城理の姿があった。彼がこの場に居ることは別段不思議ではない。理も忍学科の仲間となった以上、此処の施設は彼にも開放されているからだ。

だが、忍ではない彼が忍の資料室にどうして用事が有るのかは分からない。一応この場には、忍ではない彼には見せられない資料とてあるのだから。

「何故この場に? 此処には結城さんが興味を引く物は無いと思いませんが?」

「それでもないですよ。色々面白いものが有りますから」

「観られて困る様な資料もあるのですが……」

「ちゃんと分別を付けています。霧夜先生にも確認して貰いました」

理はそう言つて、手にしていた資料に視線を落とす。彼が読んでいるのは、忍の歴史書であつた。

戦国の世から続く忍の歴史、その始まりと歩み、そして現代に到り、なお形を残す忍の在り方を記した書。

それは所謂、教科書という奴である。無論入学当初の斑鳩も眼を通した資料であり、確かにその程度ならば見られても構わない物であつた。

「忍に興味がお有りですか？」

「興味というか……。神話とか英雄譚は、俺の好みですから」

ほう、と斑鳩は理の言葉に興味を引かれる。彼女もまた読書を趣味とする者であり、理がどのような本を読むのか気になったのだ。

因みに、彼女は古典から現代小説まで雑多に読むが、その中でも恋愛小説を好むという年頃の少女らしい嗜好を備えている。

対して理は、ギリシヤ、日本、インド、エジプト、ケルト、北欧、ローマ、クトゥルフ等、様々な神話を好む。

彼のペルソナ能力が『オルフェウス』というギリシヤ神話の吟遊詩人の姿を取つたのも、もしかしたらその嗜好が原因かもしれないのだつた。

そんな最中、理は歴史書の中のある記述に眼を惹いた。

「……鳳凰財閥？」

「ッ!？」

その財閥の名は理も良く知っている。この日本の経済を牛耳るとまで評される程に巨大な財閥の名であり、同時に目の前に居る彼女、斑鳩の生家である————筈だ。

歴史書の記述によれば、鳳凰財閥は古くから続く忍の名門であり、これまでも多くの優秀な忍を輩出してきたのだという。

それは勿論、この忍学科でクラス委員長を務める斑鳩にも当てはまるのだが——、理が鳳凰財閥の名を読んだ際、ほんの僅かに身を

強張らせたのを彼は見逃していない。

単純な話だ。何某かの不和があるのだろうと、理は推察する。彼は、彼自身がそうであるように、家族関連での確執を悟る能力には長けているのだった。

「……これまでにしますか」

ぱたり、と本を閉じる。理は斑鳩のそんな表情など見たくないからだ。斑鳩もまた気を使われたのを察し、表情を崩し、何も言うことは無かった。

が、ハツキリ言つて理は下手を打った。資料室に気まずい沈黙が流れる。理は沈黙を苦としない性格なのだが、この時ばかりは勝手が違った。

ぶつちやければ、この『気まずい沈黙』という空気を初体験し、どうすればいいんだと思案を巡らせていた。友人知人に対するコミュニケーション不足による弊害である。

相手が見ず知らずの他人ならばいざ知らず、斑鳩という人生で初めての仲間故に下手な真似など出来ない。どう対処すればいいのか、コミュニケーションの理には経験が不足——否、無いのだ。

この空気の中、沈黙を破つたのは斑鳩からである。その気遣いが理には物凄く有り難かった。

「……私は資料室に帳簿を取りに来たのですが、量が多くて……。手伝つてくれますか?」

「……了解」

理がこの後、もつと他人と話せるようになろうと誓つたのは言うまでもない。

↳葛城の場合

「おつしやーっ! 此処だ此処! 此処がアタイオススめのラーメン屋だ! 奢つてやるから腹一杯——」

「すいません帰っていいですか」

時刻は昼。今日は学院が休みの日であり、昼食は自炊しようと思つていた理は、突如部屋に突入してきた葛城に釣られるがまま、東

京の街を闊歩する。

その強引さに、そして約束を違えるのに気が引け、拒否も出来ぬままに理は葛城の後を付いていく。

そうして行き着いた先が、葛城オススメのラーメン屋だと言うが、その悪名高き名を理は知っていた。

「遠慮するなって、不満でも有るってのか？」

「このラーメン屋、量が多いことで有名でしょう。俺は小食なんです」
看板の名は『ラーメン〇朗』。言わずと知れた、大盛りで有名なラーメン店である。理も名前や大盛りに関しては何も知っていたものの、実際に足を運んだことは無い。というか、貧乏故に外食の機会自体があまりなかったりする。

理は別にラーメン自体が嫌いなのではなく、一般的な日本人と同じく好物に分類されてはいる。そして彼は宣言通り小食であり、もつと言えば量より質、味を追求するタイプである。

彼がラーメンを食べる場合、大抵はインスタント麺を自作アレンジした物に収まっているのだ。尤も、理は麺類ならばラーメンよりも Pasta 派だったりするのだが。

「そんなこと言うなよなー。お前メシ食わねえから、そんな細かいんじゃないのか？」

「……そりゃあ、葛城先輩に比べたら細いでしょうけど」

理はそう言って、目の前の少女を観察する。半蔵学院忍学科三年生『葛城』。長い金髪と、惜し気もなく晒し出されるプロポーシヨンが印象的な、活発——否、オヤジ趣味な少女。

18歳という理より一つ年上にしてそのスタイルは、同年代の少女より明らかに豊満である。下手をすれば、男性である理よりもだ。尤もこれは、理が細すぎるのだろうか。

そんなセクハラ紛いな言葉を気にする風でも無く、葛城は理を引きずって店内に連れ込もうとする。

「はっはっは！　そう、アタイのこのおっぱいの中には夢と希望とラーメンが詰まってるんだ！　悔しかったら結城も食べええ！」

「別に悔しいとかじゃなくて——ぐえっ」

……首根っこを掴んで、だが。忍である葛城の筋力には敵わず、理は成す術もなく店内に引き摺り込まれるのだった。

そして――

「……おおう」

葛城が勝手に注文し、目の前に鎮座するのは、まさに山。もやし、もやし、キャベツ、もやし、ネギ、もやし、ニンニク、e t c――

野菜ラーメンと言えば聞こえは良いかもしれないが、これはもはや『野菜炒めのラーメン和え』というべきではないだろうか。

そんな馬鹿な事を考えてしまう程に、理は○郎ラーメンに圧倒されてしまっていた。以前彼が買い物中に遭遇した、もやしを購入していた少女が見たら歓喜で卒倒しそうである。

彼女は、僅かに売れ残っていたもやしを理が譲ってあげた際、狂喜乱舞していた程にもやし好きであったのだから。

そして、これでもまだトツピングとしては少量であり、隣に座っている葛城のラーメンに至っては更に大盛りだ。それに凄まじい勢いでがつついている彼女に、理はある種の尊崇の念を抱いていた。

無論、その豪快な食べつぷりと、悲しくなるほどの女子力の投げ捨てつぷりにである。流石に女の子が昼からその量のニンニクはどうなのだろう？

理に出来るのは、もう「どうでもいい」と思考を放棄し、眼前の山ラーメンに取り掛かることだけであった。

「……それにしても、人生最初のデートがこんなのもって、果たしてどうなんでしようね？」

「ぶぼっ!」

ふと湧いた疑問を口に出すと、葛城が思いつきり咽込む。

よくよく思えば、女子と休日にご飯に出かけるのはどう考えても『デート』に分類されるのではないだろうか。そう思っただけに疑問だったのだが、予想以上に葛城にダメージのある話題だったらしい。

げほげほと気管支からスープやもやしを追い出し、漸く呼吸を落ち着かせた葛城は、真っ赤な顔で理に詰め寄った。

「ででで、デートかよっ?! これデートなのかよッ?! なあオイ結城っ!」

「……少なくとも、休日に女の子と食事に出るなんて、俺は初めての経験ですけど?」

「~~~~っ?! (そういえばアタイも同年代の男とメシ食うのなんて初めてだッ?!)」

葛城は口をぱくぱくと開閉を繰り返し、完全にフリーズしてしまっていた。そんな彼女を横目に、理はどうでもいいとばかりにラーメンを食べ始めた。鬼畜である。

だが、流石に野菜の量が多く、どれだけ食べても減ったような気がしない。

このラーメンは、全てを受け入れる『寛容さ』、正しくペース配分する『知識』、肉の群れに突っ込む『勇気』、食べ続ける『根気』を兼ね備えないと完食できないのではないか。

なお、理はそれらのステータスは兼ね備えてはいたが、根本的に胃の容量が足りなかった。数十分後、込み上げてくるモノを堪えつつ、かなりの量を残して理はギブアップしていた。

「まったく、結城はだらしないなー?」

「……うぶっ」

けらけらと可笑しそうに笑う葛城に、理は反論することが出来ない。喉元までせり上がったラーメンが発声を阻害しているのだ。

彼女は先の動揺から既に立ち直っており、元気にラーメンを啜っている。その光景に理は世の中の不条理を感じた。

「残すくらいなら、コレ貰うぜ?」

「……まだ食う気ですか。ご自由にどうぞ……」

「へっへー、じゃあ頂き——」

「……間接キス?」

「ブッ?!」

葛城、本日二回目の噴出。もはや、色気もへったくれもあったモノではない。

そんなこんなで色々悶着はあったものの、こうして理と葛城の初

デート（？）は終わりを迎えるのだった。

……寮へと帰還した二人が、メンバー全員に「くさい」と言われて敬遠されるのは、この三十分後の事である。

↳ 柳生の場合↳

「……」

「……」

もそもそ、もそもそ、と互いに無言のまま、スルメを咀嚼する音だけが流れている。

場所は野外訓練場の一角であり、二人は日当りの良い地面に座っていた。

理と柳生、この二人は元より沈黙という物を苦にしない、口数の少ない性格である。

傍目には仲良く日向ぼっこ見えなくもないが、二人の間に流れる空気はそんな甘いものではない。

「……」

「……」

ちらり、と理は隣に座る少女を見やる。

そもそもこの状況とて、散歩していた理が唐突に柳生に呼ばれ、何も言わぬままに彼女の隣に座ったという経緯だ。

珍しいことも有るものだ、と理は思った。彼の知る限り、柳生という少女は何時も雲雀と共に行動していた筈であった。

とはいえ、出会ってまだ一月と経たない彼女らの行動範囲を理は知らないし、そもそも二人の関係だって知り得ていないのだが。

「……不思議か？」

不意に、柳生は口を開く。理の疑問に答えるようなその言葉は、何やら非難めいた色が混じっている。

「オレとて雲雀から離れるのは不本意だが、お前とは一度話しておきたかったのだな。こうして場を設けた訳だ」

「……そうか。なら、要件は？」

柳生はまず咳払いを一つし、理の眼をしっかりと見据えて言い放つ

た。

「言いたいことは二つ。まず一つ、オレはまだお前を信用していない」

「まあ、妥当だね。出会ってそんなに日が経ってないし」

「……」

「ん、どうしたの?」

「……いや、信用されていないことを肯定されるとは思わなかった」

柳生は毒気を抜かれた様に、理に向けていた僅かばかりの敵意を霧散させる。

ここで彼女が理を信用していないといったのは冗談交じりだ。柳生の真意は、彼がその言葉を聞いてどのようなアクションを起こすのか確認する事だった。

先日の大型シャドウとの戦いを通じて、柳生も理に対する信用はある程度得ている。尤も、後述の理由によってこの忍学科内ではやや低めだが。

だが、その言葉を臆面もなく肯定されるのは、彼女にとって予想外にも程があつた。

「『まだ』って言ってくれるあたり、ゼロって訳じゃないんだろうけど」等と全く気にした風でも無い理の態度に、やや罪悪感さえ抱くほどである。

閲覧した彼の資料から察するに、恐らくこの少年は、このような敵意や害意を向けられているのに慣れてしまっているのだろうと、柳生は判断した。

「お前は、飛鳥や葛城とは仲良くできていると思つたが……?」

「あれは飛鳥や葛城先輩が特別なだけだよ。俺は、自分から話すのは苦手だから。……柳生もだろうか?」

「……まあな」

自分達のコミュ能力不足を再確認し、重苦しい空気が流れ始める。最近の理には、失言属性が付与されている気がしないでもない。

気を取り直し、柳生は改めて理に向き直る。彼女の二つ目の要件、実はこちらの方が本題だったりする。

「二つ目は——、雲雀に手を出すということだっ!」

「……………は？」

人差し指を此方に突き刺し、柳生は大声で宣言する。だが、理には一瞬その内容が理解できなかった。或いは、理解を拒否したというベキか。

取り敢えず理は、柳生のその言葉の文面を受け入れ、彼女が何を言いたいのかを分析し、答えを出す。

「……………雲雀を信用するな、ってこと？」

「何故そうなる?!」

やはりコミュニケーション不足の弊害か、この手の話題に関しては理はズレた答えを出してしまう。

歪曲的にでも雲雀を貶された為か、柳生は怒気を含ませながら雲雀に対しての己の感情を話しだしたのだった。

曰く、一生懸命な強さを持っている。

曰く、お菓子が好きなのところが可愛い。

曰く、オレは雲雀が好きだ！

ひとしきり語り通した後で、柳生は正気に戻り——否、彼女は正気のままに雲雀への愛を語っていた。

理もその言葉を聞いていたが、結局は最後の言葉に収束される。要は、雲雀に悪い虫が付かない様になっているのだ。

「……………悪い虫扱いされるのはどうでもいいけど、この手の話って結局は本人次第じゃないの?」

「なんだと!? 雲雀が貴様などに惚れるものかぁーっ!!!」

そして、剣呑な雰囲気を出し始めた柳生を理はなんとか落ち着かせて、この益体の無い話は終了する。

柳生もこの頃になれば流石にバツの悪い顔をして、先程までの痴態を反省していたのだった。

「すまん……………、ちよつと熱くなり過ぎた……………」

「別にいいよ。柳生がそれだけ雲雀を想っている、ってことだからね」

「そ、そうか! やはりそう思うか! ははっ、すまなかったな結城、

これは詫びと礼変わりだ、取っっておいてくれ!」

そうして柳生は、「雲雀成分が切れた!」等とのたまって、足早に学

院の方へと駆けていくのだった。

理は手渡されたそれを、どうしたものかといった思いで見つめるところとなっている。

「……スルメか」

柳生の好物であるそれを手渡されたという事は、ある程度の信頼を築けたという事なのだろう……か？

釈然としないままに、理はスルメを啜えてみる。彼女が好物とするだけあって、確かに美味しいのだが――

「二人で食べると、味気ないな……」

次に会うときはもつと和やかな空気で、こうしてスルメを食べ合うような会合になりたいと、理は切に願うのだった。

　　～雲雀の場合～

「やったーっ♪ これで雲雀が十連勝ーっ♪」

「……また負けた」

理と雲雀、二人は今、寮の雲雀の部屋でゲームで遊んでいる。経緯としては、雲雀は以前の約束を果たすために、理を自分の部屋に連れ込んだのだった。

時刻はとうに太陽が沈む頃であり、夜分に女が男を自分の部屋に連れ込むという行為など、見る人が見れば誤解しかねない。

その筆頭である柳生に釘を刺されたばかりであるというのに、天真爛漫の笑みを浮かべる雲雀を見て、理は仕方ないと溜息を吐き、彼女の部屋に入ることを了承したのだ。無論、打算もあるのだが。

「ほらっ、これが結城さんに渡すパソコンだよっ♪ 大事に使ってねっ♪」

「ああ、ありがとう、雲雀」

「えへへっ♪」

雲雀に手渡されたパソコンはやや旧式のノートパソコンであり、言ってしまうえば彼女のお下がり品である。

とはいえど、実はマジシャンに潰された先代ノートパソコンは、これより性能がさらに二つ三つも落ちてしまう。

元々は数年前、学業用にどうしても必要だった為に四苦八苦して捻出した資金で買ったパソコンだ。だが、それだって当時から見ても型落ち品なのだ。

当時から貧困に喘いでいた理にとっては忌むべき記憶の一つであり、無残に潰れてしまつて清々したという想いがあったりなかったりする。

そんな彼が中古とはいえ新しいパソコンを貰つて喜ぶ姿は、どう見ても玩具を買つてもらつた子供のそれであつたと、後の雲雀は語つた。

「で、こつちが結城さんに上げようと思つたゲームだけど——」

「……ゲーム機持つてないから、そつちはいいよ」

「だよねー……。うんっ、じゃあこれは雲雀が持つてるゲーム機で、一緒にあそぼっ♪」

「はいはい」

そんなこんなで始めたゲーム対決であるが、当然の様にゲームの経験が皆無である理が終始圧倒されている。

二人は格闘ゲームで遊んでいるのだが、理が少しでも気を抜けばコンボを叩きこんでくるあたり、相当このゲームをやり込んでいる様だ。

今もまた、画面の中では理が選んだキャラ——このゲームの主人公で、日本刀を持つ灰髪の高校生——が、雲雀の操るキャラ——高校生アイドルで、ヒロインの一人の様だ——によって一撃必殺技を受けているのであつた。

別段、理は接待プレイを受けないことに不満が有る訳ではない。というより、彼以上に精神面が幼そうな雲雀にそこまで期待していない。こうして誰かとゲームで遊ぶという初めての経験を、理はただ楽しんでる。

そして、好きこそ物の上手なれ、という諺も有り、少し経てば持ち前の記憶力や学習能力、応用力を以てこのゲームの操作方法を熟知し、雲雀とも戦えるようになる。

もしかしたら、こういうゲームは彼女達とのコミュニケーションだ

けではなく、戦闘における反射神経や判断力も鍛えられるのかもしれないと理は思った。

しばらくすれば、理は漸く雲雀から勝利をもぎ取ることが出来た。理は勝利の快感を得て無表情でも満足気であり、雲雀もまた、そんな彼を称えるのだった。

「……じゃ俺は帰るよ。パソコンとかゲームとか、いろいろ助かった。また改めてお礼をするね」

「うんっ♪ また遊ぼうねっ♪」

流石に遊び過ぎて遅い時間になり、理は帰宅することにする。雲雀はそう言って手をひらひらと振り、また遊ぶことを約束するのだった。

何と言うか彼女は、年下故か小動物や妹的な雰囲気を持っており、庇護欲を掻き立てられるのだと理は感じた。これでは、柳生が溺愛するものなるのもむべなるかな。

そう思えば、理は自然と雲雀に向けて手を伸ばしているのだった。

「……ん」

「ひゃっ。……んうーっ♪」

わしゃわしゃと、理は雲雀の頭を撫でる。突然の事に雲雀も驚いたようだが、すぐさま目を細めて、撫でられる感触を心地よく思っている様だ。

その様子を見て、彼は犬や猫——いや、真っ先に思い浮かべたのは兎である。何故だか、そんな印象を感じた。

流石に寂しいと死んでしまうという訳ではないだろうが——そもそもそれは俗説である——、これからはなるべく雲雀の相手をしてあげようと理は思った。

そうして手を離し、名残惜しそうにする雲雀に後ろ髪を引かれつつ背を向け、理は自室へと帰っていく。

……その後、我に返り、撫でられていた箇所を触ったまま顔を真っ赤にしていた雲雀が居たことを、理が知る由もなかった。

そんな理も今は自室に籠り、新しいパソコンを立ち上げている。単に場所を移したただけであるので、面倒な設定など必要ないのが有り難

かった。

取り敢えず適当なサイトを巡回し、学業に必要なサイトをブックマークしつつ、自分用のパソコンとして設定していく。

なお、元雲雀のパソコンである為、彼女のものと思われるブックマークやデータも存在したが、理はそちらには手を付けていない。何らかの拍子で、これらが必要になるかもしれないからだ。というか雲雀よ、これは普通消しておくべきではないだろうか？

そしてその中で、理が眼を惹いたものが有る。

『『デビルズバスターオンライン』？ ……取り敢えず起動してみるか』

おそらく、雲雀がダウンロードしていたオンラインゲームであるのだろう。

理は好奇心から起動してみたが、どうやら雲雀はこのゲームをあまりプレイしていなかったようだ。彼女の趣味はTVゲームである為、PCゲームには左程食指が動かなかったのだろうか。

その為新規でスタートし、適当に主人公の設定を決めると——名前は何となく『N島』とした——、早速オンラインでゲームを進めようとする。だが——

「人が居ないな……。過疎って言うんだっけ？」

ネットで得た知識から察するに、恐らくこのゲームは既に衰退し、プレイ人数が少なくなっているのだろう。

ちらほらと見かける僅かな人も高レベルプレイヤーばかりであり、残っているのはファンか廃人のみの様であった。無論、理と同じ初期プレイヤーは一人だっ居ない。

「……まあ取り敢えず、フレンド申請を試みよう」

N島：初めまして。今日からプレイし始めた初心者です。宜しければ友達になりましょうぐ（○、▽、○）ノ

眼についた人たちに向け、片っ端からフレンド申請をする理。しかし当然の様に超初心者が相手にされるはずもなく、何故だろうと理は首を傾げる。

理は気付いていない様だが、ネットで検索した顔文字などを使い、

慣れないネットゲームで友達を募集するその姿は物凄く涙ぐましい。雲雀が見ていたら、そろそろ殴つてでも止めていたのではないだろうか。

それでも気にすることなく——正確には気が付けないという——フレンド申請を続けていたら、その中で二つだけ了承の返事があった。

『cute hikky』さんと『仏麗』さんか、……なんかスゴイ人達だったけど」

理はフレンド同士と思われるこの二人と僅かな間チャットをしたのだが、そのエキセントリックな言動は、彼にオンラインゲームの凄まじさを教えることとなった。

そんな風に扱われても、彼にとつてはネットを通じた他者との付き合いという未知の体験だ。これからも続けようと思つているあたり、肝が据わっている。というか、鈍い。

取り敢えず互いのIDを交換して、連絡が取れるようにする。そして、今日はこれまでとし、『デビルズバスターオンライン』を終了するのだった。



理はベッドに身体を横たえ、眼を閉じ、忍察に越してきてから今日までの記憶を反芻する。

彼女達に振り回されたり、単に遊んだり、コミュニケーションに成功や失敗したりといった、彼にとつて何時ぶりであろう、他者との交流。

随分と奇特な人達だ。彼女達も、そして自分も。それでもそれを、理は確かにこう感じている。

「楽しい——つて、ことだろうな……」

久しく忘れていた、『絆』という繋がりをハッキリと感知することが出来る。そしてペルソナ能力は、その『絆』を力とするのを、理は■■■■の記憶より理解していた。

彼はきつと、その力を自身と彼女達の為に使うのを躊躇わないだろう。

忍学科——結城理と彼女達、〃シャドウ討伐隊〃という集まりにして、未だ歩み始めたばかりの『愚者』達。

先の見えぬその道が、奈落へと続くのか完成された世界へと続くのかは、理自身の手に委ねられているのだから——

「……………ふう——」

意識が微睡んでいく。ここしばらくは色々とあり過ぎた。お蔭で深夜のシャドウ討伐にも出掛けられていない。大型シャドウを倒したためか、理の知覚に引つ掛かるシャドウこそ少ないが、それでもゼロではないのだ。

ぼんやりとする頭で、明日こそは討伐に繰り出さなければと思い、しかし睡魔には勝てずに夢の世界へと旅立っていく。

喪失する意識の中で理が最後に思ったことは、明日もまたこのような楽しい日々が続く事への、期待なのだった——

……………だからこそ、理は気付かなかった。この忍寮へと這いよって来る、その悪意に。

「くく……………斑鳩め、待っているよ。飛燕は、俺の物だ——!」

暗がりの中、寮へと忍び込むとする怪しい影。敵意や殺気などに敏感な理ならば、或いはその存在を感知できたかもしれない。

だが如何せん理は疲労しており、今はぐっすりと熟睡している。尤も——

「……………む、これは忍び込むには少し骨だな。まあ、この俺に不可能は——ん? ぬうおおおつ?!」

忍寮に仕掛けられたトラップが発動し、あっという間に怪しい影を撃退してしまう。この寮に潜入するには、悲しいかな明らかに実力が足りていない。

「お、覚えてろよおおおつ!!!」

無様に敗走するその気配に、夜が明けてトラップ類の反応履歴を確認するまで、理はおろか寮内の誰もが気が付かないのだった。

14話 飛燕使いの器

2009年 4月15日 放課後

「ようこそ、忍学科へ!!!」

忍部屋に、クラツカーの音が響き渡る。部屋内には簡素な飾り付けがしてあり、小規模ながらもパーティーの体を成している事が窺える。

忍の少女達に囲まれ、このパーティーの主賓となるのは、結城理であつた――

彼女達はここ数日の彼との交流を通して、気付いたことが有る。それは、理は確かに忍学科に所属することとなつたが、その歓迎会を行つていないという事にだ。

折角彼が忍学科と協力体制を取ることになつたのだから、こうした歓迎会を行いたいと思うのは、彼女達の総意なのであつた。

「放課後にいきなり呼び出されたから、何事かと思つたけど……」

「あはは、びっくりした?」

理は髪に付いたクラツカーのリボンを掃いながら、飛鳥の言葉を反芻する。

考え込むこと数秒にして、理は口を開いた。

「……こういうのは殆ど経験が無いから、よく分からないな」

僅かに愁いを帯びた彼のその言葉は、それでも歓喜の感情が多分に含まれている。

そんな理の様子に、このパーティーを催した飛鳥達は複雑な感慨を抱き、そして絶対に彼を持って成すようにと心に決めた。

理は様々な料理が盛り付けられたテーブルの前に座り、改めて会場を見回す。

一番目立つであろう横断幕は、『結城理歓迎パーティー』を銘打つてある。……『結城理』の文字が上から貼り付けられているのは、この横断幕が使い回しである為だろう。最近他のパーティーでもあつたのだろうか?

食卓に並ぶ料理は太巻きや懷石料理、ラーメンやスルメに、ケーキ

をデザートにするという雑多な寄せ集めだ。和洋折衷と言えは聞こえは良いかもしれないが、恐らくは個々人が好きなものを寄せあつた結果なのだろう。

それでも、これだけの料理や飾り付けを自分の為に用意してくれたという事が理には嬉しかった。これまでの彼の人生で、このような歓迎を受けることが果たしてどれほどあつたというのだろうか――

(……考えなくていい、今は今、昔は昔……だ)

頭を振ってそんな後ろ向きな考えを掃い、目の前の事に意識を移す。彼女達の歓迎を受ける事こそ、今の理に出来る最大の返事であるのだから。

「音頭は任せたぞ、結城！」

「……分かりました。じゃあ、皆さん飲み物を取って」

既に待ちきれなさそうな葛城に急かさされ、理は自分のグラスに飲み物を注ぎ、全員が同じように用意したのを確認する。

それを皆が手に持ったのを見て、静かに宣言した。

「……乾杯」

「「かんぱーい♪」」

互い互いのグラスを打ち合わせる音が響き渡り、息つく間もなく料理に取り掛かり始める。主に、どこぞのセクハラ魔人であるのだが。

そして、相も変わらず彼の顔は無表情のままであるが、その心の内はこの場に居る誰もが理解していたのだった。



2009年 4月15日 夜――

ふう、と理はため息を一つ吐く。

歓迎会も終わり、全員が後片付けする中――主賓である彼は掃除を免除された――で理は夜風に当たりたいと彼女達に伝え、忍部屋の隅の方にある窓際に立ち、一人夜空を見上げていた。

其処に描かれる星は疎^{まば}らだ。曇天によって星々は隠されてしまっている。それはまるで、今の彼の心情を表しているかのようだった。

幸せすぎると怖くなるとはよくいったモノだと、理は思う。この数日間での彼女達との交流を通じて、彼はその心地よさを感じていた。今更、孤独に戻るなど出来ないだろう。得たからこそ、失うことを恐れる。結城理はそれを、あの十年前の日に嫌と言う程思い知らされているのだから。

(もう、失うのは御免だ——)

決意を新たに、理は自身に誓う。彼女達を、絶対に守り通すのだと。きつとこのペルソナ能力は、その為に——

「……ん？」

ふと、視界の端、窓の外にに何か映り込んだ気がする。此処が『表側』の校舎ならば、下校中の生徒などと思っただろう。

しかし、それは考えられないことだ。この忍学科が有る校舎は『表側』の校舎と場所を同じくすると言っても、その存在が露見することが無いよう人払いの結界が張られているという。

それを通り過ぎることが出来るのは、理の様な例外を除けば忍だけなのだ。だが、この半蔵学院に居る忍は飛鳥達5人に霧夜を含めたの6人のみだ。

そして、外部からの客人だとしても、己の感覚に頼ればあの雰囲気は——、『敵意』と呼ばれるそれであったと、理は捉えていた。

(……侵入者、か?)

理は意識を集中させ、垣間見たその気配を探ろうとする。普段はシャドウを探るために使う気配察知のスキル『心眼』だが、相手が人間だとしても敵意や殺気を発しているならば感じ取るのは容易い。

尤も、そもそも相手は理を対象として敵意を放っている訳ではない様子なので精度は落ちるのだが。それでも、何となくといった程度で居場所を把握することは出来た。そしてその場所は——

「……斑鳩先輩、ちよつと」

「結城さん? どうかしましたか?」

「侵入者です。今、この校舎の貴女の部屋に向かっているようですね」「なッ——んっ、そうですか、すぐに行きましょう」

理はこっそりと斑鳩に侵入者の存在を伝える。その侵入者の目的

地が、彼女の部屋の様であったからだ。

斑鳩は僅かに驚愕の表情を見せたが、すぐさま気を引き締めて何時もの凛々しい表情に変わる。その切り替えの早さに、理は舌を巻くほどだ。

「……わたくし達だけで向かいましょう。皆さんに余計な心配をかける必要はありません」

「いいんですか？ 飛鳥達を連れて行かなくても」

「構いません。……それに、私の考えが正しければ、その侵入者は——」

「……分かりました」

理はそれ以上の追及をしなかった。一瞬だけ見せた彼女の苦しそうな表情が、聞くことを躊躇させたのだ。

斑鳩は飛鳥達に向けて「掃除用具が足りないので席を外します」とだけ言い、理を連れて忍部屋から退室する。

勿論彼女の言葉は建前であり、部屋から一步出てすぐさま跳ぶようにして己の部屋に向かう。理も、遅れながらも彼女に追隨するのだ。た。

そして——

「久しぶりだなあ……、妹よ！」

「お兄様……っ」

斑鳩の部屋に居たのは、一人の男性であった。年齢は二十代前半で、身長は理よりもさらに高い。上下とも純白の服装であり、上着は大胆にも前を全開にしてその鍛え抜かれた肉体美を曝け出している。

だが、その眼は酷く険しく、斑鳩を射殺さんばかりに睨みつけており、そして彼の手には、斑鳩の愛刀『飛燕』^{ひえん}が握られていた。それだけで理は、この男、つまり件の侵入者の目的を知った。

「……斑鳩先輩、この人は……」

「……私のお兄様、です」

「義理の、だがなあ……！」

律儀にも男、村雨^{むらさめ}は、斑鳩との関係を白状する。怨嗟の感情が含まれたその言葉は、それだけでも理達に圧力を掛ける——事など無

い。
この村雨という男は、斑鳩と比べて圧倒的に実力が足りていない様であった。

「……飛燕を、どうなさるのです？」

「これは俺のものだ、どうしようも勝手だろう……！」

「違いますっ！ それはわたくしが、お父様とお母様から………っ
！」

「お父様とお母様からの？ よくもまあぬけぬけと……ッ！」

斑鳩は飛燕を取り返そうとして一步踏み出し、しかしその足が止まる。

村雨は憤怒の形相で血が滲まんばかりに歯軋りをしていた。斑鳩のその言葉と同時に、彼女に向ける殺気が増したのだ。流石に、最早無視できないレベルとなっている。

「ああ、俺には飛燕は使いこなせないさ。

だがなあ……、これは我が家に伝わる宝刀なんだ」

「……っ」

「養女であるお前が……っ！ 血の繋がらない『他人』が持つてちやいけないもんなんだよお!!」

斑鳩は目に見えて狼狽していた。顔を伏せ、スカートの裾を握りしめ、村雨の言葉に耐えている。

そこで理も見かねて、斑鳩を庇うように前に立つ。村雨は、この件には全く関係が無い筈の理が間に入ったのが気に入らない様だった。

「なんだ貴様？ これは俺達兄妹の問題だ。邪魔者はすっこんでろ！」

「……俺は斑鳩先輩の後輩だからね。貴方が怒る理由に理解はするけど、彼女に加勢するよ」

「っ、貴様に何が解る!?!」

そんな理の態度に激昂した村雨は言う。彼は鳳凰財閥という忍の名門に生まれながらも、忍の才を持たなかった為、両親は斑鳩を養女として迎えたのだと。

そしてその鳳凰財閥を継ぐ証こそが、彼女の愛刀・飛燕であり、今

村雨の手に握られているそれだ。

「飛燕は本当なら俺が継承する筈だった！ それを……、我が家に入ってきた義妹たにんに奪われる気持ちだが、貴様に理解できるといふのかあ!!!」

「……俺は孤児で、他人の家に入る方だったから、彼女と同じ嫌われる側の人間だ。……だから解る、貴方の怒りが正当だった」

「ならば何故、俺の邪魔をする?!」

理はそこで、ちらりと斑鳩の方を一瞥する。斑鳩はその眼に彼の思惑と、これまで見たことの無い感情を捉えた。

斑鳩はここ数日での彼との交流を通じ、その在り方をぼんやりとは理解し始めている。彼は常に無表情であり、決して無感情なわけではないがそれを捉え難い。

だが、今理の眼には、これまで斑鳩が見たこともない程に激情の色が浮かんでいたのだ。そして、彼女はその感情の名称を知っている――

人はそれを、『怒り』と呼ぶ――

「仮とはいえ、義理とはいえ――兄貴なら妹を……、『家族』を、傷つけるな――ッ!」

それこそが、理が村雨に対し怒る理由。彼が既に失ってしまったそれを、掛け替えの無い物である筈のそれを傷付けることを、理が許せる筈が無い。

爆発的な瞬発によって、村雨に肉薄した理は、上段蹴りによって彼を攻撃する。狙うは顎先を蹴飛ばすことによる脳震盪だ。

だが、村雨はそれを読んでいたかのように僅かに身を逸らすだけで回避する。彼は忍の才能こそなかったが、忍となるための鍛錬こそ行っており、身体能力のレベルは理を上回るのだ。

「フン！ 粋がるだけあつてそこそこやるようだが……、その程度の力で俺に楯突く気かあ!」

「ぐッ!」

村雨が理を思い切り蹴飛ばす。咄嗟にガードしたためダメージこそ無いが、それは相手も同じだ。

理自身、怒りのあまり村雨の実力を見誤っていた様である。しかし、今の一撃で大分頭が冷えた。それでも、彼に対して怒りが収まった訳ではないのだが。

「腹立たしい……！ 妹の前に、まずは貴様から始末してやる！」

そう言つて村雨は、手に持った飛燕の刀身を抜き放とうとして――

――その手に、飛燕が無いことに気が付いた。

「なッ?! 何時の間に――」

「結城さんを蹴飛ばした時ですよ、お兄様」

驚愕する村雨の背後には、飛燕を持つ斑鳩の姿があつた。村雨が理を攻撃するとき、僅かに逸れた意識の合間を突き、飛燕を掠め取つたのだ。

これこそが、理が建てた飛燕奪還作戦であつた。そして斑鳩は、理とアイコンタクトを交わしただけでその作戦内容を看破していたのだ。

だが、『眼を口ほどに物を言う』とは有るが、彼女はこの時ばかりはその諺を呪いたい。理を囮にする作戦など、有効だと分かつてはいても忌避感が出る。

いい加減彼は、自分自身を大切にしないその価値観を如何にかして欲しかった。斑鳩がそんな理に対する辟易の表情を浮かべるのも、仕方方の無いことであつた。

「く……、くそおっ！」

飛燕を失つた村雨は、懐から新たな獲物を取り出す。彼が担うそれは、農具の鎌に鎖分銅を取り付けた『鎖鎌』という、その柄から伸びた鎖分銅で相手を捕縛したり、武器を絡め取るなどという使い方をする武器だ。

「俺は小学生の時、鎖鎌大会で町内6位になつたんだよお！」

村雨は威嚇のつもりなのか、鎖分銅を振り回しながらそう宣言する。しかし、その何とも言い難い成績について、理は怒りも忘れてツツコンでしまう。

「……微妙だな」

「んだとゴラァ！」

キレた。彼にとっては誇らしい成績であったのだろう。すぐ後ろに居る斑鳩すらも無視し、理に向けて攻撃を仕掛けてくる。

彼の標的であった斑鳩から意識を逸らさせた形となったが、当の彼女自身は思い切り引き攣った表情を浮かべていた。主に、理に向けてなのだが。

「らあっ！」

「っと」

手に持った鎌で村雨は斬りかかってくる。その速度は十分に早く、鎖鎌という本来隠し武器であるそれを主武装とするあたり、少なくとも修練を積んではいる様だ。

だが、鎖鎌は彼を掠めこそすれど、捉えることは無い。村雨は苛立つてさらに攻勢の手を強め、鞭の様に操られる鎌と分銅の変幻自在の斬撃・打撃によって理を襲った。

対して理は『心眼』によって回避こそ出来はしているのだが、剣や拳ならばいざ知らず、彼は鎖鎌という特異な形状の武器に初めて遭遇し、その動きに翻弄されかけていた。

そして例によって武器の持ち合わせが無い為、その鎖鎌を素手で捌かなければならず、打って出ることが出来ない状況だ。

(……もどかしいっ！)

つまりは両者共に、決定打に欠けているのだった。凶らずも、理と村雨の心中が一致した瞬間である。

だが同時に二人は、知らず知らずのうちにこの状況に高揚感の様なものを覚え始めていた。お互いに、実力が拮抗した者との戦いが初めての経験であったからだ。

忍の世界に入って日が浅い理と、才能の無い村雨。共に強者に蹂躪される側であった二人は今、自分達の全力を以て、目の前の敵と相対出来ていた。

無論、理はペルソナ能力を使えば苦もせず村雨を倒せただろう。だが理は、以前の葛城との模擬線と同様、その能力を封印している。

そもそもペルソナ能力は、人間相手に使うには強力過ぎる異能だ。彼が使う中で最も弱い部類の《^ア火炎魔法^キ》ですら、人間一人殺すには

十分なのだから。

そして、理は村雨に怒りを覚えていると言つても、流石にそれは殺意に発展するほどではない。何より、斑鳩の目の前で義兄かぞくを殺す等、あつてはならないのだ。

「だあッ！」

二人の蹴りが交錯する。打ち合わされた脚部が轟音を鳴らし、両者の力が一瞬だけ拮抗する。

理はすぐさま不利を感じ、跳び後退ろうとするが——、それは叶わなかった。

「っ?!」

「ははっ、捕まえたぞおー！」

理の足に絡みついていたのは、鎖分銅だった。どうやら、理の足が打ち合わされた瞬間、鎖分銅を巻き付けていたらしい。

村雨は嬉々とした表情でその鎖分銅を引き寄せ、理を振り回す。忍の筋力では、理の体重などあつてない様なものだ。その勢いのままに、理は壁に叩き付けられようとして——

「大丈夫ですか?! 結城さん！」

「斑鳩先輩……。ええ、助かりました」

ぽよん、とした感触に受け止められた。壁に叩き付けられる直前、斑鳩が身を挺して理の身を庇つたのだ。

斑鳩は鬼気迫る二人の気迫に押され、彼らの戦闘に介入出来ないでいたが、流石に今の攻撃は危険すぎた為に、こうして理の身体を受け止めるに至った。

「チツ、邪魔を！」

その様子を見た村雨はさらに激昂し、理の足に絡みついた鎖を取り外すと、その後ろで彼を抱える斑鳩に向けて鎖分銅を投げつける。

正確無比に斑鳩の額を指して投げつけられたそれを、彼女は理を抱えている為に防ぐことが出来ない——彼女は、だが。

「——だから、彼女を傷つけるな！」

理は再び怒りに任せ、飛んできたその鎖分銅を左手で咄嗟に掴み取った。だが、村雨はそれを待っていたとばかりに、鎖を理の手に巻

き付ける。どうやら、斑鳩を狙うと見せかけて、理を狙っていたらしい。

村雨は今度こそ逃がさないとばかりに鎖を引き寄せつつ、鎌を構えていた。斑鳩の腕の中から引き離された理は、一直線に村雨に引き寄せられていく。彼女も理を追って駆けるが、間に合わない。

村雨は理を眼前にまで引き寄せると、彼に向けてその命を刈り取る刃を振り下ろす――！

「死ねえっ!!」

そして――

「な――、にいつ?!」

その鎌が理の命を刈り取ることは無かった。眼前にまで接近した理の顔面を貫くようにして振り下ろされた筈の鎌は、彼の左手によって受け止められている。そう、鎖分銅が巻きつけられた左手によって、だ。

それは、素手に鎖を巻き付けただけの即席のガントレットだ。忍は岩を切ったり砕いたりするほどの技量を持つらしく、村雨もその程度の腕前はあるのだろう。だが、流石に斬鉄までは習得していない様であり、理は村雨の斬撃を受け止めることが出来た。

理はそのまま鎌を刃ごと掴むと、反対側の右手を握りしめ、引き絞る。狙うは、未だ硬直したままの、村雨の顔――！

「っ、しま――?!」

「……一度、頭を冷やして来い」

理の拳が振り抜かれる。狙い変わらず村雨の頬を打ち抜き、彼の身体を弾き飛ばす。自慢の鎖鎌も理に掴み取られたまま、彼の身体は宙を舞う。

「がつ！　ぐ……まだ、だっ！」

「いいえ、お兄様」

「!？」

理の傍らには、何時の間にか斑鳩が佇んでいる。そしてその手には、天井から伸びた紐が握られていた。

「――お気をつけて」

村雨に向けて酷く平坦な声で呟くと、その紐を引つ張った。彼はそれが何なのかすぐさま知ることとなる。斑鳩が引つ張った紐は、侵入者撃退用トラップの作動キーであることを。

そして、丁度村雨が弾き飛ばされたその先の床が、ぱっくりと口を開けたではないか。未だ重力に囚われたままの村雨は、その奈落へと身を任せる他ない。

行き着く先は地下水路である為墜落死する事こそないだろうが、その結末に変わりは無いのだ。——村雨の敗北という結末に。

「……くそっ——」

奈落の底へと落ちていく中で、村雨はせめてと最後までの間、理と斑鳩を睨みつけていた。

斑鳩に対する怒りが消えた訳ではない。だが今の彼には、何処か清々しさの様な気分が有る。原因は言わずもがな、その隣に居る少年にあるのだろう。

己の武技の全てを以てして相對し、それでも彼に届くことは無かった。斑鳩の補助が有った為でもあるが、もし一対一の勝負ならば自分は勝てただろうか？

……分からない。技術や身体能力ならば自身の方が上なのは把握できる。だが、それでも彼には底知れぬ何かがあるのを、村雨はハッキリ捉えていた。

(屈辱だ……！)

それは、斑鳩などに抱くものとは全く違う激情だった。

底知れぬ力が気に入らない。此方を見下ろすその双眸が気に入らない。斑鳩の、義妹の親愛を受けるその身が気に入らない！

「くっそおおおおおおおおお——!!!」

村雨は吼える。謳う様に高らかと。奈落の底へと墜ちようとも、その叫びは己の魂を鼓舞させる。

そうだ、今はこの敗北は認めよう。だが次こそは、貴様を打ち負かしてやる——！

身体が自由落下を始める。暗い闇の中へと吸い込まれていく。その最後まで村雨は、理と斑鳩を睨みつけていたのだった。

斑鳩が紐を戻すと、仕掛けが解除されて床の穴も塞がっていく。理は落とし穴に落ちていく村雨の様子を、視線を逸らすことなく最後まで睨みつけていた。

今回、村雨を落とし穴トラップに叩き落すことが出来たのは、斑鳩の協力があったこそだった。理が斑鳩に受け止められた際、そのトラップの存在を耳打ちされていた。

後は如何にかして村雨をトラップに誘い込むかという話だったが、運の良い事にその機会が瞬時に廻り来ることとなった。それが、あの村雨の攻撃だったのである。

何れにせよ、理と村雨、二人の勝敗を分けたのは斑鳩の存在があったからこそだ。彼女が居ない一対一の戦闘では、理が敗北していただろう。理は感謝の念を込めて、彼女に向けて会釈をするのだった。

それでも斑鳩は、その場から一步も動こうとしなかった。その手の中に、飛燕を握りしめたままで。

「……すみません。出しゃばった真似をしました」

「いいえ、こちらこそ、お見苦しいところを……」

「……」

「……」

会話が続かない。以前と同じように、どうにも彼女との会話は続き辛かった。そもそも、斑鳩は未だ理に対して若干の遠慮や忌避というモノが残っているように感じられる。

理由は単純だ。クラス委員である彼女は、もしも理が危険分子であった場合、その責を負う事になるのだから。そう易々と彼を信用できる立場ではないのだ。

それでもこの数日の交流を通じ、彼が信頼の出来る人物だと彼女は確信している。……だが、信頼と信用は別物なのだ。

結城理を信頼したい心と、信用できない心。そのギャップが彼女を苛み、その不安定な心は村雨の襲撃によって悪化していたのだった。

「申し訳ありません、一人にしていただけですか？」

「……ええ。失礼します」

理は軽く頭を下げ、部屋から退室する。今の彼女に必要なのは時間だ。自分がここに居ても、出来ることなど一つもないのだから。

……或いは、飛鳥ならば何とか出来ただろうか？ 理はあのコミュニケーションに溢れる少女の姿を思い浮かべ、無意識的に彼女の姿を探し始めていた。

そのうち忍部屋に戻ってきた——鎖鎌は適当な所で放っておいた——のだが、其処に居たのは飛鳥を除く、葛城、柳生、雲雀の三人だ。「随分遅かったな、どうしたんだ結城？」

「……色々あって。それと飛鳥は？」

「飛鳥なら、今斑鳩の部屋に行っただぞ」

「えつとねっ、斑鳩さんに見せたい物が有るんだって言ってたよ〜っ♪」

どうやら、理と飛鳥は入れ違いになってしまったらしい。だが、飛鳥が斑鳩の下に向かったのなら、それはそれで構わないだろう。

恐らく彼女ならば、斑鳩の固まった心を解きほぐすことが出来る筈だから——

(……だけど、なんだこの違和感は?)

村雨を退け、陰鬱な雰囲気を出していた斑鳩を見てから発した、拭いきれない違和感が胸の中に燻っている。

理は想起しようとする、つい最近、その違和感と同じようなものを感じたことが有った筈だ。一体何処で感じたのだろうか。

違和感はどうどんと大きくなる。心臓すらも押し潰しかねない違和感が胸を圧迫している。

だが、その違和感に答えを出せないままに、時は迎えることになる。
デジャヴ
シャドウの時間『午前零時』を——



斑鳩は部屋に佇んだまま、自問自答を繰り返していた。
果たして、このままでいいものか、と——

彼にはみつともない姿を見られてしまった。葛城や飛鳥にも秘密にしていた、義兄との不和を。鳳凰財閥に縛られた自分を。

いや、正確にはそれらを理に視られたからこそ、今まで目を背けていたそれらを意識せざるを得なくなってしまったのだ。

例えば目と耳を塞いでいても、それらの現実が変わる訳ではない。それでも、この忍学科では斑鳩はただの『斑鳩』であることが出来た。彼女にはそれが心地よかった。

しかし、それももう叶わない。これからはその現実を直視しなければならぬのだ。

鳳凰財閥の証、飛燕。彼女の腕の中にあるその長刀が、酷く重く感じられる。

村雨の言った言葉が頭の中で繰り返される。「他人が持っているはいけないものだ」と。

両親からは『何人たりとも渡すな』と言いつけられてこそいるが、その言葉に果たしてどれほどの意味が有るのか。

村雨の言う通り、どれだけ取り繕うとも斑鳩が鳳凰財閥の血統では無いのは紛れもない事実だ。その証を受け継ぐなど、分不相応もいところであると、彼女は思う。

(そう、この刀は確かに、お兄様／わたくしのものである筈——、……え？ 今わたくしは何を——)

斑鳩は突如として頭に浮かんだその考えに狼狽する。それはまるで、自分ではない『もう一人の自分』が語り掛けたような、そんな思考誘導だった。

その瞬間、背後から凄まじい圧力を感じる。その存在こそが、この思考誘導を行ったのだろうか。

敵だ。危険な存在だ。迎撃しなければ！ 斑鳩は飛燕の柄に手を掛け、振り向きざまに切り払おうとして——、それが叶うことは無く、全身の力が抜けて地面へと倒れ込む。そうして倒れ伏した斑鳩を見下ろす影が有った。

そして、彼女は見たのだ。黄金の双眸を持つ、斑鳩と全く同じ姿をしたヒトガタを——！

「アナタは……、何者なのですか——」

影は嗤う。斑鳩と同じ貌で、彼女では有り得ない嘲笑を浮かべる。

影は謳う。斑鳩と同じ声で、己の存在を示すのだった。

『……我は影、真なる我——』

15話 狂気の境界線

2009年 4月15日 午前零時——

「ッ、影結界!」

時計の針が午前零時を示したその瞬間、理は誰よりも早く影結界、即ちシャドウの存在を感知した。

同じ部屋に居た葛城達がなんだどうしたばかりに理に視線を向けるが、説明する暇すらも煩わしい。何故ならば——

「近すぎる! 場所は、この校舎——」

理がその言葉を言い終える前に、彼らは影結界へと取り込まれる。視界は黒一色に覆われ、粘性を感じるほどにドス黒い闇が全てを包む。

そして、その影の闇は、彼が今まで感じたことが無い程に昏く、冷たく、そして哀しかった。

結城理は識っている。この闇は人の負の心そのもの。凍てつく冷気は誰もが抱え、そして心の奥底に潜ませている夜の帳なのだ。

結城理は知っている。彼はその闇を、ついさっきまで感じていたことを。——その答えは、自然と口から零れていた。

「……斑鳩先輩?」

視界が明ける。闇は晴れる。それでもなお、全身に纏わりつく不快感解消されることはなく、ますます強くなっていた。

そして、彼らの目に初めに飛び込んできたのは、二人の斑鳩であった。

「「……はっ。」」

「ッ、飛鳥っ!」

「う……、結城くん……?」

その光景を観て、葛城、柳生、雲雀の三人は呆けてしまっていたが、理はその傍に飛鳥がへたり込んでいるのを発見する。

すぐさま近寄って助け起こすが、目立った外傷は無く、彼女もまた二人の斑鳩を見て腰を抜かしただけの様であった。

「一体何が……?」

「わ、わかんない……。私、斑鳩さんに見せたい物が有って来たんだけど、部屋には斑鳩さんが二人いて……」

葛城達も漸く正気に戻ると、飛鳥の傍に駆け寄って、改めてもう一人の斑鳩を観察する。

姿形は、殆ど斑鳩と変わりない。ただ違う箇所が有るとすれば、黄金に染まった眼の色と、身に纏うその雰囲気——彼らは、その雰囲気を発する物を識っている。

「——シャドウ！ あれは、斑鳩先輩の影だ……！」

飛鳥達は初め、理が何を言っているのが理解できなかった。彼女達にとってシャドウとは、人類を脅かす異形であり、それを示すかのように醜悪な容姿の化け物であるからだ。

だが、理は——否、飛鳥達も、シャドウが人間から産まれることを知っている筈だ。シャドウが人間を襲撃・捕食することで繁殖する光景を彼女達は忘れた訳ではない。

しかしそれでも、今日の前に居るシャドウ『斑鳩の影』は、その前提条件を容易く覆して見せた。

それは結城理のこれまで十年に及び対峙したシャドウの中にも存在せず、■■■■の記憶の中にも存在しないシャドウだ。

だからこそ、彼らは迂闊に手が出せないでいた。何より彼らは全員、斑鳩の姿をしたモノを攻撃できる気概が無かった。

本物の斑鳩も、『斑鳩の影』も、理達の接近には気付いている様だが、殆ど意に介していない様だった。いや、互いが互いに注目している為に、他に気を向ける余裕が無いというべきか。

それも理達からすれば、斑鳩が『斑鳩の影』に向かって、一方的に突っ掛っているようにも見える。彼女にしてはらしくもなく、酷く焦った様子で、今にも掴みかからんとしていた。

しかし、それが出来ないでいるのは——、彼女が担うべき長刀『飛燕』が、『斑鳩の影』の手の中にあるからだろう。

抜身のそれを手の中で弄びながら、ニヤニヤとした表情で斑鳩と相対するその姿は、どう見ても斑鳩という少女では有り得ないのだった。

『……いい加減、認めたらどうなのですか？ わたくし』

不意に、『斑鳩の影』は口を開く。眼前の斑鳩をまるで見下すかのようなその言い方は、彼女をさらに激昂させる。だが『斑鳩の影』は、何を認めさせようというのだろうか？

「黙りなさい！ わたくしの姿で、わたくしの声で……ッ！ それ以上何かを言おうものなら——」

『どうするというのは？ 飛燕は此方に有るというのに』

「いいえ！ 飛燕は——、っ……」

『ふふ……』

二人の斑鳩は、殺気を滲ませながら睨みつけ合っている。見ているだけの理達ですら総毛立たせるそれは、未だ殺し合いにまで発展していないのが不思議な程だ。

だがこれで、一つだけハッキリしたことが有る。斑鳩とシャドウ、彼女達を繋ぐのは『飛燕』であることを、理達は判断した。……理だけが、理解できてしまった。

「お、おい？ 斑鳩のヤツ、いや本物の方だけだよ、一体どうしたんだ？ 飛燕が何だっつてんだ？」

「飛燕は確か、鳳凰財閥を継承した証だと聞いているが……。あのシャドウはそれに固執している……？」

「っつていうかつ、あのシャドウってどうやって出できたの？ そもそもシャドウって何っ?！」

葛城、柳生、雲雀の三人は、思い思いの考察を口にしていた。

対して理は先の村雨との邂逅で、飛燕が彼女にとってどれほどの意味を持つのかを知ってしまった。そしてそれが、決して吹聴できないような話でないことも彼は理解し、口を噤んでいた。

そんな風に黙っている理を、飛鳥は怪訝な顔で見えていたが、それに口出しする前に状況が変化する。『斑鳩の影』は何か気付いたように、蠱惑的な表情で理達を見回したのだ。

『ああ……、そういえばそうでしたね。わたくしの知られたくない秘密でも吹聴すれば、少しは認めるのでしょうか？』

「なっ?! 待ちなさい——」

『いいえ、待つのはそちらの方ですよ、わたくし』

『斑鳩の影』は飛燕の切っ先を斑鳩の喉元に突き付け、彼女を制する。その蛮行を流石に見逃せず、葛城達は跳びだそうとしたが、その身体は不意に停止する。

鎖だ。地面から伸びた鉄鎖が、彼女達の足に絡みついていた。理はその鎖に見覚えが有る。彼女の義兄、村雨が担った鎖鎌のそれと同一であったからだ。

そうして『斑鳩の影』は語りだした。斑鳩と鳳凰財閥の関係。義兄との関係。飛燕が持つ意味。それら彼女が秘めていた想いを暴露したのだった。

「わたくしは余所者、兄の立場を奪った存在です」

『それが如何したというのでしょうか。忍の世界は実力主義、力の無い者が悪いのです』

「飛燕は鳳凰財閥継承の証、わたくしが持つべきモノではありません」

『いいえ、両親からそれを託されたとき、わたくしは悦んだ筈です』

「お兄様には、本当に申し訳ないと思っています」

『ですが、飛燕を渡す渡さないは別の話』

理からすれば二度目の話だが、飛鳥達にとって初めて聞く内容であり、斑鳩が隠し通してきた痴話でもある。

『そう、わたくしにとつては、兄も、鳳凰財閥も、何もかもが枷だった。その束縛から、解き放たれたかった！ わたくしの力を唯一示す、この飛燕と共にッ!!』

飛鳥達は斑鳩の秘密に言葉を失くしていたが、当の斑鳩自身は更に酷い状態だ。自身の影に対する殺気が膨れ上がり、刺し違えてでも討伐せんとする気概が見て取れる。……良く無い兆候だ。

「ッ、いい加減にして下さい！ アナタの言う戯言は、もう聞きたくも有りませんッ！」

『アハハ、何を言ってるの、わたくし？ わたくしの言葉は、アナタ自身のものでしてよ?..』

『斑鳩の影』はそこで再び、黄金の双眸で斑鳩を睨みつける。生気が微塵も感じられない、冷たい雰囲気湛えたそれに射抜かれ、斑鳩は

僅かに身を委縮させる。

そしてそれ以上の絶対零度の温度を以て、彼女の言葉が紡がれる。高らかに、『斑鳩の影』は叫ぶようにして唱えたのだ。

『アナタはわたくし、わたくしはアナタなのですから———！』

その言葉を聞いて、ついに斑鳩は逆上したようだった。燃えるような憤怒の雰囲気を滲ませ、己の影を睨み返したのだ。

……だが、その状況に、理の危機察知能力が警鐘を鳴らしている。『斑鳩の影』はワザと斑鳩ほんたいを煽るような言動を繰り返していることに、彼は疑問を持ったのだ。一体何のために？

だがそれでも、このまま放置すれば絶対に不味いことになる事を理は本能的に予想出来ていた。

彼女を制する言葉など、とつくの昔に誰もが紡いでいる。その言葉の全てが、斑鳩に届かなかっただけなのだ。……なのに、彼女を止めることが出来ない———！

『フフ……、違うというのならば、否定してみては？』

「———馬鹿にツ！ ええ、アナタなど、わたくしでは有りませんツ!!!」

斑鳩は否定する。『斑鳩の影』を否定する。己の虚像を、否定したのだ！

瞬間、空気が変わった。理も、飛鳥達も、『斑鳩の影』でさえも、それを知覚する。感知できていないのは、斑鳩だけの様であった。

そうして、『斑鳩の影』が纏う負の雰囲気ふのふんいきが更に濃くなりはじめ、闇色のオーラとなって溢れ出す。『斑鳩の影』は狂ったように噛い、その身に飛燕を抱きしめた。

『フフフ♪ そう、わたくしはわたくし！ アナタではない！ もう、わたくしを誰にも縛ることは出来ない!!!』

「っ、逃げ———」

理が叫ぶよりも早く、『斑鳩の影』を中心として、闇が爆ぜた。

彼らの鎖の拘束ごと弾き飛ばすほどの衝撃を持った力の奔流は、やがて一纏まりとなり、異形の姿を織り上げる。

『斑鳩の影』は、斑鳩からの完全なる拒絶により、その身を本当の

シヤドウへと変貌させた——！

『我は影、真なる我……。さあ、まずはアナタ達七人を殺して、わたくしは自由の身となるのです！』

その姿を一言で表すのならば、『ハーピー』と呼称するのが正しいのか。斑鳩の面影を残した容姿と、彼女の裸体をそのまま拡大したような巨軀。その両腕は大空へと羽ばたく為の翼となり、彼女の「解放願望」を表していた。

だが、結局彼女は鳳凰財閥という括りから抜け出せないでいるのだろう。一糸纏わぬ灰色の身体は、元々は飛燕であっただろう長刀にその胸を貫かれ、あまつさえその刀は鎖で雁字搦めに縛られている。

そしてその刀と鉄鎖は、完全なシヤドウとなった『斑鳩の影』をなお、人の骸で編まれた鳥の巣——彼女を党首とした、鳳凰財閥の暗喩か——へと縛り付けるための楔となっているのだ。

『燃えろオ！ 《アギラオ》 ツ！』

『斑鳩の影』が翼を振るい、《中級^ア火炎魔法^ギ》が奔る。まず標的となったのは、元々の本体である斑鳩自身だ。彼女はシヤドウが暴走した影響か、倒れ伏したまま動く気配が無い。

このままでは炎が斑鳩を焼き尽くすだろう。無論それを、理が黙って見ている筈が無かった。

「ペルソナ、《オルフェウス》 ツ！」

ガラスの砕けるような音を響かせて、理は盾役としてオルフェウスを召喚する。斑鳩を庇うように前に立ち、腹部のスピーカーから音響波を轟かせ、炎を掻き消す。

その理を『斑鳩の影』は、つまらなそうに見下ろしていた。『また貴方ですか……。まったく、他人の厄介事に首を突っ込むのが好きな方ですね』

しかし理は、そんな『斑鳩の影』の呟きなど耳を傾けることもなく、後方の飛鳥達に指示を出していた。

「飛鳥、斑鳩先輩と皆を頼む。……アイツは、俺一人でやる」

「えっ?! ちょよ、ちょよと待って本気なの!?! あんなシヤドウ、結城くん一人で如何にかなるなんて——」

「なるよ。……少なくとも、マジシャンよりはマシな筈だ」

理はそれ専門の能力に特化している訳ではないが、今『斑鳩の影』が放った《アギラオ》により、ある程度の力量を測ることが出来た。

『斑鳩の影』は、先日戦った大型シャドウ『魔術師』^{マジシャン}よりは格下の存在だと分かる。尤も、比較対象が悪いだけであり、其処らの雑魚シャドウとは比較にもならない強さなのだが。

そもそも、今いるメンバーの中でまともにシャドウを相手に出来るのは理のみだ。飛鳥こそ原因が分からないシャドウへの攻撃能力を得ているものの、それ以外の面子は未だ戦う事すらままならない。

そして、放心状態となつている斑鳩を連れて逃走するなど、輪を掛けて無理だ。このシャドウは、それを絶対に許さないだろう。……そして理も、この戦いから斑鳩を遠ざける気が無かった。

「……斑鳩先輩」

「……何を。わたくしは……、もう……」

『もう』、なんだって言うんです？ 目を背けないでください。あのシャドウを生み出したのは、間違いなく貴女です」

「……あれが、わたくし？」

理は静かに、そして強い口調で宣言する。だが、斑鳩としてそれは分かっている筈なのだ。彼女がそれを、認められずにいるだけで。

「ふふ……、そうでしょうね……。あんな醜いシャドウこそが、わたくしの本質。実に相応しいですわ」

「ちよつ、斑鳩さん!? 私は別にそこまで——」

「待て、飛鳥」

「かつ姉、でもっ!」

ネガティブな意見を出す斑鳩に、飛鳥は必至で取り繕うとするが、葛城がそれを制した。しかし彼女にしては珍しく達観した表情を見せており、飛鳥もその表情を見て、葛城の心中を察した。

この中で最も斑鳩との付き合いが長い葛城は、理に次いで理解してしまつたのだ。斑鳩が抱えていた、その闇を。それが、彼女自身が乗り越えなくてはならない類だという事を。

理は紡ぐ。斑鳩の心を再び立ち上がらせるよう、言葉を綴る。不思議

議とこの時だけは、普段のコミュ力不足は成りを潜めるのだった。

「そう、あれこそが貴女が抱える心の影シャドウ——ですが、それがどうしたっていうんです?」

「……なんですって?」

「飛燕を渡されて、鳳凰財閥の党首になったのは強制であつても——

——、貴女は孤独なんかじゃ無い筈だ。

少なくとも忍学科こしなに居るのは、貴女自身の“選択”が有ったからじゃないのか! あのシャドウに、この忍学科すらも否定される気なのかツ!」

「っ!」

理のその言葉に、斑鳩は目を見開く。

そう、そうなのだ——。忍学科こしなには、鳳凰財閥の党首などではない『斑鳩』としての彼女を、認めてくれた仲間が居る。

『斑鳩の影』をこのまま放置するという事は、その彼女達の命と場所を散らし、斑鳩には本当に何も残らなくなってしまう。

……今の斑鳩には、それだけで十分だ。後は、彼女本来の仲間たちに任せることにしよう——

理は既に斑鳩の傍へと駆けよっている飛鳥の姿を傍目に捉えながら、改めて『斑鳩の影』と相対する。

『茶番は終わりましたか? 空気を読んで待つてあげましたが、わたくしにも我慢の限界が有りましたよ?』

「ああ、もういいよ。話の続きは、お前をぶっ飛ばしてからだね」

『大言を……。……ええ、やはり貴方こそがわたくしが自由となるに、最も障害となる存在ツ!』

『斑鳩の影』は今、結城理を完全に敵として認識したようだった。再び両翼を大きく広げ、彼に向けて振るうと、シャドウを拘束していた鎖の一部が飛来する!

「——はッ!」

だが、理とてこの程度の攻撃は想定内だ。何時の間にか両手に握られていたそれを縦横無尽に振るい、飛来してきた幾本の鉄鎖を全て叩き落す。

彼が担うそれは——忍具・苦無の二刀流であった。

「あれ？ 結城くん、そんなの何時の間に？」

「……さつき飛鳥を助け起こした時、懐からくすねておいた」
「えっ」

……苦無というモノは、本来隠し武器の一つであり、服の下などに携帯するのが彼女達の常である。それを取るために飛鳥の懐を探ったという事は即ち——この男、割とデリカシーが無い。

それは兎も角、理が苦無二刀流という武器を選択したのには、幾つかの理由が有る。

前提として、“速さ”が必要なのだ。『斑鳩の影』の戦い方は、見限りでは火炎魔法と鎖の拘束攻撃の二種。特に、後者が厄介である。戦闘において足を止めるといふ行為は、そのまま死へと直結するのだから。

また、再び飛鳥の柳緑花紅を使うことも考えなかった訳ではないが、今の彼女には斑鳩達の護衛という役目が有る。彼女の戦力低下は愚策であった。

「……うしろは任せた」

「結城くん、それ使い方が違うよ……」

だが、そんなボケをかますあたり、意外と余裕なのかもしれないと飛鳥は思った。

『チツ、ふぎけないでツ！ 何なんですアナタは!? わたくしの邪魔をするなああああアアアツツツ!!』

『斑鳩の影』は叫ぶ。再び鉄鎖が飛来し、理は二刀でそれを弾く。

既に気が付いていたことだが、斑鳩のシャドウはとも本体の能力・トラウマを踏襲した戦い方を取るようだ。

火炎魔法は彼女の炎の属性から、鎖の攻撃は兄・村雨へのトラウマから。故に、理はシャドウがどういった存在であるのか、ある程度想像がついていた。

『目障りですー！ 何故わたくしを阻むの!? わたくしはただ、自由になりたいだけなのに!!』

『斑鳩の影』は叫ぶ。眼前の理を見据え、哀願するように問いかけ

た。

理は思う。それは間違いなく、斑鳩という少女がひた隠して来た心の内なのだ。シャドウが代弁する、彼女の心からの絶叫だった。

そう、シャドウとは——、斑鳩の“もう一人の自分”なのだ。「……気持ちは分からないでもない。俺達の世界は、何時だつてしがらみだらけだ」

理は誰ともなく呟く。自分へと言い聞かせるように。『斑鳩の影』へと言い聞かせるように。……或いは、彼の後ろに居る斑鳩へだろうか。

『ならば何故、わたくしの邪魔を——』

『どうでもいいからだ』

『……………な』

「そんな考え、誰だつて抱えているモノだ。……俺の様に」

最後の呟きこそ聞こえなかったが、理はハッキリと断言する。彼は『斑鳩の影』の主張を当たり前のものと切つて捨てたのだ。その言葉に、流石に『斑鳩の影』も絶句していた。

「だからどうでもいい。……お前の暴走は、今ここで止める」

理は左手の苦無を『斑鳩の影』へと突き付け、右手には召喚器を握り、自身のこめかみへと押し当てた。それは飛鳥達が幾度となく見た、彼の最大最強の能力を顕現させる儀式。

引き金に指を掛け、心を落ち着かせる。頭蓋を打ち抜く弾丸は、己の覚悟そのもの。死を想い、死を乗り越え、死に抗う覚悟こそが、結城理の“もう一人の自分”を呼び覚まさせるのだ。

そして理は召喚器の引き金を引く。撒き散らされた心の紙片が、彼のペルソナを織り上げ、彼らを守護するように降臨したのだった。

「俺と、俺の《オルフェウス》と、忍学科の皆でだ——！」

今ここに、ペルソナ使いとシャドウの決戦が、幕を開けた——
！

16話 I, I I Face Myself

結城理が駆けていく。己が心の影、あの強大なシャドウへと向けて。それを止める術は、自分には無い。

斑鳩はあの化け物シャドウを生み出した、自身の心の弱さを呪う。自分なんて無力なのか——、そんな思いが心を埋め尽くしていった。

確かに彼の言う通り、あのままシャドウを暴走させるがままにしてしまえば、大切な仲間たちの命は無い。この忍学科も、無残に破壊されるのだろう。

だからこそ、己の身体を奮い立たせなければならぬというのに——

——！ 心に反して、身体は酷く重かった。

「……結城さん、わたくしは……」

怖い——、もう一人の自分”だというあのシャドウが、堪らなく怖い。

戦うことであのシャドウに殺されるという事は、”もう一人の自分”の主張が正しいのだと肯定されるからだ。

戦うことであのシャドウを倒すという事は、”もう一人の自分”を否定するという事に他ならないからだ。

それらはきつと、死よりも恐ろしい事なのだろう。……一体、どうすればいい？

だが、そんな負の思考の迷宮に囚われた斑鳩を救い上げてくれた、少女が居た——

「斑鳩さんっ！」

澆刺とした声が鼓膜を打つ。座したまま動くことが出来なかった斑鳩に駆け寄り、その傍に親身に寄り添ってくれる仲間が居る。

それは誰であろう、半蔵学院忍学科の後輩、飛鳥であった。

「あの……大丈夫、ですか？」

飛鳥は流石に決まりが悪そうに、おずおずと問いかけてくる。本来ならば斑鳩はここで、先輩として気丈な振る舞いを見せるべきなのだろうが、生憎とそこまでの気力は残されていなかった。

「ふふ……、そう見えますか？」

「……ええと」

斑鳩はやや自嘲気味に、飛鳥へと返答する。その様子に、これは重傷だと彼女は判断した。どう答えればいいのか詰まった飛鳥へと、斑鳩はさらに問いかけてくる。

「飛鳥さん……わたくしの事を、みつともないと思いますか？」

「ええ?! それは有りませんよ! どうしたんですか斑鳩さん!」

そんな斑鳩のまさかの言葉に、飛鳥は全力で否定する。斑鳩の言う通り、彼女の秘密について衝撃を受けたのは確かだ。しかしそれでも、彼女達が斑鳩の事をみつともなく思ったり、ましてや失望する筈もない。

自らの最も昏い秘部を明かされた人間は、こうまで脆くなるのかと、飛鳥はシャドウの恐ろしさを改めて思い知った。

——だが同時に、それならばいくらでも遣りようが有るのを、飛鳥は気付いたのだった。飛鳥は斑鳩の眼を真剣な眼差しで見つめ、口を開く。

「……斑鳩さん、実は私、結城くんの事が——」

「あ、それは気付いてるんでいいです」

「ええーっ?!」

(馬鹿だ)

(馬鹿だな)

(えっ?! 飛鳥ちゃん、結城さんの事が——!)

『自分も秘密を明かして対等な立場になろう作戦』、あえなく失敗である。口に出すことこそしなかったが、葛城と柳生も心の中で思いきりツツコんでいた。

盛大に自爆し、真っ赤な顔で頭を抱える飛鳥を見て、斑鳩は毒気を抜かれる。言動こそアレだったが、彼女が自身の事を心配してくれた熱意は伝わったのだから。

そんな飛鳥を想い、斑鳩の口からぼつりと、ある眩きが漏れたのだった。

「……羨ましいですわね」

「へ?」

「やっぱり飛鳥さんは、とても眩しいですわ」

思えば、この様な状況も二回目だ。つい先日、『魔術師』^{マジシャン}との戦いで逃亡した筈の自分を奮い立たせてくれたのも、彼女の言葉だった。

三年生で、クラス委員である筈の自身よりも、飛鳥の方がとても優れているのだと感じられた。

「大らかで、暖かくて、太陽の様。わたくしなどより、とても凄い——」

「違いますよ、斑鳩さん。私は凄くなんてないです」

しかし、飛鳥はその斑鳩の言葉を否定する。

「私は、斑鳩さんの事をとつても凄い忍だって思っています。綺麗で、優しく、強くて——そんな斑鳩さんを、誇りに思っています！」

「……飛鳥さん？」

「確かにあのシャドウは斑鳩さんの一面で、言つたことは事実なんですよ。でも、それだけが斑鳩さんの全てじゃ無い筈です。

私の先輩で、この忍学科のクラス委員で、……そして私達皆の家族なんです！」

飛鳥は其処で、懐からあるものを取り出す。斑鳩に見せつけるようにして広げられたその一枚の紙には、とある図形が描かれていた。

「これは……」

「ほら、今日家系図についての授業があつたじゃないですか」

上部に斑鳩と理の名前、その間に線を引き、そこからさらに下部へと4本に枝分かれした線が続き、それぞれに葛城、飛鳥、柳生、雲雀の名があつた。名前の所に、各々の顔をデフォルメしたイラストまである。

「それで、この忍学科の皆も家族みたいだなんて思って、この家系図を書いたんです♪」

「か……ぞく」

戦場に似つかわしくない笑顔を、飛鳥は斑鳩へと向ける。そして、家系図に籠められた飛鳥の想い。自然と斑鳩の眼には、涙が浮かんでいた。

「だから斑鳩さん、そんなに昏い表情をしないでください。貴女がど

んなに絶望しても、私達が付いていますから」

「飛鳥さん……、皆さん……」

斑鳩はそこで、改めて周りを見渡す。そこには、彼女が己のシャドウを晒し出し、産み出してなお、彼女を信じてやまない本当の仲間達が居る。誰もが彼女へと信頼の表情を向け、立ち上がるのだと確信しているのだ。

「ありがとう、飛鳥さんっ、皆さんっ」

斑鳩の覚悟が決まる。何時までも絶望してなどいられない。正義の為ではない。仲間達の為に、己自身の為に、そして何より『彼』の為に、舞い忍ぶのだ。

その為に、あのシャドウを——そこでふと、彼女は再び家系図へと視線を落とした。

「……あの、飛鳥さん」

「どうしました、斑鳩さん？」

「ええと、その……、この家系図ですと、わたくしと結城さんが夫婦となつていますが……」

そう、飛鳥が書いたこの家系図の図式だと、斑鳩と理が夫婦となり、その子供が飛鳥達となるのである。

普段ならばちよつとした冗談だと言って流すのだろうが、これを書いたのがかの飛鳥である以上、何となく冗談だと流すのは躊躇われた。というか、今は戦闘の真つ最中であるのだが。

「え？ この忍学科には結城くんしか男の子が居ないから、お父さんの意味で書いたんですけど？」

「ああ……そうでしたよね。飛鳥さんはそういう人でしたよね……」

しかしそんな飛鳥の言葉に、斑鳩は自身の葛藤を放棄した。彼女は所謂、天然の気が有るのだから、恐らく何も考えずに書いた結果がこの家系図なのだろう。

「もしかして、お父さんがかつ姉で、結城くんは私のお兄さんの方が良かったですか？」と聞いてくるあたり、どう転んでもボケに走っていた。

因みにどうでもいいことだが、9月8日生まれの飛鳥に対し理は1

2月2日生まれなので、地味に彼が年下だったりする。

そして飛鳥は勿論、斑鳩すら気付いていないのだが、ナチュラルにハブられた霧夜の立場はどうなるのか。正直、彼は今泣いていい。

「うわあっ?!」

だが、彼女達がそんな風にボケている間にも、刻一刻と状況は変化している。突如聞こえてきた理の叫び声で、斑鳩達は現実を引き戻された。

その眼に飛び込んできたのは、全身を鉄鎖に絡め捕られたまま、上空高く振り上げられて、今にも叩き付けられんとしていた理の姿だった。

瞬間、誰もが理を助ける為に一も二も無く飛び出す。……だが、間に合わない――!

「結城さんツ!!!」



――時間を、結城理と『斑鳩の影』が相對していた瞬間に戻す。理はそこで、改めてこの『結界』内部を見渡していた。

そこに有る光景は、彼らが今までいた忍学科の面影など何処にも無い、崩壊したビル群という破滅的な世界だ。彼はそれに見覚えがある。廃墟となったビルは、鳳凰財閥本社の面影を残していたのだ。

地面はひび割れたアスファルトであり、やや足元が覚束無い。何よりも、赤黒い縞模様の空がこの空間を一層不気味な物に仕立て上げていた。

これら異界の風景は、恐らくこの『結界』を生み出したのが、シャドウにして忍、忍にしてシャドウ。『斑鳩の影』というイレギュラーな存在であるが故の賜物。

『影結界』でも『忍結界』でもない、『斑鳩の影』という存在の為の異空間。名付けるならば、そう――『真影結界』といった所か。

(……どうでもいい。兎に角、俺に出来ることをするだけだ)

理の身体は既に『斑鳩の影』へと向けて動いている。同時に、背後

に浮かぶオルフェウスに指示を出し、《タルンダ》を発動していた。だが、真に警戒すべきは攻撃力ではなく、鎖による拘束攻撃である。

『斑鳩の影』もそれを理解しているのか、さして動揺することもなく、幾本もの鉄鎖を理へと向けて飛ばしていた。彼はそれを、両手の苦無で弾き飛ばす。

(……飛鳥の剣術を見ていて良かったな。お蔭で、防御の型が出来ている)

今の理は、飛鳥の『半蔵流剣術』を見よう見真似で振るっていた。手数や防御に優れたこの剣術は、飛来する複数の鉄鎖を叩き落すのに貢献していたのだ。伊達にここ数日、彼女達との訓練で扱われていた訳ではない。

加えて、彼の《心眼》による気配察知も相まって、死角から伸びてくる鎖すらも迎撃することを可能としていた。無論、それに気を良くして慢心するような理ではなく、一切の油断もすることなく、『斑鳩の影』へと近付いていった。

『くっ！ 舐めないでくださいッ！』

苛立ったような——否、正にそのものの声を上げ、『斑鳩の影』は理へと向けて《アギラオ》を飛ばす。彼はすぐさま右手の苦無を召喚器へと持ち替え、引き鉄を引く。召喚されたオルフェウスの《アギ》が、《アギラオ》と衝突し、凄まじい爆発を引き起こした。

《タルンダ》によって弱化した《アギラオ》は、十分に《アギ》で迎撃出来る威力へと成り下がっていたのだ。

「……温ぬるいな」

『——ッ！』

先程このシャドウは理が掛けた《タルンダ》を取るに足りないものだと判断したようだが、それがこのザマだ。強敵との戦闘において、デバフは常套手段であることを、彼は『デビルズバスターオンライン』で学んでいた。……単なるゲームがまさかこうして役に立つとは、彼自身ビックリである。

そして、その判断ミスは一瞬にして『死』へと直結する。今こうして、単なる挑発にすら乗ってしまうのもそれだ。

『はあっ！』

再び、無数の鎖が飛来してくる。その全てが理に向かってくるのだが、彼は特に慌てることもなく、身を低くして全力で駆け抜ける。時に躲し、時に打ち払い、時に弾き飛ばす。ただの一本も、彼に傷を負わせることもなく。

まるで周りが見えていない、と理は評する。例えば、今の攻撃は全て理を狙ったものだったが、それをほんの数本でも後方の斑鳩達に向けるなどすれば、彼の足は止まらざるを得なかっただろう。

それすらも考え付かない程に、『斑鳩の影』は理に執着を——憎悪を向けているのだ。まるで、人間の様に。

(いや、人間そのものか)

『斑鳩の影』は元々、斑鳩という少女の心の影なのだ。だからこそ、此処まで人間臭い。負の方向にこそ傾いているものの、感情を持ち、心を持っている。尤も、それ故に理の挑発に引っ掛かっているのだが。

しかし、理は元より人の心を操るといふ事など長けていない。今でこそマイナス方面の挑発をすることで、辛うじて『斑鳩の影』の意識を此方に向けているが、それも何時まで持つことか。この作戦は、ほんの少しでも『斑鳩の影』が意識を切り替えるだけで瓦解してしまう脆いモノだった。

(さっさと済ませるか)

「オルフェウス、《突撃》——地面を叩けッ！」

『なッ?!』

次の瞬間、召喚されたオルフェウスの《突撃》によって、アスファルトの地面が激しく砕かれる。蔓延した瓦礫と粉塵が理の姿を覆い隠し、『斑鳩の影』は理の姿を見失った。

『くっ、小賢しい真似を——』

この手の攪乱として、死角や背後から襲い掛かるのが定石だ。故に『斑鳩の影』は、奇襲を警戒して辺りに鎖を張り巡らせる。……それが、理が狙っていたものだ——！

「……まあ、こいつも上手く引っ掛かるとはね。斑鳩先輩の型にはまっ

確かにこのシャドウは強大だ。制圧力の高い火炎魔法と、鉄鎖の束縛攻撃。固定砲台としてみれば、破格の能力を持っているのは間違いないだろう。今でもほんの一瞬気を抜けば、すぐさまそれらの餌食になるのは想像に容易い。

しかし、それを扱う『斑鳩の影』自身に、必要な筈の精神が備わっていないのだ。未熟、或いは不安定。シャドウだからこそ、等と断じられる様な疑問ではないと、理はハッキリと認識していた。

それはまるで『斑鳩の影』が、今の理の實力に合わせて弱体化された様な——

有り得ないというのに、そんな作為めいたモノを感じてしまう。そして、有り得ない筈の考察をした理に、一瞬の意識の空白が出来る。

『カエセエエエエエエエエエエエエエエエエエツツツ!!』

「ッ！　しまっ——」

『斑鳩の影』が意図したものではないのだろう。怒気のまま闇雲に振り回された鎖の一つが、無情にも理の足を捉えたのだ。『斑鳩の影』は鎖から通じる感覚を標とし、全ての鎖を彼の捕縛へと向けた。

それは正に奇跡だった。それを手繰り寄せることが出来たのは、『斑鳩の影』の悪運——否、生き汚さ。それこそ、人間の生きる力としか言いようがない。

(……本当に、人間なんだな)

そんな風に、何処か感心してしまう。

(俺なんかよりも、ずっと人間らしい——)

心の何処かで、そんな風に自身を卑下する己が居ることに理は気が付いた。

理はこの戦闘の前に、『斑鳩の影』の主張を当たり前のモノだと断じている。いくらこの『斑鳩の影』がシャドウと言えども、その本質は『斑鳩』という少女の心の一部分でしかない。暴走を引き起こしたとしても、所詮は少女一人の、世間に有り触れた些細な悩みでしかないのだから。

だが、理は幾ら自身の記憶を掘り起こしてみても、そのような悩みを抱いたことが無い。『人間的な悩み』というモノを、彼は経験したこ

とが無いのだ。

人の機微に疎い筈の理が斑鳩の心中を察することが出来ているのも、国語の文章題を解くかの如く、本から得た知識を導引して推察した結果に過ぎなかった。

そんな自分が、彼女の悩みを理解できたなどと到底言える筈も無い。『斑鳩の影』に相對する資格など、自分には初めから無いのだ――

「――だからこそ、俺は……」

みしり、と全身の軋む音が理の耳に届いた。幾重もの鉄鎖が彼に巻き付いているのだ。丁度『タルンダ』の効果時間も終了したらしく、拘束に伴う力が増しており、脱出は困難――いや、不可能だ。

『斑鳩の影』はそれだけに飽き足らず、理をそのまま天高く振り上げ、地面へと叩き付けようとしていた。その勢いに内臓が逆転するよくな感覚を味わい、思わず声を漏らす。

それでもなお、飛燕を手放そうとしない理に業を煮やし、『斑鳩の影』は叫んだ。

『寄越せえええええエエツ！ それはわたくしのモノだああああアアアツ!!!』

「……ああ、そうだ。お前のモノではないね――」

『――な！』

不意に、理は飛燕を投擲する。まさかこうまであっさり手放すとは、その場に居た誰もが想像だにできなかった。

――いや、ただ一人だけ、投擲された飛燕を掴む者が居る。それが誰かなど、言うまでもない。飛燕の真の所有者、斑鳩において他ならない――！

「『飛燕鳳閃』！」

長刀・飛燕による高速の斬撃。理を縛る鉄鎖を瞬く間に切り裂き、その束縛から解放した斑鳩は、そのまま彼を腕に抱き着地する。……お姫様抱っこという形ではあるが。

全身に走る鈍い痛みを堪えながら、理は自身を救助してくれた斑鳩に労いの言葉を掛けるのだった。

「……っ、ありがとうございます、斑鳩先輩」

「無茶しないで下さい！ 心臓が止まるかと思いましたが!? 全く貴方は何時も何時もそうやって自分を囮にして——」

「馬鹿！ 前見ろ前!!」

葛城の劈く様な声が轟く。其処には、長刀と鎖の束縛から解放されたことにより、その両腕で飛翔することを可能とした『斑鳩の影』が居た。虚ろな眼窩を此方に向け、その胸の前に強大な炎が収束し、放たれる！

『やつと……、捉えましたよ！』

「くっ、ペルソナ——ああッ、アッ、っ!!」

《アギ》で迎撃する余裕などなかった。理のとった行動は、オルフェウスを召喚し、自分達の盾とすることまでが精一杯である。

しかし、ペルソナへのダメージは自身の精神への多大なフィードバックを齎し、理は斑鳩に抱えられたまま頭を抱えて唸る。その一瞬でも理の行動を制することが出来れば、『斑鳩の影』にとっては十分だ。

解放され、宙を自在に飛翔し、その巨体もこの上ない武器となる。そして彼女達は、理抜きではシャドウに対する有効打を持たない。斑鳩は、此方目掛けて《突撃》してくる『斑鳩の影』に対し、何も出来ないのだ。

『これで、終わりです——!!』

「……ッ！」

斑鳩はもはやこれまでと覚り、しかし決してその『死』から眼を離すことは無かった。

——だからこそ、それを眼にすることが出来たのだ。

「秘伝忍法、《秘技・村雨》——!!」

『え?』

突如として『斑鳩の影』に鉄鎖が纏わり付き、その動きを押し留めた。技に見覚えこそないが、斑鳩はその声に、その武器に、見覚えが有り過ぎる程に有る。

しかしその行動は、彼女の知るものと一致しない。『斑鳩の影』を捕

縛する鎖鎌のその先に、彼は居た。

「ふん、お前らは普通の武器は効かない様だが……、こうして動きを止める程度なら、俺でも出来るみたいだな」

「あ、やっぱり居た」

（……誰？）

「お……、お義兄様!」

斑鳩の驚愕の声に、飛鳥達は目の前のこの人物が何者であるのかを理解する。そう、彼は斑鳩の義兄、村雨その人であった。

本来この『真影結界』は『影結界』と同じく、適性の無い物は象徴化してしまう空間であるが、その結界を生み出したシャドウが獲物として標的にしたものは例外だ。故に、成人男性である村雨も象徴化することなく、『真影結界』で活動できていた。

まさかの人物の登場に驚きを隠せないのは、『斑鳩の影』も同じであるようだった。『斑鳩の影』はこの戦いに村雨が介入するなど、考えもしなかったからである。

身体を縛る鎖鎌を破壊しようと身を振るが、それなりの強度を持つためかそれは叶わない。遂には縛られた身体のまままで攻撃を行うのだが、次の瞬間、彼女らはとても信じられない様な光景を目にすることになる。

——『斑鳩の影』が放った鉄鎖は、一本たりとも村雨に届くことは無かったのだ。

『ば、馬鹿な?! 何故捉えられない! 一体どうなっているのです!』

「阿呆、元々鎖鎌それは俺の武器だぞ? 自分の武器が扱えない奴が一体何処に居る?」

そしてお前は、鎖鎌の扱いが俺以下なんだよ。お前の鎖鎌の動き方を見切るなんざ、町内鎖鎌大会六位の俺には朝飯前だ」

『クッ、アナタ如きに! さっさと縛られなさい!』

「お前がな」

『なっ!?!』

村雨はもう一本の鎖鎌を懐から取り出すと、『斑鳩の影』に向かって投げつける。

その様はボーラ——東南アジアの狩猟武器——を思わせる様に、回転して『斑鳩の影』の身体に巻き付き、さらなる拘束を施す。そして今回は、それだけに留まらない。

「ふっー！」

何時の間にか斑鳩の腕の中から這い出ていた理は、その鎖鎌の一端、分銅側を掴み取り、苦無に巻き付けた上でそれを深々と地面に突き刺し、地面にへと縫い付けた。ダメージこそないが、鎌側の刃は『斑鳩の影』に突き刺さり、拘束に一役買っていた。

「お義兄様……、どうして……?」

『斑鳩の影』が動きを止めたことにより、ほんの僅かの合間であるが、彼らに余裕が出来る。その瞬間を見計らって、斑鳩は義兄の迷惑を図ろうとしたのだった。

その問いに対し村雨は、彼女を何処か馬鹿にするような、或いは呆れたような目付きで睨んだのだ。

「馬鹿か? 鳳凰財閥の党首になるお前が死んだりしたら、どれだけの人間に迷惑がかかると思ってる? 俺も鳳凰家に連なるものである以上、お前を守る義務が有るんだぞ。」

俺は役に立ちそうに——もとい、出る幕が無さそうだから静観していたが、お前とこの餓鬼がハマしたから、こうして手を貸してやったわけだ」

「あ……、そうですよね……」

そんな答えに、斑鳩は落胆したような表情を見せるが、村雨は更なる答えを紡ぐ。頬を掻きながら、何処となく恥じた様に語られるそれは、きつと彼の本心なのだろう。

「それに、まあ……、お前のある話を聞いてしまって、いろいろ考えさせられたからな——」

「うえっ?! き、聞いてたのですか!?!」

「オイ待て! なんだ『うえっ?!』って! 馬鹿にしてるのかこらあ!?!」

が、まさかの兄妹喧嘩勃発である。斑鳩は己の恥部を最も聞かせたくない人物に聞かれたことを恥じ、その反応に村雨は逆ギレする。彼

は今、結構真剣に己の心情を吐露したのだが、この反応では仕方ない。「大体だな、さつきも言ったが、お前が死んだら最悪、鳳凰財閥に所属している社員や忍達全員が路頭に迷うことになるんだぞ！」

次期社長の身としては、お前に死んでもらっては困るんだ！ 分かってるのかそのところ!？」

「……えっ？ お義兄様が次期社長？ あの、党首はわたくしでは――」

「……オイ、まさかお前、忍という裏稼業の人間が社長に就任する気でいたのか……？」

村雨はそこで、本気で斑鳩を哀れな物を見るような眼で見つめる。斑鳩は冷や汗をだらだらと流し、必死にその視線を避けようとしていた。

「忍のお前は鳳凰財閥の『裏側』、俺は社長として『表側』に就任するのだが……。その様子では知らなかったようだな」

「……うう」

「あと、お前は経営や経済学などの会社を動かすノウハウを知らないだろ、そんなお前がどうして社長に選ばれると言うんだ？」

「……お義兄様は？」

「大学で専攻しているぞ。ついでに、成績は主席トップだ」

「ぐふっ!？」

斑鳩はその場に崩れ落ちる。幼いころから抱き続けてきた義兄への罪悪感が、こころも見当違いだったことにショックを受けた為であった。村雨は村雨で、「俺の義妹が馬鹿だった……」とショックを受ける有様だ。

この二人、実は意外と相性が良いのではないか？ 彼女らを除く、その場に居た全員が同じ印象を受けたのも、無理からぬことであろう。

『ええい！ それが如何したというのです！ この鎖を解いたら、まづはお義兄様から殺してやります！』

そうこうしているうちに、『斑鳩の影』の拘束が緩み始める。もうあまり時間は残されていない様だ。流星に誰もが意識を切り替え、『斑

鳩の影』を見据えるのだった。

「止めは任せましたよ、斑鳩先輩」

「え？　しかし、わたくしではシャドウにダメージが——」

「そんなのどうとでもなります。……ペルソナ、《紅蓮刀》」

理はオルフェウスを召喚し、斑鳩の持つ飛燕に《紅蓮刀》のスキルを掛ける。かつて『魔術師』^{マジシャン}を葬った一撃は、他人の武器にも付与できららしい。

彼女が普段扱う忍術の青い炎ではなく、ペルソナの紅い炎を纏う飛燕は、どこか荘厳な美しさがあつた。しかし、そのやり取りを観ていた村雨からは、フンと鼻を鳴らされる。

「……お前、まさか」

理と村雨はシャドウを挟んで対格に位置している為、実際にその言葉が届いた訳ではない。だが理は、村雨のその眼だけで何を言いたいかを察したようだった。故に彼は、同じく眼で伝えることにする。「黙っている」と。

というか今気付いたことだが、村雨は相当に優秀・有能な人間だ。血筋のお蔭でもあるが鳳凰財閥の社長に就任し、シャドウの攻撃を見切り、理の心中を察している。忍の才能が無いとは言いが、その以外の才能に溢れているのだ。

ならばこそ、彼があそこまで義妹^{いかるが}に執着した理由は——、そこで今度は村雨から睨み返された。やはり彼は、何処までも優秀なのだ。

「はあ……妹よ、さっさと決めろ」

「……？　ええ、分かりました、お義兄様」

『ぐう……ッ！　この、放しなさい！　こんなところで、わたくしが——』

「もういい加減にしましょう、わたくし。そろそろ、気が付くべきです」

斑鳩は今、『斑鳩の影』を“わたくし”と呼んだ。それは、彼女なりの決心である。

『何を気付けと言うのです!?!』

「その鎖——、先程僅かに解放されたというのに、わたくしはまたそれに捉えられた」

『それが何だというのですか！ この忌々しい枷が、わたくしを何処まで縛っていたと——』

「——いいえ、違うのですよ」

斑鳩は改めて飛燕を握り直し、己の影から目を逸らす事無く、正面から見据える。その眼にはもはや、逃避や悲嘆と言った色は無い。ケジメは、自分の手で付けるべきだ——！

「この一撃を、わたくしと、飛鳥さん達と、お義兄様——そして、結城さんに捧げます」

斑鳩は飛燕を振るう。ペルソナの紅い炎を纏う神速の斬撃。秘伝忍法《飛燕鳳閃・壺式》とペルソナ能力《紅蓮刀》の複合。

彼女の口から、自然とその名は紡がれていた。

「《紅蓮忠義斬》——！」

——幾重もの閃光が、シャドウの身体を切り裂いた。



「本当なら、もっと早く気付くべきでしたね」

『……』

暴走したシャドウの身体をバラバラに破壊され、『斑鳩の影』は元の少女の身体に戻っていた。今は斑鳩の前に立ち、彼女を見据えている。

「親元から離れ、鳳凰財閥へと預けられたわたくしには、家族と呼べる人などいませんでした。だからきつと、優秀にさえなれば、人を惹き付けることが出来ると考えたのです」

『……』

それは、斑鳩という少女の独白——或いは、懺悔。

「幸いにして、わたくしには忍の才能があり——まあ、だからこそ鳳凰財閥に呼ばれたのですが——、こうしてお父様とお母様から飛燕を預かるに至りました。」

半蔵学院忍学科では、クラス委員長の立場も頂きました。皆が皆、わたくしを頼ってくれて、とても嬉しかった。

「……でもそれは、優秀な忍という『斑鳩』^{いかるが}を求められただけで、『わたくし自身』^がを求められた訳ではありません」

「……」

その物言いに、飛鳥や葛城は何か言いたそうにしたが、村雨に制される。その様子を、斑鳩は横目で見ていた。

「……それを、お義兄様の言葉で気付かされました。あの人は、飛燕を奪った『忍』^{わたくし}を求めていなかったのですから。」

そして、鳳凰財閥と、『斑鳩』という立場に継るわたくしを認められなかったからこそ、アナタが産まれたのでしょうか」

「……」

「それでも——、飛鳥さん達はこんなわたくしを、家族だと言ってくれた。結城さんは、アナタを認めろと言った。お義兄様は——」

斑鳩はそこで、村雨に視線を移す。彼は頭を振って、彼女に応えるのだった。

「……お前の好きにしろ。俺はもう、飛燕は眼中に無い」

「ふふ……、ありがとうございます」

斑鳩は『斑鳩の影』の傍に近寄り、その手を握った。

「……アナタの姿を見て、やっと気付く事が出来ました。あの鎖はわたくしを縛る枷^{かせ}で、でもそれは、わたくしをわたくし足らしめた『絆』^{ひき}だったのです」

「……！」

「馬鹿ですよね……！ わたくしが今此処に在ることが出来るのは、わたくしだけの力じゃない！ お父様やお母様、鳳凰財閥の皆さん、勿論お義兄様だつて居たから、わたくしは此処まで来れた……っ！」

なのに、わたくしはそれに気付かず独り善がりで悩んで——
皆さんを、結城さんを……っ！」

「……」

『斑鳩の影』は、斑鳩を優しく抱き留める。その慈愛に満ちた表情

は、皆が良く知る、忍学科クラス委員長『斑鳩』そのものだ。

斑鳩は抱きしめられたまま理達の方を見て、頭を下げようとするのだが、当の理自身がそれを押し留めた。

「……俺は言った筈です。『誰でもいいから自分を認めてほしい』、それは、誰だつて思い悩む当たり前のことです。俺は気にしてません」「しかしっ！」

「だったら、まずは俺が認めますよ。『斑鳩先輩は立派な人間だ』、と」「……………あ」

理のその言葉は、斑鳩が心の底から待ち望んでいたものだった。忍という仮面を被る『斑鳩』ではなく、『斑鳩』という人間を認めてくれる言葉を、彼女は欲していた。

尤もそれが、往年の仲間や義兄ではなく、まだほんの数日程度しか付き合いない彼に——しかもおそらく、天然で——諭されるあたり、色々と可笑しく感じてしまう。

無論、飛鳥や葛城達だって、理に同意している。唯一、村雨だけはケツとでも言いたげな表情を浮かべていたが、否定の言葉は出ていない。そもそも彼は、元からこんな性格なのを義妹である斑鳩は把握済みだ。

「皆さん、ありがとうございます……！ わたくしは……っ！」

「勿論、アナタにも感謝しています。……もう、わたくしは逃げません。認めましょう、アナタはわたくしと共にあった、もう一人の自分——。」

でも……、アナタが居たからこそわたくしは、この高みへと昇ることが出来た。アナタは、わたくしの『翼』だった——！」

「……………」

「もう一度、わたくしに力を、貸してくれますか——」

『斑鳩の影』は、斑鳩に向けて力強く頷く。

「……………ありがとう、もう一人のわたくし。……そして、お帰りなさい——」

『斑鳩の影』はそうして、青色に淡く輝き、その身体が解けていく。

そこから発せられる力の波動を、結城理はこの上なく識っていた。

自分自身と向き合える強い心が、“力”へと変わる――！

(これは……！)

それは、まさに『翼』^{つばさ}。所々に羽根の意匠をあしらった純白の男性軍服に身を包み、その手には飛燕を思わせる長刀を担っている。

顔立ちは斑鳩に似通っており、一見して男女どちらとも取れる。やや短めの頭髮は、燃え盛る炎を思わせる逆立った青。

そしてその背には、天上高く舞うための、雄々しき双翼が有った。

『我は汝、汝は我――、我は汝の心の海より出でし者――。転輪する命題、《ヴィゾヴニル》なり――！』

斑鳩はもう一人の自分、困難に立ち向かうための人格の鎧、ペルソナ《ヴィゾヴニル》を手に入れた！

17話 やすらぎ

2009年 4月16日 朝

「それで、何か申し開きは御座いますか？ 結城さん、お義兄様？」

「むしゃくしゃしてやった、後悔はしているが反省はしていない」

「OK、歯ア食いしばりなさいー」

昨夜の大騒動から明朝、斑鳩は理と村雨、二人の姿を見て驚愕することになる。二人は全身ボロボロ、顔面に青痣を付けていたのだ。

斑鳩は己のシャドウを受け入れ、ペルソナを手に入れた直後に気絶し、先程目が覚めたばかりである為、事の経緯を知りもしない。何事かと思っただけで問いただせば、何と喧嘩をしたのだという。

「何故に？」

「……以前コイツにこつ酷くやられたからな。年上として、教育的指導だ」

「……それをやり返しました」

その余りにもあんまりな言い分に斑鳩は眩暈を覚え、二人を正座させて、後は冒頭の通りである。危うく習得したばかりのペルソナ能力を暴発させそうになったが、そこはまだ慣れていなかったのが幸いした。

くどくどと説教を垂れる斑鳩を見上げながら、理は昨夜の、斑鳩が倒れてからの場面を思い返していたのだった。



「お前、ワザとだろう？」

「……何が？」

『真影結界』も解除され、元の忍部屋に戻ったところで斑鳩はぷつぷりと緊張が解けたのか、その場に倒れ込んでしまった。理は彼女に《ティア》を掛けると、後の世話を飛鳥達に委ねる。

飛鳥達も初めは訝しげな顔をしていたが、「あの人と話がある」と弁明すると、何とか納得して貰えた。男同士で募る話でもあるのだろう

と思われたのかもしれない。

兎に角理は、村雨と二人きりで、落ち着いて話せる機会を得たのだった。

「惚けるな。お前は、斑鳩にあのシャドウの止めを差させる為に手を抜き、ワザと窮地に陥ったな？」

「……」

沈黙は肯定だ。まさかこうまで容易く見破られるとは、理も思っていなかった。尤も彼は初めから、バレようがバレまいがどうでもいいと思つてもいる。

……ただ、何となくではあるが、それが斑鳩に知られるのには気が引けるとも感じていた。理には、その理由が分からないのだが。

「……俺とて、あのシャドウとやらを抑え込むには、斑鳩自身が如何にかしないといけないのは分かっている。

だが、お前はそれを成すために率先して自己犠牲に走った——
」。何とも殊勝な心がけだな、反吐が出る」

村雨は鳳凰財閥次期社長という、人の上に立つべき人間だ。その彼から見れば、理が取った行動は度し難い物に見えるらしい。

「お前みたいな奴は長生き出来んぞ。死ぬ気か？」

「……俺の生き死にはどうでもいい。大事なのは、斑鳩先輩——
仲間達の方だ」

「ふん、なるほど。やはり貴様は馬鹿の様だ」

そんな村雨の暴言にも、理は眉ひとつ動かさない。愚直なまでに仲間達の事を想っているのか、或いはこの手の暴言に慣れているのか。恐らくはその両方だろうと、村雨は判断する。

ただでさえ聡明な彼だ。結城理という人間のプロフィールを知らなくても、推察することは出来る。村雨は瞬時に、理が人間関係に対するトラウマを有しており、尚且つ現在の仲間である斑鳩達に信頼を寄せているのだと把握した。

そしてそれだけではなく、理のもう一つの価値観、その死生観についてでも思案を巡らせる。脳裏に浮かぶのは、昨夜の理の発言。飛燕を奪還しに来た際、彼との衝突した際に聞いたあの言葉——、そこ

で村雨は思考を打ち切る。流石に、これ以上踏み込むのは無粋であろう。

「まあ、斑鳩を護るといふのならそれはそれで構わん。お前に任せるとしよう」

「……分かった」

「だがな——」

「っ!」

突如として、理の《心眼》が警鐘を鳴らす。その気配は、背後から迫っていた——！ 咄嗟に床に突き立ったままの苦無を蹴り上げ、両手に握り、それを迎撃する。

理が迎撃したそれは、撓る鎖によって操られる鎌であった。勿論この場において、この武器を担う人物は一人しか居ない。

「よしよし、良く防いだ。これくらい出来ない様じゃ、斑鳩は任せられんからな」

「……ふうん？ これは所謂、『お前の力を確かめてやる』的な？」
「分かっているなら話は早い。俺が稽古をつけてやる」

そう言つて鎖鎌を構える村雨を、理は胡乱な眼で見つめる。今の彼の脳内では、『イラッ』や『ムカツ』等と言う音声が流れているに違いない。

理も無言で二刀の苦無を構え、迎撃態勢をとる。その姿を見て、村雨は口角を釣り上げた。

（ククク……、この前は散々してやられたからな。今度は俺が勝つ番だ！）

（とか考えてるんだらうな。……どうでもよくない）

互いにピリピリとした、しかし何処か和やかな雰囲気を漂わせ、理と村雨はぶつかり合う。その光景をもしも斑鳩が見ていたのならば、こう評したに違いない。

この二人、精神面メンタルが似通っているのだ、と——



そうして、理は意識を現実に戻す。隣では相変わらず説教をされて萎縮している村雨が居り、どう見ても兄の威厳などあったものではない。しかし、それもまた兄弟の交流であろうと理は思う。

正座を崩して立ち上がり、自身に《ディア》を施して怪我を治療した。なお、念のために村雨も治療しておく。ハッキリ言つてムカついていたが、流石にそこは脇に置いておいた。

依然説教中である為、斑鳩はギロリと睨みつけてくるが、生憎と彼は時間が差し迫っているのだ。

「結城さん、まだ話は——」

「いえ、俺はもう登校時間です。話はまた今度にして下さい」

「あっ——と、そうでしたね。申し訳ありませんでした。どうぞ行つてらっしゃいませ」

昨日は学校から忍学科に直帰したため、鞆や勉強道具等は準備してある。手早く身支度を整えると、理は半蔵学院に向けて登校していった。

その後ろ姿を、斑鳩・村雨兄弟はしっかりと見送るのだった。

「……凄まじいな、アイツは。学業とシャドウ退治を両立する心算なのか？」

「その様ですね……。結城さんには、もう少しご自愛頂きたいのですが……」

二人して溜息を吐く。今では斑鳩もペルソナ能力に目覚めたとはいえど、現状でシャドウ討伐に最重要となる彼が潰れてしまうのは許されることではないのだ。

それを理解しているからこそその、村雨の稽古付けである。やや不穏な内心は有れど、村雨は本心から理を鍛えようと思っており、実力の近い彼との模擬戦はこれからも十分に理の糧となるであろう。しかし、勿論それだけでは不十分だ。

「戦闘面では俺達が見てやるしかないな。後は、あの不安定な内面を如何するか……」

「こればかりは、結城さん次第ですから……」

村雨は模擬戦を通じて理の内面に触れ、斑鳩は資料によって理の過

去を把握している。ある意味でこの二人は、現時点で結城理の最大の理解者なのかもしれない。なかつた。

勿論それだけで理のトラウマを払拭出来る等と、彼らは楽観視していない。今後とも結城理を死なせない為に、更なる経過観察が必要なのだ。村雨はそこで、隣の斑鳩をチラリと見やり、ニヤニヤとした笑いを浮かべた。

「な……、なんでしよう……？」

「いやな、お前がああ餓鬼とくつつくなりしてくれば、多少はあの心情も改善するかもな」

「……………な、ななつ、何を言ってるんですかあつ！」

「おゴオっ!？」

瞬間、顔を真っ赤にして兄を迎撃する妹という、ベツタバタな展開が催された。忍術によって強化された殴打によって吹き飛ばされ、折角理に治療された怪我を再度負う羽目になった村雨である。彼は割と本気でさっきの発言を行った為、理不尽だと思いつつながら気絶するのだった。

斑鳩は興奮冷めぬ顔を覆いながら、恋人関係となった理との関係を想像しようとして——、飛鳥への想いからその想像を断ち切る。

（駄目駄目、駄目です！ 飛鳥さんは結城さんを想っているのです！

わ、わたくしが結城さんとなんて——！）

しかし、一度走り出した想像は止まらない。幼いころから修行に明け暮れ、恋愛など本の中でしか見たことが無い彼女だ。無駄に発達したピンク色の想像力——或いは妄想力——により、キヤツキヤウフフな恋人生活が思い描かれる。

その妄想を思い描いているうちに、斑鳩はある事実に気が付いた。

「これなら——！ ツ、いえいえ、これはあくまで、結城さんへのお礼の一環です。ええ、一環なのです……」

ぶつぶつと呟きながら、早速その作業に取り掛かる為に部屋を出ていく斑鳩は、壁に埋め込まれた義兄になど最早目もくれていない。意識を取り戻して、壁から這い出してきた村雨は再び溜息を一つ吐き出すのだった。

「全く……、媚探しも党首としての責務の一環だろうに……。あの二人をくつつけるには、骨が折れそうだ」

未だ不安定とはいえ、結城理は人を救う力を持った人間だ。村雨もその恩恵に与った一人であり、彼が居なければこうして義妹にツッコまれる日常など有り得なかつただろう。

また同時に、彼には人を惹きつける魅力が有る。今でこそ半蔵学院忍学科内に留まっているが、アレは近い将来様々な女を惹きつけるに違いないと、村雨は確信していた。

「……まあいい。お前の行く末を見届けさせてもらうぞ、結城」

村雨は理の事を、此処で初めて名前で呼ぶ。それは、彼が理を対等な存在であると認めた証だった。因みに、理が村雨に対しタメ口で話しかけているのも、実は内心で対等だと認めている証拠だったりする。

年上に対して不遜だと言いたい気持ちが無い訳ではないが、鳳凰財閥の次期社長という自分に対し、こうも対等に接する知人を始めて得たのは初めてだった。彼は決して認めないだろうが、理に感謝しているに違いない。……男のツンデレなど需要は無いのだが。

「取り敢えずは、俺も大学に行くか。レポートを早めに切り上げて、結城のカリキュラムを組んでやろう」

村雨もまた、己の日常に帰ることにする。そこには新たに一人の人間が含まれており、しかし決して不快なものではない。彼もまた、理に惹かれた人間の一人であった。

斑鳩、そして村雨。法令や規律を厳守し、しかし信頼と優しさ、思いやりを持つ、人を導く者——『ほうおう法王』。それこそが、結城理が紡いだ『絆』なのだった。

——後日、結城理用の特別カリキュラム、勉学用のプリントを用意し、簡単な小テストを受けさせた村雨だったが、彼は其処で理の才能を垣間見る事となる。

「……オイ、お前マジでうちの会社に来いよ。給料とか融通してやるぞ？」

「内定ゲットだね。有り難く頂戴するよ」

そんな世の中の就職困難者が羨む会話が有ったとか無かったとか。



2009年 4月16日 昼――

「失礼いたします」

昼休みになって凡そ数分後、理が在籍する2年E組の教室に入室する者が現れる。途端に教室内は、昼休み特有の喧騒が静まり、入室してきた少女――斑鳩の美貌に誰もが見惚れていた。

斑鳩はそんな観衆に眼もくれる事無く――というか、気が付いていない――、真つ直ぐに理の下へと向けて歩いていった。丁度、理と談笑していた友人達も呆けて斑鳩を見つめている。勿論、理はそんな彼女の色香にやられる事など無く、寧ろボケつとした眼で彼女を見つめていた。

「……斑鳩先輩、表側こっちに来れたんですか？」

「ええ、別に制限など有りませんので。……そ、それよりも結城ちゃん！」

「（……噛んだ）ええと、何でしょう？」

そこで斑鳩は真つ赤な顔をして、手に提げていた包みを理に差し出した。その手はプルプルと震え、今にも取り落としそうであった為に慌てて受け取るが、その際に斑鳩の手に触れ、彼女の身体が大きく跳ねる。

「おつとと……。コレはっ。」

「お……お弁当です！ 結城さん、昨日の夜色々あって、お弁当を作れなかったようなので――」

「「お弁当!」 それに夜に色々あった?！」

何人かのクラスメイト達が、斑鳩の言葉に過敏に反応する。何か盛大に勘違いされているようであったが、これはそう簡単に弁明出来るものではないと判断し、今は無視することにする。

理にとっては、クラスメイトよりも斑鳩との交流の方が幾分か優先

すべきものであった。

「そ、それでは失礼しました！ 後で感想を聞かせて下さいね、結城さん！」

斑鳩はふらふらとした足取りで教室を後にした。残されたのは、高級感溢れる黒い包みに包まれた弁当を持って満足気な理と、呆気にとられたままのクラスメイト達である。

そこで漸く再起動したクラスメイト達が、一斉に理の机の周りに群がった。

「オイコラ結城！ お前あんな美人さんと一体何時の間に知り合ったんだよ！」

「しかも弁当を作って貰える仲だとツ！」

「うちの学校にあんな美人が居ただなんて……！ しかも巨乳ツ！」

詰め寄ってくるクラスメイト達——主に男性陣である——をあしらう為、理は当たり障りのない言葉でこの場を切り抜けようとする。

斑鳩は忍という裏の世界の住人である為、必要以上に目立つことは好ましく無い筈だ。ならば、こう返答すべきであろう。

「……どうでもいいだろう？」

「「どうでもいいことあるかアツ!!」」

駄目だった。男性陣だけでなく女性陣からもツッコまれたことに首を傾げているあたり、理のコミュ能力の改善は遙か未来の事の様である。

まあそれは兎も角、早速この弁当を頂く事にしよう——、そう思い、理は弁当の包みを解いていく。何人かのクラスメイトも、開封作業を興味津々に見つめていた。

……そして次の瞬間、理を除く彼らの絶叫が、教室中に響き渡った

「……………妖○グルメ？」

何とか声を絞り出した理の第一声はそれであった。ほのかに香る料理の匂いは食欲をそそり、出来立ての暖かい物だと察することが出来る。

弁当箱も漆塗りの重箱であり、高々弁当に使うようものではなかつ

た。彼女の家柄上、仕方の無いことだと内心可笑しく感じてしまう。しかし、そのビジュアルが全てを台無しにしていた。何処から如何見てもモザイク必須の悍ましいモノであり、所々から触手——恐らくイカカタコ、というかそうであつて欲しい——がうねうねと伸びている。

このビジュアルを直視してしまったクラスメイトは漏れなくS A N値直葬され、意識を手放している。酷い場合は虚ろな目で虚空を見上げて、いあいあと外なる神に祈りを捧げる始末だ。

因みに、理の呟いた言葉は邪神に献上すべき食物の名前だったりする。

「……コレ、食うのか？」

辛うじて発狂を逃れたアゴヒゲ帽子のクラスメイトが、心配そうに理に話しかけてくる。

無論理だつてコレを口にするのは勘弁してもらいたい。許されるならば、食材となつた筈の動植物に対して懺悔をするよう説教をしてやりたい程である。

……しかし、……しかしそれでも、この料理は仲間である斑鳩作なのだ。仲間への恩義と、冒瀆的な料理への忌避感を天秤にかけ、理が掲げたのは——

「……いただきます」

この斑鳩作の弁当を、食することであつた。その覚悟に、発狂を逃れたクラスメイト達は押し黙っていた。

震える箸で弁当？ を突つつこうとする様子は、まるで未知の生物や物質を採取する科学者のそれだ。惜しむらくは、その採取するモノが食材であり、己の胃袋へと保管しなければならぬ事か。

箸の先にほんの少し、最早元が何であつたのかさえ分からないナニカを掬い上げ、ゆつくりと口元へと運んで行く。普段から無表情である筈の理でさえ、この時ばかりは顔を青くしていた。

そしてそのナニカを、意を決して口内に放り込む。誰もが呼吸さえ忘れてその所業を見入っていた。

——彼らは祈る。深淵を垣間見て、狂気へと墜ちたクラスメイ

ト達が崇拜する邪神群でなく、人類に救済を齎す神々へと祈るのだ。嗚呼願わくば、この愚かにして偉大なる少年にどうか慈悲を与えたまえ——（※注：メシ食ってるだけです）

「あ、結構イケる」

「「嘘オっ!?!」」

果たして、その祈りは願い届けられたのかは定かではない。



深い森の中、少女はただひたすらに己を磨き上げていた。肉体を、精神を、技量を。彼女が眼差すものはただ一つ。

『最強』——、言葉にすれば陳腐だが、その称号を手に入れるためには、彼女はどんなものでも投げ打つ覚悟があった。

だからこそ彼女は今、己の身体を酷使し、切磋琢磨し、その武芸を研磨しているのだ。その技量は、確かに日進月歩で成長しているのだろう。

しかし、それでも彼女は満たされない。

（つまらない。来る日も来る日も訓練ばかり——）

そう、所詮彼女が行っているのは、実践を伴わない単なる訓練ではない。

長く艶やかな金髪を靡かせて、彼女の脚が頭上に吊るされていた的を蹴り碎く。それは、今回の修行が終了したことを示していた。

だが勿論、彼女の顔が晴れる事など無い。寧ろ、追加のトレーニングメニューを組もうとしている。

「斑鳩もペルソナが使える様になったんだ、アタイにだって……!」

彼女——葛城は仲間であり、ライバルであり、親友でもあった彼女の思わぬ成長に焦りを募らせ、しかし目指すべき目標が出来たことに喜んでもいる。

つい最近になって表れ始めた化け物『シャドウ』。葛城はその存在に恐怖を覚えながらも、それを乗り越え、討伐すべきものであると己を鼓舞することが出来ていた。

あの存在を打倒してこそ、己の目指すべき『最強』にへと近付けるに違いない——、そんな妄執が今の葛城を支え続けている。

「待ってるよ、斑鳩、結城！ アタイだって、すぐにペルソナを使える様になってみせるんだからな！」

更なる力への渴望を漂わせ、いそいそと次の的を用意しようとする葛城。その姿を見たならば、仲間達は何を思うのだろう。

葛城は気付く事など無い。その修行が無意味なオーバーワークでしかないことを。今の彼女は最早、自分しか見えていなかった。

そして何よりも、葛城は己が何のために強くなろうとしている事を、忘れてしまっているのだった——

18話 任務と葛藤の狭間

2009年 4月17日 『影結界』

「《オルフェウス》！」

「《ヴィゾヴニル》！」

理と斑鳩、二人の声が重なる。詩人と翼人、召喚されし二体の亜人は彼らの意思に従い、魔力を集中し、秘められた能力^{スキル}を解放する。

「《アギ》——」

瞬間、闇夜を照らすほどに紅い二つの火炎魔法が放たれ、周囲に群がるシャドウを駆逐していく。しかし、同じ魔法を同時に放っただけである為、《範囲系》や《拡散系》^{ラディ}の様にはいかず、どうしても撃ち漏らしが発生する。

だが、彼らは取り乱すことなど無い。

「雲雀っ！」

「……うんっ！ 右から二つ、来るよっ！」

「まかせて！ やあっ！」

《アギ》を逃れ、此方へと突撃してきた二体のシャドウを雲雀が感知し、飛鳥が迎撃する。なお、柳生は雲雀の護衛であった。

未だペルソナ能力を獲得してない飛鳥であるが、シャドウへの攻撃能力を何故か有しており、尚且つ彼女の『半蔵流剣術』は手数と防御、高速機動に優れている為、理は彼女を遊撃役として任命していた。そして、素早い二刀の斬撃はあっさりとしシャドウを切り裂き、殲滅する。それを見届けた理は息を吐き、片手剣を振るってシャドウの体液を拭くと、雲雀の方を見るのだった。

「……どう？」

「大丈夫っ！ これでシャドウは全滅したよっ、お疲れ様っ♪」

理よりも優れる雲雀の感知能力は、周囲に存在していた全てのシャドウが消えて無くなったことを示し、其処で漸く彼らは気を休めることが出来た。

この様にして、彼ら『半蔵学院忍学科』改め『シャドウ討伐隊』の戦闘は終了する。理はいつも通り無表情のままであるが、その他のメ

ンバーは喜色の笑みを浮かべている。

特に斑鳩は、会得したペルソナ能力の力強さを改めて実感し、自らもこのシャドウ討伐に力になれることを、引いてはそれが理の助けになることに、喜びを露わにするのだった。

しかしこの場において、一人だけその輪に加われない者が居る――

「……ちくしょう」

誰であろう、先程の戦闘において、唯一役割を与えられなかった葛城であった――



斑鳩がペルソナ能力を会得したことは、善忍の組織においては少くない衝撃を齎していた。

当然と言えば当然である。結城理だけが有すると思われていたペルソナ能力が、別の人間にも発現したからだ。彼らはこぞって斑鳩の身体を調べようとした。

しかし、彼女はかの鳳凰財閥の――養子とはいえ――次期党首である。手荒な真似をするなど出来る筈もなく、担当教師である霧夜からの口添えも有り、現状では経過報告を義務付けられただけに留まっていた。

そもそもペルソナ能力を発現した以上、彼女らは理を含めて2名しかいない対シャドウ戦力である。シャドウの脅威が未だ取り除かれていない現状で、彼らに負担を掛ける訳には行かないのだ。

兎にも角にも、斑鳩に与えられた最初の使命は、そのペルソナ能力《ヴィゾヴニル》の性能を把握することであった。

「まさか昨日の今日で、実戦投入されるとは思っていませんでしたが……」

「いい加減シャドウ討伐をサボり過ぎてたから、いい機会でした」

理の言う通り、彼らは本来行う筈であったシャドウ討伐を怠っていたのだ。尤も、大型シャドウや『斑鳩の影』の出現といった大事が起

こつた以上、仕方の無い事だとは誰もが理解しているが。それでも、人類の害となるシャドウを放置するのは、流石に憚られたのだった。「それで、ペルソナを使ってみた感想はどうでしょう？ 斑鳩先輩」「どうもこうも……、凄まじい力としか言いようがありません。この力さえあれば、わたくしもシャドウ討伐に十分力を貸すことが出来るでしょう。……ただ」

「《オルフェウス》とのスキル被り、力不足、そして俺のペルソナ能力との差異、といった所ですか？」

「……御名答、です」

理は斑鳩が感じていた不安や疑問をつらつらと列挙し、彼女を僅かに苦笑させる。現場指揮官として任命された彼の観察眼は伊達ではないのだ。それらの不安点は、彼女の《ヴィゾヴニル》の戦い方を見た当初から気付いていた。

第一に、《オルフェウス》と《ヴィゾヴニル》のスキルが類似する点である。この二体は互いに、《火炎魔法》及び《回復魔法》の魔法スキル有しているのだ。これでは、火炎耐性を持つシャドウと出会った場合に問題となるだろう。

なお、《ヴィゾヴニル》は《攻撃弱化》の様な補助スキルは有していない。物理スキルこそ《突撃》と《スラッシュ》に分かれているが、そこで二番目の問題が浮上する。ペルソナ能力に目覚めたばかりの斑鳩では、如何せんステータスが理と比べ貧弱なのだった。

尤も、これらの問題を理自身はあまり気にしていない。これから彼女と共にシャドウ討伐を行うことで、順調にレベルアップが出来ると確信しているからだ。《アギ》は兎も角、回復スキルは幾らあっても問題は無いだろうし、そもそもスキル構成が似ているという事は、ポジションに変わりが効くという事である。理と斑鳩は、先の戦闘では互いに前衛・後衛を入れ替えながら戦っていた。

「俺はやっぱり後衛向きですね、《魔》のステータスも高いようすし」「それならわたくしは、《速》に秀でているようすです。基本はわたくしを前衛としましょう」

この様に会話を交わし、対シャドウ戦における戦術は次第に定まっ

ていくのだった。

……しかし、その彼らであっても、互いのペルソナ能力に差異が存在するのは説明が付かなかった。理が『召喚器』を用いてペルソナ召喚を行うのに対し、斑鳩はその道具に頼ることなく、己の身一つでペルソナを召喚したのだ。

斑鳩の場合、意識を集中させると眼前に現れるペルソナカードを飛燕で切り払い、打ち砕くことで、『ヴィゾヴニル』は召喚される。対して理は、彼女の様な『召喚器』を使わないペルソナ召喚を行うことが出来ないのだった。

しかし、斑鳩もまた召喚器によるペルソナ召喚を行うことは出来なかった。……正確には、召喚器の引き金を引く事自体が出来なかったのだが。斑鳩は召喚器を手に持ち、銃口を額に突き付けると即座に恐慌状態に陥り、召喚器を取り落してしまった。

彼女は言う、「結城さんはあの『死』の恐怖に抗って、引き金を引いているか」と。どうやら、召喚器を突き付けられた人間は、酷い『死』のイメージに充てられるらしい。実際に、忍学科メンバー全員が試したところ、誰一人として引き金を引くことが出来なかったのだから。いずれにせよ確かなことは、能力の向上や差異の調査を含め、ペルソナ能力はまだまだ考察の余地があるという事なのだった。



2009年 4月18日 昼

「葛城先輩の様子がおかしい?」

「うん……」

翌日の昼、理は飛鳥に相談を受けていた。例によって昼休みに弁当を持参され、それを名目として二人きりで退室。屋上での食事会だ。勿論飛鳥がこの場に居るのは監視の一環なのだが、昨日の斑鳩の弁当作りを見て、何やら対抗心を燃やしたらしい。弁当の内容は手作りの太巻きである。

当然の如くクラスメイトからは懐疑の視線を――まるで仇を見る

ような眼で見られた——向けられたが、そこは持ち前の精神でスルーしていた。

「そう言われてもな……、普段一緒に居る飛鳥達に分らなければ、俺に分かる筈無いし……」

「ううん、かつ姉は普段から悩むなんていう人じゃないの。あんなかつ姉を見るのは私も初めてだから、どうしていいのか……」

互いに弁当を交換しつつ、その味に舌鼓を打ちながらも、二人の間に流れる空気は暗い物だ。理作の卵焼きは絶品であるのだろうが、こんな空気では美味しさは半減である。その事実にもまた、飛鳥は重い溜息を吐く。

太巻きを齧りつつ、理はふと思いついたように飛鳥に視線を向け、この重い空気を少しでも払拭出来るよう問いかけた。

「改めて聞くけど、葛城先輩ってどういう人？」

「え？ うーん……、そうだね、凄くいい人だよ。姉貴肌っていうのかな、とつても強くて私達を引っ張ってくれるの。……あ、でもあのセクハラ趣味はちよつと遠慮したいけど」

「セクハラ……？」

葛城の人となりを図る筈であった問い掛けは、聞き逃すことの出来ない不穏な単語によって怪しい方向へ誘導されかける理である。

飛鳥の話聞く限り、自己紹介の時にも言っていたセクハラ趣味は、どうやら冗談ではなかったらしい。胡乱な眼を向ける理をどう受け取ったのか、飛鳥は自分が知る限りの葛城の趣味趣向を列挙しているのだった。

「好きな食べ物ラーメンで……あ、これは知ってたかな？ 戦闘では両足の具足を使って戦う……これも知ってるよね。」

「なら……誕生日は11月5日の18歳、血液型はB、身長165センチ……結城くんと同じくらいだね。スリーサイズは上から——」

「待て待てストップストップそこまで」

しかし、余りにもあんなまりな情報を提出し始めた飛鳥を諫めるために、理ですらツツコミに回らざるを得なかった。そんなもん聞いて

も、何の役にも立ちそうにないのだが。

話を遮られ、不満そうな視線を向けてくる飛鳥を尻目に、理は水筒のお茶で唇を湿らせてから再び口を開く。

「……まあ、葛城先輩が後輩に慕われる人だっていうのは分かったよ。兎に角、暫くは様子を見よう」

「でも、大丈夫かな……？ 斑鳩さんの時だって、今のかつ姉みたいに不安定な所を狙って、シャドウを暴走させたんでしょ？」

「その時はその時だね。現状、『影抜き』を行ってくる奴を捕縛するのも俺達の任務だ」

かつて斑鳩がその身のシャドウを暴走させた際、第三者による干渉が有ったのだという。

信じられないことに彼は——正体不明の為、弁座上『彼』と明記する——忍学科の校舎内に潜入し、斑鳩を背後から奇襲、そして彼女のシャドウを暴走させるという離れ業をやったのけているのだ。

特に理は、他の人間のシャドウを暴走させたその御業を特別視し、『影抜き』という名で呼んでいる。飛鳥達もそれに倣って呼び、その技を畏れていた。……あと、どうでもいいが理のネーミングセンスにも感銘を受けていた。

「……かつ姉は、囷おとりってこと？」

「……悪い、あんまりいい気分じゃないだろうな」

「いや、別に大丈夫だけど……」

結城理は、とても理知的な人間だ。現時点で有している情報や戦力を吟味し、最適な行動を取ることが出来るのが彼の絶対的な強みである。

だからこそ、飛鳥は理を信用している。彼とて、仲間を囷に使うような作戦など気が進まないのは見て取れるし、叶うならばその立場を変わってやりたくも有るのだろう。飛鳥も同じ気持ちだった。

尤も、この二人では敵をおびき寄せる囷としては不資格なので、その願いは叶わないのだが。

「俺に出来るのは、シャドウ討伐の様な戦闘面だけだ。……人間関係は、まだ苦手だな」

「そうかな？ 初めて会った頃に比べると、結城くんはちゃんと私達とコミュニケーションを取れてると思うよ。」

「……そうだとしても、俺じゃあ葛城先輩に対して何か出来そうにな
いよ。……悪い」

「あ、謝らなくていいってばあつ?!」

結局、二人して葛城の不信感を如何にかする方法は、ついぞ思いつ
かなかつた。

そして、精々が食事会を通して理と飛鳥、二人の距離が縮まったと
いう、ある意味では有意義とも言えなくもない会合となつたのだつ
た。

「ところで……、何でまた弁当なんか作ってきたの？」

「だって斑鳩さんが結城くんにお弁当を作つたつて言うから、私だつ
て……」

「ふうん……」

「あと、斑鳩さんがまたあのイカモノ弁当を作っていたから、慌てて押
し止めて、私がお弁当を持っていくつて説得したの」

「それはグツジョブ。いやホントに……」

丁度その頃、何処かの大学の食堂内で余つたからと押し付けられた
弁当を開封した某義兄が絶叫を上げていたが、彼らの知る所ではな
い。

「そういうえば、私達がご飯食べてるのを覗き見してる結城くんのクラ
スメイトが居るけど、どうしよう?」

「……放っておきなよ。特に、太巻きを食べてる飛鳥を見ている様な
男性陣はさ」
バカども

「え? じゃあ、結城くんが太巻きを食べているのを見ている女の子
達は——」

「そつちらはもつと気にしなくていいから?!」

結城理、天然ボケ気味な彼の性格では、それを上回る天然ボケ——
言わずもがな、飛鳥である——と邂逅した場合、ツツコミに回ること
になるという現象が立証された瞬間である。

2009年 4月18日 深夜――

◆
今日も今日とて、シャドウ討伐である。昨日の様に、前衛を斑鳩、後衛を理とし、索敵を雲雀、護衛を柳生、遊撃に飛鳥を置いての布陣だ。……葛城は、補欠扱いである。

無論、この場に居る誰もが彼女がその立場に甘んじていない事は気付いている。だが、どうしようもないことだ。この布陣を崩せば、即座に誰かが命の危険に晒される事は間違いないのだから。

「……えっと、かつ姉、大丈夫？」

「……ああ」

そんな葛城に飛鳥が心配そうに声を掛けるが、返答は素っ気無い物だった。

集団行動中において、彼女の様な態度は良く無い物だ。全体の士気に係わり、シャドウ討伐に対するモチベーションが削がれていく。そして最終的に、命に係わるミスへと直結しかねないのだ。

さしもの現場リーダーである理も、この様な人間の感情に対してどのようなアプローチを掛ければいいのか皆目見当が付かない。そもそも、アプローチできる人間が存在するのか。コレはそういう類の話なのだ。

「……今日は此処までだ」

「ハアッ?!」

討伐を初めて大した時間は経っていないが、理は此処で切り上げることを宣言する。それに抗議の声を発したのは、当然葛城だった。

葛城は理の眼前にまで歩み寄って、胸ぐらをつかみ上げる。普段の彼女ならば、この様な暴拳に出るなど有り得ないだろう。相当にストレスが溜まっている証拠だ。

「どういうつもりだ結城イ！ まだ少ししか経っていないぞ！ それなのに、もう終わりだったのか!？」

「……その通りですよ、葛城先輩。今日、これ以上の討伐は無意味だと

判断しました」

理は淡々とした口調で、事実だけを述べる。これ以上の探索・討伐は、このチームの士気の低下を招く。そして、それ以上に――

「……………アタイの所為だっていうのか」

「それは……………」

葛城は歯を砕かんばかりに噛み締める。唇の端から一筋の血が流れ、地面へと落ちた。彼女の悔恨の念は、察して余りある――否、理にはそれを察することなど出来ない。

持つ者と持たざる者、二つが相成ることは無いのだから。理以外の彼女達ですら、葛城に掛ける言葉を見付けることが出来ずに、彼らのやり取りを遠巻きに見ることしか出来なかった。

「…………ハ、結城は分かりやすいな。こんな間近で視線を逸らしたら、やましいことが有るって白状してる様なモンだぜ？」

「……………」

彼女の言う通りだった。鼻がくっつくほどまでに接近していると、いうのに、凄まじいまでの激情を宿す青い双眸に射抜かれ、理は堪らず顔を背けたのだ。

「分かってるさ、アタイには力がねえ。ポジション的に、この布陣の先頭に立つことだって出来ない。ははは…………、情けないったらありやしねえ」

「っ、そんなこと――」

「慰めなんていらねえよ、これはアタイの我儘だったのは分かってる。

…………けどな、それでも我慢ならねえってのはあるんだ」

ままならないモノだ、とその場に居る誰もが思う。葛城が何の力持たない少女ならば、彼女の慰めもやりようが有っただろう。尤も、力が無ければ初めから忍及びシャドウ云々に関われないのだ。が。

力が有るからこそ、力が無いことに苦しむ。その擦れ違いが確執を生み、確執は死を招く。そして、その死を免れるために擦れ違いが生まれる。それは、何とも皮肉な悪循環だった。

「力が欲しい……………」

ぼつりと、葛城は呟く。小さな声ながら、彼女の心の底からの絶叫だった。

「シャドウにも悪忍にも負けたくない、確かな力がアタイは欲しい！」

……アタイは、お前が羨ましいよ、結城」

絞り出すような声で葛城は己の心情を吐露した。力無き少女は、力を有する少年を羨望の眼差しで見つめたのだ。

「……………」

「……………結城？」

だが不意に、理は表情を歪める。それは、彼女たちと過ごす様になって、僅かずつでも感情を表す様になってきた彼が時折見せる、強い激情の色。

シャドウを打ち倒す時に見せる狂気ではない。斑鳩を救った時の様な慈愛でもない。彼が浮かべる表情は、苦悶のそれだ。今の彼が抱える感情は、絶望なのだった。

胸ぐらを掴み上げて顔を寄せていた葛城だけが、それを目の当たりにする。理のそんな姿を見ただけで、血の上つていた頭が冷えて、冷静さを取り戻した。

だが、既に遅かった。葛城は、結城理が抱えるそれに触れてしまったのだ。彼の、奈落よりもなお深い、深淵の如き心の闇を――

「……………くそっ！」

「ちよっ?! かっ姉っ！」

葛城は理を放り出して解放すると、仲間たちに背を向けて、闇夜の街へと走り去ってしまった。だがそれは、言うまでも無く自殺行為である。

現時刻である午前零時の時間帯、この街はいつどこに居てもシャドウに襲われても可笑しくない魔境と化しているからだ。飛鳥もそれを理解しているのか、葛城を追って駆け出して行った。

「葛城さん！ 飛鳥さんも！ 追いますよ、皆さん！」

「……………ああ」

斑鳩は解放された勢いで尻餅を付いていた理を助け起こし、彼女達の後を追う様に言う。彼もそれに逆らう事無く、素直に従うのだっ

た。

しかし今の理の心中では、複雑な感情が渦巻いていた。己のトラウマに触れた葛城に対する嫌悪感も確かに存在するのだが、それは微々たるものだ。

今の理が抱くのは不得手な筈の、葛城の心中を察しようとする想いだった。

「葛城先輩、この能力は、決していいモノじゃないんだ」

理が戦うのは、絆を紡いだ彼女達を護るためだ。しかしそれはあくまでも戦う理由であり、能力を振るう理由にはならない。

だからこそ理は、葛城が力を欲する理由を知りたかった。自身が嫌悪するこのペルソナ能力を、そこまで求める理由を――

「……貴女はどうして、そこまで力を求めようとするんだ」

かつて葛城は模擬戦を通じて、理にその在り方を問うた事が有る。感情が薄く、淡々と、死ぬように生きていた彼女を彼女は不気味がった。

今でもその価値観は、消え去った訳でも、鳴りを潜めている訳でもない。しかしそれでも、変わることが出来たのだと理は感じている。他ならぬ、彼女達のお蔭で――

尤も、理には理の戦う理由が有る様に、葛城には葛城の戦う理由が有り、それを理解しようとするなど烏滸がましい事なのかもしれない。

だが、ただ一つ分かることが有るとすれば――

「っ！ 結城さんっ！」

「分かってる。葛城先輩達の方から『真影結界』が展開されたね」

そう、シチュエーションは整っている。葛城の揺れ動く心、衝動的な単独行動、そして午前零時という時間帯。

理達が標的とする、斑鳩を襲った『彼』の襲撃が十分に予見出来た。今の葛城は、間違いなく格好の獲物なのだろう。力を得られるチャンスとなる『影抜き』を行われるのが葛城というのは、果たして幸か不幸なのか。

少なくとも、今の不安定な葛城では不幸な顛末となるのは想像に難くない。そして、そうさせない為にこの能力は有るのだと、理は確信

を持って言える。

「貴女を、俺の仲間を此処で死なせる訳には行かない——！」

展開された『真影結界』が迫り、理達を飲み込み、引きずり込む。彼ら全員がその力の奔流に眼を開けていられなくなり、瞼を閉じて耐える。そして眼を開ければ、既に周囲は異界と化していた。

其処は、以前の『斑鳩の影』の結界と同じく、赤黒い縞模様の中だ。しかし、周囲の風景は全く違っている。何処か深い森の奥の様であり、理達はその内部の開けた空き地に集められていた。

辺りには木製の案山子や的、武器と云ったものが散乱しており、この場が本来どういったものかを堅実に表している。

「此処は……、葛城さんがよく使用する修行場ですね。見覚えが有ります」

己の心象風景を開示する『真影結界』を唯一展開している斑鳩はその光景を観て、納得した様に呟いた。つまりは、この光景こそが葛城の本質であり、心の闇であるのだ。

当然その中心地には葛城と、『葛城の影』の姿があり、ついでに傍らには飛鳥の姿もある。

「飛鳥」

「あつ、結城くん。……御免なさい、例の人は発見できなかったよ……」

「それは別にいいよ。俺だって一回二回で発見できるほど楽観してない。それより——」

「うん、かつ姉の事だよ。私が来た時には、もうシャドウが現れた。後はかつ姉次第だけど……」

どうやら飛鳥は、葛城に干渉するつもりは無いらしい。葛城に気付かれる事無く、その様子を固唾を飲んで見守っていたようだ。しかし

『ツハ！ 無様だなあ、アタイ？ アタイを受け入れるって言っておきなながら、全然出来てねエゼ？』

「うるさい！ お前は黙ってアタイに従って、力を寄越せばいいんだ！ そうすれば、アタイにだって——」

『口だけなら何とでも言えるぜ？ それなのにアタイを制御できないのは、心が否定しているからだ。ハハハッ、分かっているのに出来ないってのは辛いねエ。そう思わないか、お前さん達？』
「!?」

危惧した通り、或いは予想通り、葛城は己のシャドウを制御できていない様であった。『葛城の影』に忠告されて、漸く飛鳥や理達の姿に気付く辺り、視野も狭まっている有様だ。

『カカカ、今のみつともないアタイを見て、お仲間さん達はどう思うのかねエ？ 失望？ 侮蔑？ 単純に呆れているかもなア？』

「ッ、み、見るなあ!?」

葛城は仲間達の姿を見て驚愕を露わにし、顔を青ざめる。『葛城の影』の言う通り、みつともない自分の姿を晒したことを恥じているようだった。

「葛城さん、落ち着いてください！ そうやって煽り、自身に否定させるのがそいつらの目的です！ そのままじゃ——！」

「かつ姉、しっかりして！ 何時ものかつ姉だったら、そんな奴に言い負かされる筈が無いよ！」

斑鳩や飛鳥は、葛城を励ますように声援を掛ける。だが、錯乱しかけている今の葛城には届かない。

『さあさあ、見せつけてやろうぜ？ 餓鬼みてエに駄々捏ねて、力を欲しがるアタイの姿をよ？ 傑作だぜ！』

「黙れえええッ！」

そして、激昂した葛城は遂に『葛城の影』を攻撃してしまった。それも、得意とする足技などでなく、拳で殴りつけるという混乱の極みに有るモノだ。

当然、『葛城の影』にダメージを与えられるようなものではなく、それどころか当の『葛城の影』はへらへらと笑っている始末だった。

『ハッハアッ♪ そう、それだよ！ お前が、アタイが求めているのは、そんな暴力——絶対的な力なんだ！』

「っ、違——」

『違わないさ！ 何もかもぶっ壊す様な力を求めているのが、アタイ

——『葛城』なんだよオ!!』

「違う! 違う違う違う! アタイが欲しかったのはそんな力じゃない! アタイは、アタイは——」

葛城は、己の影の言葉を否定することが出来ずにいた。当たり前だ。どんなに取り繕おうとも、たとえ暴走していようとも、『葛城の影』は葛城の内面の一つなのだ。

その言葉、その思想、その願望。それら全てが葛城の中に燻っていたものであるのだから。だからこそ、葛城は『葛城の影』の言葉を否定出来ない。出来る筈が無い。故に——

「お前は、アタイなんかじゃない!!」

葛城は激情のままに叫び、己の影を否定するのだった。そして、『葛城の影』は否定され、本体から切り離されることよって己の存在を確立する——!

『ツク、ハハハハハハ! そうだ! アタイはお前じゃない、アタイはアタイ、唯一の存在だ!』

「っ、葛城さん! 逃げ——!」

斑鳩が叫ぶが、既に遅い。確固たる存在となった『葛城の影』が膨大な闇に包まれ、新たな己の形を創り上げていく。その力の奔流に目の前で晒される形となった葛城は勢い良く吹き飛ばされ、気を失ったようだった。

「そんな!? どうしてこうなっちゃうの!」

飛鳥はそんな光景に驚愕している。葛城を信じ、手を出さずにいたというのに、その結果がこれだ。到底納得できるものではないだろう。

もしも自分が葛城を手助けしていたら、或いは様子が可笑しくなっていた先日の時点で葛城を気にかけていたら、如何にかなったのではないか。彼女は、そのようなIFを想像してしまう。

「私の所為なの……?」

不甲斐なさからそんな言葉が口から漏れるが、しかしそれを否定するものが居る。他ならぬ、結城理その人だ。

「……違うさ、飛鳥」

「結城くん、でも、私がいじつかりしていればかつ姉は——」

「だったら俺も同罪だよ。俺だって何も出来なかったんだから。それならまずは、俺を責める方が先だと思うけどね？」

「……その言い方はズルいと思うな。結城くんを責めるなんて、出来る筈無いじゃない」

「なら、飛鳥だって気に病む必要は無いよ。責める必要があるとしたら、この事態を引き起こした奴さ。……葛城先輩だって、その被害者に過ぎないんだ」

理は淡々とした口調で、事実のみを口にする。とても人を励ますような雰囲気や声色でもないが、その透き通るような声は人を安心させる響きが有った。

「うんっ、そうかもね」

そんな僅かな会話だけで落ち着いてしまう辺り、飛鳥の理に対する信頼が見て取れるのだった。……もしくは、単に飛鳥がドが付くほど単純なだけなのかもしれないが。

「それで、私はどうすればいいの？」

「気絶した葛城先輩を保護して、安全確保。アイツの相手は、俺と斑鳩先輩でやる」

「なら、オレと雲雀はどうすればいい？」

「同じく、葛城先輩の護衛だ。出来れば援護をして欲しいけど——」

理はそこで一度言葉を切り、闇の中から姿を現した『葛城の影』の姿を見据えながら言葉を紡ぐのだった。

「……贅沢は言ってられそうにないな」

現れたその姿は、正に『竜』そのものだ。ただしそれは、一般的な四足のドラゴン型ではなく、有翼の蛇という、俗にリントヴルム、或いはワーム・ウィルムと呼ばれる姿である。『葛城の影』は、そこに更に屈強な両腕を追加した形態を取っていたのだ。

そしてその^{アキト}顎からは、丸呑みにされる様な最中の長髪の少女の体軀が逆さ吊りとなってはみ出しており、その部分が何を表すのか言うまでもない。『本能に飲み込まれる理性』、そんな葛城の心の闇だ。

『我は影、真なる我——。きア！ 何もかもぶっ壊してやるよオツ!!』

『破壊衝動』、単純明快なその心象は、このシャドウの圧倒的なまでの戦闘能力を表していた。このシャドウは、『斑鳩の影』よりも更に強大なのだ。

だが、背を向ける訳など行かない。今の理と斑鳩の後ろには、守るべき仲間たちが居るのだから。二人は同時に駆け出し、シャドウに対抗すべきその能力を発現させる。

「行きますよ、斑鳩先輩！ 《オルフェウス》！」

「ええ、結城さん！ 《ヴィゾヴニル》！」

彼らは違う事無く己のペルソナを顕現し、『葛城の影』を攻撃する。油断や慢心など無く、ただひたすらにこのシャドウの討伐を目的とするのだった。

——だが惜しむらくは、その一切合財が、このシャドウには通用しないという事だろう。

『ハハハ！ いいぜ、来いよオツ!!』 アタイはその全てをぶっ潰してぶっ壊してぶっ殺して、アタイこそが最強だって知らしめてやらあアツ!!!』

『葛城の影』はその竜の眼を持って、二人を睨みつける。瞬間、彼らの背に凄まじいまでの怖気が奔る。それは例えるなら、蛇に睨まれた蛙——否、そんな陳腐な表現などでは、絶対に有り得ない。あえて名付けるとしたら、それは、そう——

《龍の眼光》

理の《アギ》と斑鳩による秘伝忍法《凰火炎閃》、共に強大な炎の力を宿した攻撃は、『葛城の影』に対して有効な筈であった。

だが――

『――見切ったアツ！』

『葛城の影』は歓喜の声を上げると、その巨大な体軀をくねらせて、あろうことか二人の同時攻撃を回避して見せたのだ。

直線的な軌道で飛来する《アギ》を躲すのはまだ分かる。元より、理が放った《アギ》は牽制に過ぎず、斑鳩の《凰火炎閃》が本命であり、今日これまでのシャドウ討伐を通して得た連携攻撃である。

しかし、『葛城の影』はそれを回避した。彼らとてこの攻撃が決定打となるとは思っていないが、手札の一つを潰されたことに変わりは無い。そして同時に、それを悔やむ暇すら与えられないのだ。

『ハハハッ！ 今度はアタイのターンだ！ 行くぞオツ!!』
「ッ、また――!」

それは、戦闘が始まってから幾度となく味わった、悍ましいおぞい感覚。『葛城の影』の両眼が妖しく煌めき、二人は勿論、戦況を見守っている葛城達ですら身体が竦みあがるほどの重圧を感じる程だ。そして目に見えて二人の攻撃の手が鈍り始める。

肉体、精神に作用し、彼らの行動の手を鈍らせる程の重圧――否、ランダムマイザ《全能力弱化》を施したのだ。そして同時に自身の高速化、《二回行動》を獲得する。

その結果は単純にして明快。『相手を遅くし、自分を速くする』。言葉にすればそれだけだが、戦闘中においてこれほど強力なスキルは二つとして無いだろう。

能力の違いこそ有れど、それは何処かの世界、何時かの時代、近くて遠い場所にてこう呼ばれていたのだ。《龍の眼光》と――!・

『喰らえッ！』

「斑鳩先輩、俺の後ろに！ 踏ん張れえっ！」

『葛城の影』がその巨大な双翼を振り翳し、羽ばたかせることによって極大の烈風が発生する。《忘却の風》ほつきやくとでも名付けるべきその攻撃は、全体攻撃として彼ら全員に襲い掛かった。

「ぐ、うッ!？」

「結城さ——」

「動くな! じっとしてろ!」

理は敬語も忘れ、背後に庇う斑鳩に向けて警告する。それは彼女が『疾風属性』に弱いからだ。ここ数日の雑魚シヤドウとの戦闘を通じ、彼らは己の弱点についても把握している。

理は『電撃属性』に、斑鳩は『疾風属性』に弱く、この《忘却の風》はその『疾風属性』の魔法攻撃に他ならない。まともに受ければ間違いないくダウンし、あまつさえステータスの低い彼女では、そのまま致命的となる恐れがあったのだ。

無論、盾となった理にはこの攻撃が直撃する訳だが、それでも斑鳩が受けるより遥かにマシであり、消費する体力以外には問題は無かった。

しかし、烈風による攻撃である《忘却の風》は弱点属性ではない理でさえ、踏ん張っていないければやはり体勢を崩してしまい、結果として足を止めざるを得ない。

そして、その足を止めた隙を狙って、『葛城の影』は攻撃を仕掛けてくるのだった。

『ガアアアアアアアッッッ!!』

「しまっ——!?!」

彼らを襲ったのは、『葛城の影』の長大な尾。人間の胴体ほどの太さを持つそれは、鞭のように撓り、地面を這うようにして向かってくる。

瞬時に、理の《心眼》は警鐘を鳴らす。その意図を理解した彼は次の瞬間、信じられない行動に出たのだった。

「斑鳩先輩、失礼しますっ!」

「は? げふうッ!?!」

理は背に庇っていた筈の斑鳩を、あろうことか思い切り蹴飛ばしたのだ。その場に居る全員が何を、と思う暇も有ればこそ、その暴挙の意味をすぐさま理解する。

理へと迫る『葛城の影』の尾は、彼一人を狙ったものではなかったのだ。弧を描くようにして振るわれる尾は、理のみならず斑鳩すらも

捉えていただろう。

吹き飛ばされる斑鳩のほんの鼻先を高速で尾が掠め、彼女の前髪を揺らす。撃たれ弱い斑鳩がまともに喰らっていたならば、どうなっていたかなど考えたくもない。ならば、理は——？

「が……、はッ——?!」

「結城さんッ!」

無論、斑鳩を離脱させるまでが精一杯であった彼は、『葛城の影』の尾に打ち据えられていた。

脇腹の辺りに太い尾がめり込むようにし、その衝撃で理の身体はくの字に折れ曲がっている。みしり、などという筆舌に尽くし難い音まで聞こえる始末だ。そして理は、そのまま吹き飛ばされてしまう。

驚愕に彩られた表情を見せる斑鳩は、すぐさま体勢を立て直し、吹き飛ばされた理の救出へと向かおうとする。だが——

「駄目っ、斑鳩さん! 横に跳んでっ!」

「ッ!」

後方から発せられた指示のままに、斑鳩は理を追うことを中断し、右方へと身を投げ出す。次の瞬間、彼女が居た個所に《疾風魔法^ガ》が奔り抜けた。

言うまでも無くその魔法を扱う者は、この場において奴しかないない。

『チ、惜しいなア?』

「……く、邪魔を!」

《ガル》を放ったのは、勿論『葛城の影』だ。風の属性を持つ葛城のシヤドウであるからこそ、『葛城の影』も疾風魔法を発現させている。理が離脱した今、斑鳩一人で相手取るには最悪の相性だった。

だがしかし、相性の有無こそが戦闘での優劣を決める訳ではないのだ。

「斑鳩さんっ!」

「っ、ええー!」

『おおっ?』

再び聞こえてきた声に斑鳩は突き動かされる。誰であろうその声

は、雲雀のモノだ。この時すでに雲雀は斑鳩の横に並び立ち、二人組^{ツーマンセル}で行動することとしていた。

一人で居れば間違いなく『葛城の影』は自身の排除を優先するであろうし、下手をすれば柳生や葛城が巻き添えを喰う羽目となる。

それと比べたら、ペルソナ能力を持つ斑鳩の傍に立ち前線に出る方が幾分かマシなのだと、雲雀は判断したのだった。斑鳩もまた、感知能力に秀でた彼女の感覚を信じて、己の操縦を委ねることにする。

『ツハ、そんな急拵えのコンビなんかで、アタイに勝てるっても——』

「そっちこそ、私達に勝てるだなんて過信しないでねっ！」

『……あん?』

『葛城の影』は正面の斑鳩・雲雀コンビに顔を向けていた為、不意に背後から聞こえてきた声に訝しむ。それは、他ならぬ油断そのものだ。

「ペルソナ、《紅蓮刀》^{ぐれんとう}！」

「秘伝忍法、《半蔵流乱れ咲き》^{はんぞうりゅうみだぎ}！」

背後からの声——飛鳥は両手の脇差・柳緑花紅^{りゅうりよくかこう}に、理の《紅蓮刀》の火炎を宿し、『葛城の影』へと切り掛かる。

そして、秘伝忍法とペルソナ能力という二つの異能が合わさり、強力な『合体スキル』として昇華する！

「——《狂焰乱舞》^{きょうえんらんぶ}！」

『ぐおおおおおおおっつっつ?!?!?!』

さしもの『葛城の影』もこれには堪らず、苦痛の声を漏らす。

『葛城の影』が背後からの強襲に反応できなかったのは、吹き飛ばした理を完全に戦闘不能にしたのだという思い込みから来る油断だった。

実際には、理が吹き飛ばされた際にすぐさま飛鳥が飛び出して彼を受け止めていたのだ。尤も、飛鳥に受け止められなければ、どうなっていたのかは分からないが。

しかし、そういった不確定要素があろうとも、戦闘中に敵から意識を逸らす等烏滸がましい行為である。恐らくこのシャドウは『破壊衝

動』から産まれた故に、『破壊する』という過程にしか興味が無いのではないか。

だが――

((――浅い!))

ダメージこそ与えられたようだが、『葛城の影』そのものの体躯には目立った外傷が無く、飛鳥の斬撃はその堅牢な竜鱗に弾かれていたようだ。

しかし、それでもダメージを受けたという事は、このシャドウが『火炎属性』を弱点とすることなのだ。そうと分かれば、理の行動は早い。

「斑鳩先輩はそのまま雲雀と組んで、《アギ》で遠距離攻撃! 雲雀は探知で攻撃を受けない様に彼女を誘導して! 飛鳥は俺と来て、アイツを引き付けるんだ!」

「了解!」

『おおおつ! 舐めるなあああアアアアアツ!!』

事態は進展していく。雲雀と飛鳥、戦線へと新たに二人の間を組み込み、『葛城の影』と相對する。

戦いはまだ、始まったばかりだ――



「は、はは……。やるじゃねえか、結城も、皆も……。なんだよ、別に『最悪』って程でもないんじゃない?」

「そうかな?」

己のシャドウと対峙する仲間たちの姿を見て、葛城は呆れたように声を漏らす。だが、対する柳生の言葉は辛辣だった。

理達の『葛城の影』との戦闘において、それを柳生に最悪と評されたのはたった一つの要因に尽きる。

「おのれ結城め……。雲雀を戦線に出すなど……。!」

「そこかよ?!」

が、相変わらず雲雀を最優先とする柳生の思考に、葛城は思わず

ツツコミを入れた。

尤も、あのメンバーの中で雲雀は唯一ペルソナに相当する能力を持たない以上、仕方の無いことなのだが。

「まあ、それもあるが……。お前のシャドウの能力は厄介すぎる。正直、何時引っくり返されても可笑しくないぞ」

「…………ぐっ」

しかし、雲雀以外に関することならば柳生は冷静であった。この二人は戦線から一步引いてその戦況を見渡すことが出来ている。彼女達から見れば、今の状況は決して好転しているとは言いがたい。

柳生の言う通り、『葛城の影』の固有スキル《龍の眼光》は破格の能力だ。たった一度使われただけで、理が戦闘不能になる恐れさえあったのだ。次に使われて、無傷で済む保証など何処にも無い。

理の類稀なる指揮能力によって戦況を維持出来てはいるものの、それも果たして何時まで持つものか。その理でさえ、もう限界に等しい。先の『葛城の影』の一撃が、ノーダメージだったなど有り得ないのだから。

「く、どうすりゃいいんだよ、チクショウ……」

「…………葛城、お前がそれを言うのか？」

「は？ 何を——」

「お前は——あのシャドウもまた自分の力だと考えて、結城を倒したいと考えたんじゃないのか？」

「……………あ」

柳生は弱音を吐く葛城に非難の視線を向けて、こう言うのだった。きつかけは、ほんの数瞬間前の会話。『葛城の影』と互角に戦う理達を見て——否、互角にしか戦えない『葛城の影』を見て、失望の色を表したからだった。

今更『葛城の影』がもう一人の自分であることなど否定しようが無い。なればこそ、アレもまた自分の力なのだと、葛城は心の何処かで考えていたのかもしれない。それを、柳生の言葉で気付かされたのだ。

「あ、アタイは……」

「ペルソナだろうがシャドウだろうが、力が貰えるならオレだって欲しい！ オレ自身、雲雀を前線に出すしかない自分に腹が立っているんだぞ！」

柳生の言葉は酷く辛辣だ。だが、こうも発破を掛けなければ、葛城は立ち直ることなど出来ない。今この場合は、彼女の分岐点であるのだ。

たとえ彼女がペルソナ能力を得たとしても、力の意味を履き違えたままならば、容易く悪へと転じてしまうだろう。そうさせない為にこそ、柳生はその言葉に想いを乗せる。

「力を求めるのは勝手だが、その意味を履き違えるな、葛城！ お前は何の為に戦っている！」

「ッ！」

その言葉に、葛城は頭を殴られた様な衝撃を感じた。

そうして気付き、思い出す。自分がこれまで、どうして戦って来れたのか。どうして力を欲したのか。その意味を――

「アタイは……、もう一度父さんと母さんに会う為に――！」

葛城の両親はかつて、任務遂行中に掟を破り、善忍の陣営を追放されたのだという。彼女の両親は、そうして行方知らずとなった。

忍の組織を追放された『抜け忍』が元に戻るのには並大抵の事ではない。だからこそ葛城は、己を高め、善忍陣営での地位を得ることで両親の信用を取り戻そうとした。

それこそが、葛城の戦う理由だったのだ。

「……そう。それこそが貴女の戦う理由ですか、葛城先輩」

「っ、結城!？」

葛城の言葉は、理にも届いていた。『葛城の影』を引き付けているうちに、柳生と葛城の陣地に侵入したらしい。勿論その合間に飛鳥が前線を引き受けている為、あまり時間は残されていない。援護の為に、直ぐにでも舞い戻る必要があった。

「すいません、聞くつもりは有りませんでしたけど――」

「良いぜ別に。寧ろ、お前には聞いてもらいたいね。……その代わりって訳じゃねえけど、一つ訊きたいことが有る」

「……？」

しかしそれでも、葛城には一つだけ彼に問い質したいことがある。葛城は漸く、自身が戦うに足る理由を見付けることが出来た。ならば彼は何の為に戦うことが出来るというのか。彼が霧夜に話した、彼女達を護るという意思は戦鬪行為の付加価値でしかない。

結城理が自己の希薄な人間であることは瞭然である。その彼が何の為に戦い、その能力ベルツナを使うのかを、葛城は今一度知りたかった。

彼女の問いに手間をかけていられるような状況ではないが、此処は真剣に答えるべきなのだ。彼は判断する。理は一瞬だけ目を閉じ、開く。その刹那にも満たない様な逡巡の後、理は応えるのだった。

「……俺には葛城先輩みたいに両親は居ませんし、斑鳩先輩みたいに家柄の問題が有る訳でもない」

「……っ」

葛城は僅かに顔を顰めるが、それは理の言葉に憤った訳ではない。寧ろ逆に、自分に腹を立てている。それは彼女が『葛城の影』との戦鬪が始まる前に、理に対し理不尽な嫉妬と怒りをぶつけていたのを自覚したからだ。

彼女が両親の為に力を欲したのに対し、彼には既にその両親が居ないことを、彼の言葉で思い起こされた。理に対する嫉妬など、初めからお門違いであったことを葛城は改めて思い知らされ、己の浅慮を恥じた。

「だから俺は、この能力ベルツナに目覚めた意義と意味を探したい。そうじゃないと——」

理は一瞬だけ、その言葉に凄まじいまでの激情を乗せる。先の問答でも見せた、結城理の心の闇。一体彼に、何があったというのだろうか。

「……『戦う理由を探すために戦う』、納得は出来ないかもしれませんが、今はそれが俺の戦う理由です」

「いや……十分き。アタイに比べりゃ、ずっと健全だろうさ」

掌に拳を叩き、打ち鳴らす。その音こそが、葛城が吹っ切れた合図だった。今の彼女は、己の影を、己の弱さとして受け入れる事が出来ていた。

そしてその心境の変化こそが、『葛城の影』を打ち倒す剣となる――

『ガツ?! な、何イ!? 貴様――』

「さあ、ここからが本番だぜ、アタイ? 今度こそオマエをぶっ飛ばして、アタイの力になって貰うからな!」

葛城の心境の変化は、シャドウたる『葛城の影』にへと及び、その存在を揺らがせる。眼に見えて動きが鈍くなり、今ならばその動きを捉えることも出来るかもしれない。

好機と見た葛城は大地を踏みしめ、突撃のポーズをとる。彼女自身が突っ込むつもりのようなのだが、それを制する気持ちは誰にだって無かった。

「援護します! 行って下さい、葛城先輩!」

「おう! あと結城、前から言おうと思ってたけど、その丁寧口調はなんかムズ痒いからやめてくれ。名前も葛城呼びでいいからよ」

「……ああ、分かった。行け、葛城!」

「よっしや任せろお!!」

『ぐ、オオ! 舐め、ルなアツ!!!』

葛城が飛び出すと同時に、再び発動する《龍の眼光》。ドラゴンの両眼が妖しく輝き、葛城は全身が重くなるような重圧を確かに感じる。だがそれでも、彼女はその足を止めることは無い。

『葛城の影』もまた勝負の決め所であると察したのか、更なる決め手を使うのだった。

『オオ……! 《攻撃強化》^{タルカジャ}アツ!!! まだだ、《チャージ》イツ!!!』

それらとともに、自身の攻撃力を上げるスキル。二つのスキルの重ね掛けにより、『葛城の影』の次なる攻撃は、正真正銘必殺の一撃となるであろう。

当然、使わせるわけにはいかない。その為に、理達が居るのだから

「柳生! 眼を狙え!」

「っ、ああ!」

理が召喚器を構え、柳生に向けて指示を出す。彼女はそれだけで何

をするのか察したのか、己の獲物である番傘、それに仕込まれた銃口を『葛城の影』に向ける。

彼が行うのは、『オルフェウス』の『紅蓮刀』を彼女の番傘に付与すること。本来、斬撃武器に対し使用するそのスキルが、柳生の射撃武器に対し付与されたならば、どうなるのか。

その答えは――

「打ち抜け！ かえんだん『火炎弾』ッ！」

『何ッ?! ギャアアアアアアアアッッッ?!』

柳生の本来の武器、氷の弾丸が飛び出す筈であったそれは、火炎を纏って『葛城の影』の片目を打ち抜く。弱点たる『火炎属性』だけでなく、鱗に覆われていない眼球を狙われたことにより、多大なダメージを受けたようだ。

理のみの力、弾速の遅い『アギ』ではこうはいかなかっただろう。音速を超える銃弾と、柳生の射撃スキルが合わさってこそその戦果であった。

『グオオッ！ アタイに近寄るんじやネエエエッ！』

不利と見た『葛城の影』は、またしてもその両翼を羽ばたかせる。『忘却の風』は、この場に居る全ての人間に襲い掛かるだろう。それでも、彼らはその歩みを止めない。

『「オルフェウス」ッ！ 葛城を守れ！』

「飛鳥ちゃん、斑鳩さんっ！ 来るよ、踏ん張って！」

その発動を察知した二人、理と雲雀はそれぞれ仲間を守るべく行動する。理は『オルフェウス』を召喚し、葛城の盾となるよう飛ばす。その合間に無防備となる彼の身体は、柳生が支えているのだった。

雲雀は攻撃に備えるよう二人を促す。彼女らは全員が『葛城の影』の『忘却の風』に対し耐性を持っていないのだが、三人で身を寄せ合って何とか突風に耐えた。何よりも、『疾風属性』を弱点とする斑鳩がこの攻撃を耐えたことが、次の行動へと繋がるのだ。

『「ヴィゾヴニル」、葛城さんを護る力を貸して下さい！』

この戦闘において守られるばかりであった斑鳩は、『もう一人の自分ヴィゾヴニル』に新たなる力を望む。その想い、その心の願いこそが、ペルソナ能力

そんな大雑把な掛け声と共に、葛城は己の影を、貫くのだった――



「……悪かったな」

『……』

醜悪なドラゴンの姿を打ち倒し、元の少女の姿へと戻った『葛城の影』に、葛城は相對する。

恥じ入る様に頭を掻き、バツの悪そうな表情で、しかし視線を己の影から逸らさないままの葛城は、普段の豪胆な態度からはとても思えない程に弱々しく見えた。

「アタイは何にも分かつちやいなかった。力が欲しいだの寄越せだの言つて、その力を扱うのに必要な、本当に大事な事を忘れちまつていた」

『……』

葛城は一度深呼吸をしてから、懺悔をするようにその言葉を紡ぐ。それは『葛城の影』だけでなく、この場に居る理達にも伝えるためであらう。

暴走した『葛城の影』との戦闘で命の危機に晒された仲間達にも、聞いて貰わなければならない為であり、彼女自身聞いて貰いたくも有る為だ。

「父さんと母さんの事だけじゃない。アタイが求めた力は、独り善がりなんかで得られるようなモノじゃなかったんだ。……お前の力が、必要だったんだ」

『……』

「認めるよ。お前はアタイで、アタイはお前。二つで一つの力なんだ。……やっと気付けたよ」

『……』

「だから……あー、その……だ」

そこまで言葉を紡いで、葛城は羞恥が限界に達した様であり、半ば

ヤケクソ気味に宣言する。

「だあーっ！ こういうのはアタイのキャラじゃないんだよ！」

『……』

「兎に角来い、もう一人のアタイ！ 今度こそお前を否定したりなんかしねえ！ 一緒に戦ってもらうぜ！」

『……！』

真っ赤な顔で拳を向けて突き出し、『葛城の影』もまたそれに倣って、互いの拳を打ち合わせる。女の子同士とは思えない程にワイルドな確かめ合いであり、斑鳩や飛鳥など思わず吹き出していた。

しかし、それこそがきつと葛城に、彼女達に最も似合う『絆』の動作であるのだろう。『葛城の影』は拳を打ち合わせ、小さく頷いて、その身は葛城の新たなる力となるのだ。

自分自身と向き合える強い心が、“力”へと変わる――！

『我は汝、汝は我――、我は汝の心の海より出でし者――。地

天の竜姫、《ティアマト》なり――！』

その姿を一言で形容するならば、“竜人”というのが正しいのだろう。葛城によく似た容姿とプロポーシヨンに、竜鱗に覆われ堅牢となった体躯と、しなやかな尾。

半人半竜のその姿は、力の象徴たる竜の己を受け入れた葛城に相応しい物であった。

『《ティアマト》……、これがアタイの力……』

《ティアマト》は溶ける様にして消えると、葛城の心の中へと還っていく。同時に《真影結界》も解除され、理達は普段の街並みの中に帰還したのだった。

そして、緊張が解けたのか彼女は何処かふらついており、程度の差は有れど誰もが疲弊していた。早く忍学科に戻って休息を取ろうとというのが全員の意見だったが、その前に葛城が理に話しかけてきた。

「……何？」

「その……、さっきは悪かったよ。掴みかかったり、怒鳴ったりしてさ……」

「それはどうでもいいよ。俺の方にも問題はあつたし、もう葛城はペ

ルソナ能力を手に入れた。それなら、蒸し返す必要は無いだろう?」「それでも! ケジメは付けたいんだよ!」

葛城は理の正面に立って、両腕を広げてみせる。なお、今の彼女は忍装束であるので、前全開のブラウスから覗く肌色が非常に目に宜しく無い。尤も、理はそこらへんを「どうでもいい」と割り切っている節が有るのだが。

「ほら! 今ならお前の言う事を、一つぐらいならなんだって聞いてやるぜ! ほらほら、このおっぱいを触るとかどうだ?」

「……………」

用はありがちな、「言う事をなんでも一つ聞く」というのが葛城なりのケジメの付け方の様だったが、その例えは如何なものか。

彼女を除く、理を含め五人の視線が「何言ってるんだコイツ」と語っているのを彼女は察したが、最後までには引けない。どうも単純に、ノリと勢いだけだったらしい。

まあそれでも、葛城のケジメは受け取っておこうと思う理である。彼女に向けて手を伸ばし、人差し指を立てた。

「な、なんだよ? 触るのか?」

「触らないって。…………もう一回」

「へ?」

「もう一回ラーメン奢ってくれたら、それでいいよ」

「…………あ」

以前の休日に、二人でラーメンを食べに行ったことを思い出す。あの時は何だかんだあったが、それでも楽しいと思える一時であったのを彼らは覚えている。理はそれを、また行おうという事だった。

この言葉で葛城の緊張、そして理への確執は完全に解き崩されたらしい。強張っていた表情を破顔させると、理をその豊満な胸元に思い切り抱き寄せるのだった。

「ぶお?!」

「はははっ! 嬉しいこと言ってくれるな、結城い! このこの」

「あーっ! ちよつとかつ姉何やってるの!」

バスト95センチの見事な双丘の中に、理の頭が埋め込まれる。傍

から見れば不純異性交遊なやり取りだが、一瞬にして飛鳥の反感を買い、当の理自身は窒息死寸前だ。どうあがいても修羅場である。

「何やってるんですか貴方達は……」

斑鳩はそんな彼女を見て溜息を吐く。彼女が一応落ち着いていられるのは、以前同じような状況に陥った経験からだ。それでも、何となくもやっとする物は有り、何故そう思うのかを斑鳩は必死に振り払っていた。

なお、その時と同じく、柳生は雲雀の目を塞いでこの光景を見せない様にしていた。

(……本当に、人たらしですね)

それこそが彼の魅力でもあると、当のたらしされた一人である斑鳩は思う。そしてそれは同時に、人を繋ぐ力でもあるのだ。

尤も天然である為、やや性質が悪くもあるのだが。今現在の理が、今度は飛鳥のバスト90センチの胸に埋まっている辺りなど、特に。

そして、相変わらずぎやあぎやあと喚く葛城を見て、斑鳩はとある物語を思い出していた。それは、葛城が覚醒したペルソナ《ティアマト》。そのモチーフとなる『ドラゴン』に関する様々な伝承だ。

その世界各地の神話・伝承に連なる、『ドラゴンメイド』と呼ばれる少女達。呪いによって醜い竜へと姿を変えられた彼女達は大概にして、愛する者のキスによって呪いを解かれるのだという。

ならばこそ、醜き竜たる『葛城の影』を、元の葛城の心に還した理もまた、呪いを解いた者であるのか。……当たり前だが、理は葛城の想い人ではないし、キスもしていない。

いずれにせよ、結城理に惹かれる少女がまた一人増えたのだろうと、斑鳩は結論付ける。葛城自身はまだその思いに気付いていなさそうであるが、それもまた葛城らしさであろう。

斑鳩は、そんな風に葛城を取り戻してくれた理に、この上ない感謝を捧げるのだった。

なお、葛城がまたしても理を昼食に誘おうとして、「ん？ あれってもしかしてデートの誘いじゃね？」と気付いて悶絶し始めるのは、これから約十二時間後の事である。

閑話Ⅱ 心の力 Side：街の記憶

理が半蔵学院へと編入してきてから数週間が経ち、始めの頃は取っ付き難い物であったという彼への評価が、ここ数日で変わり始めた。

それというのも、結城理を訪ねる美少女達というイベントがあったからだ。黒髪ロング美少女に始まり、黒髪ポニーテール美少女、金髪ロング美少女と、三人もの巨乳美少女が訪れたのである。これでは、気にするなと言うのが無理であろう。

それに伴い、結城理という人間が再評価される。クラスの自称・情報通である松笠はH H 半蔵学院の日々のクエスチョンに答えない Q という組織を発足し、彼の周辺を調査することにしたのだ。

「それをふまえて、我らHHQは全力をあげて我がクラスの転校生を調査いたします！」

「指令、私はA組なので『我がクラス』というのはやめていただきたい」
組織と言っても、メンバーは松笠と α と Ω はじまり終わり という3人のみであり、HHQそのものが生徒会未承認という有様なのだが、まあそこは目を瞑ってやってほしい。

兎に角彼女達は聞き込み調査を行い、理の人となりを測るのであった。

「まずは基本データと印象調査の結果発表です」

松笠は私見だが、理に対するステータスを開示する。

彼女はまず理の『学力』を“わりと”と判断した。

同じクラスである松笠は理が質疑応答する場面を何度か眼にしているが、その全てにおいて彼は完璧な回答をしていたのだ。

授業で『旧石器時代と新石器時代の違いは？』などと問われても、松笠にはちんぷんかんぷんであるというのに、理はその問いに「……石器の形」と正解を答えている。

それと同時に、授業中に居眠りをしている場合も有るのだ。それでいて成績が良いのだから、松笠達には全く理解が及ばない。……だからこそ“わりと”なのだが。

そのうえでE組の担当教師に理の具体的な成績を尋ねてみると、何と編入試験は満点でパスしたのだという。本当に訳が分からない。調査をしたばかりだということのに、逆に謎が深まるばかりだ。

次いで、理の『魅力』は「選り好み」と言った所だ。

クラス内の印象調査では、彼の第一印象、容姿に対する評価は「地味そう」「墓地にいそう」「ねむそう」「ヘッドホン」等である。得てして、良い評価であるとは言いがたい。というか、二番目はもはや悪口ではないのか？

とは言えど、理が普段から発している陰鬱な雰囲気を目にしたならば、このような評価も仕方がないのだろう。容姿もまた、長くうっとおしい前髪が顔を半分覆い隠し、その雰囲気も助長していた。

しかし前述した通り、理に対する評価は変わり始めている。何があつたのかは知らないが、最近はその陰鬱な雰囲気が和らいできており、先述のイベントも有って彼の容姿を再確認するクラスメイト達——主に女性陣——が、その整った容姿に気が付き始めたからだ。徐々にはあるが、前三つの印象も「クール」にへと統合され始めていた。

最後の要素、『勇気』は知らない。しかし、数々のイベントを「どうでもいい」と流すその胆力は凄まじい物であるのは間違いないだろう。

「続いて街での目撃情報をご覧ください！」

証言1 CDショップ・大和撫子風黒髪美少女との接触

とある日の学校帰り、理は近場のCDショップを訪れていた。音楽鑑賞を数少ない趣味の一つとする彼であるが、少し前まで貧乏学生であつた彼ならばこのような店を訪れるのは有り得なかつただろう。大体は、レンタルショップ——それも割引日限定で——か、図書館での無料レンタルで視聴していたのだから。

しかし最近の理は羽振りが良くなつていた。忍学科からの給金・援助金を得て、以前ほど貧困に喘ぐことが無くなつたからだ。

とは言えど、理は散在する気などさらさら無い。本当ならばその金も貯蓄する気ではいたのだが、忍学科のメンバー全員から「結城(くん)

(さん)はもう少し贅沢をしてもいいの!」と押し切られたのである。という訳で、現在の理は新品の音楽CDを見繕っていた。なお、彼の音楽嗜好は洋楽よりであり、特にクラシックやジャズを好む。そして、上側の棚にクラシックの名盤が有るのを発見し、手に取ろうとした時それは起こった。

「……ん?」

「あつ……」

CDを挟んでの反対側から伸ばされた手に、理の手が触れる。細くしなやかな指と、すべすべとした肌触りの白い肌は、間違いない女の子のそれだ。

思わず顔をそちらの方に向け、同じく相手方からも顔を向けられた為に、バツチリと眼が合ってしまった。

取り敢えず、まずは謝罪。意図しない接触と云えど、下手をすればセクハラ扱いを受けかねない昨今だ。理は最近、葛城からの激しいスキャンシップ——もはや逆セクハラの域だ——を受けているが、其処ら辺の良識は当然あるのだから。

「……失礼しました」

「いえ、こちらこそ」

理にとつては有り難いことに、少女は彼をいきなりセクハラ犯罪者扱いするような突飛な思考を持っていなかった。寧ろ、軽く会釈をしただけであった理に対して、深々とお辞儀を試みせるほどに礼儀正しい。

そんな応対をされた理は興味を惹かれ、改めて彼女を見やる。そして相手方の少女は、そういった感性が薄い理ですら気後れしてしまう程の美人だったのであった。

一目で見た印象は、『雪』であっただろうか。触れるだけで儂く融けて消え去ってしまいそうな雰囲気でありながら、そのアイズブルーの瞳には月光の様な確かな光を宿している。

セミロングの黒髪は、大きな白いリボンによってキツチリと後頭部で束ねられ、所謂ハーフアップと呼ばれる髪型だ。

彼と同じく学校帰りであろう彼女は、灰色のワンピースタイプとい

う珍しい制服に身を包んでいる。理が彼女に興味を抱いた要因の一つだ。……別に、その制服の胸囲部分が突出していたことなど全く関係が無い。

総評して、完全無欠の美少女である、と言っていていいだろう。街中で見かけたならば、10人中9人は振り返ってしまおうという、そんな魅力を持っていた。尤も、理はその残る一人という少数派であるのだが。

「……これだね、どうぞ」

「え？ あ、どうも——いえ、ちよつと待ちなさい！」

理は自分及び少女が取ろうとしていたCDを手に取り、彼女に手渡す。しかし彼女はそれがお気に召さないのか、理に待ったをかけた。手渡された筈のCDを、今度は理へと押し付ける。

どうやらこの少女は、かなりの生真面目らしい。このCDを買うべきなのは、理だと主張してきた。

「このCDは貴方も取ろうとしたモノでしょう？ ならば、当然貴方が受け取るべき権利が有る筈です！」

「……それはそつちだつて同じことだから、俺はいいよ」

しかし、互いの主張は平行線である。謙遜は日本人の美德とは言いが、それが二人集まればややこしい状況になるようだ。互い互いがCDを交互に押し付け合うその姿は店内でも注目の的となり、周りの人間は何処か微笑ましい目付きで見守っているのだった。

そして話はどんどんと脱線していく。現在は互いの音楽嗜好と、それらに関連する趣味を語り合っていた。

「俺は聴く以外だと、歌ったり、楽器を弾いたりするかな」

「おや、歌うだけでなく、楽器も嗜んでいるのですね」

「歌うといっても、最近一人カラオケに通う様になっただけだし、楽器を弾くのも学校の授業だけだね。音楽系の部活に入ってみたいとは思っているけど」

「素晴らしい向上心です。私も日本舞踊を学んでいます、流石に楽器までは——」

ふと、その二人の傍を通りがかる影が有る。二人とはまた別の学校

の改造セーラー服に身を包んだ女生徒は、こそこそと怪しい動きをしており、この上なく不審である。

店内中の注目が理達に集まっている中、怪しい少女は二人の傍を何気なく通り抜けようとして――

「待て」

――がっしりと、その肩を掴まれた。

この怪しげな少女、実は万引き犯である。店内の注目が二人に集まっていることを良い事に、幾つかの商品を鞆やポケットに詰めていたようだが、そんな悪徳行為を見逃せるほど理は倫理観が喪失している訳でもなく、生真面目な少女は元から規律順守の性格の様だ。

「……万引きは窃盗で、犯罪だ。みつともないことするもんじやないよ」

「窃盗犯、即ち悪です！」

「あ、？ 放せ手前ら、痛い目に逢いてえのか！」

不良少女が叫ぶと、店内のあちこちから同じ改造セーラー服を着た何人もの女生徒が集まってくる。どうやら、集団万引きの現場でもあった様だ。

理は呆れ果てた様に不良少女を蔑んだ眼付きで見るが、少し眼を離れた隙にその彼女は生真面目な少女に絞め落とされていた。

「……容赦ないね」

「悪は断じて許しません。申し訳ありませんが、警察への通報をお願いできますか？」

「了解。あと、警察だけじゃなくて、うちの学校のクラス委員にも連絡しているかな？ 自警団みたいなこともしているから」

「ええ、構いません」

理が言うクラス委員とは、勿論彼が所属する忍学科の事である。彼女達は時折、街中を巡回してこの様な不良撲滅運動も行っているのだ。

そのため、理がこの様な現場に遭遇した際は必ず連絡をするように言われている。表向きの彼は半蔵学院に通う普通の生徒である以上、無用なトラブルに関わる訳にはいかないのだから。

「……というか、そっちだって別に不良等コイツに関わらなくても——」
「ゴチャゴチャイチャついてんじゃねえぞツ!!」

少女の身を案じる理であったが、話の最中に割り込んでくる無粋な輩が居る。熊のように大柄な不良、少……女……? が、二人に向かつて素手で殴りかかってくる。

理は思わず迎撃しようと身構えるが、それよりも生真面目な少女の方が速かった。

「——ふッ!」

「ゴバツ?!」

眼にも止まらぬ速度となつて放たれた掌底が、不良の顎を打ち据えた。全身の関節を連携させ、下から上に打ち上げる様にして放たれた為、不良の身体が僅かに浮き上がる。その威力に理は僅かに不良に同情するが、結局は自業自得である以上、すぐさまその考えを振り払った。

そして反撃とはいえ、躊躇なく手を出した少女に理は目を見張る。どうも最近の自分の周りにはバイオレンスな女の子が集まっているな等と、首を捻りたくなつた。

というか、この私刑を黙認している辺り、彼自身とてわりとアレであることを自覚してほしいのだが。

「なッ! やりやがったな、このアマ! ヒイヒイ言わせてやるから、覚悟しな!」

リーダー格と思しき熊の不良少女? を攻撃したことにより、不良グループはこの少女を完全に敵とみなしたらしい。臆面もなく、全員で襲い掛かって来た。

しかし少女は臆することなく不良達を見据え、迎撃の構えを取っている。念の為に、理は少女へと問う。

「……手助けは?」

「無用」

短い答えと共に、少女は駆け出す。タン、タタン、タタン、タン、と軽やかなステップを刻み、不良達を翻弄し、素手の一撃で以て気絶させていった。戦闘時間、僅か十秒の出来事である。

ヒイヒイ言わせるどころか、自分達が言う間も無く沈黙させられた不良達に理は憐れみを覚え、願わくば心を入れ替えて真人間にならんことを切に望んだ。

不良退治という一仕事を終えた少女は、何処か満足気な雰囲気を漂わせながら理の方に近づいてきた。取り敢えず、労いの言葉を掛けることにする。

「お疲れ様、恰好良かったよ。ステップのリズムは、モーツアルトの『怒りの日』かな？」

「……………」

「……………どうしたの？」

「いえ、そこまで見抜けるとは……………」

ステップのリズムだけで曲名を看破した理の慧眼に眼を瞬かせる彼女は、粛々としていた先程までの態度とは打って変わって年相応の可愛らしさを魅せていた。因みに、理は気付かずにタメ口なのだが、実は彼女の年齢は理よりも一つ年上であったりする。

そして、店内が俄かに騒がしくなっていく。喧嘩騒動が起こった以上、その発端ともいえるべき自分達が此処にいることは好ましくないだろう。傍目には現場から逃走する犯罪者だが、大本の原因はこの不良集団である。理と少女は後始末を警察や忍学科に任せ、CDショップを後にすることにした。と、その前に――

「ほら、これ」

「えっ？…これは……………」

理が少女に手渡したのは、先程まで二人が諍いを起こす原因となったクラシックのCDであった。勿論万引きなどでなく、包装されている為、何時の間にか彼が購入していたらしい。

「いや、だからこれは貴方が――」

「……………もう埒が明かないから俺が買って、まずそっちに貸してあげよ。それでいい？」

少女も流石にこれ以上の問答は不毛だと察したのか、そのCDを胸に抱いたまま、またしても深々と頭を下げた。

「ありがとうございます。有り難く借り受けさせてもらいます」

「……そんなに畏まらなくていいよ。俺もキミと話し合うのは結構楽しかったし、そのお礼みたいなものだから」

そういつて理は踵を返し、帰路に就く事にする。少女はその背に微笑みを浮かべながら、別れを告げるのだった。

理にとつても少女にとつても、この一時はさながら『運命』であったと言えるだろう。

「……じゃあ、また」

「ええ、また会いましょう、結城さん」

少女は告げていない筈の理の名前を呼びながら、街の人混みの中に消えていくその姿を見送っていた。

……この後、忍寮に帰還した理が飛鳥達に給金の使用先を尋ねられた際、女の子へのプレゼント代に使ったと正直に話して、彼女達の機嫌が物凄く悪くなったのは全くの余談である。



理の姿が見えなくなった頃、少女の傍に別の人間が歩み寄ってきた。

その姿は異様だった。少女と同じ灰色のワンピース制服に身を包んだ、歳の頃を同じくする長身の女性だ。整ったプロポーシオンに、茶髪をリボンでサイドテールに結び上げている。

しかし、その顔は般若面に覆われ、容姿を窺い知ることは出来ない。何より異常なのは、そんな姿をしながらも通行人に誰一人として見咎められることが無いことだ。実際、この二人は既に周囲の人間からは認識されなくなっていた。

「……それで、会ってみてどうだ？ 件の『ペルソナ使い』とやらは？」
仮面の少女、叢は、隣に立つ少女、雪泉に尋ねる。言わずもがなの二人は、飛鳥達と同じく忍であった。

善忍育成学校『死塾月閃女学館』に所属する彼女達は、かのシャドウという存在と事件について把握しており、それを唯一倒すことが出来るというペルソナ使いについても聞き及んでいた。当然、結城理の

事もだ。

雪泉が理に会ったのは偶然でこそあるものの、容姿や名前などを資料で確認しており、すぐさま彼だと気付く事が出来た為、その人となりを測ろうとしたのだった。

「ええ。話してみた限りでは、邪な所など無い清廉潔白な人物だと思います」

「ほう？　雪泉にそこまで言わせるとはな。……噂通りの男という訳か」

叢の言う噂とは、資料に書かれていた理の人間性——『人誑し』であるという部分だ。字面で見れば不名誉な事かもしれないが、どうも周囲の人間は彼をそう見る傾向にあるらしい。

というか、この資料を纏めたのが斑鳩である為、そういった偏見が付く事も致し方ないだろう。叢はもう既に、その評価を揺るぎない事実として認識している。

眼の前で、にこやかな雰囲気を漂わせながらCDを胸に抱いている己の親友の姿を見たならば、それも当然であった。

そんな普段の雪泉らしからぬ光景を見て、叢は溜息を吐く。そして、身に纏う般若面を撫でた。

「結城理、ペルソナ使い。……Personnaか……」

ペルソナという言葉には、ラテン語で『仮面』という意味が有る。異形を召喚し、魔法を操り、化け物を屠る力を持つ異能にしては、まるで似合わない名前だと叢は思う。

酷く名前負けをしていると思わざるを得ないのは、彼女自身がある出来事から『仮面』を被ったからだ。故に叢は、理とペルソナについて興味を持ったのだった。

「……出来れば我も、結城と話を——ああ、駄目！　やっぱり恥ずかしい……！」

……尤も、この調子ではそれが果たされるのは、当分先になりそう
だ。



〈証言2 商店街八百屋・金髪お嬢様風美少女との接触〉

理の食生活は、基本的に自炊中心である。忍寮では食堂が無く、入寮者である理や飛鳥達の食事は、自分で作るか外で食べるかの二択であったのだ。

幼い頃から一人暮らしを始め、炊事のみならず基本的な家事全般を苦としない理は、節約の為に自炊を行っており、現在は食材の買い出しの為に商店街を訪れていた。

なお、忍学科のメンバー達は全員が料理スキルを備えている。以前強烈なイカモノ弁当を創り上げた斑鳩でさえ、和食系統に限ればプロ並みの腕前を持っていた。是非ともその腕前は、創作料理を作るのに発揮しないで欲しいと切に願う。

そして理の料理の腕前は、その全員から太鼓判を押されるほどであったりする。彼の創り上げたトマトとアサリのパスタに誰もが舌鼓を打ったのは記憶に新しい。

とはいえ、彼の好物・得意料理はそんなパスタ料理だけに限らず、和洋中何でも御座れだ。強いて挙げるなら、作りやすくて安価な物とあった所か。

(今日の特売は……)

セール広告を片手に、八百屋の店先に並ぶ特売の野菜を矯めつ眇めつ眺める。理は今日の献立を肉料理にしたいと考えていた為、それに合う野菜を探していた。

万能食材たるタマネギでもあればいいのだが、生憎今日は安売りを行っていないらしい。落胆しつつ辺りを見回すと、ふと目に付く食材があった。

『もやし特売!』——そのポップを見て、買う買わない以前に理の脳裏に過ぎったのは、とある少女の姿——
「間に合いましたわああああっ!!!」

……脳裏どころか、目の前を過ぎ去った。理と同じ年頃で、やや幼げに見える顔立ちに翠の瞳、ふわりとした長い金髪と、黒色のセーラー服。

その礼儀正しい口調を聞けば、どこぞのお嬢様とさえ思ってしまうような風貌の美少女。しかしそれが偽りであることを、理は知っている。

そしてそれ以上に、彼女はもやしが大好物であるという特徴を持っていた。

「本日限定、特売もやし！ うふふ、まだこんなにたくさん残っていますわ！ 店主、ここからここまでのもやしを買わせて頂き——」
「はいストップ、買占めは止めようよ」

少女の前で理は、もよしの袋を一つ見せつける様にして、ひよいと取り上げる。生憎彼女の関心を惹くならば、声を掛けたりド突いたりするよりもこっちの方が有効だ。

取り上げられたもよしの袋を追う様に視線を動かし、そのもやしを持つ人物が眼に入ると、彼女は途端に顔を綻ばせた。

「まあ！ 貴方は何時ぞやの、もやしをお譲り頂いた殿方では有りませんか！ その説はどうも」

「……いや、別に感謝されるほどの事じゃないよ」

理の言う通り、本当に感謝される程度の事ではない。単に理が彼女に、もやしを一袋譲ってあげただけだ。

つい先日、奇しくもこの八百屋で最後の一つとなっていた特売もやしを理が入手した際、遅れて現れて完売となったもやしコーナー前で崩れ落ちる彼女が眼に堪え忍びなかつたので、彼女に譲ったのである。当然というか何というか、物凄く喜ばれた。

彼女との出会いにもなった一幕でもあるそれは、理の中では主に喜劇として扱われている。

「むう、仕方ありません。わたくしがもやしを買い占めてしまったら、他の方々がもやしを食べられませんからね」

「是非そうして欲しいね。俺ももやしを買おうと思っていたから、ちよつと困る」

実はこの少女、激安食材であるもやしを買い占めようとする所から察して頂けると思うが、物凄い貧乏人である。いや、理自身直接聞いたことは無いのだが、彼の金銭に関する勘はそう言っていたのだ。

色々な事情から金銭絡みのトラブルに巻き込まれた経験のある理は、何となくのレベルで相手の金銭事情を察することが出来る。斑鳩などがその筆頭で、俗な言い方をすれば『お金の匂いを発していた』とも言えいいのか。

目の前の少女はその逆で、そういった雰囲気は全く感じられない。おそらく少女も同じ感性を持ち、理が金に縁が無いことを察しているのだろう。それに故か、二人は気が合ったのだ。

「今日はどんな料理を作られるのでしょうか？ もやしのミルク煮？ もやし炒め？ 茹でもやし？」

「いや、肉料理の嵩増しに……、まあいいや。レシピは——」

理はメモ帳にさらさらとレシピを記載し、少女に手渡す。理と少女は、この店で顔を合わせる度に料理のレシピを交換し合うのが常となっていた。

「ふふっ♪ やはり貴方のもやし料理のレパートリーは豊富ですね。わたくしも大助かりです」

「……それはどうも。こつちも結構助かってるから、お互い様だね」

……正確には、少女が伝えてきたレシピをアレンジし、彼女に返還しているというのが真相のだが。彼女のレシピは何というか、もやしありきと言うか、もやししかないとと言うか。斑鳩の創作料理と良い勝負だ。

このままもやし漬けの生活が続けば、彼女の魂を *mo ya si* て——もとい、栄養が偏る事に成りかねないと理は判断し、食生活の改善に努めようとした。最近の自分は、随分とお節介になったなど実感する理である。

尤も、こうしてもやしを買い占めようとするあたり功を奏しているとは言い難く、それでいて斑鳩にも勝るプロポーションを持つのだから、もうどうでもいいんじゃないかと思っただけ突っ込むと、嬉々として少女は買い物かごにもやしをただ突っ込むと、嬉々としてレジを済ませ、帰路に就くのだった。

「それでは、わたくしはこれにてお暇致しますわ。御機嫌よう♪」

「……ああ、また」

同じく会計を済ませた理は、ひらひらと手を振って別れの挨拶を告げる。そうして、スキップでもしように足取り軽い彼女の背を見送るのだった。

不思議な雰囲気を持つ少女だ、と理は思う。それは勿論、あどけない性格や、もやしに對する愛情と言った部分ではない。彼が少女に抱いた違和感は、彼女の金銭面への執着だった。

先述の通り理は金に縁が無く、寧ろお金に関しては本当に碌な目に逢っていない。だからこそ彼は、金銭への執着が全く無いと言っていない程だ。

逆に彼女は、ここ数回の出会いで金銭への強い執着を時折見せていた。それ自体は別に悪いことではないものの、恨み辛みと言った感情すら入り混じるようでは、決して良い事とは言えないだろう。

理はそんな彼女の過去に何が合ったか知る由も無いし、そもそも名前すら知らない仲なのだ。そんな雰囲気を持つからこそ、必要以上に踏み込むのは憚られたのだから。

「……儘ならないな」

最近の自分は、本当にお節介になった。絆を得て、それが本当に貴いものだと知り、結城理という人間は少しずつ変わり始めている。こうして、彼女を如何にかしてやりたいと考える程度には。

ならばこそ、自分に出来るだけの事をしようと思はれる。金銭といった俗な物など関係無い、『正義』の公平さを持って、彼女と係わりうと彼は心に決めた。

取り敢えず、まずは――

「もやし料理のレパートリー、増やすかな……」

彼の今日の夕食が、『もやしの肉味噌炒め』となった瞬間であった。



く証言3 夜の街・不思議な双子との接触く

(遅くなったな……)

時刻は夜十時ごろ、理は夜の街を歩いていた。最近の彼は運動系の部活――水泳部である――を始め、今日もその活動によって帰宅時間

が遅くなっていた。

勿論シャドウ討伐と言う使命がある以上、積極的な参加は出来ないでいる。だが、部活動を通じて何人かの友人ができ、彼らへの義理も有る為に疎かにも出来ない。何より理自身、部活動を楽しんでいた。

そして、忍学科に本日のシャドウ討伐は無しと連絡を伝えた後、何処かに食事でも寄ろうかと考えながらのんびりと脚を進めていた理の前に、“それ”は現れたのだった。

「わおーん?」

「……………」

——何だアレは!?

理の思考はそれ一色に染まる。今までの人生の中で、此処まで混乱したことはないと断じることが出来るほどに、目の前の光景は彼の常識を逸していた。

くるくると跳ねたセミロングの金髪、ジト眼に形取られた瞳は左眼は緑で右眼が青というオッドアイ、その整った容姿と豊満な体付きは十分に美少女と言っても過言ではない。

身に纏う衣装は、バレリーナを思わせる白のドレス。金色の装飾と翼の意匠があしらわれており、この上なく彼女に似合っている。喜悦に歪む口元から漏れた声は、明らかに理に向けられたものだ。

尤も、この真夜中に露出過多のドレスを着込み、犬の様な鳴き声を発しているのは、明らかに正常な人間と判断していいモノではない。漸く理は、目の前の少女が何者であるのかを察した。

「痴女だッ?!」

思わず大声で叫ぶ。物凄く失礼な物言いなので、本来ならば内心に留めるべきであろうが、混乱しきっている彼にそんな余裕など存在する筈が無い。それどころか、理に罵られて身悶えするという彼女の反応が、さらに混乱を加速させた。

「あはあくん? イイ! すつごくイイよ、今の! もっと罵ってえ〜♪」

「うわっ!? 近い!」

痴女の少女は、そのまま四つん這いで理の方へと擦り寄ってくる。

ドン引きしてその場から飛び退くが、少女はやはりその後を追ってくる。ハアハアと息を切らせながら、四つん這いのままで。……物凄く怖い!?

いつしか壁際にまで追い込まれ、壁に背を付けながらも尚逃げようとする理の前に少女は跪き、こう告白するのだった。

「うふふ〜? キミ、すつごく素質有りそう♪ ねえねえ、りょうな両奈ちゃんのご主人様になってくれないかな、かな〜?」

「御免被る!」

焦りと恐怖で口調も崩壊しかけているような気もするが、彼の薄っぺらいキャラ——と、本人は思っている——如き、彼女の前では塵芥に等しいのだろう。

じりじりとにじり寄ってくる少女、両奈に怯えながら、理の脳はこの状況の打破の為にフル回転する。考えろ、考えろ、考えろ! この状態から抜け出すのに、最善の一手を!!!

その時理に電流走る——! 思い起こされるのは、つい先日学校での友人達との会話。と言っても、健全な男子高校生の友人間で交わされる会話など、大抵は猥談である。

理は左程興味が湧かず、話半分で聞いていたが、それらの会話により世の中には特殊な性癖を持つ人間が居ることは理解していた。尤も、こうしてそんな性癖を持つ少女が眼前に現れる等予想していなかったが。

そして、一応はこういった性癖——マゾヒズム——への対抗策は記憶に残っている。こうなってしまった以上、嫌だが、本当に嫌だが、実行するしかない。理は覚悟を決めた。

「……両奈」

「はいっ?」

深呼吸をして、すうつと理の眼が細められる。絶対零度の視線で両奈を睨みつけ——両奈はその時、ゾクリとした感覚を覚えた——告げる。

「——《おすわり》ツ!!!」

「わんっ?」

理の指示に——言うまでも無く、半ばヤケクソである——両奈はすぐさま反応し、その場に《おすわり》をする。両足は大股開き、両手もキツチリと地面につけた。

その体制に移行するとき、スカートがふわりと靡いてちらりとライトグリーンのショーツが見えたが、そんなモノは最早どうでもいい。重要なのは、両奈の動きを止めたという点である。

「よし、そのまま《待て》だよ……」

「くうん……♪」

理は両奈の動きを制したまま、ゆつくりと彼女から距離を取る。両奈はその間、期待に満ちた目で理を見据えていたのだが、当然の如く彼はスルーしていた。

しかし、そのまま十分に離れて後は全力で逃走するだけだという所で、新たな闖入者が現れた。

「何やってんのよこのバカ犬……!!」

「わおんっ?」

突如現れた少女は、お座りの体勢を取っていた両奈を思いつきり蹴っ飛ばす。しかし両奈はやはり嬉しそうに嬌声を上げて、その攻撃を甘んじて受けていた。突然の出来事に、理は行動できないでいる。

この少女は、恐らく両奈の親族であろう。彼女によく似た顔立ちに、それを丁度ツリ目にした瞳の形。特徴的なオッドアイは鏡映しの様に左右入れ替えだ。

茶色の長髪を黒い紐リボンでツータールにし、前髪を赤いカチューシャで纏めている。服装は以前見た灰色のワンピース制服であり、あの生真面目な少女と同じ学校であるのだろう。

尤も、彼女は兎も角、親族の両奈にさえ胸囲的——否、驚異的にプロポーシヨンの差が有るようだが、そこは流石に口を噤んだ。

「姿が見えないから何処に行ったかと思えば、こんな所で発情しているだなんて! ちよつとは人様の迷惑を考えなさいよッ! 分かってんのこの愚図ッ!」

「あ〜ん? 両備ちゃんもつとお〜♪ でもでも、このお兄さん両奈ちゃんをイジメるのがすつごく上手くて〜♪ ご主人様になって欲

しいの〜?」

「……うわあ」

何だコレは。もうわけがわからない。誰か説明をしてくれ。理の脳内では、そんな思考がぐるぐると廻る。

両備は地面に伏せた体制となった両奈の尻をげしげしと踏み付け、彼女を散々罵っている。マゾヒストの両奈とは対照的に、サディストであるようだ。いや、そんな情報を一体どうすればいいのか、理にはてんで分らない。

後、両奈は理にご主人様とやらになつて欲しいそうだが、それがどういう意味なのか理解するのを彼は放棄した。寧ろ、理解したら色々アウトだ。

そして、そのご主人様と言う単語に反応し、両備は理の存在に気が付いたようだ。彼女は両奈の尻をぐりぐりと踏み躪りながら、彼の方へと顔を向ける。

「へえ? アンタがアタシの姉のご主人様? こんな駄犬に付き合つてくれるなんて、物好きも居たのね」

「(妹か……) いや、そんな事実は無いよ」

理は両備の言葉を否定する。自身にそんな性癖などないからだ。それに、彼を混乱させていた両奈が抑えつけられたことよって、理も幾分平静を取り戻すことが出来たのもある。

オツドアイの双眸は彼を射抜くようにギロリと見据え、妙な迫力を見せるが、同じくオツドアイの知り合いが居た彼にとってはあまり気にならない。

兎に角、一刻も速くこの場から、両奈から離れたいというのが、理の心情である。彼女のご主人様などという世迷言を、断じて認める訳にはいかなかった。

少なくとも、妹に踏み躪られて悶えている両奈を如何にかするとう事は、二人の共通認識の様である。

「ま、アンタの行動は正当防衛で、間違つてはいなかったでしょうけど、コイツには眼を付けられちゃったみたいね、ご愁傷様」

「勘弁してくれ……。俺は恋愛とかよく分からないし、するにしても

純愛な方が良いんだよ……」

「恋愛？ バカねえ、この駄犬に有るのは肉欲だけよ。恋や愛だなんて二の次だわ」

「一番駄目な奴だろそれ?!」

本当に勘弁してほしい。本来ツツコミキャラではない理でさえツツコミに回らざるを得ない程に、この姉妹はキャラが建ち過ぎている。

取り敢えず両備は、理の非ご主人様宣言と言う答えに満足した様であり、何処からか首輪を取り出して両奈に装着する。引くほどに手際が良すぎた。

「じゃあね。一応アインタの名前は聞かないでおいてあげるわ。寧ろアインタの名前なんかコイツが知ったら、何処までも追いかけてくるわよ」

「ああ、そうしてくれ……。俺も今日キミらに会ったなんて忘れる様にするよ」

「いや、忘れないでご主人様〜！ やつと見つけたご主人様なのに〜！ きやうんっ?」

「黙りなさい犬！ さっさと帰るわよ!」

両備は首輪に付けられた鎖を引き寄せ、両奈を強制的に歩かせる。両奈は何時までも名残惜しそうに理を見つめていたのだが、その姿はすぐさま曲がり角に消えて、見えなくなった。

「何なんだった、アレは……」

両奈と言う頭痛の種が漸く視界から消失したことにより、理は盛大な溜息を吐く。今までのどんな貧困生活やシャドウ戦よりも疲れた気がするし、実際そうだった。

早く帰りたい。食欲も失せたので、寮へと真っ直ぐ帰ることにする。すぐさま寢床に入り込み、全てを忘却してしまいたい。

が、多分不可能だろう。此処は彼の帰宅路であるのだから、今後彼女と邂逅する可能性が多々存在した。その事実には、理の気分は最低にまで落ち込む。

その時の自身の心情は、さながら崩落する『塔』の様であったと、今

後この双子と長い付き合いとなることになった彼は後に語るのだった。



「……………」

理の外での目撃情報を集め、列挙したHHQは思う。

（——女の子ばっかじゃん!!!）

人証しなのは分かっていたが、此処まで女性を引き付けているのは想定外だ。

「イマイチ実態がつかめないわ……！　このままじゃHHQの名がすたるウウウ!!!」

松笠はその理の奇行、というか彼の周りの女性達の奇行に付いていけない様だ。「NO——」とすら叫んでいる。

別に分らなくていいし、分からない方が幸せだと思うのだが、彼女のジャーナリズムはそれを良しとしない様である。

その時、メンバの一人であるαが松笠に進言する。なお、Ωは既に興味が失せたのか、本を読んでいた。

「もっと身近な人に聞いてみたらどうでしょうー」
「結城くんの身近な人……」

その時、丁度昼休みであった教室に一人の少女が入室してくる。幸運なことにHHQにとっては、その少女は恐らく理に最も近い人間の一人であろう。

「と、いうわけで！　同じ寮に住んでいると噂の飛鳥さんに直撃取材ですー！」

「へっ?」

飛鳥は今日も理に弁当を届けようと教室に抛つたのだが、そこをHHQに捕まった様だ。『突撃！　となりが結城くん』というテロップでも流れていそうな雰囲気の中、松笠はマイクを差し出し、尋ねる。

「ズバリ！　普段の結城くんとはどんな人ですか!?!」

「え……、どんなって……（何なのこの人……）」

松笠はマイクをずいっと、下から覗き込むように差し出し、彼女の特徴的なドリルツインテが揺れる。その迫力に気圧されたように、飛鳥はほんの僅かに考え込むそぶりを見せて、理の印象を告げるのだった。

「結城くん……かあ……。……うんっ！」

「ど、どうですか？」

そこで飛鳥は顔を綻ばせて、クラス中に響き渡る声で、こう告げるのだった。

「勿論っ、私達にとって大事な人だよ♪」

「「……………きゃー……………っ♪♪♪」」

当然の如く、クラス内は黄色い歓声に包まれる。年頃の少年少女にとって、この宣言は刺激が強すぎたらしい。

一応弁明しておくとして、飛鳥が告げた言葉は「私達（忍学科）にとって（戦力的な意味で）大事な人だよ♪」という意味なので悪しからず。

そして、忘れてはいけない。

「飛鳥……、馬鹿かキミは……」

この2年E組の教室には、その結城理本人が居ることを――！

その後、理がクラスメイトの男女友人知人問わず、散々からかわれる羽目となったのは、言うまでもない。

20話 Deep Breath Deep Br eath

……ただ、またこの光景デジャヴを見ている。

夢の中という精神の世界で、結城理はこの光景を見せられていた。

『ま■一つ、試練■やつ■くる……』

『試練だつて?』

それは、遠い／近くの記憶。〃向こう側〃という、此処ではない世界の自分ではない自分、■■という名の自分の記憶。

これは〃向こう側〃で実際に在った事なのだろう。だが、在ったとしても今自分が居る〃こちら側〃の世界では存在しない筈の出来事の筈だ。

ならば、この記憶には何の意味が有る? ■■がこの記憶を自分結城理に見せることに、一体何の意味が有る?

『君■〃ヤツら〃と■■う事さ』

……ああ、そうか。この言葉は、この記憶は、警告なのだ。〃こちら側〃の世界は、何故か〃向こう側〃に似た歴史を歩み始めている事を、理は改めて認識した。

同じ時代に生き、同じ魂を持ち、同じ能力に覚醒した結城理と■■。しかし歩む世界は、根本的に違っている。忍の世界とシャドウの世界、交わる筈が無かった世界は今、一つとなりつつある。

……何故だ? どうしてこの世界は——、……分からないことを考えても仕方がない。

『試練■向き合■■は、準備が■要だ。■も時間は無限■やない。……もち■■君なら、分■つてると思■け■ね』

……そんなこと、十分過ぎるほどに分かっている。揺蕩い流れる時間を、止める事など出来はしない。過去を取り戻すことも、決して出来はしない。

だが、未来は変えられる。迫り来る驚異を知り、力を蓄える事ならば出来る。■■やこの人物が言いたいのは、そういう事なのだろう

か。

『じゃ、■れ■過ぎた■また■——』

……時間の様だ。記憶の光景にノイズが掛かり、それ以降を知ることとは叶わない。それでも、警告は確かに受け取った。

この警告は、未来を知るスキル《デジャヴユの少年》として昇華した。そして、■■が何故この記憶を見せたのかが、理解出来たような気がする。

■■■■、〃向こう側〃に居るもう一人の自分。

……そう、きつとキミは——



2009年 5月9日 夜 『満月』——

時刻は深夜零時前、理は自室で音楽を聴いていた。首に下げたMPプレイヤーから繋がる、耳に賭けた銀色のイヤホン。そこから流れる音楽が、彼の精神を安定させる。

理が『試練』が訪れるという警告と思しき夢を見てから、幾ばくかの時間が経った。その夢を見てから彼の精神に平穏が訪れたという事はなく、常にピリピリとした警戒心を募らせていた。

そして今日、その警戒心が最大の警鐘を鳴らしている。朝目覚めからの間、常にその緊張が解けることはなく、周囲の人間をドン引きさせていたのだが仕様がないう事だろう。

勿論、飛鳥達も何事かと理を問い詰めたのだが、彼は「……嫌な予感がするから、夜は待機しておいて」と伝え、それつきりである。何ともに何も無いことだ。

しかし飛鳥達は、理のその言葉に従って忍察で待機していた。それというのも、彼が持つ危機察知能力が常識を逸しているからだ。特に、『死』に関連する察知能力は最早未来予知染みている。

例えば、相変わらず彼女達との模擬戦では負け越しが続く理であるが、その戦闘訓練の合間での殺気・殺意を伴った攻撃においては驚異的な回避能力を見せているなどだ。

その理が『嫌な予感がする』と言うのだから、飛鳥達は不安を覚えながらも彼の言葉を受け入れたのである。彼女達は固唾を飲んで、午前零時の時を指し示め様とする時計の針を見つめているのだった。

そして、午前零時が訪れる。世界は、当たり前前の様に『影時間』へと堕ちた――

(……やっぱりか)

電源の落ちたMPプレイヤーを握りしめながら、理は己の見たデジャヴユの警告が杞憂にならなかったことに、溜息を吐いた。誰だつて嫌な予感など外れて欲しいモノだ。

当然と言えば当然だが、影時間になってすかさず彼女達は出撃を決意した様であり、飛鳥など慌ただしく理の自室へと転がる様にして飛び込んできた。

「結城くんッ！ また影時間が――」

「……分かってるよ。当たって欲しくなかったけど、そうはいかないみたいだ」

そう言つて頭痛を堪えるように顔に手を当てる理を、飛鳥は心配そうな目付きで見守る。

彼女は勿論、ここ数日の間警戒心を募らせていた彼の様子を知っていた。心労からか顔を青白くさせ、元より少ない食欲をさらに磨り減らす理を介護しようとさえ思っていたのだ。今日の前に居る彼は、それこそ死にそうにさえ見える。

「だ、大丈夫なの……?」

「あんまり……。けど、無視だつて出来ないだろ?」

既に理の知覚は、この影時間を生み出した元凶ともいうべき強大な存在を感じ取っている。それは、およそ一月前の4月9日、彼らが相対した『魔術師』と同じ、『大型シャドウ』ともいべき存在だった。

ペルソナ能力に目覚めていない飛鳥はその気配を察知できない様であり、理の言葉に訝しんでいたが、彼が不調を押し出撃するとうい意思是理解した様である。無論、彼女にそれを止めることは出来なかった。

「安心して結城くんっ、私達がちゃんとフォローするからねっ!」

これから死地へと赴く事など思えない程に、飛鳥は笑う。彼女だつて不安は有るだろう。それを理に悟らせない様に気丈に振舞うのだが、人の機微に疎い彼にだってバレバレだった。

それでも、その屈託のない笑顔は不調の理を安心させる為の配慮であり、頼られた事への嬉しさでもあるのだ。その心遣いを、理は好ましく思う。だからこそ理は、斑鳩は、葛城は、柳生は、雲雀は、飛鳥を信頼するのだ。

「……俺は、飛鳥が仲間であつたよ」

「ふえっ?!」

突如理から告げられた賛辞に、飛鳥は狼狽する。顔を赤くし、わたたと慌てながらも、褒められたことを素直に受け取ったのか、彼に向けて「あ、ありがと……」と小さく呟く。

理もまた飛鳥の礼を受け取ったようであり、相変わらず表情を変えないまでも、眼を閉じてその言葉を反芻しているのであつた。

……飛鳥との絆が深まった気がした——



理が大型シャドウの存在を感知した地点は、彼らが通う半蔵学院にほど近い、浅草駅の列車内であつた。尤も、丁度駅に停まっているという事など無く、彼らはその列車に近づく為線路を歩く羽目となつたのだが。

影時間は全ての機械類が停止するとはいへ、線路を歩くというのは中々にスリリングである。不気味に光を放つ満月に照らされながら、理達は目的の列車に近づくのだった。

「これ……だよな? パツと見じゃ、特に何も無いようだけど……」

「……シャドウの反応はこの列車からだ。けど、動く気配が無いな」

静止している列車を確認するように、飛鳥は理へと問いかける。このメンバーの中で感知能力に秀でてるのは雲雀だが、それでもシャドウに関する知覚ならば理に分があつた。

理は開いているドアから内部を覗みつけるようにして、この列車内

に潜むシャドウの存在を感じ取っている様だ。どうやら、この大型シャドウは『待ち』の戦法を取るらしい。さりとて、無視することも出来ない。

これほど強大なシャドウを放置した場合、もし暴れ出したりなどしたら周囲への被害は計り知れないからだ。依然として大型シャドウは動きを見せていないが、それが一層不気味だった。

「しかし、こうしても居られません。幸い、ドアが開いています。そこから侵入して、内部のシャドウを討伐するようにしましょう」

「へへっ、腕が鳴るぜ！ 忍具も、ペルソナも、その他諸々もな！」

葛城が意気込みをするように、腕をぶんぶんと回す。彼女だけでなく、全員がこれからのシャドウ討伐に恐れなど抱いていない様であった。

前回の『魔術師』戦と違って、今回は斑鳩と葛城、二人のペルソナ使いという戦力が増えている。以前の様に、手こずる事無く戦えるのだと思っているのかもしれない。

念のために理はもう一度、油断だけはするなと伝え、列車内に乗り込むのだった。飛鳥が率先してドア下の梯子を上る。……が――

「あ」

「「あっ」」

「え、なに？ ……はっ?!」

……飛鳥の今の服装は、忍転身を終えた忍装束姿である。紅いスカーフと、ベージュ色のカーディガン、緑のチェック柄のミニスカートという伊手達だ。

もう一度言おう、ミニスカートである。そんな彼女が、彼らの前で梯子を上ればどうなるかなど言うまでもない。

「……………み、見たの、結城くん…………？」

「……虹色ストライプとか、随分派手だな、としか。どうでもいいけど」

「いつそ恥じらってよ!?!」

顔色をこれ以上ない程に赤くした飛鳥は、急いで列車に乗り込む

と、車内から理を罵った。相変わらずデリカシーの無い男である為、パンツを見たことなど対して気にも留めていないらしい。それはそれで、少女としての矜持を刺激するようでもあるが。

ふと、彼の持つ未来視のスキル《デジャヴユの少年》が発動する。向こう側に居た■■■のかつての経験を、デジャヴユとして警告してくれるスキルなのだが――

『ノ■■かない■■よ……』

……今さら警告されても、役に立たなかった。

次いで、理が列車に乗り込む。男が乗り込む様子など、見ていて楽しいものではないだろう。斑鳩達の反応は特に見受けられない。

しかし、斑鳩が乗り込もうとした時、葛城が反応して見せた。曰く「おっぱいもいいが、尻も捨てがたい！」とのことである。

当然、斑鳩に叱責を受け、葛城は列車に乗り込む順番を最後から二番目に回された。斑鳩は最後の番であり、葛城のお目付け役である。何とも馬鹿馬鹿しい事に、全員が呆れ果てる他なかった。

三番目に、雲雀が乗り込む。その際には下から柳生が押し上げながら補助しており、彼女の臀部を幸せそうな顔で触っていたが、理は見なかったことにした。

四番目には柳生が乗り込むが、今度は雲雀が引つ張り上げる様に補助する。彼女はやっぱり表情をトロけさせていた。というか当たり前だが、身体能力が突出している忍である彼女らにこの様な補助は必要無い筈だ。しかし最早それにツッコむ気力など理には存在しない。

戦う前から気疲れを覚え始め、一刻も早くシャドウを討伐して休息を取りたいという彼の本音を、一体誰が責められよう。兎に角、迅速にシャドウ討伐を行えるよう、理は葛城の乗車を手助けしようとする。

……そして、それは突然に起こったのだ――

『あ■■……、ち■■っ■■待って』

やはり突然に発動する《デジャヴユの少年》。デジャヴユの中に現れた少女は、今の理達と同じく列車内に乗り込んでおり、しかし困惑の感情を見せている。

デジャヴユの光景は当然の様にノイズが掛かっており、その全貌を窺い知ることは出来ない。それでも、少女の困惑は理に伝わり、警告を成す。

『こ■■■■駅でも■■いとこ■■■■停まって■■■■にドア全開■■ておかし——』

「ッ、不味い！ 早く乗り込めっ!!!」

「は？ え？」

突如として鬼気迫る表情で乗車を促す理に、葛城は混乱することしか出来ない。その一瞬が、命とりだった。

ぷしゅう、と空気の抜けるような音が響く。誰もが聞いたことのある、列車のドアを開閉させる空気圧の音だ。当然、この場においてその音が響くことは、彼らにとつて悪手でしかなかった。

「チツ！」

「げっ?! ギャー——ッ!!!」

車内にいた理達と、車外に居た葛城と斑鳩を隔てる様にしてドアが閉じる。その際に葛城は指を挟んだようであり、この様な状況でなければ笑いを誘ったかもしれない。

だが、そんな悠長なことを言っている暇など無かった。当の葛城自身は……、まあ大丈夫だろう。葛城なのだし。

「なっ?! 分断されただど?!」

「罨か……。しようがない、気は進まないけど、このドアぶち抜くよ」「公共施設破壊だけど、この状況じゃね……」

シャドウの計略により分断された理達であるが、所詮はただの列車である。ドアを破壊して、合流することにした。流石に全員が破壊を躊躇ったが、状況が状況である。

ガラスの向こうで斑鳩も難しい顔をしていたが、ゆっくりと頷いているので合流を優先したのだろう。理は腰に下げた鞘から片手剣を引き抜き、振り抜こうとして——

「……………え？ 何この反応……周リから、凄く嫌な感じが……………!」

「雲雀、どうした?」

「……………これはっ?!」

雲雀、そして理は、全身に纏わりつく様なシャドウの気配を察知し、まるで胃袋に飲み込まれてしまったという錯覚に陥る。彼らはそれが、間違いではなかった事をすぐさま知るのだった。

がたん、ごとん—— ゆっくりと響いてきた音は、この影時間においては有り得ない筈のモノだ。

……列車が、動き出したのだ——！

「な、何？ 動かないんじゃないの？」

「……この列車は、シャドウの支配下にあるみたいだ。く……、もつと早く気付くべきだったな……」

「だ、大丈夫なのっ？」

不安そうに尋ねてくる雲雀だが、勿論そんな筈はない。理は眼を閉じ、精神を集中させることで、意図的に《デジャヴュの少年》から情報を引き出そうとする。そして得られた情報は、最悪以外の何物でもなかった。

『……マ■イな。こ■ま加速し■いけ■、あと■分で1つ前■車に衝突す■！』

「……っ、急ぐよ。このままだと、次の列車に衝突することになる」

「「衝突ッ!?!」」

彼女達は驚愕を露わにする。忍である彼女達でさえ、列車事故では生き残れる保証が無いのだろう。いや、脱出するぐらいならば出来るだろうが、今この列車内には象徴化した乗客が多数居る。

彼らを見捨てて脱出することなど、善忍である彼女達が考え付く筈もなかった。

「……驚くのは後にしてくれ、時間が惜しい。列車を止めるぞ！」

理が立てた作戦はこうだ。この列車を操る親玉“大型シャドウ”が居ると思しき前方車両まで、強行突破する。その際には縦列に並び、柳生、飛鳥、雲雀、理の順番で隊列を取るのだ。

柳生は《氷結弾》の銃撃による攻撃で雑魚シャドウの足止めを行い、飛鳥は接近するシャドウの迎撃。雲雀は感知能力による前方からのシャドウの出現、接近の察知であり、理は後方の警戒を行う。彼の《心眼》ならば、目視せずともシャドウの存在を感知できた。

「脚を止めるな、雑魚は足止め優先で止めを差さなくてもいい、怪我をしたら俺が《回復魔法》で治癒する。兎に角、最前列まで突っ込むぞ！」

「了解！」

なお、斑鳩と葛城の援護は期待出来そうにない。線路上に取り残されたままの二人を、理がちらりと視界に収めた際には、多数のシャドウに襲われていたのだ。

ペルソナ能力を使える今の二人ならば負けこそしないだろうが、今もなお加速を続ける列車に追いつけと言うのは酷な話だった。

「行くぞ！」

理の掛け声と共に、全員が一斉に走り出す。残り時間は一刻の猶予もない。いや、その残り時間さえ不明瞭だ。『向こう側』とは、現場が違うのだから。

Time Limit ??:?? ——

「柳生ちゃんっ、飛鳥ちゃんっ！ 前方1、右から2！」

「前方はオレがやる、飛鳥っ！」

「うん、右の奴は任せて！ 皆に近づけさせないから！」

雲雀の指示に合わせて、柳生の番傘から発射された氷の弾丸がシャドウ『囁くティアラ』を貫き、『凍結』させる。彼女はペルソナ能力を持たない為倒すには到らないようだが、『凍結』の状態異常により、動きを止めるには十分だった。

其処へ既に二体のシャドウを屠っていた飛鳥の剣撃が襲い掛かり、消滅させる。この間5秒も経っておらず、足を一瞬たりとも止めて居ない。忍少女3人による、完璧なコンビネーションである。

「出てくるなよっ！」

先を急ぐ彼らの背後から数体のシャドウが襲い掛かってくる。だが、隊列後方の理はそれに見向きもせず、ペルソナを召喚することもなく、後ろ手に放った最低威力の《火炎魔法》だけで迎撃した。

理は《ディア》系統や《アギ》の様な下級魔法ならば、ペルソナを召喚することなく発動できる。そもそも忘れがちなかもしれないが、彼はペルソナに覚醒する以前からこれらの魔法を扱うことが出来てい

ただ。

それらの能力を持ってして、単独で十年近くシャドウ討伐を行っていた彼に、奇襲など成功する筈が無い。彼女達が安心して戦えるのも、しんがり殿を務める理の存在が大きかった。

「前方1つ！ ……あ、ちよつと固そうな奴だよっ！」

彼らの行く先を塞ぐ様に現れたのは、天秤型のシャドウ『炎と氷のバランサー』。初めてみるタイプのシャドウだが、見るからに『火炎属性』と『氷結属性』に耐性を持っているであろう。これでは、柳生の《氷結弾》も理の《アギ》や《紅蓮刀》も通用しない。

理はすぐさま召喚器を取り出し、こめかみに押し付けて銃爪を引く。

「……邪魔っ」

召喚された《オルフェウス》の《突撃》により、『炎と氷のバランサー』は呆気無く潰されてしまう。先を急いでいる彼ら、というか理の前に出た不幸である。その容赦の無さに飛鳥達ですら引き気味であった。

「（……おつかない）」

苛立つのは理解できるが、普段の彼との性格にギャップが有り過ぎるのだ。バトルジャンキーである葛城を敬遠する節の有る理だが、今の彼もそれと大差無いことを理解できているのだろうか？

もしも、今の彼の前でミスなど起こそうものなら——、どちらにせよこの討伐戦を失敗すれば死ぬことに変わりはないのだが。飛鳥達はより一層気を引き締めて、歩みを進めることを決心した。

理はそんな彼女らの気を知ること無く、背後から机型のシャドウ『笑うテーブル』から投擲された杖や剣を、《心眼》によってやはり見向きすることなく背面に回した片手剣で叩き落していた。……彼のおっかなさが、さらに増した瞬間であった。



Time Limit ?? : ??

「……（っ）だ」

約二分の時間をかけて、理達は前方車両のドア前までに到達した。ドアを通して強力な存在感を誰もが感じ取っており、この先に「大型シャドウ」が居ることをひしひしと思ひ知らされる。

勿論突入する前に、強行突破の為此処に来るまでに負っていたダメージを理の《ディア》で回復し、万全の状態とした。しかし、体力面は兎も角、精神面はそうはいかない。特に、精神力によってペルソナを扱う理は、最も疲弊していた。

それでも、彼らが悠長に休んでいる暇など無いのだ。飛鳥達は不安を覚えながらも、理に従い前方車両に続くドアの前に立った。

「……俺も列車も長くは持たない。短期決戦で行くよ」

「……了解」

そして、理達はこの列車を支配する「大型シャドウ」と相對する――

それは、美しい女性の姿をしていた。整った顔立ちの目元を覆う紅いマスカレード。車両の壁面に沿って張り巡らされる髪には聖典が刻まれている。

床面に腰を降ろし、それでもなお天井に頭が届くほどの巨軀であり、左右の半身はそれぞれ白と黒に分けられ、乳房にはBoaz^闇とJachin^光の頭文字が描かれていた。

この存在こそが、暴走する列車を支配し、理達を死に至らしめんとする残酷なる大型シャドウ『女教皇』^{ブリーステス}であった。

ドクン――、と理の心臓が跳ねる。かつて『魔術師』と相對した時も味わった、あの大型シャドウを無意識に求めてしまうという、不思議な感覚だ。

しかし、それに気を取られている場合ではない。頭を振ってその欲求を振り払い、片手剣を握りなおす。飛鳥達も『女教皇』も、共に臨戦態勢であった。

「……来る」

理の短い呟きと共に、壁面に沿う聖典の頭髪が撓る様にして四方八方から理達に向かってくる。理への攻撃を最優先とした『魔術師』とは違い、メンバー全員に万遍なく攻撃を仕掛けてくるあたり、シャド

ウ達も学習している様だ。

既に隊列を変更し、前衛には理と飛鳥が立つが、流石にこの多重攻撃は捌ききれない。二人はいくつかの髪の毛の聖典を切り裂くが、捌けなかった頭髮が柳生と雲雀に襲い掛かった。

「左だよっ、柳生ちゃんっ！」

「ああー！」

しかし、それをすかさず雲雀がフォローする。頭髮による攻撃を逸早く察知・伝達することで迎撃を可能とした。柳生はすかさずその方向に刃の仕込まれた番傘を投げて、『女教皇』の頭髮を切り裂く。

これにより『女教皇』の第一打は何とか防ぐことが出来たのだった。理はすぐさま作戦を立案し、全員に通達する。

「飛鳥は俺と一緒に奴の攻撃を防いで！ 柳生は隙ができたら銃弾を撃ちこんで、アイツの動きを止めるんだ！ 雲雀はその補助！」

一瞬でも良い、奴が『凍結』したら、すぐさま俺の《オルフェウス》で畳みかける！」

「うん！」

「任せろ！」

「わかったよっ！」

理は大声で作戦を通達すると、今度は《オルフェウス》を召喚し《攻撃弱化》を発動する。その後、召喚状態を維持したまま、再び襲い掛かって来た頭髮を迎撃した。

《タルンダ》により弱体化した攻撃力では、《オルフェウス》の豎琴による《突撃》で難無く打ち払うことが出来た。これにより『女教皇』は体勢を崩し、決定的な隙を晒す。無論、それを見逃す彼らではない。

「柳生ちゃん、今っ！」

「仕留めるっ！」

雲雀の指示に合わせ、柳生は番傘の仕込み銃を『女教皇』に向け、銃爪を弾いた。そこから放たれた《氷結弾》が、『女教皇』の眉間に吸い込まれるようにして向かっていく。

——だが、次の瞬間信じられないことが起こった。ぱきん、とガラスが砕けるような音が響く。

「……………な、に？」

『女教皇』の額に打ち込まれ、その顔面を凍結させる筈であった《氷結弾》は、着弾と同時に運動ベクトルを180度反転し、狙撃手である柳生へと襲い掛かったのだ。《氷結弾》は彼女の胸部の辺りに着弾し、全身を『凍結』させて崩れ落ちる。

その信じがたい光景に誰もが息を呑む。再起動が速かったのは理だったが、彼もまたこの光景を受け入れ難くあるようだ。

『氷結属性』の『反射』耐性だつて?!

それでも『女教皇』が何を起こしたのかを理解できるだけの理性は残されていた。いや、この光景は彼の判断ミスから来た惨劇だ。その彼がこの光景を否定するなど、有ってはならないのだから。

あえてミスの原因を上げるとすれば、結城理には、そしてこのメンバーには、アナライズ「向こう側」の■■■と違い、敵性存在を《解析》するバツクアツプ要員が居ないという事に尽きた。

尤も、そんな無い物強請りを今更したところで起こった出来事は変えられない。今理に出来るのは、ダウンした柳生のフォローをするよう、作戦を変更することである。

「ぐ……………つ、一旦全員で防御優先！ 柳生が戦線復帰したら、さつきと同じ作戦で——」

「待、て……………！ そんな余裕は無いぞ……………！」
「ッ!？」

息も絶え絶えに、柳生は何とか声を絞り出す。足元の覚束無いその身体を、半錯乱気味の雲雀に支えられながらだ。雲雀は、《氷結弾》を放つ合図を出したのが自分である為、柳生の今の状態を自分の所為だと責めているのかもしれない。

彼女が放った《氷結弾》は彼女自身の命を脅かすほどの威力は無かったものの、全身を『凍結』させられ、動くこともままならないでいた。

そして、この戦場において「動けない」という事がどれほど致命的であるかなど考えるまでも無い。だが柳生は、自身の安全よりも『女教皇』の討伐を優先させた。誰もが、その言葉の真意を察する。

「そんなっ?! もう次の列車が!?!」

窓の向こう側に見えた景色、大きなカーブを曲がった先の路線の上には、停車している列車車両が有った。その景色を見た理は、この車両が走る速度と次の列車までの車間距離を目測し、衝突までの残り時間を逆算する。

(あと30秒……!)

Time Limit 00:30——

だが状況は、そんな風に焦る彼らを嘲笑うかのように悪化していく。

理達はふと肌寒さを感じ、服越しに腕を擦る。次いで、吐く息が白くなっていることに気が付いた。空気中にキラキラと光り輝く粒子が舞っており、それが所謂ダイヤモンドダストであることに違和感を覚えた頃にはもう遅かった。

『女教皇』から放たれていた《広域氷結魔法》が、車内の温度を極低温にまで下げていたのだ。理達は最早、己の武器を上手く握れない程にまで全身を凍えさせていた。

悴んで取り落としそうな召喚器を必死に握りしめ、《オルフェウス》を何とか召喚し《アギ》を暖代わりとするが、焼け石に水だ。理の《アギ》では『女教皇』の《マハブフ》を相殺できない。『魔』のステータスが違いすぎるのだ。

最早冷気は車内全体に及び、壁や床までを『凍結』させ、空気中を舞う氷雪が視界を阻害する。理達は、完全に手詰まりだった。……手詰まりで、在るべきだった——

「……私が行くよ。結城くん、援護をお願い!」

「飛鳥ッ?! 何を——」

突然の飛鳥の特攻宣言に理は息を呑むが、今はその驚嘆の時間さえ惜しい。飛鳥もまた、彼の了承の言葉さえ聞くことも無く『女教皇』へ向けて突貫していった。理にはその光景がスローモーションに見える。

《デジャヴュの少年》を通じて見る光景にも、同じ様にして『女教皇』へと突撃する■■■の姿があり、■■■はその背に手を伸ばしていた。

馬鹿な、と理は思う。飛鳥／＼を貶したのではない、特攻するべきならば自分である筈だという思いからだ。彼女はシャドウへの攻撃手段を得てるとはいえ、耐性面は一般人と変わりない。『女教皇』の《マハブフ》を真正面から受けければ即死する可能性すらあるのだ。そんな彼女一人が突撃したところで、如何事態が好転するといふのか。……嗚呼、かつての／＼もこのような思いに駆られたといふのか。今の彼にとって、結城理／＼が何故手を伸ばすか等、分かりきったことだ。

『仲間』なだよ！』

ドクン——と、再び心臓が高鳴る。しかしそれは『女教皇』へと抱く渴望の欲求ではなく、結城理の新たな力の目覚めだ。

そう、仲間であるからこそ、結城理／＼はその背に手を伸ばす。得た絆を失いたくないからこそ、その能力を振るう。今この場で、力の足りない結城理ならばそれは叶わぬ筈であった。

『そりとう』を力を手入れたいだね。れもちよ
変った力みいだ』

理の視点は、再び《デジャヴユの少年》の中へと移る。

『でも変れるけ、何属さな力、それやが切り札に力。……君在り方しでね』

それは、結城理／＼が持つ真の力。デジャヴユの中に居る誰かは、その使い方を示していた。

理は言わば、数字の0ゼロのような存在。空っぽでありながら、無限の可能性を持ち、『奇跡』へとすら至ることの出来るその力。

『貴は御一人で、数のペルソナを持、そを使い分けとが来るです』

視点は変わり、今度は神秘的な青い部屋の中へと移る。その言葉を紡ぐのはやはり誰かは分からないが、この人物も理の力の使い方を教えてくれていた。

思い起こされるのは、あの『魔術師』や『女教皇』へと抱く渴望。しかしそれは、誰かは分からない言葉で漸く気付く事が出来た。

結城理はその「ナニか」を求め、打ち倒すことで、欠けていた「ナ

二かゝが満たされた様な感覚を味わったのだ。それは先刻の戦いで手に入れた、『魔術師』のアルカナ。

『宿るペルソナは——』

——そう、そのアルカナは示した。強い意志と努力こそが、唯一夢を掴む可能性であるのだから。

「……っ、飛鳥！」

「えっ?! 結城く——」

意識を現実へと戻した理は、今にも『女教皇』へと飛び掛からんとしていた飛鳥の肩を掴み、引き寄せる。

突撃を邪魔された飛鳥は、しかし自身を引き寄せる理の腕にドギマギしながら、どういう事だと彼に詰め寄ろうとして、その眼に宿る意志の強さに沈黙させられた。

理はそんな飛鳥の反応に構う事無く、召喚器をこめかみに押し付けて、銃爪を弾いた。

そして、飛鳥達は驚愕へと陥る事になる——

「——《ジャックフロスト》ッ！」

召喚されたのは、彼本来のペルソナ《オルフェウス》ではなく、イングランドの冬と霜と氷の妖精《ジャックフロスト》。

その見た目は、雪だるまの身体に青い帽子を被り、ひょうきんな顔をした可愛らしい小人である。しかし、この妖精が召喚されたことによる戦況の変化は絶大だった。

召喚された《ジャックフロスト》は『女教皇』の眼前へと飛んでき、《マハブフ》を受け止め、吸い込んでいく。

「これは、氷が……!?!」

それこそが《ジャックフロスト》の持つ特性、『氷結属性』の魔法を全て無効化してしまう『氷結無効』の耐性であった。これにより、『女教皇』の《マハブフ》を無効化し、飛鳥達の盾となったのだ。

「……でも、これじゃあ防ぐだけで精一杯。攻撃なんて——」
理はそんな風に焦る飛鳥を宥める様に、ゆっくりと話しかける。

「大丈夫だよ、飛鳥」

「結城くん、でも……」

次の瞬間、列車の天井が爆ぜたかと思えば、そこから飛び出してくる二つの影があった。その正体は――

「お待たせしました!」

「済まねえ、ちよつと遅れた! 皆大丈夫か!」

その二人は、線路上に取り残され、多数のシャドウに襲われていた筈の斑鳩と葛城であった。どうやら、シャドウを殲滅した後、走ってこの列車へと追い付いたらしい。現状ではやや場違いだが、つくづく忍とは規格外だと認識する理である。

「俺達は一人なんかじゃない。仲間が居る、……そうだろう?」

「……ふっ、あははっ♪ そうだね!」

飛鳥はそう言っただけ笑い、すぐさま臨戦態勢を取った。しかし、それを理、斑鳩、葛城の三人が押し留める。

今この場はペルソナ使いである3人が担うべき場面であり、彼女には柳生と雲雀のフォローを頼んだのだ。飛鳥も素直に従い、彼らの後ろへと回った。

「時間が無い、速攻で終わらせるよ」

「ええ。あのペルソナは何だと聞きたい場面ではありませんが……」

「話は終わってからだな」

話は手短に、理、斑鳩、葛城は臨戦態勢を取る。そして、一秒の間を置ける事も無く『女教皇』へと突撃していく――!

Time Limit 00:23――

《ジャックフロスト》、《氷の壁^{こおりかべ}》!

まず理が唱えたのは、味方全員に『氷結耐性』を付与する魔法だった。これは『女教皇』の《ブフ》《マハブフ》対策であるが、もう一つの理由が存在する。

「ペルソナチェンジ! 《ジャックランタン》!」

「ッ、また違うペルソナを?!」

理が新たに召喚したペルソナは、同じくイングランドに伝わる火の妖精《ジャックランタン》。カボチャの頭に小さな黒いマント、そして火の付いたランタンを持つという風貌だ。

《ジャックランタン》は本来ならば『氷結属性』を弱点とするペルソ

ナであるが、先の《ジャックフロスト》が唱えた《氷の壁》により、その弱点を突かれるという事は無かった。

「《敏捷弱化》！」

そして理が更に唱えたのは、対象の命中率・回避率を弱化させる《スクンダ》だ。これにより『女教皇』は動きが鈍くなり、斑鳩と葛城の攻撃を避けられなくなった。

「《ヴィゾヴニル》！ 切り裂きなさい、《パワースラッシュ》！」

「《ティアマト》！ 打ち砕け、《アサルトダイブ》！」

二人はここ数日のシャドウ討伐を通じて強化された物理スキルを持って、『女教皇』に畳みかける。強力な物理スキルの二連打により、大きなダメージを受けたようだが、それでも『女教皇』は倒れない。理は更なるダメ押しのために、新たなペルソナ、そしてスキルを発動する。

「《カハク》！ 《防御弱化》！」

「これって……！」

召喚された《カハク》は中国に伝わる木の精霊。小柄な体躯にチャイナドレスを纏う少女であり、《ジャックランタン》と同じく氷結弱点のペルソナだ。唱えたスキルは、対象の防御力を弱化させる魔法だった。

『魔術師』アルカナのペルソナは火炎魔法や補助魔法に優れたペルソナが多いが、同時に氷結属性を弱点とするペルソナも多い。《氷の壁》は、その弱点を補うのに最適なスキルであった。

そして、その様子を見ていた飛鳥達は、結城理が持つ真の力に気付く。ありとあらゆるペルソナを持ち、付け替え、使役するという“力”。何物でもなく、何物でもある存在、《ワイルド》。それこそが、理の“力”であったのだ。

《カハク》を還した理は、再びペルソナを付け替えて、今度は己自身である《オルフェウス》へとチェンジする。それは、今の彼らが持つ最大の魔法スキルを唱える合図であった。

「斑鳩先輩、葛城、合わせろッ！ これで決める！」

「ええ！」

「おう！」

Time Limit 00:11

理に呼ばれた斑鳩と葛城は、すぐさま彼の横に並び立ち、己のペルソナを召喚する。

「《ヴィゾヴニル》、《アギラオ》！」

「《ティアマト》、《ガルラ》！」

「《オルフェウス》、《アギラオ》！」

彼らが唱えたのは、強化されて中級の威力となった魔法スキルの三連打。『火炎』、『疾風』、そして再び『火炎』の魔法が組み合わさることにより、極限まで増大された灼熱の衝撃波が『女教皇』へと襲い掛かる――！

「二――《メガブレイズ》!!!」

その威力は凄まじく、速度超過により激しく揺れる列車をさらに揺るがすほどの衝撃を齎し、後方の飛鳥達は思わず目を瞑った。そして、彼女達が再び眼を開けた時には、『女教皇』の姿は何処にも無いのだった。

この合体魔法により、『女教皇』の討伐に成功する。だが理の知覚は、《アジヤヴユの少年》は、未だ警鐘を鳴らす――！

『ブレー■かけな■と、す■■はっ!!!』

「やつ――」

「いや、まだだ！」

歓喜の声を漏らした飛鳥を押し止めるように理は叫び、全力で運転室へと駆け出した。彼女達が一体何を、と思う暇も有ればこそ、再び列車が激しく揺れ出し、今度はギヤリギヤリと鉄を思い切り擦りあわせるような耳障りな音が響く。

「っ、そうでした！ この列車はもうすぐ次の列車に衝突しそうなんでした！」

「ってことは、結城のヤツブレーキを掛けたのか!? だけど――」

『女教皇』の討伐に時間が掛かりすぎ、今更ブレーキをかけても制動距離が足りないのだった。それは勿論運転席に立つ理も把握しており、激突が避けられないことを悟る。

「此処までか……ッ！」

だが――

「フン、諦めるとはお前らしくもないな、結城」

「柳生……？」

運転席に入ってきたのは、先程『氷結反射』でダメージを負い、『凍結』させられた柳生であった。今はその『凍結』も解除され、雲雀に支えられながらでありながらも、己の足で立っている。

戦況から一步引いており、感知能力に秀でている雲雀が傍にいた彼女は、理とほぼ同時に列車が止まらないことを察知したらしい。顔色は優れないが、それでも彼女の瞳には絶望は無い。

「何とか出来るのか？」

「ああ。オレ達の『力』は何もペルソナだけじゃないんだ。よく見ておけ結城、これが『忍』の力だ!!」

Time Limit 00:05――

柳生は意識を集中させ、顔の前で印を切る。途端に彼女の周りから、荒れ狂う暴風雨のような絶大な力が溢れ出す。そして柳生は、その『力』を解放する！

『秘伝忍法』！ 束縛せよ、《氷の足》^{こおりあし}!!」

「……イカ!？」

理が目撃したのは、常識では考えられない程の巨大さを誇るイカであった。いや、深海ならばこれと同じ大きさであろうダイオウイカなども存在するであろうが、言うまでも無くここは陸の上である。

柳生が呼び出したと思いきイカ？ は、その10本の触手のうち特に長い触碗の2本を列車に巻き付け、残る8本を地面に擦りつける。その摩擦力で列車に急ブレーキがかかり、徐々に減速していった。

理は其処で漸く、以前読んだ忍の書物の中に、『秘伝動物』と呼ばれる忍が使役する超常の存在が居ることを思い出した。

「ペルソナじゃないのか？」

現時点での柳生はペルソナ能力に目覚めておらず、この大イカがペルソナではないことは確かだ。書物にも『自然の力を動物の姿として具現化する』という記述がある為、この大イカは柳生が使役する

『秘伝動物』なのだろう。

何れにせよ、柳生とこの大イカの活躍で、列車は衝突する直前で停止するのだった。誰もが安堵の溜息を吐き、その場にどっかりと腰を降ろした。

そして理は、その強大な存在に興味を惹かれ、引いては「忍」という存在と能力にも関心を寄せる。

今までは飛鳥達が担うだけの力であり、その性能を把握するだけに留まっていた理だったが、こうして眼の前でその力を見せ付けられた以上、更なる情報を得る必要がある。

「……俺にも使えたりするのか？」

理はそんな僅かな期待を抱きながら、崩れ落ちていた仲間達を助け起こし、帰り支度に就く。

影時間の中の『満月』は、そんな彼らを怪しく照らし、線路の上に6人の影を伸ばすのであった。

21話 忍修行 前編

2009年 5月17日 昼間——

『いつの世も人の道は、光と闇に別れ、戦乱の世と変わらず裏の世界に生きるは“忍”^{しのび}』。

現代も然り。時代を経て忍の雇主は、政治家や企業に変わった——

私欲を満たすための道具として忍を雇う者もいるため、忍の世に变革が訪れた。

国家に所属する忍を『善忍』、違法行為を犯す忍を『悪忍』と区別される事になった。

その立場の違いから同じ忍であるにもかかわらず、『善忍』と『悪忍』は戦う運命にある。

そこにどんな理由や事情があろうとも、戦いから逃れることはできない——』

忍についてそう記されていた書物をぱたりと閉じ、結城理はため息を一つ吐く。場所は、半蔵学院忍学科の資料室。理はうず高く積もった書物の中で、そういった資料を読み漁っていた。

5月9日に現れた大型シャドウ『女教皇』^{ブリーステス}を討伐し、数日が過ぎた。その結果は上々、等と言える筈が無い。『女教皇』が列車を暴走させたお蔭で、列車は大幅にオーバーラン、うち一つの車両は天井に大穴が開いた。つまりは、人的被害こそゼロであったが、経済被害が途轍もない事になったのだ。一応、忍学科から、正確にはその上位組織から鳳凰財閥を通じ、鉄道会社に補填金が支払われてはいるのだが。

そもそも先日の『女教皇』の襲撃のみならず、常日頃の雑魚シャドウ討伐の際にも、街中には幾ばくかの被害が発生している。忍が扱う『忍結界』とは違い、シャドウの『影結界』、『影時間』内での破損は現実世界にも影響を及ぼすからだ。物品、建造物、影人間と化した被害者のケアまでも秘密裏に補填し、その経理を任されている鳳凰財閥は今日が回るほどの忙しさだと、村雨は死にそうな顔で語った。ついで、有り難いお小言も貰っていたりする。

「お前ら……、頼むからもうちよつと上手くやれんのか……?」

悲痛な顔で訴えてくる村雨から目を逸らし、理及び斑鳩はその功績を称え、煽てあげることで何とか彼を労う。小一時間も唆せば、彼もいつもの調子を取り戻していた。チョロい。

まあ、シャドウの被害にあうこの街が混乱せずにいられるのは、間違ひなく彼らのお蔭なのだ。鳳凰財閥とて表向きは普通の企業であり、忍という裏稼業に関われる人材は左程多くない。それ故に村雨も駆り出されているのだ。彼のそういった愚痴に付き合うことぐらい、甘受するべきであろう。理は大型シャドウを倒したことによつて、暫くはシャドウの被害が減るであろうことを伝え、村雨及び鳳凰財閥に感謝を捧げるのだった。

しかし、それにしたつて被害が完全にゼロになる訳でもない。鳳凰財閥と忍組織のサポートはあくまで金銭面のみだ。理は戦闘面におけるサポートの限界を、『女教皇』戦で感じ始めていた。

シャドウの存在の感知、周りの状況の把握、戦闘時における解析能力。それらを補う後方支援の能力者が、今のメンバーには欠けている。シャドウとの戦闘という絶対的な死地において、これらのサポート面は必要不可欠であるのだ。そして理は「忍」という存在にその可能性を見出し、今現在こうして忍の書物に目を通していただつた。

「……そこはまず私達に話を聞くとところじゃないの?」

「……俺は取説とかを読み込んでから実地に入るタイプだよ、飛鳥」

飛鳥を補助に置き、分からない箇所を彼女に質問し、纏めた情報を手元のノートに書き込む。時には彼女達の授業にも参加し、理は忍というモノに理解を深めていく。それがここ数日の、結城理の過ごし方であった。



理が忍に興味を持ったという事に、彼女達は初め難色を示した。彼自身の戦力を増強することは歓迎すべき事だが、それ以前の問題が有

る。

有体にいえば、彼は詰め込み過ぎなのだ。学園生活やシャドウの討伐だけではなく、最近の理は部活動も始め——しかも運動部と文化部の掛け持ちだ——、生徒会にも通っているという。

何故そこまであちこち通うのかと飛鳥達が問い質せば、「……何となく？」という答えしか返ってこない。其処は幾らなんでも何となくで済ませてはいけないと思うのだが。

兎に角、流石にこれ以上彼に何かをやらせようものなら、本気でパンプしかねない。忍の事は、忍である私達に任せてく欲しいと、飛鳥達は理を思い留まらせようと説得したのだが、彼は頑として聞き入れなかった。

前述の通り、理は「忍」に戦闘時のサポート面として期待を寄せている。そしてそれが、これからの戦闘に絶対的に必要であることだ。現場リーダーとして、その知識を得ることは不可欠であると。

そう反論されてしまえば、彼女達も強く言うことは出来ない。取り敢えずまずは、理に基礎的な知識を身に付けさせ、彼がどのような反応を示すのかを観察するのだった。複雑怪奇な忍の世界の内情を知れば、彼もそうそう手を出すことも無いだろうという期待からである。

「忍の階級は、下から順に下忍、中忍、上忍、隠密、特上忍、最上忍、天上忍、極上忍——」

……だというのに、理はあっさり忍の知識を吸収していく。ぶつぶつと呟きながら、凄まじい速度でペンをノートに走らせているその様子に、隣で見ている飛鳥はドン引きだった。

飛鳥の頭の出来はどちらかといえば、余り宜しく無い方である。始めの内は彼の質問疑問などに応えていたのだが、時間が経つにつれその頻度も低くなり、今では彼へと資料をせつせと運ぶ侍女扱いだ。

(まあ、これはこれで悪くないけどね♪)

資料を運び終えて、飛鳥は理の隣にすくと座る。その端正な顔を横から覗き込むというのは、中々に役得だと彼女は思った。

飛鳥はにこにことした顔で理の横顔を見つめているが、彼はそれに

気付かない程集中しているのだ。

「特殊ランクに、餓忍、絶忍、轟忍、虚忍、影忍、殲忍、卍忍、朧忍、秘忍。そして頂点に『カグラ』がある、と。」

……そういえば、クラスに似たような苗字の子が居たっけ。厄介な病気に罹患して、治療の為に姉妹で離島に引っ越したらしいけど、大丈夫かな？」

時折そんな独り言を交えつつ、理は忍の知識を深めていく。飛鳥はそれを眺めている。穏やかな時間が、ゆっくりと流れていった。

飛鳥は思う。書物に向ける理の真剣な眼差しは、全ては自分達と共に戦う為に有るのだと。そうして、飛鳥の胸の中に不思議な感情が渦巻く。

……嗚呼、やっぱり私は結城くんの事が、■■■■しいと——

「——アインシュタインの有名な理論は一般相対性理論で、赤道付近にいる人達は自転によって大体時速1700キロで移動している。」

石鱈はアルカリ性で、吉村冬彦の随筆は万華鏡——」

「……………うん？」

ちよつと待て!?

「ゆ、結城くん……………？今は忍に関する勉強中じゃ？」

「そうだけど、明日から中間試験だから、ちゃんとした勉強もやっておかないと」

「うえっ!? 表側あっちと裏側こっちの勉強を両立してたの!？」

「……………そんな変な事かな？大丈夫、飛鳥？stay with meしつかりして」

「言葉の意味は分からないけど、変なのは結城くんの方だよ……………」

飛鳥は驚愕したまま、未だ何処がオカシイのかと首を傾げたままの理を一瞥し、きつとこの少年は脳みそが二つくらいあるのだと結論付けて、これ以降のツッコミを諦めた。

理はそんな彼女の様子に訝しんでいたようだが、暫くすれば興味を失くし、再び勉強に取り掛かる。彼は今度はカオス理論なる言葉まで呟いていたが、飛鳥は最後まで耳を塞いで聞かなかったことにするのだった。

2009年 5月25日 放課後――

◆
中間試験を終え、結果発表の日。理は当然の様に、学年トップの成績を収めていた。周囲から向けられる視線は、称賛やら尊敬やら、或いは呆れといったモノだ。

無論、忍学科の面々からも祝福された。教師である霧夜からはちよつとしたお小遣いを、クラス委員の斑鳩からは弁当を――そちらは丁重にお断りしたので、別の機会に報酬を貰うという形になった。そうして、試験後の諸々の諸事情を終え、今の理は修練場を訪れている。忍についての学習を修了し、いよいよ実地訓練に入るのだ。

「……で、まずは滝行からなんですな」
「ええ。わたくしたち忍が扱う『忍法』は、自然との一体こそが重要になります。滝に打たれることで、精神統一と共に、自然に向き合うのです」

今、理達は修練場の一角にある滝壺を訪れていた。彼の言う通り、滝行を行う為である。それに伴い、服装も何時もの半蔵学院の制服に変わり、白装束に身を包んでいた。

それは無論斑鳩達でもあり、見麗しい少女達が薄手の長襦袢のみという姿は酷く艶めかしい。尤も、理は左程興味を示さず、何人かの少女は落胆した様であったが。

「自然との一体……。『秘伝忍法』を使う為には、自然の力を動物として具現化する、でしたな」

「その通りです。その具現化された動物を、私達は『召喚動物』或いは『秘伝動物』と呼びます」

理と斑鳩は忍法に關しての情報を再確認しながら、滝壺に向かって歩いていく。飛鳥達もその後に続いたが、その表情は何処か優れない。単純に、冷たい滝壺の中に身を沈めるといふ事に気が進まないだろう。

そんな飛鳥達を、斑鳩は修行の為だと説得しながら、滝の真下にそ

の身を置く。理もそれに倣い、彼女の隣で滝行を始めることにした。冷たい水流が、全身を激しく打ち据える――

「……でも、俺は忍法の素質は殆ど無いという事でしたか？」

理の言う通り、忍学科が彼の忍としての素質を調べた際、彼にはその才能が殆ど無いであろう事が分かっている。資料を調べた理にも理解できていたが、忍としての素質はその殆どが家系によって決まるのだ。この半蔵学院忍学科に居る彼女達も、才能の大小は有れど皆例外なく忍の家系である。寧ろ、ペルソナ能力以外は一般人であった理に僅かでも素質が有っただけでも僥倖なのだ。もしかしたら彼は、何処か有名な忍の分家筋であるのかもしれない。

無論、才能が皆無であることを理も理解し、受け入れている。無理なら無理ですっぱり諦めるが、出来るところまではしたいのだった。「まあ、通常の忍法でも多かれ少なかれ自然の力を使うので、『秘伝忍法』とまではいかずとも、ある程度の忍法ならば使えるようになるのでは？」

「適当ですね……。そりゃあ、俺だって身体能力強化の忍法くらいは使えるようにはなりたいですけど」

理にしては珍しくも愚痴りながら、斑鳩に自身の想いを吐露する。今までのシャドウとの戦闘において彼女達忍の圧倒的な身体能力が、戦闘時に理との足並みを揃えることを難しくしていたのだ。

それが顕著に表れたのは、やはり5月9日の『女教皇』戦であろう。『女教皇』の居る場所へと向かうときに理の足が速ければ、或いは戦闘時に忍の技を持って手古摺る事が無ければ、あそこまで飛鳥達を危険に晒すことは無かったのだから。

「欲張りだねえ……。ペルソナ能力だけじゃ、まだ足りないってのか？」

「足りてはいるけど、もっと万全にしたいっていうのが本音だよ。それを言うなら葛城や斑鳩先輩は、もうペルソナと忍法の2つの能力を持ってやるよね？ それがちよっと、羨ましいってのもあるな」

「む……」

同じく滝に打たれている葛城は、呆れたように理に声を掛ける。か

つて自身が力に溺れそうになった故の忠告でもあるのだろう。無論、理としてその危惧を抱かれることは想定済みであるし、それでも彼は力を欲するのだ。

「……結城さん、無茶だけはしないで下さい。貴方は他の何物にも代えられない、わたくし達の戦略の要、そして大切な仲間なのですから」
「そうだけ。お前が居たから、アタイ達は此処まで来れたんだ。アタイ達に出来るフォローならなんだってするから、そう気負うんじゃないよ」

「……ええ、ありがとうございます」

理は斑鳩と葛城の二人からそんな言葉を掛けられ、気恥ずかしくも礼を告げるのだった。

……斑鳩と葛城からの確かな信頼を感じる。二人との仲が深まった気がした――

しばらくして、理達は滝行を終える。激しい水流に打たれつつ滝壺に身を沈めていた為、全身を程よく解すことが出来た。滝行には、こういったマッサージ効果もあるようだ。

全員が水を吸った白装束の裾を絞りつつ陸に上がり、その寒さに震える。飛鳥や雲雀などは、ガタガタと全身を震わせて、身を温めようとしていた。

「さ、ささ、寒いくっくっ!!!」

「……火、要る?」

「止めて下さい、これも修行の一環です」

理は見かねて《^ア火炎魔法^キ》で暖を灯そうとするが、それを斑鳩に押し留められる。「そういうものですか」と納得させられ、手に灯していた《アギ》を消す光景を、二人が恨めしそうに見ていたのだった。

因みに、そういう斑鳩も唇を青くしており、彼女はやせ我慢をしているのだろう。柳生は無言だが、やはり身を震わせている。どうか飛鳥達より酷いので、寒がりなのかもしれない。

葛城は……、白装束が水に濡れたことにより、くつきりと浮かび上がる少女達の身体のラインをガン見していた。ある意味、最も酷い。「何言っただ、普通此処は見るところだろオ!?」 結城、お前も男なら

もうちよつとがつつくべきだぜ！」

「いや、どうでもいいので」

「チッ！」

何やら舌打ちが多数聞こえたが、理は無視することにした。そうではなくとも、男性が女性の半裸姿を凝視するなど、マナー違反もいいところである。そういった良識を、彼は当然備えていた。

確かに葛城の言う通り、今の彼女達は水に濡れ、白装束がびっちらりと肌に張り付き、しっとりとした色気を漂わせている。短めの白装束から肌蹴た裾から垣間見える肌や手足、濡れた髪が顔に張り付いて、何時もとは違った印象を見せているのだ。

さらには、濡れて透けた装束は少女達の豊満な身体を投影し、身に着けている下着の色や形さえ判別することが出来る。しかもそれが、計5人という状況なのだ。これでは、大した反応を見せない理の方に問題が有ると言われても仕方が無いだろう。

……それどころか、寧ろ――

「(結城(くん)(さん)、エロいなあ……)」

同じく水に濡れた状態となっている理に対して、そういったヨコシマな感情を抱いている少女達が居るほどだ。『水も滴る良い男』という言葉がこの上なく似合うのが、今の理の姿である。

理はその何だかよく分からない悪感情を向けられた事により、水の冷たさとはまた別の悪寒を感じ、身震いするのだった。



そんなこんなで、漸く本格的な忍法修行に入る。水から上がり、身体を拭いて、いつもの服に着替えて人心地が付いた理達は、主に3グループに分かれて彼の忍法修行を行うことにした。

基礎的な『忍法』を身に付ける為の修行には斑鳩・葛城を、『秘伝動物』召喚の忍法には柳生・雲雀を、そして彼女達『忍』の力の要である『忍転身』には飛鳥が就く事となった。

理は二人の師事を受け、四苦八苦しながらも忍法を身に付けようと

している――

「……飲み込みは早いですね。既に自然エネルギーの取り込みは出来るようになりましたか」

「まあ、ペルソナのお蔭で『力』の流れ方は大体分かります。自分の内から出すか、外から取り込むかの違いですから、コツを掴めばある程度は」

そもそも斑鳩と葛城が基礎技術の師事を担当しているのは、この二人が理と同じくペルソナ能力を有しているからだ。未だその全容が分かっていないペルソナ能力が、彼女達の忍法にどのような影響を及ぼすのかさえ定かではない。二人曰く、以前と変わり無いという事なのだ。

そうして暫く経てば、理は取り込んだ自然エネルギーを活用する忍法を行使できるようになり、当初の予定であった身体能力強化の忍法を習得する。

理は習得した『力』を強化するスキルを《力のチャクラ》、『速』を強化するスキルを《速のチャクラ》、『耐』を強化するスキルを《耐のチャクラ》と名付け、今後とも活用するようにするのだった。

「けどなあ、結城はそこで頭打ちか。センスは有るだけに、素質が無いつてのは勿体ないねえ……」

……尤も、各スキルにおける能力の補正值はお察しレベルであり、無いよりはマシという程度なのだが。葛城もその部分を嘆くように理を憐れむのだが、しかし彼はさして気にする風でもなく、けろりとしてこのたまった。

「こればかりは如何しようも無いよ。大事なのは、如何にこの能力を使うかだ」

「お前がそう言うんならいいけどさ……」

そももどかしそうにぶつぶつ呟く葛城は、上昇志向を持たない理に不満なのだろう。斑鳩はそんな彼女を窘め、改めて理に向き合う。

理は地べたの上に胡坐を掻いて座り込み、両手は忍法の印を結んでいたが、斑鳩から話しかけられた為、印を解いて少しだけ体勢を楽にした。

「それで、結城さんは取り敢えず身体強化の忍法を習得できましたが……。他に必要そうなものは有りますか？」

「そうですね……」

理は少しだけ考え込むそぶりをして、次いで斑鳩をじっと見つめる。その銀灰色の双眸に見詰められ、僅かに胸の高鳴りを覚えるが、それを押し留めて訊ねる。

「な、なんでしょう？」

「斑鳩先輩……飛燕って、何処に仕舞ってます？」

「え？」

「いや、斑鳩先輩は戦うとき、飛燕を何処からともなく呼び出すので。あの武器を出し入れする？ 忍法が使えたらな、と」

ペルソナを付け替えることの出来る《ワイルド》に覚醒した理は、様々なポジションに就く事が可能となった。前線に立つての近距離及びペルソナ攻撃、後衛からの支援魔法や遠距離武器での攻撃などだ。あえて言えばそれらを両立する中衛が、今の彼のポジションかもしれない。

その為に、状況に応じて武器を使い分ける必要も出てくるだろうと感じて、理は斑鳩にその忍法を使えないかと尋ねたのだ。斑鳩は何故かわたわたとしながらも、理の質問に答える。

「そう……ですね。確かに武器引き寄せの忍法は有用でしょうけど……それなりに難しいですよ？」

そう斑鳩は忠告するが、理にとって難しきなど二の次である。大事なのは、有用か無用か、その二つだけだ。

兎に角理はその忍法をどうやって修得すればいいのかを斑鳩に尋ねようとして、其処に葛城が待ったをかけた。

「なあオイ、今思ったけどさ、結城はいろんなペルソナを召喚できるんだから、ペルソナを“武器だけ”で召喚するとかできないのか？」

「……武器だけを？」

そう葛城に問われて、ふと考え込んでみる。彼女の問い掛けは予想外で、かつ今まで想像だにしなかったことだ。余程柔軟な思考を持っているのだろうか。

理は忍法修行もそっちのけて、精神を集中して自己の内側たるペルソナへと問い掛けて、葛城の提案が実行できないかを試すのであった。そして――

「……出来る出来ないで言えば、出来る……と思う」

「おお、マジか！　って、思う？」

「何と言うか……、非物質存在のペルソナを、物質である武器にするのが少し手間が掛かりそうなんだ」

ペルソナには元より物理的な干渉能力が有るが、それでも彼らはこの世の者^{モノ}ではない存在だ。それを武器とする為には、この世の物^{モノ}へと変換させる必要がある。

■■■■の記憶の中にもあった、ペルソナを武器や防具へと変換する物質化^{アイテム}スキル。その感覚はまるで、ペルソナから武器を産み落とす様なものであると、理には感じられた。

「今はまだ、使えそうにないかな」

「そうか……、残念だな……」

「まあ、精進あるのみですね。今は取り敢えず、結城さんが忍法を覚えるのを優先しましょう」

その後、理は二人から様々な忍法を再び師事される。

天空を掛ける戦闘法《飛翔乱舞^{ひしょうらんぶ}》、周囲の敵を弾き飛ばす《リミットブレイク》、決闘用の空間を創り上げる《忍結界》、e t c――

しかしやはり、理にはそれらの忍法が使えない。そろそろ斑鳩と葛城の視線に憐れみが混じってきたように感じられるが、やっぱり理は気にした風でもない。その神経の凶太さだけは、最早見習うべきであろう。

斑鳩はもう自分の指導に問題が有るのではと落胆しており、葛城は投げやり気味に理に問い掛けてくる。

「……お前、もういつそ忍者のペルソナとか居ねえの？」

「あー……多分居る、かな？」

理はシャドウとの戦闘を通じて、打ち倒すことにより、心の海よりその恩恵や成長の証として新たなペルソナを獲得する。その中で『愚者』のペルソナに、そういった気配が感じられるのだ。

「で、使えますか？」

「まだ無理」

「ですよー」

結城理が「忍」として大成するには、まだまだ暫く掛かるようである。

22話 忍修行 後編

2009年 5月26日 放課後——

斑鳩・葛城による『忍法』講習が明けてから一日、今日は柳生・雲雀の二人による『秘伝動物』の講習である。

忍法の才能が無い理が『秘伝動物』を扱えるのか？ などと言うなかれ、この講習は『ペルソナ』と『秘伝動物』の差異を調べるために催された物であり、理の『秘伝動物』召喚は二の次だ。

『秘伝動物』とは果たして何であるのか？ その形を成す『自然の力』とはどのようなエネルギーであるのか？ そもそも『ペルソナ』自体が何物であるのか？

理達はこの講習によつて、それらの答えを得ることが出来るのかもしれないのだった。

「……で、飛鳥も参加するんだね」

「あはは……、私はまだちよつと『秘伝動物』の召喚に慣れてないから……」

……この少女、イマイチ締まらない。

気を取り直して話を聞けば、飛鳥が扱う『秘伝動物』召喚は、動物そのものを召喚するのではなく、己の肉体に宿らせる形であるという。〃蛙〃の秘伝動物を召喚する彼女は、その筋力を脚に宿らせて超常的な瞬発力を発揮する。彼女の『秘伝忍法』も、その瞬発を生かしたスピード重視のモノだ。

対して、飛鳥以外の4人の忍学科メンバーはハッキリとした形で秘伝動物を召喚する。

斑鳩は〃鳳凰〃、葛城は〃龍〃、柳生は〃鳥賊〃、雲雀は〃兎〃。因みに秘伝動物がどのような姿を成すのかは、才能と同じく家系によつて決まるのだとか。

理は早速、柳生と雲雀から秘伝動物召喚の術式——忍法は両手で組む印が術式になる——を教え込まれ、秘伝動物召喚の忍法を行使するのだった。

「出ないね」

「出ないな」

「出ないみたいだね」

「……まあ、分かったことだけど」

当然、駄目だったのだが。理の才能がからつきしであることは瞭然であるというのに、彼女達は一体何を期待していたというのだろうか？

「「たぬk——」」

「やめろオ!？」

あんまりにもあんまりすぎる期待に、思わず大声でツツコむ理。だから、理は風やら砂の忍ではないのだ。

そんなこんなで、印を変えるなり自然の力を操作するなどして試行錯誤するものの、やはり秘伝動物は召喚出来ない。理に言わせれば「手応えが無い」という事だった。勿論それを理解はしているが、目の前で柳生が烏賊の秘伝動物をあつさりと呼喚する光景を見せられれば、多少なりとも感じる事も有るというモノだ。

……尤も、その想いは続く雲雀が秘伝動物を召喚したことによって、綺麗さっぱり消え去る羽目となった。

「雲雀……何その、……何?」

「忍兎にんとだよつ、可愛いでしょっ♪」

雲雀が抱えているそれは、何とも言い難い生物ナマモノだった。立派に伸びる二つの長い耳は兎のそれであり、それだけならば理もそのナマモノを兎として認識できたかもしれない。しかし、それだけだ。それが持つ兎としての特徴は、そのウサミミだけなのだ。

彼女の腰にも迫ろうという体長には、まあ目を瞑ろう。首に巻かれた紅いスカーフは、若干飛鳥と被っているが十分オシャレだ。額に書かれた「忍」の文字はよもや虐待だろうか、実は雲雀は意外と黒いのだろうか。

しかし少なくとも普通の兎はピンク色の体毛をしていないし、二足歩行だつてしない。何より、そのドギツイ三白眼は絶対に兎のモノではあつてはならない。コレを兎と称さうものなら、漏れなく地球上全ての兎から抗議が来るだろうという、そんな風貌であった。

ハツキリ言おう、キモい。

「……それが、雲雀の秘伝動物なの？」

「うんっ♪ 初めはちよつと大きな兎さんだったんだけど、気付いたらこんな姿になってたんだっ♪」

そう雲雀は楽しそうに笑い、忍兔の頭をぐりぐりと撫でる。彼？

彼女？ は、その感触に心地よさを感じているようであり、うつとりと眼を細めていた。

しかしふと、忍兔は理の方へと視線を向ける。その視線には剣呑な感情が多分に含まれており、間違いなく友好的なものではない。言葉に表せば、「あ？ 文句あるのかコラ？」といった所か。

何と言うか、その態度にもう理も呆れ果てる。『秘伝動物』が感情を持つなど、理が読んだどの書物にも記されていないかった。この兎モドキ、色々と規格外すぎる。いや、真に規格外なのは雲雀の方か。

確かに雲雀は、他の忍メンバーとは隔絶した感知能力を持つなど、覚的な才能に溢れている。その才覚が、こうして『秘伝動物』召喚にも表れているのだろう。

(『秘伝動物』の忍法は雲雀に学ぶか……?)

この実技が終了した後は、座学による『秘伝動物』召喚忍法の教授を行う事になっている。理論と感覚、どちらも重要視する理にとっては、更に詳しい理論を覚えるのは当然の事であった。

まあ、万一自身が『秘伝動物』召喚忍法を獲得したとして、あのようなナマモノが現れるのは勘弁だが、そちらは置いておくとしよう。それより問題であるのが――

「……く、また雲雀と……ッ！」

相も変わらず雲雀大好きっ娘、柳生が此方を睨んでくる事だろうか。

理は取り敢えず、何時もの様に「どうでもいい」と溜息を一つ吐くのだった。



理は『秘伝動物』召喚の実技を終え、座学を通じ、数日の時間を経て幾つか気付いた事が有る。

自然の力という超自然的なエネルギーによって形作られる『秘伝動物』は、いわば『精霊』というモノではないか、という事にだ。

火の属性を持つ斑鳩の鳳凰は『火^{フレイミィス}霊』。風属性の葛城の龍は『風^{エアロス}霊』という風に。

そんな彼女達の秘伝動物召喚という能力をペルソナのスキルで表すのならば、『精霊召喚』とも言えるだろう。おそらく、そのスキルを上手く扱えば、ペルソナの更なる能力向上に繋げることが出来る筈だ。

そう思い、斑鳩と葛城に打診してみる。

「ペルソナと秘伝動物の同時召喚って出来ない？」

「無理です?!」

「何言ってるのオマエ?!」

バツサリである。単純に、彼女達ではその二つを扱うのにスペックが足りないという事なのだろうか。

そう言う理ですら、二体のペルソナの同時召喚には未だに至っていない。しかし、『デジャヴュの少年』の中で見る■■■■■は、ペルソナの同時召喚による合体スキル『■■■■■』を行使していたのだ。

理もまた、そう遠くない内にペルソナの同時召喚を習得するものと思われる。その事を彼女達に伝えると、何処か呆れたような目付きで睨まれたのを理は理不尽に感じた。

しかしそれは、寧ろ当たり前なのかもしれない。結城理のペルソナ能力は、後から覚醒した斑鳩や葛城のそれとは天と地ほどに隔絶している。

彼女達は理の様に複数のペルソナを使い分ける事など出来ず、スキルの行使にも制限が有る。『影結界』や『忍結界』ではない通常空間ではペルソナを召喚出来ない、といった風にだ。無論彼には、そういった制限など無い。

これでは、理がペルソナの二体同時召喚の可能性を示した事に、彼女達が呆れながらも納得したのもむべなるかな。

尤も、その代わりにという訳ではないだろうが、忍法の才能が皆無である為、ある意味バランスが取れているのかもしれない。

(だけど、それならそれでやりようはある)

座学を終え、休憩時間となった忍部屋・資料室内では、理がまたしてもノートにペンを走らせている。ただし書かれている内容は、対シヤドウ戦における戦術論だ。

昨日今日の実習を通じ、ある程度までは忍法を使える形にした為、彼の取れる手札は幾つかが増えた。その新たに増えた手札を盛り込んだ戦略を、今こうしてノートに書き込んでいる。

彼の記憶力ならば態々ノートに書き込むなどする必要は無いが、後でメンバーに作戦指針として公開する為、こうして紙面に書き起こしているのだった。

しかし、そんな風に黙々と戦術論を書き起こしている理に、ぽつりと問い掛ける声があった。

「……結城さんは、凄いよね」

「……何が？」

話しかけてきたのは、座学を終えた後、理の補助に付いていた雲雀であった。

それは天真爛漫な彼女とは程遠い、思い詰めた様な声色だ。その雰囲気に理も手を止め、隣に座っていた雲雀にへと顔を向ける。

今の雲雀は珍しい事に、何時も一緒に居る柳生の姿が無く、それだけでもこの話が彼女にも聞かせたくないモノだという事を察することが出来た。

「ひばりはさ、思うんだ。……ひばりは、忍には向いてないんだって」「……何でそう思うの？」

「だって、修行をしてもひばりはぜんぜん強くなってる気がしないの。おまけにドジだし、皆に迷惑を掛けるし……」

「……」

それは、雲雀が今までずっと抱えてきた負の感情だ。それをこうして目の当たりにし、実はネガティブであるという彼女の本質を垣間見て、理は僅かにたじろいだ。

「でも、結城さんは違う。忍の才能が無くつても、ペルソナや頭の良さが有るから、今はこうして作戦立てをする事だって出来る。……ひばりとは、全然違う凄い人だよ。そう……全然……」

「……買い被りすぎだね。俺はそんなに大した人間じゃ——」
「っ、それでもっ！……ひばりじゃ結城さんには勝てないんだよ……」

理は何と声を掛ければいいのか分からなかった。雲雀は一生懸命やっている、等と無責任な言葉を掛ける心算も無い。その結果が出ないからこそ、今雲雀はこうして悩んでいるのだから。

雲雀のコンプレックスは、所謂「持たざる者」としての悩みであり、その対極に位置する理が何を言った所で、彼女に届く筈が無かった。

「……だからこそ理は、まずはその勘違いを矯正するのだった——

「はあ……雲雀、キミはそんなに自分を卑下する事なんか無いよ」
「でもっ！」

「俺は、見ての通り忍の才能は無いから、そっち方面でキミに言える事は無い。」

「……けど、雲雀はこれまでずっと俺達と一緒にシャドウと戦ってきた。その功績を、その強さを、俺達はちゃんと知っている。それだけは否定させないよ」

「そ……そうかもしれないけど」

「というか、雲雀は俺に勝てないなんて言うけど、つい先日組手で俺をボコボコにしたのは誰なの？」

「それは御免なさい」

理は雲雀の言葉を否定し、自身が持つ価値を告げる。ついでに、ちよつと不満を漏らしたりしたが、そっちは謝られた。これは単純に、『電撃属性』を操る彼女とでは《オルフェウス》との相性が最悪だったという事なのだ。

「……それでもキミが、まだ卑屈になるのなら、その理由を教えてほしい。どうしてそこまで、自分自身の事が信じられないという事にね」

「っ！」

雲雀は理のその言葉に、明らかに動揺して見せる。彼は気が付いていたのだ。雲雀のコンプレックスとネガティブさが、過去のトラウマから来るといふ事に。

流石にそれを言葉にするのは憚られるのか、彼女の口は堅い。それでも理は、雲雀に問うのだった。

「俺はもつと、雲雀や皆の事を、知りたいから」
「うう……」

しばらく雲雀はもじもじと身を揺すったり、ちらちらと理と視線を合わせたり外したり、いいいじと指を絡ませていたが、やがて決心がついたようであり、ゆっくりと口を開いた。

「……結城さんはさ、ひばりの『眼』をどう思う？」

「綺麗な眼だと思うけど？」

「ぶふっ!」

突如投げ掛けられた問いに、理はあっさりと応えてみせる。しかし、それがド直球の即答で褒められるのは想定外であつたらしく、思い切り咽込んでいた。

後、その咽込む声は何故だか二つ聞こえた。一つは勿論雲雀の物だが、もう一つの声は資料室の天井隅あたりから聞こえた気がする。まあ、そちらは今置いておこう。

「そ、そうじゃなくて……、その……」

「まあ、不思議な瞳をしているよね。華の意匠が有るなんてさ」

「うん、ひばりのお家は、この眼を『華眼』^{かがん}って呼んでる。……ひばりなんかには、分不相応な力だよ」

そして、雲雀はぼつりぼつりと語りだした。

雲雀の家系には時折、『瞳術』と呼ばれる瞳に宿る異能を覚醒させる者が現れるのだという。その能力は、『人の心を操る』という強大なモノだ。彼女は思春期の頃、その『華眼』を開眼し、一族が期待する才能を持つ事となった。

……そう、その『眼』こそが、雲雀の重荷となったのだ——
「ひばりは昔からずっとダメダメだったけど……、この眼を得てから

家族は皆その事を気にしなくなっちゃった。

訓練に失敗しても、「次はきつと上手くいくから」って何回も言われて叱られなかった。兄妹の皆より何倍も時間をかけてやっと出来るようになったら、今度は「流石は雲雀だ！」って褒めてくれた」

「……」

家族という最も身近な存在から寄せられる過度な期待に、雲雀は耐える事が出来なかった。理は口を閉ざす。事が忍に関するモノである以上、彼が伝えられる事は多くない。今は黙って、彼女の話に聞き入っていた。

「……ひばりだって分かってるよ。皆が本当に大切なのは《華眼》であって、《雲雀》自身じゃないって」

無論理にだって、それを否定することは出来ない。忍の世界のみならず、何処でだって稀有な才能は重宝されるものだ。其処に当人の意思が必要とされるのかはケースバイケースであるが、少なくとも雲雀自身は《華眼》という才能だけに価値を見出してしまった。……自身自身を無価値であると、断じたのだ——

「ねえ、結城さんはどう思う？ ひばりみたいな落ちこぼれが、こんな《眼》を持ったって、本当に忍になれるのかな？」

雲雀は改めて理に問い掛ける。その姿は、断罪を待つ咎人の様だ。ここで彼が下手な事を言おうものなら、彼女は間違いなく忍の道を歩む事は無くなるだろう。部屋隅からの殺気が容赦なく襲い掛かってくるが、その威圧に臆することなく理は雲雀に向き直り、真摯に応えた。

「……辛いよね」

「え？」

「雲雀や俺は、そんな風に期待を寄せられ——いや、押し付けられてきた。大人達は、見栄や面子や体裁を気にするから。あいつ等はただ、『この子は私が育てた』って自慢したいだけなんだ」

「……う」

理の言葉は辛辣であり、雲雀にも理解できるものだった。彼女の脳裏には、かつて《華眼》を開眼した際、一族徒党の前でその眼を見世

物の様に晒された記憶が蘇る。

一族の忍達は揃って雲雀を絶賛し、褒め称えてはいた。しかし、彼女の《華眼》は心を操り、見抜く。雲雀の眼は、彼らが心の内では下卑た嗤いを浮かべていた事を見透かしていた。

その経緯もまた、雲雀が自分は忍の落ちこぼれという卑下と、《華眼》の忌避に繋がるのだ。

「結城さんも、そうだったの……？」

「……俺の場合は只の、学校での成績の出来具合だけだよ。いい成績を出さないと、罰くらいは有ったけどね」

「それって……！」

普通の家庭であるならば、子供の成績に一喜一憂するのは当然である。だが知つての通り、結城理という少年は孤児であり、引き取られた先は血や絆の繋がりが薄い、殆ど“他人”であった筈だ。

そんな彼らが、幼い理に課す罰など容易に想像がつく。彼の半蔵学院での優れた成績に、こういう背景があつたことを知り、雲雀は驚愕するのだつた。

「だけど雲雀、本当に全ての人がそうだったの？」

「え……？」

「《華眼》だけじゃない、本当の《雲雀》を見てくれる人が、きつと居た筈だ。……少なくとも俺やこの忍学科の皆は、そう思っているよ」

「……………あ」

「大事にするんだ。その《眼》は絶対に、キミの力になる筈だから」

不意に、理の手が雲雀の顔に触れる。右手を伸ばし、彼女の頬を撫でる様にして添わせたのだ。

彼のやや低い体温が掌越しに感じられ、撫でられるという心地良い感覚に雲雀の心は微睡む様に安らぐ。……何だか殺気が倍増したような気がするが、無視だ無視。

「……それに、さっきも言ったけど俺は雲雀の眼は綺麗だと思うよ。

《華眼》なんて関係無く、ね」

「結城さん……」

雲雀はふと、真正面にある理の《眼》に視線が移る。其処に有るの

は、満月のように美しい銀灰色の瞳であり——、同時に悍^{おぞ}ましく濁った、“死”を宿す瞳であった。

綺麗なモノには魔が宿るから、それはまるで、雲がかつた朧月。雲雀は、初めて会った時から理のこの眼が好きになれなかった。斑鳩や葛城などは彼のこの眼を気に入っている様だが、彼女にはそれが理解出来ないでいた。

しかし、今ならば解る。美しいモノを汚すその濁りは、彼の観てきた絶望という淀^{よど}。清濁を織り交ぜる理の眼は、一度絶望に沈んだ彼女達の心を揺らすのだという事を。

……飛鳥は多分、それらをひっくるめて彼を気に入っているという辺りだろうか？

「——うんっ♪ 結城さんにそう言ってもらえたら、元気が出てきたよ！ ありがとう♪」

「ん、どういたしまして」

「じゃあ、ひばりはちよつと身体を動かしてくるねっ♪」

「そう？ なら、俺も付き合おうかな」

手元のノートには、既にある程度の戦術論が書き連らねている。雲雀との組手で、これらの戦術と忍法を覚えて強化された自身のスペックを把握しておくのは悪い事ではないだろう。

理はこれらの資料を片付けた後で修練場に向かうと雲雀に伝え、彼女は資料室を後にするのだった。

——そして、理一人となった資料室の暗がりから、一つの姿が現れる。

「お前、雲雀に手を出し過ぎだ。殺すぞ」

「第一声がそれか……。何と言うか、雲雀は小動物的な可愛さが有るから、つい手がね……」

「それは分かる」

現れたのは言わずもがな、柳生である。どうやら彼女は何時の間にか資料室に侵入し、雲雀を監視していたようだ。……ストーカーというヤツだろうか？

それは兎も角、殺す等という物騒な言動が飛び出してくるが、柳生

は醸し出していた殺気を抑えて、理に相對する。その姿は何処か、悲壯感を漂わせる雰囲気だ。

「さっきの話、オレも聞いていた。……雲雀にあんな過去が有ったなんて、初めて聞いた」

そんな柳生の言葉に、理は意表を突かれる。

「……柳生は雲雀と仲が良いから、《華眼》の事も知っていると聞いたけど?」

「馬鹿言え、《華眼》は兎も角、それに伴う過去の話を知る訳が無いだろう。オレ達は出会ってまだ2ヶ月も経っていないのだから」

「え、まだそんな時間しか経っていないのに、あんなに仲が良いんだ」「お前がそれを言うのか……?」

コミュカが皆無な癖に、様々な人間を惹き付けるといふ不思議な魅力を持つ理に言われれば、何だか皮肉の様にも感じてしまう。

「雲雀が何かしらの不安面を抱えているのは分かってはいたが、オレはそれを問い質す事が出来なかった。

本来ならば、オレが雲雀の支えとなるべきなのにな。……それを引き出した、お前が少しだけ妬ましい」

「……アレは元々雲雀の中で燻っていただけで、親しい人ならちゃんと引き出すことが出来た筈だ。それこそ、柳生にだってね」

「ならば、お前もまた雲雀に親しく思われているのだろうか?」

責めているのか、褒めているのか。柳生の言葉は、どうにも真意を掴み辛い。そもそも、何故彼女は――

「……柳生はなんでそんなに雲雀を気に掛けるの?」

「……お前には関係の無い事だ」

「……そう」

ひやり、と理は僅かに冷や汗を掻く。柳生が発したのは、殺気ではない。純然たる「殺意」であった。恐らく――否、間違いなく理は今、彼女の触れてはいけない部分に触れた。

柳生は言った。雲雀と出会って、まだ2ヶ月も経たないと。そうだというのに、彼女の雲雀への入れ込みようは尋常ではない。それを成すだけの執着が、柳生には有るのだろう。

彼女達の只ならぬ関係に迂闊にも踏み込みかけた理は、しかしその動揺を億尾にも出す事は無く、雲雀との組手の為に退出しようとする。

「待て、お前と雲雀との組手、オレにも参加させろ」

「……まあ、構わないけど……、お手柔らかに頼むよ」

「善処する」

それは決して了承の意で使う言葉ではない。ふんす、と鼻息荒く、此方をねめつけてくる。

しかしそれは、理の安易な行動が原因でも有る為、彼自身に憤りは無い。彼女の怒気を受け止めるのもまた、自身の責任であるとし、柳生との組手を受け入れるのだった。

柳生は先に退室し、理は組手で使う為の装備を整える為、更衣室——なおこの時、運が悪いと着替え中の少女と鉢合わせする羽目になるので、注意しなければならぬ——へと向かう。

（雲雀と柳生を相手にするなら、この武器を使うか）

そう装備を吟味しつつ、手に取った武器を装備して、二人が待つ修煉場へと赴くのだった。

……そこで待つモノを、結城理はまだ知らない——



華の眼を持つ／雨に佇む少女は思う。あの少年の過去の一端に触れ、己の過去は彼のように過酷であったのかと。

少女は彼のように、家族を亡くした過去など無い／家族を亡くした過去が有る。その心の痛みが、彼女には理解出来ない／出来る。

だからこそ思うのだ、結城理は自身と違う／同じなのだ。

雲雀が抱く彼への感情は、羨望。自身と同じく過度な期待を受け、それでもなお前へと進む彼の強さに少女は憧れる。

柳生が抱く彼への感情は、同族嫌悪。自身と同じく大事なモノを失くし、絶望を宿すその瞳を嫌悪する。

少女達二人は忍学科内でも特に、結城理という人間に近い事を、

彼の過去より理解するのだった。

「あつ、柳生ちやくん♪」

「済まないな雲雀。結城との組手、オレも参加させて——」

……しかし、決して忘れるなかれ。

「え……う？」

「どうした、ひば——がッ?!」

「柳生ちゃん!? まさか、『敵』ッ!」

彼女達は、理の過去、その奈落の如き昏い深淵を覗き込んだのだ。

「そんな……、どうして……う？」

そして、深淵を覗くとき、深淵もまた此方を覗いているという事を

23話 悲しみのリボン

2009年 6月1日 『真影結界』――

其処は、冷たく、寒く、そして悲しかった。

ざあざあど降り止まぬ雨が、この場全員に居る身体を濡らし、体温を奪っていく。しかし空に雨雲は無く、『真影結界』特有の赤黒い縞模様だけを映している。

彼らが立つ地面は完全に水没しており、靴に入る雨水が酷く不快だ。その水面が見渡す限り続き、この世界にはそれだけしか存在しないという、悲しい心象風景であった。

「っ、柳生ちゃん！ 雲雀ちゃん！」

第一声は飛鳥であった。この場には理を含む忍学科メンバー全員が揃っており、彼女は最も柳生たちに近い立ち位置に居たようだ。或いは、『真影結界』が展開される前から傍に居たのかもしれない。

飛鳥は、この結界の中心部で倒れ伏している柳生と雲雀に近付こうとして、しかしその足が止まる。原因は彼女らのすぐ傍に立つ、二つの人影。それは、柳生と雲雀の姿を持つ、柳生と雲雀ではない存在。

……つまりは、彼女達のシャドウであった――

「ッ、退いてっ！」

『……ふん』

「ぎゃあっ!？」

「飛鳥ッ！」

『柳生の影』は詰まらなそうに飛鳥を一瞥すると、その傘を振るう。すると、その傘の先端から飛び出したイカの触手が飛鳥を打ち据え、弾き飛ばす。その為、慌てて理が彼女を受け止める事となった。

「飛鳥さん、結城さん！ 大丈夫ですか!？」

「けほっ、わ、私は大丈夫です！」

「問題ありません」

斑鳩が攻撃を受けた理達に声を掛けるが、大したダメージは無いようであり、ほっと一息を吐く。しかし、すぐさま気合いを入れ直し、愛刀・飛燕を握りしめ、目の前の敵を見据えるのだった。

「柳生さんと雲雀さんのシャドウですか……。それに、相変わらず襲撃犯は捕捉出来ませんね」

「まあ、そっちは仕方ねえさ。今は、こいつらを如何にかしねーと……」

斑鳩と葛城は油断せぬままに、じりじりとシャドウ達との間合いを測っていた。柳生と雲雀、彼女達の特性がシャドウとなった場合、雲雀は近接攻撃に、柳生は中・遠距離攻撃に長けていると思しいからだ。無論、シャドウ化した為にそれらの特性が変換されている可能性もあるが、その時はその時である。

いずれにせよ、今の彼女達は迂闊に攻勢に打って出ることは出来ない。シャドウ達の足元には、未だ倒れ伏したままの柳生と雲雀が居るのだから。

しかし、斑鳩と葛城は悲観してはいなかった。何故ならば――

「行け、飛鳥っ!」

「うんっ!」

『っ!』

この状況で指を啞えて見ているという愚を、彼らが犯す筈も無いのだから。

斑鳩と葛城は『柳生の影』と『雲雀の影』に相對することでシャドウ達の注意を逸らし、理と飛鳥をフリーにする。その隙を付いて、理はペルソナを召喚、飛鳥に《敏捷強化^{スクカジャ}》を付与した。飛鳥はそのまま眼にも止まらぬ瞬発によって、倒れていた柳生と雲雀を救助したのだ。

理はそのまま飛鳥に「柳生達を護衛していてくれ」と指示を出し、斑鳩と葛城の横に並び立つ。飛鳥はすぐさま二人を抱えて後退し、理達の後方に移動する。彼女はその間、柳生と雲雀の安否確認を行うのだった。

「柳生ちゃん、雲雀ちゃん、大丈夫?」

「う……っ、雲雀ッ!」

飛鳥の呼びかけに応じて、柳生が愛しい少女の名前を呼びながら飛び起きる。何とも彼女らしい覚醒の仕方に、場違いな笑みが漏れそう

だ。尤も、その雲雀はまだ起き上がれないままであったが。

「柳生ちゃん、落ち着いて。雲雀ちゃんは無事だよ。……でも、一体何が有ったの?」

「ぐ……い。確かオレは、雲雀と結城とで組手を行う筈だったのだが、いきなり誰かが後ろから——ッ!?!」

柳生はそこで、自身が襲撃犯たる『彼』に襲われ、『影抜き』を行われた事を察したらしい。

眼前に居る己のシャドウ、『柳生の影』と、その傍に立つ『雲雀の影』に気付き、不快感を露わにして叫ぶのであった。

「チッ! お前がオレのシャドウか! 汚らわしい、さっさと消えろ!」

いきなりの喧嘩腰に、飛鳥達は動揺する。シャドウを否定すれば、暴走を起こす要因となるだけに、彼女の行動は褒められたモノではない。尤も、斑鳩と葛城はその気持ちが無理解出来なくもないのだが。

シャドウは、自身の最も見たくもない部分を反映して誕生する。これからあの『柳生の影』が、どのような痴話を話すのかと思えば、柳生の怒りも当然のモノであった。

『柳生の影』はそんな柳生に呆れたように、ふう、と溜息を一つ吐き、そんな彼女を諷める様に語り掛ける。

『フン、随分と嫌われたものだな、お前? このオレが、^{オレ}どういう存在か分からない筈が無いだろうになあ?』

「黙れ! そんなことは分かりきっている! 隣に居る雲雀——いや、その紛い物と共に、とつとと消え失せる!」

「ちよ、ちよつと柳生ちゃんどうしたの、そんなに慌てて!」

飛鳥の言う様に、柳生の慌て様は尋常ではなかった。いつも冷静な彼女からは考えられない程に、柳生は取り乱している。

そして何より、柳生は『雲雀の影』を紛い物だと断じた。普段から雲雀を溺愛する彼女とは思えない暴言である。その言葉に、誰もが眉を顰めた。

何とも言えない沈黙が下りる。其処から初めて口を開いたのは、『雲雀の影』であった。

『紛い物……そう、雲雀は紛い物だった……。……誰も、ひばりを見てくれない!』

「な、なに……?」

『雲雀の影』の慟哭に、柳生は狼狽して見せる。そして、今彼女の足元に伏している雲雀が僅かに身動きした事に、誰もが気付かないでいた。『雲雀の影』の言葉を、『柳生の影』が引き継ぐ。

『ハハハ! 紛い物だとは良く言ったものだ! 所詮お前にとつては、『雲雀の影』のみならず、雲雀自身が紛い物でしかないと言うのにな!』

「なツ!? 違う!」

『違わないさ! お前が雲雀を気にかけていたのは、その容姿が死んだ妹、望^{のぞみ}に似ていたというだけだったのだからな!!!』

『柳生の影』の言葉に、全員が息を呑む。柳生の雲雀への執着する理由が、亡き妹の代替品であったという事にだ。シャドウの言葉故にそこまで極端な理由でもないかもしれないが、その主張は概ね間違いは無いのだろう。

柳生自身も否定しきれないのか、一層狼狽えながら、シャドウの言葉を否定しようとする。

「ち……、がう! オレは、オレは……!」

『否定出来るのか? いいや、出来ないよなあ! お前はまだ妹の“死”を乗り越えられていない。望の事を忘れることが出来ない。』

この眼帯とリボンは、妹を忘れない為にこそ造りあげたのだからな』

そう言つて『柳生の影』は、右眼の眼帯を取り外す。其処に有つたのは、何の事は無い普通の眼球——尤も、シャドウの特徴たる妖しく輝く黄金の瞳だが——である。

シャドウの形は本体の肉体を再現する為、柳生本人の眼帯の下も普通の眼が有るのだろう。その事実意外と全員が面食らつた。眼帯によつて塞がれた彼女の眼は、悪くて欠損などを起こしているという想像が彼らの中には有つたからだ。

しかし代わりに、そこまで妹を想う柳生の気持ちを知り、何とも言

えぬ想いが彼らの心の内に渡来する。

そう、このシャドウ『柳生の影』は、妹の死を認められず、追い求めるという柳生の『執着心』から誕生したのだった。

『さて、どうだ雲雀？ お前が親友だと信じていた柳生も所詮、あのクソジジイ共と変わりなかつたなあ？』

『……うん。ひばりはやっぱり《華眼》という能力にしか価値が無いつて、ハッキリ分かった。雲雀自身を見てくれる人なんて、何処にも居ない……』

『雲雀の影』は、沈んだ声のままに己の在り方を肯定する。雲雀の過去を知らない飛鳥達は何の事か分からない様だが、理と柳生には分かる。

そう、このシャドウ『雲雀の影』は、雲雀という少女の “認めてほしい”、 “自分を見てほしい” という『自己顕示欲』から誕生したのだった。

そしてこの二つは、二体のシャドウは、この上なく相性が良い。片や紛い物の妹を求め、片や紛い物の理解者を求めているからだ。

調和する二つが完全なる一つに勝る様に、互いを補い合う事の出来るシャドウ達は今、本体である柳生と雲雀からの否定を要することなく、暴走を始める——！

『ハ、ハハハ!!! 嗚呼、やっと手に入れた!』

『フフ、アハハッ♪ 嗚呼、やっと認められた!』

二体のシャドウは互いを抱きしめ合い、嗤う。負の感情は相乗し、絶望的なまでの力の奔流を生み出し、荒れ狂う暴風雨となる。

この『真影結界』内部で降り続ける雨はさらに激しくなり、雷までも奔るのだった。

『紛い物でも構わない、死んだはずの望は今、オレの腕の中に居るッ!!!』

『紛い物でも構わない、雲雀を認めてくれる人が今、目の前に居るッ!!!』

そして、その二つの絶叫と共に『柳生の影』と『雲雀の影』を闇が覆い隠し、新たなカタチを創り上げる——！

『我らは影、真なる我——』』

闇が晴れ、現れた『柳生と雲雀の影』は、シルエットだけならば本体の一人である柳生に似ているかもしれない。

だが、その下半身は『真影結界』の地面、雨溜まりの中に水没し、妹という半身を喪った彼女の心象を表している。その痛みでバラバラに引き裂かれそうなカラダを、黒いリボンによって自らの手で縛り上げていた。

その頭部は左顔が柳生の物であり、美しいシルバーブロンドであった頭髮は悍ましい触手状にへと形を変えてしまっている。

雲雀を模している右顔側の愛らしいストロベリーブロンドは残っていたが、その下に覆われた右眼球、彼女の象徴たる《華眼》は極度に肥大し、血走った状態で此方を睨んでいた。

斑鳩や葛城のシャドウよりもお悍ましい、『柳生と雲雀の影』の醜悪な姿に、彼女達は絶句する。

『我らは紛い物、ならばお前たちを殺して、我らが唯一絶対の本物となる——！』』

重なり合った二つの声が轟き、水面から数多の触手がうねり、理達に向かって襲い掛かってくる。喪失状態にあった彼女達は漸く意識を取り戻すが、余りにも遅い。

だがしかし——
「はッー！」

その数多の触手を纏めて貫く、一筋の閃光が奔る。斑鳩達が振り返れば、其処には短弓ショートボウを構えた理の姿があった。どうやら、その弓から放たれた矢で以て、襲い来る触手を狙撃したらしい。

(……模擬戦で使う予定だったのに、こうなるとはね)

理が思う様に、元々は此処の修練場で行う筈であった雲雀・柳生との模擬戦で、彼はこの弓矢を使うつもりでいた。

理と相性の悪い『電撃属性』使いである雲雀とは接近戦を避け、遠距離狙撃で対応するという魂胆である。……卑怯などと言うなかれ、これも立派な戦略だ。

無論ただの弓矢などでなく、忍学科が用意した特別製であり、具体

的に言えば弦が並の弓とは比べ物にならない程に硬い。それこそ、理が身体能力強化スキル《力のチャクラ》を使用して漸く引けるほどだ。その分威力は折り紙付きであり、さらに理は放たれる矢にペルソナのスキルを付与することによって攻撃力を向上させる事も出来るのだ。今使用したのは、《スライム》の《シングルショット》である。

『柳生と雲雀の影』は水面から無数に伸びてくる触手という膨大な手数を持ち、片手剣などでは捌ききれず、今彼が後方に庇う柳生と雲雀が攻撃を受ける可能性があった。

それならば、この戦闘においては理はこの弓矢による遠距離狙撃、魔法による後方支援に徹し、斑鳩と葛城に前衛を任せる事にする。

そして、彼女達にもその作戦を通達し、戦闘が開始される――

！

「《ハイピクシー》！ 《防御強化》だ！」

まず理が唱えたのは防御を強化する《ラクカジャ》で、守りを固める。それを計三回、斑鳩と葛城、そして自身にへと付与した。

召喚されたペルソナ《ハイピクシー》は、小柄な体躯に逆立てた髪という、妖精にしてはやや攻撃的な見た目だ。高位という名とその見た目通り、妖精の中でも魔力と戦闘能力に長けた上位種的な存在であるらしい。

それは理が『女教皇』^{ブリーステス}を打ち倒し、獲得した『女教皇』^{じよきよおう}のアルカナに属するペルソナでもあった。

このアルカナは、柳生が得意とする『氷結属性』に耐性を持つペルソナが多く、《ハイピクシー》ならば無効化することも出来る。それに故に、このペルソナを装着していたのだ。

『オオオオオオツツツ!!』

「来るぞー！ 飛ベッー！」

理の怒号と同時に、斑鳩と葛城に幾本もの太い触手が向かっていく。その接近を理の《心眼》による警告によっていち早く感知できた二人は、その合間を縫う様にして跳躍し、『柳生と雲雀の影』に向けて接近するのだった。

「アタイも行くぜー！ 《ティアマト》、《攻撃強化》！」

葛城も触手攻撃が止んだ隙を付いて、自身と斑鳩に攻撃力を強化する《タルカジャ》を付与する。彼女のペルソナ《ティアマト》は『打撃物理スキル』と『疾風魔法』に長けているが、この様な『強化魔法』も発現していたのだ。力強さを求める、実に彼女らしい嗜好だ。

……尤も、その魔法の糧となる精神力は左程多くない為、余り乱用は出来ない様なのだが。

「《ヴィゾヴニル》、焼き払いなさい！ 《マハラギ》！」

斑鳩は周囲から迫り来る触手を打ち払う為に、範囲攻撃である《マハラギ》を使用する。《アギラオ》程の威力は無いが、触手は左程耐久力が無いようであり、《マハラギ》程度でも十分に殲滅することが出来た。

二人は、迫り来る触手を切り払い、打ち倒しながら、『柳生と雲雀の影』に接近していく。無論相手も、それを黙って見ている訳ではない。

『オオ……！ 《オクトパシーリスト》ッ！』

『柳生と雲雀の影』の周囲の水面から、更に膨大な数の触手が立ち上り、接近する斑鳩と葛城に向けて襲来する。

名状しがたい足が、深きものの足が、冒瀆的な足が、薙ぎ払う様にして迫り、雨の如き乱打を降らせるのだ。しかしそれでも、二人は一歩も引く事は無かった。

「捉えさせはしないッ、《ジャックランタン》！ 《敏捷弱化》！」

それらを補う為に、理の支援があるのだから。

かつての『女教皇』戦と同じく、相手の命中・回避率を弱体化させる《スクンダ》により、『柳生と雲雀の影』の攻撃は鈍くなり、同時に葛城は《敏捷強化》も発動し、『柳生と雲雀の影』が彼女らを捉えることは更に叶わなくなる。

「捕った——！——」

遂に『柳生と雲雀の影』の眼前まで接近した斑鳩と葛城は、攻撃の為に己の獲物を振り上げる。強化された彼女達と、弱化した『柳生と雲雀の影』とでは、確実にダメージを与える事が可能になるのだろうか。

——しかし、何かがおかしい。

(……………、何だこの違和感?)

これまで圧倒的に攻め立てているというのに、理の《心眼》による警鐘は鳴りやまない。身体に纏わりつく様な《淀んだ空気》が、それを助長し――

「ツ、二人とも、そいつから離れ――！」

『無駄だよ』

響いたのは、異常に肥大した眼球を持つ『雲雀の影』の声。その悍ましく変貌した《華眼》は、眼前の斑鳩や葛城を通して此方を見据えている。

その異常と理の警告を感じたのか、二人はその場から勢いよく飛び退き、それよりも一瞬の間を置いてその眼から極光の光線が放たれる――

『――《ペトラアイ》！』

『柳生と雲雀の影』から放たれたのは、ギリシア神話のメデューサなどに代表される、捉えるもの全てを石化させる邪悪な視線。それは、真っ直ぐに理へと向かってくる。

(ツ、回避を――いや、駄目だ!?)

理はその攻撃が放たれると同時に気付く。斑鳩と葛城、理、そして後方の飛鳥達は、全員が一直線上に並ばされている事に。理が《ペトラアイ》を避ければ、後ろの飛鳥・柳生・雲雀に襲い掛かる事になるのだ。

つまりは、《オクトパシーフィスト》による攻撃は決して乱雑なモノではなく、こうして彼らを誘導し、誰か一人でも避けようのない状況に貶める事こそが目的だったのだ。

「くそツ、《オルフェウス》！」

やむなく理は《オルフェウス》を召喚し、彼らを庇うように前面に立たせる事にする。竖琴も盾のように構えるが、迫り来る《ペトラアイ》の光線とぶつかり合い、そのダメージは理本人へとフィードバックする――

「ぐツ、ああああアアつつつ!？」

「結城くん!？」

理にとっては運の良い事に、全身が『石化』するという事態は免れ

た。しかし引き換えに、両腕だけが『石化』してしまい、その重量によつて地面へと跪いてしまう。

斑鳩と葛城は慌てて理に駆け寄ろうとするが、それよりも『柳生と雲雀の影』が速い。今度はその眼球が、斑鳩の方を向いた。

『《パララアイ》』

「な——あ、ガッ!?!」

彼女に向けて放たれたのは、対象を『麻痺』させる《パララアイ》であった。元々速度を売りにする斑鳩であるが、『麻痺』状態ではその速さも持ち腐れになってしまう。

残るは葛城のみであったが、彼女はすぐさま『麻痺』してしまった斑鳩を抱えて離脱しようとしおり、それは十分の速度で逃げ切ることが出来る筈であった。

『《獣の眼光》』

「げッ?!.. ぐあッ!?!」

しかし突如として、『柳生と雲雀の影』の速度が増す。それはかつて、『葛城の影』も使用した自己強化のスキル。それよりも幾分かは劣化するが、人間一人を抱えた葛城を攻撃するには十分であった。

妖しく光る眼光に睨まれ、ほんの僅かに身を竦ませた葛城は足を止めてしまい、その隙を付いて太い触手が彼女を打ち据える。咄嗟に斑鳩を庇う事は出来たが、二人は勢いよく弾き飛ばされ、理達から離れた距離に行ってしまう。

(コイツ……い・バステ特化のスキルを!?)

瞬く間に無力化された自身を含む3人を見て、理は気付く。このシヤドウ『柳生と雲雀の影』は、バッドステータス攻撃に特化したスキル構成であるのだと。

今使用した《ペトラアイ》《パララアイ》は言うに及ばず、あたりに漂う《淀んだ空気》は、バッドステータス攻撃の成功率を上げる効果を持つスキルだ。

更には《獣の眼光》という自己強化スキルを備え、多数の触手という元から膨大な手数は更に手が付けられなくなっている。

そして、それらのスキル構成は、今のメンバーでは極めて厄介だ。

それらのバステ攻撃で付着した状態異常を解除できる《パトラ》系スキルを持つのが、理しか居ない為だった。

(両腕が動けば――！)

しかし、その理は今、『石化』によって両腕が封じられてしまっている。当然その状態では、弓を引く事や剣を振るう事は出来ず、召喚器によるペルソナ召喚も不可能だ。

無論、その隙を見逃すほど『柳生と雲雀の影』は甘くは無い。

『先ずはお前からだ！』

『柳生と雲雀の影』の《華眼》に、漆黒のオーラが収束していく。そこから感じ取れる力は《呪殺魔法》のそれであり、その弱点属性を持つ《オルフェウス》を装着している今の理には最悪の相性だった。

だが、寧ろ都合が良い、と理は思う。初めから此方を狙ってくるなら、後ろの飛鳥達が危険に晒されないからだ。それでも一応、重い腕を引きずって横に移動し、彼女達を射線からずらす。

なお、彼らが《ムド》の力に犯された場合、死ぬ事こそないが、体力^{HP}を根こそぎ奪われてしまい行動不能となるだけだ。ついでに、一度戦闘不能になれば状態異常も解除される。

このメンバーはそれぞれ、忍学科が用意した薬や、斃した雑魚シャドウがドロップした道具類も持つっており、その中にはそうした瀕死状態から復活できるアイテムも有った筈だ。此処は、あの《ムド》らしきスキルを甘んじて受け、その後復活するのが良いだろうと理は思う。

幸いにして、今は葛城がある程度動くことが出来る。復活の手は、彼女に委ねる事にしよう。……尤も、その合間に身体を叩き潰されでもしたら本当に死ぬのだが。またしても理が行う命懸けの賭けに、柳生達の護衛の為に手出し出来ない飛鳥は、息を呑んでその光景を見ることしか出来なかった。

『ハハハッ！ 無様だなア、リーダー様よオ！ さっさと死んでしまえエツ！ 《ヘルズアイ》ッ!!!』

それをどう思ったのか、『柳生と雲雀の影』は理を嘲笑いながら、その力を解放するのだった。『柳生と雲雀の影』の罵声と共に、『呪殺属

性』の閃光が放たれる。これは躲すことが出来ないと、理は覚悟を決める。

……しかし、その閃光が理を飲み込む事は無かった。突如として彼を抱え上げ、《ヘルズアイ》の閃光から離脱した存在があったからだ。その姿は――

「雲雀?! 気絶してたんじゃないのか?!」

驚愕の声を上げたのは、柳生である。それは彼女の隣で、飛鳥に護衛されたまま倒れ伏していた筈の雲雀であつたからだ。雲雀は理の『石化』を『パトラジエム』で治療しつつ、彼女の疑問に答える。

「……御免なさい、気絶した振りをしていたの。柳生ちゃんの事、聞きたくて……」

「なツ?!」

雲雀の言葉に、柳生は絶望に打ちひしがれ、その場に崩れ落ちる。当然だろう。柳生の話は、最も聞かせたくない少女に聞かれていたのだから。

「そんな……、雲雀に知られてしまったら、オレは生きていけない……」

しかし、そうして絶望する柳生にへと語り掛ける一人の姿があつた。

「……生きていけない、ね。大層な言葉だよ、それは」

語り掛けたのは理だ。しかし彼は、何処か彼女に憤るような声色で語り掛けている。

「なんだと?! お前に何が――」

理のそんな態度と言葉に激昂しようとした柳生は、しかし続く言葉を押し留めた。彼女の絶望は、この中では彼だけが理解し共感できる筈だからだ。最愛の家族を喪うという、その絶望を。

「確かに家族を喪うっていうのは、哀しい事だ。『柳生の影』キミのシャドウを見れば分かる。キミは妹を喪った時、心の半分が死んでしまったという事にね」

理は柳生の心の在り様を淡々と告げる。そして彼の言葉は、そのまま彼の経験であることを柳生は察することが出来た。理の家族が死

んだときに、彼の心もまた死んだのだという事を。家族を一篇に喪つた彼の絶望は、柳生のそれすらも上回るのだろうか。

「だけど柳生、『生きる』っていう事が、どんなに辛くて、怖くて、死ぬほど大変でも、俺達はそんな思いを抱えながら、この世界を生きていけないといけないんだ。……少なくとも俺は、母さんにそう願われた」

『生きなさい、理——』

それは、遺言にして祝詞だ。結城理の母はそう呟いて、炎に飲み込まれていった。

その言葉が有るからこそ理は、奈落の底の様な絶望に吞まれても、大人達の醜悪な一面を眼にしようとも、死にたくなるほどの罪の意識に苛まれようとも、生きる事が出来たのだから。

……しかし、半蔵学院に来る前の理が、死ぬようにして生きるしか出来なかつたように、彼の心は左程強く無い。或いはその言葉は、祝福にして呪いだつたのかもしれない。

「柳生、キミにもある筈だ。死んだ妹に願われた、大切な想いが。……それを蔑ろにして、勝手に死ぬんだって言うんなら——」

理はそこで、凄まじいまでの眼力で彼女を睨みつける。今の彼は、その眼に凄まじいまでの怒気を宿していた。

「——俺がお前を倒してやる」

そう、理の怒りは、柳生が妹の死を想うあまりに、妹自身の想いを忘れてしまっている事だ。望という少女の想いを蔑ろにし、その死だけに眼を向け続けるというのは果たして、ただ忘れるという行為とどれ程の違いがあるのだろうか。

だからこそ、結城理は激昂する。家族という掛け替えのない存在を蔑ろにすることは、彼が最も許し難い行為であるのだから。

「……雲雀、柳生のフォロー、頼んだ」

「……うん」

そこで理は話を切り上げ、後の世話を雲雀に委ねる事にする。流石にキツイ物言いであったことは自覚が有るらしい。それ故に、これ以降のフォローは雲雀に任せるのが適任であると思いつたのだ。

そして改めて結城理は、『柳生と雲雀の影』に相對する。既に斑鳩も葛城も状態異常から回復し、戦闘態勢へと復帰している。理達が会話できていたのも、彼女らの功績だ。

「行くぞー！」

「ええー！」

「ああー！」

三人のペルソナ使いは駆ける。シャドウ、『柳生と雲雀の影』を打ち倒す為に。

「……オレの想い。望の願い、か——」

少女は思い出す。かつて妹と交わした約束を。

「柳生ちゃん、ひばりの想いを、聞いて——」

少女は語り掛ける。かつて抱いた己の心の弱さを。

そして二人は答えを得る。あのシャドウを生み出した、彼女達の原点ともいべき、この戦局を終わらせるに到る道標を——

24話 己が必要とされる為に

『誰にも負けない忍になってね、お姉ちゃん』

何の事は無い。それこそが妹の、望の願いだったはずだ。

たったこれだけの短い言葉を思い出せないなど、果たして自身はどれ程愚かだったのかと自己嫌悪する。

来る日も来る日も修行に明け暮れ、挫けそうになった時でも、望が居たから、この言葉が有ったからこそ、目標に向かって歩めたというのに。

学校帰りの望が修行に差し入れ——泥団子だったが——を持ってきて、その手を引いて帰路に就く。

そんな日常が、何時までも続いていくのだと思っていた——

……悲劇は、何時だって突然に訪れる——

一瞬だった。間に合わなかった。鍛えた忍の技など役に立たなかった。

道路を挟んだ横断歩道の向こう側で、望は突然スリップした乗用車に撥ねられて押し潰されて轢き殺されて。

オレの目の前で望の赤い紅いアカイ血がちがチガ流れて溢れて零れてとまらない止まらないトマライ——!!!!!!

……結城の言う通り、望を失った事でオレの心は、半分死んでしまった——

しかし、妹が死んで2年ほど経てば、荒んでいた心も、望の為に泣く事も、やがてはその辛い過去を慣^なれてしまう。

父は言った、「それは悪い事ではない」、「妹の為に流す涙が減ったとしてもそれでいいのだ」と。

勿論オレは納得できなかった。望の事を忘れるなんて。望が消えていくんだなんて。……この眼帯は、その為に造り上げたというのに。

そんな折の中で、オレは雲雀と出会ったのだ——



『こんな運命は理不尽すぎる』

幾度となくそう思った事だろう。

ひばりの家は由緒正しい忍の一家であり、戦国時代から歴史の裏にはご先祖様の活躍が有ったらしい。

そんな家系に居ながら、ひばりは一度だって忍になりたいと思う事は無かった。沢山のお兄ちゃんやお姉ちゃんが居るのだから、その内の誰かが家を継ぎ、ひばりは将来はキーキ屋さんになろうかな、なんて思っていた。

……だけど、継承者を示す《華眼》が現れたのは、お兄ちゃんでもお姉ちゃんでもなく、ひばりだった——

でも、出来の悪いひばりが《華眼》を手にしても、家族の皆は素直に喜んでくれた。ひばりが失敗しても、同じ訓練を続けても、文句ひとつ言われない。

どんなにドジをしても、迷惑をかけても、皆優しく雲雀を受け止めてくれる。

……違う、違う、違う！ ひばりにはそれが耐えられない!!!

ひばりは所詮大したことのない人間なのだから、失敗したら怒って欲しいし、駄目な所は駄目だと叱って欲しいのだ。

そうでなければ、ひばりは本当に《華眼》の能力にしか価値が無いという事になってしまう。

やがて、ひばりが入学する事となった半蔵学院でも、それは変わらないんだと思っていた。

そんな折の中で、ひばりは柳生ちゃんと出会ったの——



「オルフェウス、《紅蓮刀》！」

「秘伝忍法、《飛燕鵬閃・壺式》！」

「《大紅蓮忠儀斬》！」

斑鳩は、飛燕に理が発動した《紅蓮刀》の炎を宿し、《飛燕鵬閃・壺

式》を放つ。そうして、彼との絆を昇華させ更なる威力を増した合体スキル《大紅蓮忠儀斬》により、迫り来る触手の群れを切り飛ばす！

その神速の炎閃により、数多の触手が切り払われた事で開かれた活路を、間を開ける事無く彼らの追撃が襲い掛かる。理はすかさずペルソナを付け替え、続く葛城との合体スキルを発動させた。

「ジャックフロスト、《ソニックパンチ》だッ！」

「追い風は任せる！ ティアマト、《ガルーラ》！」

「《天馬流星烈拳》！」てんまりゆうせいれつけん

召喚された『ジャックフロスト』は、その短い腕をぶんぶん回し、突き出した勢いのままに、葛城の《ティアマト》が発動する《ガルーラ》という追い風を受け、一筋の流星となる。

『柳生と雲雀の影』が持つ数々の厄介なスキルを封じるために、狙いはその肥大した醜悪な《華眼》だ。二人が発動した《天馬流星烈拳》は狙い変わらずその《華眼》を打ち据える筈であった。

だが――

『ツハ、甘い！ 《霧雨昇天撃》！』きりさめしやうてんげき

迫り来る『ジャックフロスト』を迎撃する為、『柳生と雲雀の影』もまた強大な攻撃スキルを発動する。その触手の髪がうねり集まり、槍状となって、降りしきる雨を吹き飛ばすほどの勢いで飛来する。

理はそのスキルが特大の威力を持つていることを察するが、此処で引く訳にはいかない。真正面から、迎撃する！

『おおおおおおオオオオオオツツツ!!!』

だが、『柳生と雲雀の影』の《霧雨昇天撃》と、『ジャックフロスト』の《天馬流星烈拳》は一瞬だけ拮抗するが、それは『ジャックフロスト』が弾き飛ばされるという結果に終わるのだった。

ペルソナを攻撃され、そのダメージジフィードバックによって理は堪らず膝を付くが、そんな隙を逃す事無く、『柳生と雲雀の影』は彼を攻撃する。《華眼》に力が収束し、放たれる。

『喰らえッ！』

「させるかあ！」

しかし、葛城が理を突き飛ばすことで、その力の奔流を身を挺して

庇う。だが、それは悪手だ。

《華眼》からの閃光に呑まれた葛城は、その身体を一瞬びくりと撥ねさせると、虚ろな目で此方を睨みつけてくる――

「……うへへ、おっぱい揉ませろ〜い?」

「oh……」

どうやら『柳生と雲雀の影』が放ったのは、《魅了の魔眼》であるらしい。それにより、葛城は「魅了」状態に陥ったのだ。

……陥った筈なのだが、どうにも何時もと余り変わり無い様なのは、きつと気のせいだと思いたい。

「ウガアアアアアアアアア!!」

「うおつと?!」

しかし、その戦闘能力は本物だ。その身体能力で獣のように飛び掛かってこられては、さしもの理も対処に手間取る。……というか、何故男である理の方へと向かう!?

「くつ、結城さん、今――」

『フン、《麻痺の魔眼》』

何とか二人がかりで葛城の「魅了」を解呪しようとするが、それを許す『柳生と雲雀の影』ではない。理と葛城へと気に向けた斑鳩の隙を見て、再び《パラライ》を発動した。

その閃光に呑まれた斑鳩は「麻痺」状態となり、身体が動かなくなる。これでは彼女に援護の期待が出来ないばかりか、自身の身も守れない危険な状態だった。

「シャアアアアアアアア!!」

「ああ、もう! ちよつと手荒くいくよ、葛城!」

このままでは埒が明かないと、理は意を決し、強引にでも葛城を正気に戻すことを決める。

彼女達の「魅了」や「麻痺」を解除するには、『ハイピクシー』が持つ《メパトラ》を使えばいいのだが、こうも葛城に飛び掛かられているようでは上手く狙いが定まらない。斑鳩の為にも、手段を選んでいる余裕は無かった。

「ハイピクシー、《逃走転移》!」

この状況を打開する為、理が唱えたのは《トラフリー》だった。本来は戦闘時の逃走用に使う単距離転移のスキルなのだが、彼にはここで逃げる気などさらさら無い。彼はある地点へと移動する為に、このスキルを使ったのだった。

「ゆ、結城さん？ 何故、わたくしの傍に」

「斑鳩先輩、失礼します」

「あれ、そのセリフ何かデジャヴ!？」

《トラフリー》を使い、「麻痺」状態となっていた斑鳩の傍に一瞬で転移した理は、彼女の身体をひよいと抱え上げる。動けない彼女を『柳生と雲雀の影』から離すという目的が有るのだが、理の真の狙いは別にあつた。

なお、斑鳩の言うセリフのデジャヴは、以前の『葛城の影』戦のモノであり、その時は碌な結果に終わっていない。その為、斑鳩はこれから起こるであろう惨事に、「麻痺」している筈の身体が震える気がするのだった。

「ガルルルル!!」

「ちよ、結城さん!?! 葛城さんがこっちに——」

そうして、理を狙って「魅了」状態のままの葛城が突っ込んでくるのだが、彼は冷めた目で斑鳩を見据え、宣言する。

「……囮役をお願いします、斑鳩先輩」

「そういう事ですかアア——ツ!?! あッ、ちよ、葛城さ、止めツ!?! あひいっ?!」

美少女二人がくんずほぐれつ。その見麗しい姿は、戦闘中という状況でなければ眼を惹いただろうが——いや、この男が興味を示すかどうかはかなり怪しい。

事実、今でさえ理は彼女達の姿を見ているものの、その体制は召喚器を構え《メパトラ》を掛けるタイミングを見計らっているものだ。姦しい二人の情事そのものには目もくれていない。

程なくして理は二人に《メパトラ》を掛け、彼女達の状態異常を解除するのだが、そのあまりにも鬼畜な囮作戦に二人や飛鳥は勿論、『柳生と雲雀の影』ですら引いていた。

『……ええい！ 此処で一網打尽にしてやる！ 《アイオンの雨》！』
『柳生と雲雀の影』の宣言と共に、『影結界』で降りしきる雨が硬質化し、理達を襲う範囲攻撃となつて襲い掛かってくる。斑鳩と葛城はその攻撃を見て、避けられないと判断し防御態勢を取った。

だが、理は新たにペルソナを付け替え、召喚する。呼び出すのは――

「来い、ユニコーン！」

召喚されたのは、『女教皇』のペルソナ『ユニコーン』だ。旧約聖書やヨーロッパ伝承に登場する伝説上の生き物であり、額に万病の解毒薬となる角を持つ白馬の姿をしている。

そして理は、召喚された『ユニコーン』に飛び乗ると、降りしきる《アイオンの雨》に向かつて突っ込んでいくのだった。その姿はさながら、旧き戦乱の時代に生きた、歴戦の騎乗兵の様だ。

『馬鹿め、血迷ったか――何ッ?!』

そんな理を嘲笑おうとした『柳生と雲雀の影』だったが、すぐさまその表情は驚愕に取つて代わる。理と『ユニコーン』は、《アイオンの雨》の中を最小限のダメージで突っ切ってくるからだ。

降り注ぐ硬質化した雨粒を、理の矢が打ち払い、『ユニコーン』の角が弾き飛ばし、その曇る事のない視線は回避系スキル《貫通見切り》で以てして、己が進むべき道を見据えている。彼らを止める者は、この場には存在しないのだった。

「――捉えた！」

『ユニコーン』は跳ねる。《アイオンの雨》を突っ切り、主の攻撃を敵へと届かせる為。

そうして、理は弓に矢を番え、放つ――！



「ひばりはね、この『眼』が嫌いだったの」

雲雀は語りだす。長年心に秘めてきた昏き想いを。その言葉を、柳生は黙って聴いている。

「人の心を操る魔眼、この力で皆をコントロールしているとしたら、ひばりは誰とも対等に付き合えないって思っていたから」

《華眼》という能力を以てして彼女の家系は、先祖代々から歴史の裏で活躍してきた。だがそれは、望まずしてこの能力に覚醒した雲雀には不要なモノなのだ。彼女が常日頃からその力に怯えて過ごしていても何ら不思議ではなく、その重圧は凄まじいモノであったのだらう。その重圧に気付けないでいた柳生は、己を恥じるのだった。

「だからひばりは、例えシャドウの言葉でも、柳生ちゃんの本心が聞けてちよつとだけホツとしたの。この『眼』で皆を操っている訳じゃないって分かったから」

「雲雀……」

柳生は彼女の安心したような言葉を聞き、しかしすぐさまその表情は沈んだものへと変わる。

「だが、オレの本心は聞いていた通り、お前を妹の代替品として見ていたモノだ。そんな情けない想いだったというんだぞ？」

それは柳生の懺悔だ。本人自身ですら気付いていなかった——
「否、気付こうとしなかった彼女の弱さであり、シャドウとなった心の一部分だった。それは勿論、受け入れられる筈が無い物だ。」

「ううん、情けなくなんかない。それだけ望ちゃんが、柳生ちゃんにとって大切な家族だったっていう事でしょ？ ……柳生ちゃんの気持ちは分かるよ、ひばりも、お兄ちゃんやお姉ちゃんの事が好きだから」

しかし雲雀は、そんな懺悔を告白する柳生の身体をそつと抱きしめ、彼女の想いに応える。

「……それをひばりは、結城さんの言葉で気付けたよ。結城さんは、この『眼』はひばりの力になる筈だ、って言ってくれたから。」

今なら解るよ、ひばりは《華眼》そのものが嫌いだったんじゃない。その力を使いこなせなくて、大好きな家族に応えられない弱い自分自身が嫌いだったのっ！

柳生を抱きしめる雲雀の眼から涙が溢れ出す。その涙の意味は、己への自責か、家族への謝罪か、或いは——

「柳生ちゃんは、そんな弱いひばりを見捨てないで、ずっと傍に居てくれた人だった——！」

一緒に修行してくれて、叱ったり怒ったりしてくる厳しさや、お菓子を買ってくれたり慰めてくれる優しさを、柳生ちゃんから貰ったんだよ！

そんな柳生ちゃんが、ひばりを望ちゃんの代替品とだけしか見えない筈が無いよっ！……柳生ちゃんだって、気付いてるでしょ？」

「……ああ、そうだな——」

柳生はそこで初めて、雲雀を抱きしめ返す。彼女の流す涙は、柳生への感謝を示す感涙であったのだ。涙でくしゃくしゃになった顔は、望にそっくりで——似ても似つかないと、柳生は思う。その事実を、柳生は受け入れる——いや、雲雀の言う通り、初めから気付いていたのだ。

忍である雲雀とは違い、望は何の力も持たない一般人であった。確かに始めの内は、雲雀を望の生き写しとして見ており、接していたのかもしれない。あのシャドウは、其処から産まれたのだ。

しかし、忍の修行や学業を通じていく内に、雲雀を切磋琢磨し合う仲間として、親友として認めるようになった。

その理由は、実に単純な事だ。望と雲雀は、別人であるのだから——

「……馬鹿みたいだな、オレは。雲雀は雲雀だ、そんな風に自分の弱さを認め、精進を続けるのが雲雀なんだ。

それを高々シャドウの言葉だけで揺さぶられるとは、オレもまだまだ弱い忍の様だ」

「大丈夫だよっ♪ 一緒に強くなるう、柳生ちゃんっ♪」

「ははっ、それでこそオレの大好きな雲雀だ」

「えへへっ♪」

二人は再び、互いを抱きしめ合う。そこには先程まで存在した悲壮感など何処にも存在せず、まるで仲の良い姉妹の様に——しかし決して違う二人の少女の姿があった。その微笑ましい光景を、護衛を任されている飛鳥は顔を綻ばせて見守っているのだった。

斑鳩や葛城は勿論、理も激痛の走る体に鞭打って、飛鳥達を救う為に駆けていく。だが、間に合わない――！

「――させないッ！ 柳生ちゃんも雲雀ちゃんも、傷付けさせはしないッ！」

しかし、飛鳥は吼える。迫り来る数多の《死魔の触手》を、その眼に絶望を宿す事無く見据えている。無茶だ、と誰かが叫んだ。或いは全員か。ペルソナを宿していない今の飛鳥では、あの触手の群れを迎撃出来る筈が無い。

だが、その飛鳥の気合に呼応するように、彼女の周囲の空間が揺らめき、一つのカタチを織り上げていく。その光景に誰もが眼を疑う。何故ならば、それは――

「来てッ！ 私の――」

『ッ、馬鹿なッ!?!』

ペルソナ、なのだろうか？ ボヤけてその全貌を把握することが出来ない程にあやふやなカタチをしたそれは、確かな力を発動する――

「――《地変魔法》！」

飛鳥の掛け声と共に、彼女の前方の大地が隆起し、立ち昇った鋭岩が迫り来る《死魔の触手》を迎撃し、打ち払ってみせる。

『土』の属性を持つ飛鳥であるからこそ発現した彼女自身のスキルだと思われるが、その魔法は今まで理や斑鳩達が扱ってきたペルソナ能力とは一線を賀す、未知のスキルだった。

その信じがたい光景を見て、理の脳裏にある考察が思い浮かぶ。

(……まさか飛鳥は、【A潜在】なのか?)

実は忍学科の上層部は、迫り来るシャドウの驚異に対抗する為、理の様な先天的なペルソナ使いを搜索していた。その為に提唱されたのが、【A潜在】から【C潜在】まで区別された、ペルソナ使いとしての才能を表した階級なのだった。

唯一の先天的覚醒者である結城理は【A潜在】、『影抜き』による後天的覚醒者である斑鳩と葛城は【B潜在】と区分され、『影結界』『影時間』のみの適応を持つペルソナを持たない普通の忍達は【C潜在】と

されていた。

なお、この呼称を聞いた際、葛城は「結城はもうAとかBとかそういうレベルじゃねーよ。コイツは【特A潜在】って呼ばーぜー!」とツッコんでいたりする。

しかし忍学科は、未だ理や斑鳩達といった面々を除き、ペルソナ使いを発見できていない。その為、この世界には【A潜在】は結城理しか存在しないのではないかと疑問視すらされていたのだ。

故に今、目の前に在る光景はその疑問を覆す光景であったのだ。だがしかし、飛鳥のソレは何かがオカシイ――

『おのれエ! そのふざけた力、見極めてやるツ! 《マハアナライズ》――あア?』

そして発動する『柳生と雲雀の影』の新たなスキル。理、飛鳥、斑鳩、葛城はまるで体の中を弄られる様な不快な感覚を味わい、そのスキルが解析系のモノであることを察する。

だが、そのスキルで以てしても飛鳥の能力は把握出来ない様だ。不穏な声を漏らし、悍ましいモノを見るようなに飛鳥を睨みつけた。

『……貴様ツ、その能力は――!』

「私だって、戦えるんだから! 《マハマグナ》!」

飛鳥の攻撃はさらに続く。その宣言と共に、先程の《マグナ》よりもさらに広範囲に鋭岩が立ち上る。それらは『柳生と雲雀の影』を取り囲むように発生し、その動きを阻むのだった。

「《大山涯》っ!」

『ツ!? 何処へ――!』

飛鳥は大きく振り上げた刀を地面に突き刺すと、地面へと潜る。彼女が持つ忍法・遁術が一つ《大山涯》。その能力は、『土』属性を司る彼女に相応しく、地中を自在に移動するというモノだ。

地中へ潜んだことにより、飛鳥の姿を見失った『柳生と雲雀の影』は狼狽し、決定的な隙を晒した。飛鳥は、其処をすかさず畳みかける!

「《地昇竜》っ!」

『何ッ!? ぐあッ!』

《大山涯》に続く飛鳥の忍法《地昇竜》は、地面から這い出して奇襲

を仕掛ける技だ。その攻撃を、彼女は何と《マハマグナ》によって作り出され、『柳生と雲雀の影』を囲っていた鋭岩から行つたのだ。

『柳生と雲雀の影』の頭部のすぐ傍にあった鋭岩から飛び出してきた飛鳥は、柳緑花紅の一撃で以てして攻撃する。厄介な《華眼》にこそダメージは与えられなかったが、その一撃は深いダメージを与えるのだった。

「……凄いな」

その一連の動作を見ていた理は、心の底から感嘆の声を漏らす。ペルソナと思しき未知のスキルを覚醒させた飛鳥だが、何よりも理が驚嘆したのは、そのスキルと既存の忍法との組み合わせによる、即興での戦闘利用だった。忍法を殆ど使えない理では辿り着けない境地。伝説の忍・半蔵の血を引くという飛鳥の才は彼をも上回り、今芽吹きかけているのだ。

……尤も、流石にその才能にも限界があるようだったが。

「——あう……」

《地昇竜》によつて『柳生と雲雀の影』を切り裂いた飛鳥だったが、着地と同時に倒れ込んでしまう。覚醒のショックか、慣れない戦法をとつた疲弊か。いずれにせよ、危険な状態であることは変わりなかった。

『クソオオオオオッ！ このアマガツ！ 殺シテヤルツ！』

そして、飛鳥の思いもよらぬ攻撃を受けた『柳生と雲雀の影』は完全に逆上し、攻撃対象を彼女に定めたようだ。今までとは比べ物にならない程の力を収束させる《華眼》は、最大の攻撃を彼女に向けて放つのであろう。

『《ガルガリンアイズ》ツツツ!!』

それは本来、座天使ガルガリンしか持ち得ぬ魔眼の閃光。そのスキルに秘められた殺意やエネルギーは、《パラライズ》や《セクシーアイ》等とは比べ物にならない。まず間違はなく必殺の一撃か、それに比肩する威力を持つのだろう。倒れ込んだ飛鳥では、回避など出来ない——

「そうはさせませんっ！ 守って下さい、ヴィゾヴニル！」

「飛鳥を殺させてなんかたまるかよ！ 来い、ティアマト！」

だが、『ヴィゾヴニル』、そして『ティアマト』。二体のペルソナが飛鳥を庇うようにして前に立ち、《ガルガリンアイズ》の閃光から守護する。そうして光が収まった所には、膝を付く斑鳩と葛城の姿があったのだ。

二人のお蔭で飛鳥は助かったのだが、理の感覚は彼女達の生命^H力^Pが枯渇し掛けているのを感じ取る。やはり《ガルガリンアイズ》は並ならぬ威力を宿していた様であり、理は二人の傍に駆け寄ろうとするが、彼女達はそれを押し留めるのだった。

「つ、二人とも、無茶を——」

「結城さんが……けほつ、それを言いますか？ わし……わたくし達の事は構わず、決着を付けて下さい！」

「……ゴホゴホ、回復アイテムはあるから心配すんな、さつさとケリ付けて来い！ ……というか、こっち見んな！ あっち向いてろッ!!」
「……うん？」

何だか、斑鳩と葛城は妙に焦っているような雰囲気を感じられる。二人の声には覇気が感じられず、老人の様なしわがれ声だ。恐らくは《ガルガリンアイズ》による状態異常だろう。

……理は、それ以上の考察を止める事にした。どう考えたって碌な事になっていない。そして、視線は向けないのだからせめて声を抑える努力をして欲しい、と理は思う。彼は「皴が」とか「白髪が」とか「垂れてるッ!？」等という極めて居た堪れなくなる二人の声を努めて無視するのだった。

兎に角理は、《ガルガリンアイズ》を発動しその反動で動きを止めている『柳生と雲雀の影』に、止めを差すために向き直る。そして、その傍には柳生と雲雀が寄り添うのだった。

「柳生、雲雀。覚悟は決まったのか？」

「ああ、待たせたな」

「雲雀だってっ！」

二人のその瞳に、絶望は無い。彼女達はシャドウという己の心の闇を、ハッキリと見据えていた。

『ぐ……、何故だ!? 何故お前達はそうやって絶望せずに、希望を抱く

ことが出来る!?

お前達は自分自身の過去を忘れるとでもいうのか!? 妹の死を、下らない期待を——』

「それは違う」

柳生と雲雀は、『柳生もう一人の自分と雲雀の影』の言葉を否定する。

「オレは、望の死を忘れたい訳じゃない。……いや、少し前まではそうだったろうが——」

何時までも望の死を見ているばかりでは、オレは永遠に進むことが出来ないという事に気付けたただけだ。……望も、そんな事は望んでいないさ。

……そうだ、オレがすべき事は、望の死を忘れる事じゃない。望が生きていた事を忘れない事なんだ!」

「ひばりも気付けたよ。この《華眼》は、一生ひばりに付いて回って、逃れることは出来ない——」

それでも、この《眼》だってひばりの力で、ひばりそのものなのっ! ひばりは何時かちやんとこの《眼》を使いこなして、大好きな家族の期待に応えるんだからっ!」

『……っ!』

しかし、否定すると同時に、彼女達はシャドウを受け入れてもいた。その気迫を受けた『柳生と雲雀の影』は、たじろいだ様に見える——そして、纏う雰囲気を一変させ、告げる。

『——ならば、それを証明して見せろッ! 我らの、柳生もう一人の自分と雲雀よッ!』

「言われなくてもだッ!」

「だけどそれは——」

「結城（さん）も、一緒にだ（だよっ）!!!」

「……ああ! 行くぞ、柳生、雲雀!」

共に覚悟を決めた両名は、駆ける。先手を打ったのは『柳生と雲雀の影』だ。

『この一撃、乗り越えてみせろッ! 《刹那せつな五月雨みづぐり撃》ッ!!!』

『柳生と雲雀の影』はその触手により、刹那の間に五月雨の如き連撃

を放つ。先の《霧雨昇天撃》や《アイオンの雨》と同じく、『雨』の属性を持つ柳生のシャドウらしい攻撃だ。

対する理達は、この攻撃を前に柳生が立ちほだかり、その力を以て迎撃する。彼女が行ったのは――

「秘伝忍法！ 《薙ぎ払う足》っ！」

秘伝動物を召喚し、真正面から張り合う事だった。召喚された柳生の烏賊の触手が、『柳生と雲雀の影』の触手とぶつかり合い、弾き飛ばしていく。

だが、攻撃力及び手数はこちらが圧倒的に上回り、このままでは押され返すのも時間の問題だった。しかし、柳生の顔に絶望など無い。それは彼女の傍に立つ、二人への信頼あってこそだった。

「柳生、合わせろ！ ジャックフロスト！」

理が召喚するのは『ジャックフロスト』。このペルソナが持つスキルで、彼女の支援を行うつもりだ。

――そして、理は其処に新たな光明を見出していた。

この数日で読み漁った忍に関連するする書物。特に理は、『自然の力』という超常的なエネルギーによって発動する秘伝忍法に多大なる関心を寄せていた。これまで幾度となく発動させた、秘伝忍法とペルソナのスキルの融合。その新たな境地を、彼らは今此処に成そうとしていた。

そう、結城理は、自然の力――またの名を【MAG】マゲネタイトとも呼ばれるそれによって構成される秘伝動物を所謂『精霊』と見做すことで、その力をペルソナの魔法スキルによって補い合い、再構築して放つ事を可能にしたのだ。

《精霊召喚》、魔法スキルと組み合わせる事により、増大させる特性を持つスキル。その結果が、此処に在る――！

「《アトミックブロー》!!!」

『ぐ……、うッ!?!』

理のジャックフロストと、柳生の烏賊から放たれる《氷結魔法》が融合し、増大し、共鳴し合い、極大の吹雪となって『柳生と雲雀の影』に襲い掛かる！

上級魔法にも匹敵、或いは凌駕しかねない威力を持ったそれは、『柳生と雲雀の影』の体軀を万遍なく【凍結】させていった。

間髪入れず、彼らの攻撃は続く。次は、雲雀の番であった。

「結城さん、忍兎雲に乗ってっ！」

「ああ！」

「じゃあ行くよっ——《忍兎でブーン》っ！」

雲雀の秘伝忍法によって召喚された忍兎、そして彼が担う忍兎雲という飛行物体に、理と雲雀は乗り込む。

……尤も、乗り込むとは言うが、少々サイズの小さい忍兎雲に人間二人が乗るのは土台無理な話であり、理は忍兎雲に跨って座っている雲雀の肩に手を掛け、残り少ない足場で何とかバランスを保っている状態なのだが。

それでも何とか、理と雲雀は崩れ落ちそうな身体を支え合い、姿勢を保つことで、忍兎雲を操作し『柳生と雲雀の影』の上空に陣取るのだった。

「雲雀、忍兎。今度はキミ達の番だ。制御はこっちでやるから、キミは思いっきりぶっ放せばいい」

「うんっ！ 任せるよ、結城さんっ！」

やり取りは先の柳生との合体スキルと同じであり、彼女の秘伝忍法の力を理のペルソナ能力によって制御するのだ。

雲雀は己を無能とは評するが、実際はその有り余る才能により力の制御が甘くなっているだけに過ぎない。そして、彼女が操る『雷』の属性の忍法を制御する為には、それ相応の力が理にも要求された。

「来いッ！ パールヴァティ！」

その為に理が召喚するのは、『女教皇』のアルカナに属する美しい女神のペルソナ。今の彼が召喚出来る最も高位のペルソナであり、インド神話の破壊神シヴァの正妃神たる『パールヴァティ』だ。

「忍兎っ、行くよっ！」

そして同時に、雲雀の掛け声と共に忍兎雲から電撃が迸る。最早暴走にも等しい程に溢れ出るそれは、しかし理の『パールヴァティ』によって掌握され、後は放たれるのを待つのみであった。

彼らの眼下に存在する『柳生と雲雀の影』は抵抗することも無いまま、それを見届けるしか出来ないでいる。そうして、そのシャドウは何処か達観した声色で、彼女達を称えるのだった。

『……そうだ、それでこそお前達は、我らの柳生もう一人の自分と雲雀だ！ この我を打ち倒して、己が進みべき道を行くが良い！』

しかし理は、その『柳生と雲雀の影』の言葉に反論する。

「……いいや違うさ。打ち倒すんじゃない、受け入れるんだ。柳生と雲雀は、もう既にシャドウキという存在を否定したりはしない。

柳生と雲雀がどれだけ強い人間か、つていう事を、彼女達の『もう一人の自分』であるキミが知らない筈も無いだろう？』

『……ああ』

「なら、もう幕引きとしよう——」

穏やかな『柳生と雲雀の影』の言葉に満足した理は、『パールヴァティ』によって制御される雲雀の《電撃魔法》を彼女への手向けとする。

理と雲雀、二人の力が組み合わさることによって発動する合体スキル。

「《ハイパージオンガ》!!!」

その雷鳴の一撃が、『柳生と雲雀の影』を貫くのだった——



柳生と雲雀には、最早言葉など不要だった。既に彼女達は、己が答えを、シャドウを受け止めるべき心を持っている。

理と雲雀の《ハイパージオンガ》を受け、消滅した『柳生と雲雀の影』は二つに別たれ、それぞれの在るべきところへと還っていく。『柳生の影』は柳生の前に、『雲雀の影』は上空に居た雲雀——ついでに理——の前へと。

シャドウ達は、少女達の前でこくりと僅かに頷き、その身をペルソナにへと変えていった。

自分自身と向き合える強い心が、“力”へと変わる——！

『我は汝、汝は我——、我は汝の心の海より出でし者——』

『柳生の影』が転身するのは、黒いリボンを全身に纏う、白銀の長髪の少女。やはり妹を喪ったというトラウマは拭えないのか、その下半身は欠落したままである。それでも、その個所は黒いリボンが束ね合うことで触手の脚を、まるで人魚の様に形作っていたのだ。

『雲雀の影』が転身するのは、黒留袖を纏い、蒲がまの穂を持った兎耳の少女。垂らされた兎耳はその目を覆い隠し、窺い知ることは出来ない。

『深淵の愛、オトヒメなり——』

『オトヒメ』、それこそが柳生のペルソナ。竜宮伝説・御伽噺『浦島太郎』に登場する、深海の楽園竜宮城に住む姫である。

全身を纏うそのリボンは、想い人を束縛するほどに深い愛を持つ彼女の一面を表し、望や雲雀に深い愛情を注いだ柳生の心情を表しているのかもしれない。

『愛の導き手、イナバシロウサギなり——』

『イナバシロウサギ』、それこそが雲雀のペルソナ。日本神話『古事記』に登場する、兎神・稻羽之素菟であり、縁結びや医療の神として知られている。

神話において、ワニザメを欺いた報いとして全身の毛を剥かれてしまおこなむちのかみい、それを憐れんだ大穴牟遲神やがみひめによつて治療された恩として、彼と八上比賣を結び付けたという。

その身に纏う黒留袖は彼らの仲人としての立場を表し、忍学科における雲雀が皆の仲を取り持つムードメーカーとしての立場を表しているのかもしれない。

「これが……」

「ひばり達の、ペルソナ——」

当時に、《真影結界》も解除され元の訓練場へと帰還する。再び満ち始めている月が、彼らを優しく照らし出していた。

「……終わったー……」

「ひゃうっ?!」

そこで気が抜けたのか、理は忍兎雲の上で身体を弛緩させ、だらり

と雲雀の背に寄りかかる。当の雲雀は吃驚とした声を上げ、下方の柳生は此方を睨みつけており、気絶した飛鳥を背負った葛城や斑鳩は、やはり呆れた様な眼付きで理を見ていた。シリアスな雰囲気は何処へやら。

まあ、この戦闘でも大立ち回りな働きをした理である為、その疲弊は計り知れない。毎度の事ではあるが、やはり結城理が居なければ、シヤドウとの戦闘は成り立たないのである。

「……うん、お疲れ様だよ、結城さんっ♪」

今にも崩れ落ちそうな理の身体をそつと支えながら、雲雀は決意を改める。ペルソナという得た力の使い方を、《華眼》という力との付き合い方を。

……そして――

「……結城さん、落ち着いて聞いて欲しい事が有るの」

「……ああ」

深刻な雰囲気を漂わせて、背後の理に語り掛ける雲雀。上空に居るために、その言葉は地上の斑鳩達に届く事は無い。勿論、後で聞かせるつもりだが。

そして理は、これから雲雀が語る内容が何であるのか、ある程度は目算が付いている。それは先の戦闘で、彼らが覚えた違和感――そう、飛鳥が見せた謎の能力についてだ。

「飛鳥ちゃんのアレは、間違いなく外部からの干渉だったよ」

「……分かってるさ」

感知能力に長けた二人だからこそ感じとることが出来た、何者かによる飛鳥への干渉。それによつて発現した――発現させられた、彼女のペルソナ能力。その存在の目的は不明だが、問題なのは、ペルソナを発現させることが出来る程に強力な干渉能力である。

今回それに助けられたのは紛れも無い事実なのだが、正直薄気味悪い。そしてそれ以上に懸念すべき事は、その干渉による飛鳥への影響なのだ。

「……ひばりと柳生ちゃんを襲ったのも、飛鳥ちゃんだった――」

「……そうか」

だからこそ理は、続く雲雀の言葉をあつさりと受け入れる事が出来たのだった――



『約束■り、ま■■いに来た■。調■はどう?』

そして再び、《テジャヴユの少年》は未来を知らせる。見慣れぬ部屋の中で、ベッドに横たわる■■■は、とある少年の言葉を聞いていた。

『て……、あ■一週間で、■■月が■ちる』

ノイズ交じりで全てを窺い知る事の出来ない警告も、決して聞き逃せるモノでは無い。それは結城理にとっても、■■■にとっても、有益な情報なのだ。

『そ■■■次の試練が■つてく■よ……、気■付け■』

警告は受け取った。およそ一週間後、次なる『試練』が訪れるという情報を。この警告が有れば結城理は、負けず、間違わず、失わずにいられるのだろう。

(……だけど、■■■、キミは――)

理は《テジャヴユの少年》から警告を受け取るたび、■■■の記憶や感情をも受け取る事が有る。それは余り気持ちの良い感情ではない。

しかし、その後悔が、その無念が、その絶望が、結城理という存在を救う事になる筈なのだ。

(……「僕」はもう、二度と――)

時は2009年6月1日、次の『満月』まで、残り一週間――

閑話Ⅲ 心の力 Side：街の記憶 その2

2009年 6月2日 放課後――

「……来たぞ、望^{のぞみ}」

柳生と雲雀、そして理は、墓地を訪れていた。昨夜の『柳生と雲雀の影』との戦闘を終え、己のトラウマと向き合う事を決心した柳生は、その決意と向き合う為にも、まずは妹の墓前に立つ事にしたらしい。雲雀と理は、その付き添いである。

手を合わせ、無言のままに佇む柳生の姿に、理達は何も言うことが出来ない。彼女が今どの様な想いを抱いているのか、理達には知る事は出来ず、知ってはいけないモノだ。その想いは、彼女だけのモノであるのだから。

「……」

「……むむむ」

理も雲雀も、柳生に倣い手を合わせるのだが、望という少女を知らない彼らはどの様に想えばいいのか。取り敢えず雲雀は、そのしかめっ面を如何にかしてほしい。

そうこうするうちに、柳生はすつと立ち上がり、踵を返して墓前から立ち去ろうとする。意外にも短い黙祷に、理は拍子抜けした様に柳生に話しかけた。

「……もう良いの？ まだもつと、キミの妹に話す事でも有るんじゃないか」

「ああ、大丈夫だ。別に、もう二度と来ないという訳でもないからな。……オレはまた、何度だって望の所に来るさ」

「そうだよっ♪ そうしたら、望ちゃんだって寂しくないだろうからねっ」

「……そうか」

「望……、また来るからな」

そんな短い呟きを残し、柳生は振り返らずに歩んでいく。

それが柳生なりのケジメの付け方なのだろう。理達も彼女の後を付いて、この場から立ち去る事にするのだった。

「それじゃあ、帰りにみんなで商店街にオイシーもの食べに行こうよっ♪」

「よし……、じゃあ行くか」

それでも何処か暗い雰囲気を漂わせる柳生を励ます様に、雲雀は天真爛漫に食事に誘っている。見た者が微笑ましく感じる二人の絆は、これから未来永劫変わる事は無いのだろう。本物の姉妹のようで、しかし決して違うその間柄は、まさしく彼女達が望んだモノなのだから。

「結城さんもっ、行こうよっ♪」

「ああ。……ん？」

理は雲雀の掛け声に呼ばれ望の墓石に背を向けた時、ふと何かの違和感を覚えた。

背筋に走る冷気、とでも言えばいいのか。しかしその冷気は怖気や不快を感じるようなモノではなく、それが彼の違和感を助長させる。

「どうした、結城？」

「……いや、少し」

その違和感を拭えないでいる理は、ある決断をした。

「……そうだね、俺はやっぱり遠慮するよ。柳生と二人だけで、楽しんでくればいい」

「何ッ!? 雲雀と二人きりだとッ！」

「えっつ！ 結城さんも一緒に来ればいいのに」

柳生は何時もの如く、ふんすふんすと鼻息を荒くしている。どうも彼女のこの雲雀LOVEは、一向に改善する気配が無い。最早手遅れである。

雲雀は理の不在を不満気にしているが、彼は適当な理由を付けてこの場を離脱する事にしたのだった。

「悪いね、ちよつと用事を思い出したから」

「むっつ」

雲雀はまだ納得していない様であったが、最終的には柳生に宥められ、理を残したまま墓地を後にするのだった。

そして、一人きりとなった理は自身の背後、誰も居ない場所に居る誰かに向けて、声を発した。

「……さて、もういいかな?」

『……うん』

消え入りそうな、しかしはつきりとした声が理に届く。いや、聴覚などではない、第六感によって認識されるそれは果たして“声”と言つていいモノなのか。

振り返った理に前に立つのは、小学生程の幼い体躯。服装は純白のワンピースだ。腰まで届くほどの赤い長髪を、黒いリボンでツーサイドアップに結んでいる。

しかし彼女は、向こう側が透けて見えてしまう半透明の身体をしていた。……つまりは、人に非ざる者。死してなおその声を届けんとする思念体、或いはアストラル体。所謂『幽霊』という存在だ。

「察するに、キミが柳生の妹の、望ちゃんでもいいのかな?」

だが、理はオカルトな存在が出現したことにまるで慌てた様子が無く、その正体を看破さえしてみせた。彼女の容姿は柳生に似ていて、同時に雲雀にも似通っており、それ故にこの幽霊少女が、『望』という少女であることを理は理解したのだ。

自身が幽霊であるという自覚が有り、生者とは相容れぬと思う少女は僅かに目を丸くして、彼の問いに肯定するのだった。

『うん、そうだよ。……お兄ちゃんは大変な人だねー、普通私みたいな幽霊とか見たら、怖がったりするんじゃないの?』

「……別に。今更幽霊とか見えてもね……、どうでもいいとしか」

実はこの男、所謂観える人だったりする。幼少期の体験、或いはシャドウ討伐を通じた『死』への理解ゆえか、そういった存在を認識してしまうのだ。

最初に認識したのは、あの十年前の事故からであり、その時は幽霊どころか『死神』を見てしまっていたりする。

『死神つて言うのと、頭がドロクロで、黒いボロボロ布を纏つて、手に大鎌を持っていて——』

「うん、大体そんな感じ。俺が見たのは、背中に棺桶を背負っていて——」

そして始まる生者と死者の会話。二人の会話の内容は多岐に渡つ

た。物凄く不穏なデストークに始まり、自分の事、相手の事、姉やその仲間たちが起こしたシャドウの出現、他愛ない世間話。

話してみて、望自身そんな彼の感性がよく分からなくなってくるが、久しぶりの——おそらく死んでからは初めてとなる——会話を心行くまで楽しむのだった。

『あははっ、おもしろーい♪　こんなに笑ったのは久しぶりだよお兄ちゃん♪』

「それは良かったよ」

望は理が話した、柳生の雲雀への奇行に呆れるやら怒るやら笑うやら。まあ兎に角、大好きな姉の話を聞けたことが嬉しくてたまらないようであった。

そんな彼女に、理はふと問いかけてみる。

「……思ったけど、キミの事を柳生に話さなくていいの？　柳生がキミの事を観えなくても、通訳なら俺が出来ると思うけど」

『……ううん、いいの。私はもう死んじやっているから、下手に話せばお姉ちゃんの負担になるかもしれないでしょ？』

「そうか……」

死者が生者に囚われるべきではない。その逆もまた然りだ。柳生はそうしてシャドウの暴走を引き起こしたのだから。

望という少女は、酷く聡明だ。幼くして逝ってしまった所為なのか、元からの気質であるのか。この少女は姉と違い忍にならなかった故に、一歩引いて見守るという立ち位置に居た。それはどうやら、生前も死後も変わらないらしい。

しかし——

『気にしないで、お兄ちゃん。私はこうして、時々お墓参りに来てくれるお姉ちゃんを見守られれば、それでいいんだから』

「……っ、それは」

そんな筈が無い、そう言おうとした理は、しかし言葉を飲み込む。思えば、今こうして彼女が幽霊として現世に居るという事は、彼女が成仏出来ていないという事に他ならないではないか。現世に留まる幽霊など、きつと碌な顛末にならない筈だ。

だがそれでも、これは彼女たち姉妹の繋がりだ。迂闊に自分が踏み込むべき領域ではないと、理は自分に言い聞かせる。……それでも理には、納得できるものではなかった。

「……望、キミは……本当にそれで——」

『ふふ、嬉しいな。お兄ちゃんも偶にはお墓参りに来てね、約束だよ？』

「っ！ 待っ——」

『……またね、お兄ちゃん』

理は望の半透明な身体に手を伸ばし、しかし触れることは叶わない。彼の手からするりと抜けて、空気に交じる様にして望は消えてしまった。

理は何も掴むことの出来なかった己の手を見て、開閉して——溜息を一つ吐く。

「……望、馬鹿だよキミは。残された人の気持ちをもっと考えるんだ」

望という少女が、現世に留まりながらも姉を見守るといふ我儘を言うのなら、残された者である此方も我儘を言おう。理不尽に死に別れてしまった遺族という者は得てして、どんな姿であっても逝ってしまった者との再会を望むのだ。それは勿論、幽霊であっても。

だからこそ柳生は、あのようなシャドウの暴走を引き起こした。雲雀に妹の姿を重ね、例え偽りであってしても『望』という妹を求めたのだ。理にはそれが、痛いほど理解できる。彼もまた、残された者であるのだから。

「……『お兄ちゃん』、か。同じ呼び方だったな……」

そして理には、柳生と望の仲を取り持ちたいという欲求が芽生えていた。あの少女は、自分を『お兄ちゃん』と呼んだ。結城理にはそれが、酷く懐かしい。

彼を残して逝ってしまった少女。未だ愛や恋だのを理解出来ない結城理という人間が、心底『愛している』と断言できる、その少女と同じ呼び方だった。

「……お前に逢いたいよ……ことね琴音」

その言葉は、鉄面皮の彼にしては珍しく、悲痛な表情をして漏らされる。

それは、柳生や望と同じ、『死』に囚われる人間としての在り方だった――



「……軽く食事にするか」

とある日の学校帰り、小腹を空かせた理は適当なファミレスに立ち寄る事に決めた。

どうにも最近の理はペルソナ能力による影響なのか、食事が徐々に増えている気がしないでもない。流石に“向こう側”の■■■■のようにペタワツクセツト等を完食する程の大食漢ではないが。

だからと言って彼は、飛鳥達に食事を増やすなどという厚かましい要求する心算など無かった。それを言ってしまうえば、その瞬間結城理はヒモへと成り下がる事であろう。

その為繁華街の一角にある店へと立ち寄り、軽く済ませる心算でいたのだが、放課後の時間帯である為か店内はそれなりの盛況を見せていたのだった。

「二名様ですか？ 今大きい席しか開いていませんが、そちらでよろしければご案内致します」

「あー……、それでいいよ。直ぐに済ませるから」

「畏まりました。では、14番のテーブル席にお掛け下さいませ♪」

一応理はこのファミレス以外で食べるという案も浮かばなかった訳でもないが、その場所を探すのを面倒臭がった為、すぐさま「どうでもいい」と思考放棄した。

そして促されるままに14番テーブルへと向かおうとした理であったが、それを呼び止める声があった。

「申し訳ありませんお客様……、新規のお客様が入店されたのですが、開いてる席がもう14番テーブルしかなくて……。相席をお願いしてもよろしいでしょうか？」

理に声を掛けたのは、たった今彼に着席を促したはずの店員である。非常に申し訳なさそうな表情を浮かべ、理に見ず知らずの人間との相席を懇願するのだった。

「……だったら、俺はお暇するよ。店員さん、悪いけど——」

生憎と理自身は、知らない人間との相席はあまり受け入れたいモノではない。その為、頼んだメニューをキャンセルして貰い、退店しようとしたのだが、其処へ再び声掛けをする人物が現れた。

「えーっ!? キミキミ、ちよい待ち! そこまでアタシ達の事嫌わなくたってイイじゃーん? イケメン君も一緒に食べようよ〜♪」

「……うん?」

理に話しかけてきたのは、派手な少女、所謂ギャルだった。

その容姿を一言で言えば、『魅惑の悪魔』。まず目に付くのは、異国人の血を引くであろう色素の薄い金髪。血のように紅い瞳と、吊り上がった眼尻にはバッチリとメイクが決まっており、薄紫のアイシャドウが艶めかしい。口元のホクロも彼女のセクシーさを引き立てていた。

男を魅了するその豊満な体付きは、以前見た雪の少女と同じく灰色ワンピース制服に身を包んでおり、同じ学校であるのだろう。もしかしたら、彼女の知り合いなのかもしれない。

「うわーい! 何それ楽しそう♪ お兄ちゃんも、美野里達とご飯にしようよ〜♪」

「……ううん?」

次いで話しかけてきたのは、天真爛漫な笑顔を浮かべた、同じ制服に身を包む小柄な少女だ。長い茶髪を編んでツータールにし、背にはハムスターの形をしたリュックサックを背負っている。

容姿は幼げであり、くりくりとした丸くて青い瞳と、口端の八重歯が特徴的である。ただ、その体付きは所謂トランジスタグラマーという奴であり、先の悪魔的な少女とも見劣りしない。

「四季、美野里。いけませんよ、初対面の人に迷惑をかけては」

「……(あ、マトモそうな人)」

三度現れたのは、おかつぱ頭の少女。例によって同じ制服であり、

プロポーションも以下略。桜の花びらの形をした髪飾りを付けた、しつかりとした雰囲気を持っている。

「……」

「……!?!」

四人目も例によって例の如く制服とスリーサイズが云々……般若面を付けている!?! さしもの理もこれにはギョツとし、一歩たじろいだ。が、その時少しか少女がシユンとした雰囲気を出した為、それ以降は何とか身体を押し留める事に成功した。

理は、店員がこの般若面の少女に気圧され、自身に相席を促したのだらうかと邪推するが、実はそんなことは全く無かつたりする。この辺りのファミレスなどは、この様な異様な客など度々来店する為、慣れてしまっているだけであった。

「さあさあ、ご飯にしよーん♪ こっちでイイんだよね〜」

「美野里、お子様ランチ食べたーい♪」

「えっ、ちよ」

そんな風に気を抜かしていた理は、両脇を二人の少女によってがしりと抱え込まれる。腕にふによふによと柔らかい感触を感じるが、そんなモノはどうでもいい。何故自分は、こうして宇宙人の様に連行されているのだろうか？

おかつぱ頭の少女と般若面の少女に縋る様に目線を向けるが、最早二人とも諦めてしまったのか、黙って首を横に振っているのだった。

「……ええー?」

そんなこんなで四人の少女と食事をとる羽目となった理である。それぞれが思い思いの注文をし、料理が届くまでの間に自己紹介をするのだった。

「アタシは四季しきです。よろしく〜♪」

「美野里はねっ、美野里みのりって言うんだよっ」

「夜桜よひざくらです。すいません色々……」

「……叢むらぐせだ」

「……結城理むすきりです、よろしく」

なんだか半蔵学院忍学科のメンバーとの自己紹介でも、同じ様な展

開だつたなと理は思い返す。

なお、四季と美野里は理の両隣に陣取っている為、非常に居心地が悪い。対面に居る叢は殆ど無言の為何の役にも立たず、非常に申し訳なさそうに謝ってくる夜桜だけが彼の癒しであった。

「……まずそもそも、何で初対面の俺と食事なんてしようと思ったのさ？」

「ん〜？ キミはアタシらの事を知らないかもしれないけどさ、アタシらは雪泉ちんからキミの事を聞いてたからね、気になっちゃって♪」

理の疑問に、四季はドリンクバーのトマトジュースを啜りながら答える。彼女の容姿も相まって、まるで吸血鬼の様な有様だ。下手するとテレビ局の屋上で殺されそうな気がしないでもない。

「雪泉って……ああ、あの子か。……そういえば、名前は知らなかったな」

四季から聞いた名前に覚えは無かったものの、その名前が持つ雰囲気と、彼女達の制服を見れば自ずと答えは導かれる。これまであのCDショップで数回の交流を重ねている、あの雪の少女の事であると理は気が付いたのだった。

「うんうん♪ 雪泉ちゃん、お兄ちゃんの事をすっごく楽しそうに話すからね〜」

「……別に、ただ趣味の話をしているだけなんだけどね」

「いやいや〜、それだけであの雪泉ちんがニコニコってする訳ないってさ〜。これはもうあれだね、LOVEっちゃってるね！」

「ちよ、いけませんよ四季?! そういう事を喋ってしまったては！」

「……」

何とも姦しい事である(無口な叢を除く)、とまるで他人事のように理は思う。最近は飛鳥達との交流によってある程度慣れたとはいえ、自分の様なコミュ障がこの仲良し四人組の中に放り込まれたところで、どう立ち回ればいいのか彼にはてんで分からない。

雪泉が自分にLOVEしているというのも、恋愛感情をイマイチ理解できない理にとっては、どう対応すればいいのかまるで分からない

かった。というか、彼女の名誉の為にもツッコむのは止した方が良さ
だろう。この場に彼女が居なくて、本当に良かった。

「……まあ、料理が来たから食べようよ」

「いただきます♪」

「……いただきます」

夕食前で有る為か、ほぼ全員が軽食である。理はペペロンチーノ、
四季はナポリタン、夜桜と叢雲はうどんだ。どうでもいいが、何故か
麺類ばかり集ってしまった。ついでに美野里だけは、お子様ランチ
とがつつり食べている。……しかしこの少女、些か幼すぎではないだ
ろうか。

マナーこそ悪いが、理を含めて和気藹々と会話が弾む中——やっぱ
り叢は無言を貫いている——、理はふと湧いた疑問を彼女らに問い掛
けてみる。

「……そういえば、キミ達4人って——いや5人か、どういう集まりな
の？」

見た限りでは、彼女達は同じ学校で同年代だという以外、特に共通
項は見受けられない。雪泉達のグループは部活動などでの集まりな
のだろうか——という疑問が、この問いの建前の理由である。

ハッキリ言おう。理のこの質問は、彼女達への「探り」である。意
図的か偶然なのかはわからないが、こうして理に近寄った所で、雪の
少女も感じさせたその身に纏う『忍』の世界特有の雰囲気は隠しきれ
ていなかったのだ。……善忍か悪忍かまでは判断できないが。

「ふーん？ 聞いちやうんだ、ソレ♪」

四季もまた理の意思を察した様であり、蠱惑的な表情を浮かべ舌な
めずりをする。彼女だけでなく、向かい側の夜桜も険しい表情をし、
叢も身構えているようだ。その雰囲気を感じて、僅かに戦闘態勢を取
る。

此処まで来て彼女達が今この場で自分達が何者であるのかを秘匿
するようであれば、彼女達は——

「えへへっ♪ 美野里達はねー、黒影おじいちゃんの所で一緒に育っ
たんだよっ♪」

「……………」

そんな一触即発の雰囲気は、能天気な美野里の言葉によって断ち切られた。……オイ、どうすんだこの空気。

「……何か、大丈夫そうだね」

「……ええ、私達も少し過敏だったようです」

解放された空気の中で、張り詰めた気を弛緩させた理と夜桜は揃って溜息を吐いた。その一方で四季は何が可笑しいのかけられらと笑っており、叢は相変わらず無言を貫いているのだった。

『黒影』、その名は忍の資料を見た理も知っている。かつては伝説の忍と謳われた半蔵のライバルであり、その行き過ぎた悪忍排他の思想によつて善忍の世界を追放された忍であるという。

彼はその後、身寄りの無い子供達を引き取り、忍として育てられたのが彼女達であるそうだ。追放されたとはいえ元善忍。彼によつて育てられたという彼女達もまた、善忍であるのだろう。兎に角、この場で理を襲うような悪忍では無い事は確かな様だ。

「まあ……キミ達がどういふ人達なのかは大体分かったよ。敵じゃないって事で良いんだろう？」

「……意外とあっさりしているのだな。もう少し用心深いと思ったが」

理のその言葉に苦言を申しでたのは、これまでほとんど無言だった叢だ。彼女はどうかやら警戒心が強い方らしく、未だ胡乱な眼付きで此方を睨みつけている。なお、現在は食事中であり仮面を少しずらしているため、彼女の眼はそこから見えている。……何なんだその仮面は。

「……用心深く観察して、キミ達を信用に値するって判断しただけだよ。これでも、人を見る眼は有るつもりだ」

理の言う通り、彼はこれまでの人生で培った人との出会いで、その観察眼を鍛えられていると言ってもいい。しかしそれは、ネガティブな意味合いでだ。

家族の死後、半蔵学院へと転入するまでの彼の人生は、様々な人間達の悪意というモノに翻弄されたと言っても過言ではない。そのセ

リフと共に、普段から淀んでいる眼を一層濁らせたのが、その事実を後押ししていた。

しかし理は、其処で一度目を瞑り、開く。そして現れた銀灰色の瞳には、一瞬前までの昏い影は微塵も無く、其処には確かな光というモノが在った。

「……俺はきつと、キミ達みたいなのが、好きなんだろうね——」
理と同じ、家族を喪ったという絶望の道を歩んできた彼女達。しかし、黒影や共に育った仲間と言う新たな家族を手に入れ、前へと歩まんとする者。

絶望の中で生き足掻く人は彼から見れば、強く、気高く、美しい、愛おしい人なのだ。それは、今までの彼が手に入れることが出来ず、これからの彼が手に入れようとしている在り方そのもの。

だからこそ結城理は、彼女達に好意を抱くのだろう。

「ヤバ、マジヤバ！ アタシ告白されちゃった〜♪」

「は、はあ!? なに言っとるんじや！ ワシらを口説いたりして！ ゆ、雪泉に申し訳が立たん……！」

「うわーい！ 美野里もお兄ちゃんの事、好きだよ〜っ♪」

「ふええっ!? い、いけませんいけません！ 我なんか告白なんか！ すいませんすいません、我はもうずっと引きこもってますー！」

「……そういう意味で言ったんじや無いんだけど？ ……どうでもいいか」

……なんだか、盛大に勘違いさせてしまったようだ。理の天然証しスキルは絶賛発動中である。

言うまでも無く理の言った『好き』とはLike的な意味であり、Love的な意味合いは一切無い。その癖、全員が好意的に捉えてくれているので性質が悪いのだ。どうせ一過性のモノであると予想できるため、理は特に訂正せずスルーすることにした。

しかし、四季のテンションはフォルティシモであり、夜桜は方言口調になり、美野里は全身を使って喜びを表し、叢は顔を真っ赤にしてあわあわと喚いている。……と言うか叢はキャラが変わりすぎではないだろうか？ 先程までの尊大な口調とハスキーボイスは何処に

行つたのやら。

叢は顔をぶんぶんと振っている所為で仮面が外れかけ、ちらちらとその容姿が見え隠れしている。そしてその厳つい般若面の下にある素顔は裏腹に、丸っこいタレ目が印象的などても可愛らしいモノではないか。というよりも、理はその顔に寧ろ見覚えが有る。

(……昔、貧民街に居た子か。そういえばあの時は、もやしの子も一緒に居たんだっけ?)

理は遠い記憶を呼び覚ます。それは幼い頃の彼が当時の保護者に貧民街に連れていかれた際に見かけた、二人の少女の姿だ。無論一人は目の前に居る叢であり、もう一人は商店街のスーパーで交流を重ねているもやしの少女である。

尤も、その姿を見かけたのは一瞬であり、二人はすぐさま何故か被り物でその容姿を隠してしまっている。叢は殺人鬼の様な目出し紙袋を被り、もやしの少女はもやしの袋をテープで張り合わせたものを被っていた。その為、今の今まで叢の事を思い出せずにいたのだ。

いずれにせよ、理はそこから直ぐに退避する事になる。貧民街の余りにも劣悪な環境を見た保護者が、流石に見かねて連れ戻した為だ。元々は育てる心算が無いと彼を捨てていく気だったというのに虫のいい話だ。どちらにせよ理はそこから直ぐに別の親戚筋に引き取られた為、保護者(笑)の事など知ったこっちゃないのだが。

「……ごちそうさま。さて、俺はもう帰るよ。雪泉にもよろしく言っておいて」

「じゃーねー♪」

「……ま、また……」

いち早く食事を終えた理は、先んじて席を立つ。四季と美野里は愛想よく笑いながら彼を見送ったが、夜桜と叢は未だ真つ赤な顔で俯いたままであった。理が退店して暫く経ち、漸く二人が再起動したのを見計らって四季は切り出すのだった。

「いやー、ホントにイケメン君だったねー♪ あれじゃあ、雪泉ちゃんが惚れちゃうのも仕方ないよね。アタシも気になっちゃった♪」

「うんうん、だよねー♪ そうだ、お兄ちゃんも黒影おじいちゃんに

会ってもらおうよ♪」

「まあ……、確かにいい人ではありませんでしたね。件の『ペルソナ使い』が結城さんだというのなら、私達も安心できます」

「……むう（あんまり話せなかった……）」

この場に理が居なくなっても、彼を取り巻く話題は尽きる事無く弾んでいく。四人の麗しい少女達が一人の少年を話題にして語り合うその姿は、とても『忍』とは思えない程に微笑ましい、何の変哲も無い只の少女としての在り方であった。

少女達は誓う。ペルソナ使い、結城理と共に戦う事を。少女達の理念である、正義の道を歩むという鎮魂の夢へと沈まん事を。

尤も――

「あー、速くまた会いたいなー♪」

「ねー♪」

「あの、四季、美野里？ 結城さんは雪泉の……まあ、その……気になる人？ なんですから、そうベタベタしては……」

「……（我も会いたいですけど……）」

彼女達には、もう少し『節制』というモノを覚えて貰いたい。



それは、ある日の放課後の出来事だった。

ふと、理は忍部屋の一角に眼を向ける。それは『購買部』と書かれた看板を掲げた障子戸だ。

実は理は、今まで一度も『購買部』に入った事が無い。それは単に忍学科で彼が必要とする物が無かったという事と、例え存在した場合でもその時は霧夜教諭が用意してくれたからだ。

しかし、今の理は有体に言えばヒマだった。飛鳥達は皆、任務か訓練で席を外しており、一人きりで学院の課題を片付けていたのだ。その課題も早々に片付けた為、完全にフリーな時間が出来てしまった。飛鳥達の任務や訓練も彼が付き合えないモノの為、そちらへ向かう事も出来ない。その様にヒマを持て余した理は、普段入る事のない部屋

に興味を持ったのだった。

(俺が入っても、別に構わないよね……?)

一度好奇心を持ってば、それを止める者はこの場に存在しない。座布団から立ち上がり、足取りはやや軽く、『購買部』へと近づいていく。

そして躊躇う事無く、理はその戸を引き開けたのだった。

まず感じたのは、全身を伝うぬるりとした感触。そして僅かばかりの浮遊感。恐らくこの戸には何かしらの忍法が付与されているのだろう。

対して『購買部』の内装は左程おかしなところは無い。……いや、扱う商品が忍向けのモノである為、苦無や手裏剣が並んでいるのは果たして普通と言っていないものか？

それだけならまだしも、明らかに忍向けとは思えない派手で扇情的な衣装が飾られ、果ては下着まで取り扱っているのはどういう事なのだろう。これでもか、というくらいデカデカと飾られている為、バツチリと眼に入ってしまったではないか。理は早くも『購買部』に入った事を後悔し始めていた。

「いらっしやいませーっ！」

「!?」

そんな風に意識を若干飛ばしていた理へと、盛大な声が響き渡る。尤も此処が店内である事を顧みれば、「いらっしやい」という挨拶は当然のモノであるのだが。

彼に声を掛けてきたのは、半蔵学院の制服に身を包む少女であった。顔立ちは所謂可愛い系であり、とろんとしたタレ目が印象的だ。腰まで届くほどの黒い長髪で、カチューシャで前髪を上げて留めている。そうして晒されたおデコが輝いて見えた。いや、輝いて見えるのは彼女の屈託のないスマイルか。例えそれが営業スマイルだとしても、彼女の笑顔は見た者を安心させるような雰囲気があった。

「……キミは？」

「お初にお目にかかりますう！ この『購買部』で売り子のバイトをやっておりますう、忍学生一年の苜蒲あやめと申しますう！ 以後、御鼻屑にいー！」

「……そ、そう」

だが、出会った少女はハイテンションだった。自身とは正反対な少女の出現に、理も引き気味である。そんな彼に構わず、菖蒲はどんなに接してくる。

「結城先輩、貴方の事は飛鳥先輩やかつ姉さまから聞き及んでいますう！ こうして会える日を楽しみにしておりましたあー！」

「……それはどうも。それと、キミは俺の事をどんなふうに知っているのか聞いてもいいかな？」

「かつ姉さま」とのたまった菖蒲の発言はどうでもいいとスルーしつつ、この少女、菖蒲が果たして自身の事をどのように聞き及んでいのかを、理は興味を持った。

ただしそれは、飛鳥達が第三者に話した自身の評価、などといった純粋な興味というモノからではない。主に、何やら嫌な予感がしたから、という危機感からであった。そして、やはり――

「ええと、飛鳥先輩が言うには、『とっても強い人、身体も、心も、結城くんの全部が』、だそうですう！ かつ姉さまは、『今まで何度も助けられた、アタイが認める強い男』、ですつてえ！ 斑鳩先輩は――」

「うん、もういいから。あと俺は、そんな大した人間じゃないから。いやホントに……」

この感情を何と表せばいいのだろう。彼の心中を満たすのは、取りあえず『恥』が多であるが、『喜び』や『嬉しさ』といったモノも無い訳ではない。彼自身自覚もあるが、結城理という少年は案外チョロいのである。

「ふふふ、皆さんから聞いていた通り、やはり結城先輩は魅力溢れる殿方の様ですねえ」

「……どうでもいいから、もうそれでいいよ……」

取り敢えず理は何時もの様に考える事を放棄し、この場を収める事にする。それでも菖蒲は「わかってますよ、ワタシ」的な表情で此方を見据えてくるのでたまったものではないのだが。

「……それで、此処はどういうモノを売ってるの？」

「ふふ、それでは不肖ながら購買部バイト菖蒲が、結城さんにオススメ商品をご紹介しますう！」

菖蒲の表情は「露骨に話を逸らしましたねえ」等と形作っているものの、一応は自身の責務を優先する事にしたらしい。こほん、と咳払いをして、天真爛漫な営業スマイルを浮かべ、商品棚に向けて手を挙げるのだった。

そうして菖蒲による購買部の説明が始まる。

「それではご説明致しますう。ここ『購買部』では、忍学生の皆さま向けの商品の取り扱い、販売を行っておりますう。内容は主に、忍具、忍法書、忍装束などですう。分かっているとは思いますが、売るものが忍用の道具である以上、ここでの売買は『銭』を使ってもらいませよお」

『銭』とは、忍の世界のみで通用する通貨である。任務などの報酬を通して渡され、忍学生達はこの購買部で自身の装備を整えるらしい。同時に、一般人などが誤って購入する事など無いようにする為の措置でもあるそうだ。

理自身もある程度は『銭』による報酬を受け取っているが、大体は日本円に変えてしまっていた。

「……それは分かるけど、アレも忍装束なの？」

そう言つて理は後ろ手に、なるべくその方向を見ない様にして、飾られた忍装束？ を指差す。其処に在ったのは極めて扇情的な、凡そ実用的とは言い難いコスチュームの数々である。

そもそも忍装束は本来、装着者である忍の体力面・精神面を視覚化させる機能を持つている。忍の体力が削られるたび、装束もダメージを負って段々と破けていくのだ。……この忍法を開発した人物は頭オカシイのではないだろうか。

その為、その機能が発揮されているのならば、忍装束はどの様な外見でも構わないのだろう。尤も、その外見があんな事になっている為、理はツツコミを入れているのだが。

「ええ、勿論アレも忍装束ですよお？」

「……そう（女の子のセンスは分からない……）」

「大丈夫ですう、結城さんにもきつと似合いますからあー！」

「何で俺が女装する流れになつてるの?！」

因みに、男性物は無いとバツサリ言い切られた。理不尽である。そうして、購買部に関する説明は続いていく。

「ここ購買部の扉は時空間忍法によつて繋がれ、あらゆる場所から入る事が出来るようになっていきますう。この場においては、善忍も悪忍も関係無いのですう」

「あの扉を潜った時の違和感はそれか……」

購買部の扉が所謂『どこもドア』的なモノであつた事には特に驚きは無い。理自身が瞬間移動的なペルソナのスキルを使える以上、忍側にも同じような技術が有つても不思議ではないからだ。

しかし理が特に気になつたのが、購買部は全ての忍機関において『中立』を保っているという事であつた。つまりそれは、購買部に所属する彼女もまた『中立』に徹しなければいけないという事だ。

「……通りで、キミを半蔵学院で見たことが無かつた訳か。制服は半蔵だけど、半蔵学院には所属してないって事だね」

「書類上なら、一応は半蔵所属なんですけどねえ」

菖蒲はそう言つてくすくすと笑う。その笑みは、半蔵に所属出来ない事などを全く気にした風でもない、真つ直ぐな笑顔だつた。

店内を見たところ、彼女以外は皆正規の人員なのだろう。菖蒲の様な忍学生は彼女一人だけだつた。そして、アルバイトであるという彼女がどの用な過程を得て購買部に所属するようになったのかは分からないし、初対面の人間にそこまで追求する気は無い。

詰まる所、今の理と菖蒲の関係は『客と店員』であるという事なのだつた。

「……まあ、今日は手持ちが無いから買うのはまた今度にするよ」

「あらら……それは残念。またのお越しをお待ちしておりますう」

「ああ、また来るよ」

「ありがとうございますーっ！」

菖蒲は笑顔を絶やさぬまま、理に二度目の来店を促していた。それを商売上手と取るか、未永い付き合いを見越したものであると取るか

は人それぞれだろうが、彼はそれを後者と解釈する。理自身も、この出会いを価値在るものとし、菖蒲との再会を望んでいたのだ。

尤も、彼女との出会いの場は購買部という金銭が絡む施設。彼女自身の意思は兎も角、『銭』という通貨を所持していない理はお呼びではないのである。

「……『金の切れ目が縁の切れ目』ってヤツか。まあ、真理だけどね……」

理は購買部から退室しつつ、金銭に関する諺を独り言ちる。ただし今回の場合は、金が無いから縁が出来ないという逆説的な話なのだが、まあ余り違いはないだろう。

どちらにせよ、理はその諺を身を以て思い知っている。かつて理を引き取り、すぐさま彼の両親が残した遺産を掠め取っていった親戚などがその典型だ。これが彼が金銭に執着しない主な理由だったりする。

しかし『金は天下の回り物』という様に人間社会は金銭が付いて回り、或いは『地獄の沙汰も金次第』と死んでからも付きまとうのかもしれない。少なくともこの現代社会、人間は生きていくだけで金に囚われるのは紛れも無い真理なのだ。

「……だったら、精々上手く利用させてもらう事にしようか」

『時は金なり』、本来は時間は金銭と同じように無駄にしてはいけないという縛めであり、そこから転じて商売人ならば時間を金に変換するという解釈をするのだろうか。

ならば理はこの教えを、『金』によって菖蒲との時間を買うのだと、そう覚えようではないか。

「ええと……、『春宵一刻值千金』だっけ？」

菖蒲との出会いを詩によって表すあたり、理自身なかなかのロマンチストである。彼女との一時は、千金にも値するのだと言っているのだから。

この言葉は、日本では春の夜の素晴らしさをあらわす句であり、春の花である『菖蒲』^{アヤメ}にピッタリの詩であるだろう。

そして、この詩を詠んだ詩人・蘇軾が生まれた中国では、この詩も

こう表されるのだ。
男女の恋情、と――

25話 シヤドウクライ

2009年6月5日 放課後——

「……………ふう」

結城理は、息を吐いて精神を集中させる。今彼が居るのは修練場の真っ只中であり、傍では飛鳥がその様子をじっと見守っていた。

指は必要な印を組み、周囲に存在する自然の力——自然マグネタイト——を身体に取り込んでいき、その忍法を発動させるために生体マグネタイトへと練り上げる。

そして、懐から取り出したそれ——古めかしい巻物だ——を眼前に掲げ、より一層集中を高めていく。

そう、結城理が行おうとしているのは、『忍転身』だ。理は今、飛鳥の指導を受け、忍達が使う中でも最も基礎にして要ともなる忍法『忍転身』を習得しようとしていた。

『忍転身』とは読んで字の如く、その「身」を「忍」へと「転」じる忍法だ。忍達が使うこの変身術は、忍としての力を最大限発揮する為に行う忍法である。

忍ではない理には不相応な忍法だとは改めて思うが、しかし贅沢は言っていない。この忍法を習得すれば、未だ扱おうことが出来ずにいる他の忍法も習得出来る筈なのだから。その為、理も自身の力のみならず、飛鳥達からも最大限のサポートを受けて忍転身を発動させようとしていた。

例えば、理が今掲げている巻物は、忍転身を行う際に必要な『秘伝忍法書』と呼ばれる忍具だ。尤も今回は忍ではない理に合わせて多少の改良がくわえられている為、正確には『儀典・秘伝忍法書』と呼ぶべきか。飛鳥が傍に居るのも、そんな理のサポートを行う為に補助にしているのである。

「……………忍、転身——ッ！」

そうして、集中と術式の組み上げを終えた理は、『忍転身』を発動させる。

『儀典・秘伝忍法書』から放たれる光が帯状となって理の身体を包み

込み、練り上げられたMAGが忍装束へと変換され、その身へと纏う

なお、この変身シーンで別に理は裸になつたりはしない。そんなもん一体何処に需要が有るといふのだ。

逆に、彼女達はいつも通り裸になつて変身する。飛鳥達も理の前で何度か実演を行つているが、惜し気も無くその艶やかな肢体を晒していた。

しかし悲しいかなそこは結城理という男。始めの内は紳士的に目を逸らしていたのだが、飛鳥達に勉強の為にしっかりと見てほしいと言われ、それから仕方なく見ていた。ついでに言えば、彼の視点では謎の顔アイコンや光は存在しない為、色々とモロ見えである。

だが、それも二、三度見れば慣れてしまい、飛鳥達は色々な意味でへこむ事になる。何だかんだ理は彼女達が意識している男性である為、もう少し何かしらの反応が欲しいのだった。

当然飛鳥も同じ心境であり、あの手この手のセクシーポーズで彼の気を引こうとしている辺りもはや手遅れである。最近では修行ではない平時の時ですらガードが緩くなつて居る始末だ。……アレか、飛鳥は5分と持たない脱ぎ癖を持つ灰被りなパッションガールなのだろうか。

閑話休題

「……くっ！」

だが、其処で光が途切れる。集中を切らしたことにより、MAGの変換が途切れ霧散してしまったのだ。その反動で彼の体内で練り上げられていた生体マグネタイトが一気に枯渇し、たまらず地面に膝を付く。

そんな理を見て飛鳥が駆け寄ってくるが、この様な光景は最早幾度となく繰り返し返されているのだった。

「……駄目か」

「ううん、そんなことないよ。結城くんは頑張っているから、次こそは成功するよっ」

「……それ、もう十回連続くらい聞いてるけどね」

「あ、あはは……」

とはいえ、理はそこで飛鳥に怒りの感情を向ける事など無い。《忍転身》が成功しない原因は自分自身に有り、そこには飛鳥の関与など全く存在しない為だ。

理は足を組み換え胡坐の姿勢を取ると、地面に転がっていた『儀典・秘伝忍法書』を拾い上げ、手の中で弄ぶ。そうして、《忍転身》が成功しない理由を改めて考察する。

(……忍転身で変身する姿は、自分が『こうありたい』と想うカタチに具現化する。だけど――)

忍転身によって身に纏う忍装束の姿は、自身の理想像によって左右されるといふ。

例えば斑鳩の軍服然とした忍装束は、上級の忍としての証であるらしい。クラス委員長としての彼女の現れ方で有るのだろうか。

葛城の忍装束である前全開のブラウスは、昔斑鳩とケンカしたときにバツサリと切り裂かれた名残だそうだ。しかしそのケンカを経て今の彼女達の関係が有る以上、葛城にとっては思い出の様なモノであるのだろう。

飛鳥、柳生、雲雀に関しては詳しく知らないので、後で聞いておこうと理は思う。というか、雲雀のあのブルマ姿は何なのだろうか？ 兎に角、彼女達はそういった理想像を持っているからこそ、忍転身を行うことが出来るのだった。

……しかし、結城理には『こうありたい』という理想像が存在しないのだ――

結城理が自己の薄い人間であることは、今更確認するまでもない。半蔵学院に来るまでの悪辣な人生観が、今の彼の希薄な人格を創り上げてしまっている。飛鳥達との交流によって多少は改善されようが、今だその根幹は変わらずにいるのだ。

彼が司るもう一人の自分ペルソナも、《ワイルド》によって様々な自分が居る以上、其処に明確な自分が存在しない。故に、彼は理想となった自分が想像できずにいる。

ならば今一度、自身に問いかけてみる。己の記憶を漁り、その中に

理想とするべき存在が有るかどうかを。

彼の理想となる人物は、仲間達である斑鳩か、葛城か、柳生か、雲雀か。

しかしそれらは今の結城理を形作るものではあるが、己の理想像とは成り得ない。

或いは「向こう側」の、■織■か、■ゆ■か、真■か、■鶴か。

しかしそれらは■■を形作るものではあるが、己の理想像とは成り得ない。

何故か？ 単純な事だ、結城理／■■にとって彼ら彼女らは愛し、敬い、隣に居るべき仲間ではある／あったが、己が『こうありたい』と思う人物像ではないからだ。

彼に言わせれば、所詮自分は自分にしか成れず、その人はその人でしか成れないのだから、結城理は他人を理想像とすることが出来ないのだった。

勿論それは、今眼の前にも居る彼女にも当て嵌まる——

「えっと、どうしたの結城くん？」

「……いや、何でもないよ」

どうやら、気付かぬうちに飛鳥を見つめていたようだ。彼女は何やらニコニコとしながら理を見つめ返していたが、彼はそれが気恥ずかしくつい顔を逸らしてしまう。

そのまま理は無益な考察を繰り返していたのだが、ふと、ふらりとした感覚が彼を襲う。理はそれに抗うことが出来ずに後ろに倒れ込むのだが、何か彼の身体を受け止める。

「おっとと、大丈夫？」

「……んあ、飛鳥？」

倒れ込んだ理に心配そうに声を掛けるのは、他ならぬ飛鳥の声だ。まあ、此処には初めから理と飛鳥しか居ないので当然であるのだが。

理は頭の下に柔らかい感触を感じ、頭上には飛鳥の顔が——否、突出した胸部によって顔は見えなかったが、その光景・体勢によって、今の状況が所謂『膝枕』であることを察するのだった。

しかし、それに気恥ずかしさを覚えたり、彼女の足の柔らかさを確かめるよりも早く、急速に眠気が襲ってくる。過度な忍法の行使により、身体が休息を求めているのだ。飛鳥もそれを理解しているのか、彼を咎める事無く休息を促した。……この、膝枕の体勢のままです。

「うーん……、焦るのは分かるけど、休める時は休んだ方が良いよ?」
「……じゃあ少しだけ、……休ませて……」

飛鳥の言葉に甘えて、理は意識をあつさり手放すことにする。

「おやすみなさい、結城くん——」

微睡みに落ちる彼の意識が最後に捉えたのは、そんな飛鳥の優しい声であった。



自らの膝の上で穏やかな寝息を掻き始めた理を見て、飛鳥は溜息を吐く。

「ちよつと無理させちゃったかな……?」

『忍転身』の講座が彼女の担当である以上、その匙加減は自身の裁量によって決まる。此処まで彼に無理をさせたのには、その見極めを誤った自分の責任もあるだろう。

尤も、それは仕方の無い事だ。最近の理は焦りの気配を色濃くしており、それは一月前の『女教皇』^{ブリーステス}の出現前とほぼ同じ状況であった。

『影人間』こと無気力症患者も徐々に数を増やしており、深夜のシャドウ討伐でもその勢力を増している。そう近くない内に新たな大型シャドウが出現するのは、彼女達にも感じられていた。その為、張り詰めた雰囲気は忍学科でも伝染しているのだ。誰しも、己や仲間の強化に手を抜く訳にはいかないのである。

そんな憂鬱な気持ちになりながら、手持無沙汰な彼女は何の気無しに、膝上の理の頭をそつと撫でてみる。

「……ん」

頬を擦ってみる。

「……あふ」

耳を擦ってみる。

「……………」

「……………」

——ヤバい可愛い！

膝に乗せている理を起こさない程度に飛鳥は身悶えする。傍から見ればイチャつくバカツプルか、もしくは幼気いたいけな少年に手を出す変態淑女のそれだ。そして、この場合は後者が正しい。だが、生憎この場には彼ら二人しか存在しない。その為、彼女の行為を止める者は何処にも存在しないのである。

因みに余談だが、起きているときであつても理自身はこういった肉体的なスキンシップをあまり嫌がらない傾向にある。距離の近い友人知人を得て久しい彼は、物理的な距離の取り方を未だ測りかねているというのが真相だろう。

尤も、それに気を良くした葛城が明らかに度を越えた接触をして、斑鳩に諫められる場面も多々あるのだが。スキンシップと称して理の胸を揉むなど、正直どうかと思います。

その後しばらく飛鳥のちよつかいは続き、理の前髪を捲って右眼の下にセクシーな泣き黒子が有るのを発見して漸く満足するのだった。少し前までの彼女が発していた陰鬱な雰囲気は消え去り、心なしか肌も艶々としている。

しかしそれでも、膝上の理に視線を落とすと、やはり飛鳥の纏う雰囲気影が落ちていく。

「……………最近の結城くんは——ううん、皆は、私を避けているよね。どうしてかは分からないけど……………」

飛鳥の言う通り、ここ数日の忍学科の面々は彼女を遠からず避けていた。それは無論、『柳生と雲雀の影』の出現で明かされた、何者かによる彼女への影響・洗脳が原因である。

理達はそれを、飛鳥にだけ話していない。斑鳩達は信じたくなかったのだ。例え洗脳されようとも、自分達を襲ったのが仲間である飛鳥などと。理自身もこの件に関しては口を噤んでいる。

下手に彼女達の関係を悪化させて、戦闘時に連携が取れないような

事でもあれば本末転倒だ。その為少なくとも、次の大型シャドウを討伐するまでは飛鳥にこの件を伝ええないという事になっていた。それ故に、彼女達の関係はギクシャクしてしまっている。

「……大丈夫、分かっているよ。結城くんも皆も、私に気を使っているんでしょ?」

……人の心情に聡い飛鳥が、それに気付くと分かっていたもだ――

「そんな私を補う為に、皆が皆、凄く頑張っている……。だから結城くんも、こんなになるまで頑張っちゃうんだから」

そう言って飛鳥は、苦笑交じりに再び理の頭を撫でる。男とは思えない程のさらさらとした髪質感に僅かに嫉妬しながら、ここ数日の彼の様子を思い返す。

自身も含めた忍学科の面々との試合。ペルソナ能力者同士での戦い故か、以前までの様に負け越すことも少なくなってきた。

新しい忍法の習得。幾つかの実践的な忍法を習得し、戦闘時の手札がさらに増えたら嬉しい。

ペルソナ能力の新たな使い方。以前から考えていたというペルソナの武器化は参考になりそうな能力を発見し、習得の目処が立ったそうだ。

予てから目標としている忍転身。その有様はご覧の通りだが、理は必ずやこの忍法をモノにするだろうと飛鳥は確信している。

それら結城理の努力の賜物は今、飛鳥の目の前でカタチになろうとしている。だからこそ――

「だから私わたし／私わたしは、キミに／あなたを、**■**して**■**しているだよ／**■**して
おります――」

そう呟く飛鳥は――否、飛鳥と思しき存在は、蠱惑的な表情を浮かべ理を見下ろしている。

何時の間にかその瞳は人外のソレである金色へと変わり、しかしシャドウのくすんだ金色とも違う輝きを秘めた、満月の様な黄金の瞳だ。

白銀の月を思わせる理の銀灰色の瞳と対となる様なその瞳は彼へ

と注がれ、並ならぬ執着を見せている。

それは決して、彼らの知る飛鳥という少女ではなかった。この存在こそが、斑鳩達を襲い、シャドウを暴走させる『影抜き』を行った襲撃犯なのだ。

「私／私は、ずっと傍で見ているよ／見ていました。キミ／あなたの努力の姿を」

二人の、或いは一人と何者かの声 mixes、重なり、穏やかに眠る理へと降り注ぐ。その声に含まれる感情こそ悪意ではないものの、度し難いまでの激情が籠められているのは確かだった。

しかし、そういうった感情を敏感に感じ取る《心眼》を持つ筈の理は、眼を開ける事は無い。だが、それは当然だ。その声は結城理／■ ■ ■ にとって、異物などではないのだから。

飛鳥は——いや、得体の知れぬ誰かは、更に言葉を紡ぐ。其処にはもう、飛鳥の意思は残っていないかった。

「■ ■ ■ しています、■ ■ ■ 様。『永劫』に——」



時は、待たない。すべてを等しく、終わりへと運んでゆく——

結城理／■ ■ ■ が何時か聴いたその言葉通りに、時間は止まることなく進んでいく。時は有限であり、その事實は残酷なまでに重圧と なって彼らへと押し掛かるのだ。

準備は万端だろうか。不足は存在しないだろうか。そんな誰もが当たり前のように抱く悩みも、彼らにとっては『死』という終わりへと直結する蝕みと成り得る。

だからこそ、この《デジャヴユの少年》は有用であり、同時に絶望への指針ともなる。この光景デジャヴユを見るといふ事は、否応が無しに大型シャドウの到来を知らせるのだから。

『やあ、君 ■ ■ ■ 屋の ■ ■ ■ で出会 ■ ■ ■ のは初め ■ ■ ■ だね。で ■ ■ ■ 今 ■ ■ ■ つくり ■ ■ ■ して ■ ■ ■ ない』

■ ■ ■ は、タ ■ ■ ■ 口 ■ ■ ■ の中で囚人服の少年と相對する。しかしらし

くも無く、その声色は何処か焦りを含ませていた。

『■夜■にやつ■■る試練は、■うも〴〵じ■■いみ■■だ。と
に■く急い■ほう■■いよ……』

なるほど、少年の警告は最もだ。何故ならば――

「……一度に〴〵2体〴〵もお出ましか、少しばかり反則じゃあないかな
?」

時刻は、6月8日、影時間。『満月』――

理達が強大な反応を感知した地点、半蔵学院校門前で相對するのは、〴〵2体〴〵の大型シャドウだ。

母性を示す丸い体躯に煌びやかな羽根飾りを付け、その手に魔杖を構えた、薄紅色の仮面を付けたシャドウ、『女帝^{エンプレス}』。

ひよろりと長い鋼鉄の身体に騎士然とした装飾を付け、その手に大剣を携えた、王冠を模した仮面を付けたシャドウ、『皇帝^{エンペラー}』。

この2体のシャドウこそが、今夜彼らが打ち倒すべき敵、『試練』なのであった。

しかし彼らは、臆することなく2体のシャドウを睨みつける。

「2体同時とは少々予想外でしたが、わたくし達が行う事は変わりありません」

「そーだな、兎に角こいつ等をブツ飛ばせばいいだけだぜ！」

「相手が何者であろうと、雲雀には指一本触れさせん！」

「ひばりだって役に立ってるんだからっ！ 後方支援は任せてねっ♪」

「じゃあ……行くよっ、みんなっ！」

「……ああ」

飛鳥達は各々の武器を構え、2体のシャドウに向けて宣言する。己の覚悟を示す、その誓いを――

「」「正義の為に、舞い忍ぶ！」「」

「……」

……理を除いてだが。

「……気になってただけけど、その口上？ って、俺も言ったほうが良いのっ？」

「あく……これは私達半蔵学院特有の前口上みたいなものだから、別

に結城くんが言っても構わないと思うけど……」

「俺は忍じゃないから、『舞い忍ぶ』ってのはどうもね……」

後、正義云々も自分には似合わないと思は思う。ハッキリ言って、彼女達のように『正義』を掲げてシャドウ討伐を行うなど、思った試しもないのだから。

「……まあ、そっちはどうでもいいか。取り敢えずは、コイツ等を倒してからにするさ」

そして何時もの様に、どうでもいいと思放棄し、意識を戦局面へと切り替えるのだった。



「雲雀、解析！」

「りょーかいっ！ イナバつ、《解析魔法》！」

戦闘開始と共に、理は雲雀へと《アナライズ》のスキルを使用するよう指示を出す。雲雀の『イナバシロウサギ』は、彼らの中で唯一解析系のスキルを習得しているのだ。しかし、敵能力の解析にはある程度の時間が掛かる。ならば――

「柳生、攪乱！」

「ああ！ オトヒメ、《フォッグブレス》！」

敵のステータスを下げる、バッドステータスを付与する、といったスキルを有している柳生の『オトヒメ』により、『女帝』と『皇帝』を一時的に攪乱する。《フォッグブレス》は、相手の命中率・回避率を大幅に下げるスキルだ。

朦々と立ち込める黄土色の霧により、二体の大型シャドウはその体を覆われる。普通ならば理達にさえその姿を視認する事は困難になつてしまう筈だが、それすらも雲雀の『イナバシロウサギ』は解消していた。

精神感応にも優れた力を持つ『イナバシロウサギ』により、相手の位置や弱点部位などを把握するだけでなく、それを他者に伝える事を可能としたのだ。所謂、テレパシーというモノである。彼ら全員が己

の視界だけでなく、『イナバシロウサギ』を通して伝えられるシャドウの反応を知覚していた。

尤も、そう言った能力の代償か、『イナバシロウサギ』は直接的な戦闘能力に乏しい。解析能力以外では、『回復魔法』『電撃魔法』『打撃物理』といったスキルを習得しているが、如何せん『運』以外のステータスが低いのだ。

また、弱点属性も『氷結魔法』と『バッドステータス攻撃』の二種を持つ。前者は兎に角、後者は『イナバシロウサギ』が、神話において八十神やそがみに騙され傷を悪化させた稲羽之素菟いなばのしろうさぎを反映しているが故なのかもしれない。

無論、シャドウ達も黙ってやられている訳ではない。

『■■■■ーーッ！』

「っ、《広域疾風魔法》が来る、全員退避！」

理は『女帝』による魔法スキルの発動を察知し、全員を下がらせる。次の瞬間、その丸い体躯から暴風が放たれ、辺りに立ち込めていた《フォッグブレス》を吹き飛ばしたのだった。そしてそれは、『女帝』の隙となる。

「よっしや、頂きー！」

「ちよ、葛城さん!?!」

それを好機と見た葛城が先走り、斑鳩による静止の声が掛かるが彼女はそれを無視する。『疾風耐性』を持つペルソナ『ティアマト』だけに、『マハガル』による暴威を無視しながら突っ込む心算のようだ。こちら辺は、戦闘狂である彼女の悪癖と言えよう。

「だらっしやあッ——あれ？」

当然、そんな単調な攻撃が通用する筈も無く、葛城の蹴撃は『皇帝』の剣によって受け止められていたのだった。『皇帝』はそのまま大きく剣を振り払い、葛城を吹き飛ばす。

とはいえ、流石に身体能力に優れた忍だ。難無く着地し、大したダメージこそ無い。だが、勝手な単独行動を斑鳩に咎められるのだった。当然である。

「全く……次は有りませんよ、葛城さん」

「いや、ワルいワルい。ただ、あのヒョロい奴に攻撃した時によ、手応えを感じなかつたんだ。多分、物理攻撃は通りにくい——いや、全く効かねえな」

しかし、葛城は葛城でタダでは転ばないらしい。こういった弱点を見抜くことは、対シャドウ戦において重要なものだから。

「……『皇帝』は物理無効か。なら、『女帝』はどうだ？」

葛城の言葉を聞いた理は、その手に《氷結魔法》を創り出し、『女帝』ではなく『皇帝』に向けて射出する。そして彼の予想通り、その《ブフ》を『女帝』は庇うのであった。当然、ダメージは無い。

これまでの事で解るのは、『皇帝』は物理攻撃を無効化し、『女帝』は魔法攻撃を無効化する。そしてこの二体は、互いを補い合う様にコンビネーションを取るのだ。今まで一体ずつしか襲撃してこなかった大型シャドウとは違い、非常に組し難い相手といえるだろう。

「解析できたよっ！ 『女帝』の弱点は物理攻撃で、魔法は無効化されちゃう。『皇帝』はその逆で、物理無効で魔法弱点っ！」

「……予想通りだね」

その考察を後押しするように、雲雀の『イナバシロウサギ』の《アライズ》による解析が終了し、その結果を理達に伝えるのだった。

しかし、シャドウとしてはそのステータスはやや歪だと言わざるを得ない。物理攻撃が弱点とは、『打撃』『斬撃』『貫通』と三つの属性が弱点となり、魔法ならば『火炎』『疾風』『氷結』『電撃』の四つもが弱点となる。

この弱点の多さは明らかに可笑しく、其処にこのシャドウの特性・特殊能力が関係するのだろう。手を出さずに様子を見るべきか、一気に決めるべきか、理は悩む。しかし状況は待つてくれない様だ。

『——■■■■ツー』

二体のシャドウは、それぞれ謎のスキルを行使する。身体から飛び出た虹色に輝くエレメントが宙に舞い、混じり合い、再構成され、再びその身体にへと取り込まれる。新たなエレメントを取り込んだ『女帝』と『皇帝』は、その雰囲気を一変させるのだった。

「……これはッ!？」

『気を■ける……、こ■から攻撃■通ら■い』

《デジャヴユの少年》は警告する。このスキルこそが、『女帝』と『皇帝』の持つ特殊能力であることを！

「チツ、何か解らないが喰らえッ！」

その雰囲気には圧され、仕込み傘から墨クナイこと《氷結弾》を発射した柳生だが、次の瞬間には彼ら全員に驚愕の表情が彩られる。

「んな?! 効かねえぞ! あのだカブツは魔法が弱点の筈だよな!？」

葛城の言葉は全員の心情を代弁していた。彼女の言う通り、『女帝』と『皇帝』は《氷結弾》が命中したにも拘らず何のダメージも負った様子が無いのだ。魔法を無効化する『女帝』は兎も角、『皇帝』までもだ。

それこそが、『女帝』と『皇帝』が持つ固有スキル《パラダイムシフト》だった。変革、革命を表す意味の名を持つこのスキルは、自身の耐性、スキルを変化させるスキルであり、用は理の『ペルソナチェンジ』の互換と言える。

「耐性を変化させるスキルか……雲雀、もう一度《アナライズ》を」

「う、うん。時間はかかるけど、イナバっ、もういつかいお願いっ——
——えっ!？」

改めて弱点を解析する為に、『イナバシロウサギ』を召喚しようと動きを止めた雲雀を狙う様にして、二体の大型シャドウが同時に襲い掛かってくる。雲雀が自身らの弱点を把握できるスキルを持っていることを理解し、まずは彼女を潰すことにしようだ。

突然の事に雲雀は対処が遅れ、その場に硬直してしまった。この臆病さもまた、彼女の弱点だろう。だが、それらの弱点を晒していたとしても、彼女の隣には全幅の信頼を寄せる最高の仲間達が居る。特に柳生などは言うまでも無く、彼女を守り通すのだから。

「雲雀ッ！」

「きやあっ! あっ、助かったよ柳生ちゃんっ♪ ありがとうっ！」

「当然だ、雲雀を傷つけるものは、このオレが許さない！」

『女帝』と『皇帝』の攻撃から身を躲すために、柳生は雲雀を抱えて跳躍したのだ。溺愛する雲雀を脇に抱えていながらも声を荒げてい

る辺り、かなりご立腹らしい。

「許さんぞ貴様ら！ このオレの力で成敗して——」

「いや、柳生はそのまま雲雀の護衛だ。雲雀は常にあいつ等を《アナライズ》して、逐一その結果を報告してくれ」

「……分かった」

理の指示に、柳生は不承不承といった感じで渋々と了承する。雲雀を傷付けかけたシャドウ達に怒り心頭なのは理解するが、元より現場の指示は彼に任されており、その指示の意味を理解出来ない程柳生は愚かではない。

この二体のシャドウ相手では後方支援に徹する事が最善なのだ、柳生も雲雀も理解できたのだった。

「雲雀と柳生は、支援魔法と解析に徹しつつ後方支援。斑鳩先輩と葛城は『皇帝』の相手。俺と飛鳥は『女帝』だ。兎に角この二体を引き離すぞ」

理は簡素で短く、しかし的確な命令を傳達する。なお、軽口を言っているようにも聞こえるが、今の彼は『皇帝』の大剣を自身の装備である両手剣で受け止めながら指示を出しているという、結構切羽詰った状況でもある。

指示を出された斑鳩は理を救出しようとするが、今の彼女は飛鳥と共に『女帝』を相手取っている為身動きが取れずにいた。それでも慌てず騒がず、それでいて速やかに理の作戦に意見する。

「一応、わたくしと葛城さんが『皇帝』の相手をする理由を聞いても？」
「『皇帝』は見るからに物理特化のスキルを持っているので、打たれ強い葛城を前衛にして斑鳩先輩が後衛で戦って下さい」
「アタイに肉壁になれと?!」

葛城は理の指示に憤慨しつつ、斑鳩が変わって『皇帝』の身体を蹴つとばして彼を救出する。当然ダメージは無いが、取り敢えず『皇帝』と『女帝』を引き離すことには成功した。コンビネーションを取る相手ならば、それを崩すというのが定石である。そして、理の指示はまだ続く。

「……あと、葛城の暴走を抑える役目も有りますので。……さっきの

醜態を忘れたとは言わせないよ、葛城」

「お、おう……う？」

そこで理は葛城をじろりと睨みつける。元々が容姿端麗な少年に睨みつけられるのはかなり迫力が有った。葛城はその銀灰色の瞳に睨まれた事により、背筋に冷たいモノが流れる。そしてそのゾクゾクがちよつと気持ちよかった。

まあ兎に角、彼の言い分は当然であった。彼女の先行行動は褒められたモノではなく、失敗すれば即座に死に直結する危険な行為なのだ。

理は葛城への戒めの意味も込めて、怒気を交えつつ忠告する。

「もしもまたキミが暴走して、万一シャドウにやられるっていうのなら——その前に俺がキミを倒すからね」

「い、イエツサアーツ！」

その凄まじい雰囲気には圧倒され、思わず葛城は軍隊式の敬礼で呼応した。キツイ物言いのその言葉は以前柳生にも語ったモノであるが、見方を変えれば心配の言葉でも有る為、葛城にも憤りは無い。というよりむしろ——

((愛が重いなあ……))

相手に倒されるくらいなら自分がやる、と言っている訳で、言葉こそ過激だがそれは彼が持つ忍学科への好意の裏返しに過ぎない。それもまた彼なりの仲間意識の表れなのだろう。良く言えば過保護、悪く言えばヤンデレという奴だ。実際、彼女達はそんなに悪い気がしないでいた。

そんな馬鹿げた話をしていううちに、雲雀による《アナライズ》の解析が終了したようだ。

「解析完了っ！ 今の『女帝』と『皇帝』の弱点は——」

「……話は此処までか。——じゃあ、行くぞツ！」

「「うんっ！ (ああっ！) (ええっ！)」」

彼らは戦う。その胸に抱くのは死と敗北の絶望ではなく、生きて勝利へと繋げる希望であるのだから——！

「行くよっ！ 斑鳩さん、かつ姉っ！」

『皇帝』との戦闘、それに決着が付こうとしていた。飛鳥の叫びと共に、その前方の地面が隆起する。彼女が『柳生と雲雀の影』との戦闘で獲得したスキル《地^マ変^グ魔法^ナ》による効果だ。

隆起した地面、ここ半蔵学院の校門に敷き詰められているタイルが捲り上げられ、其処から鋭い岩が飛び出してくる。その鋭岩が『皇帝』の身体を刺し貫き、その場に縫い付けるのだった。

驚くべきことに、飛鳥が操る『地変魔法』は《パラダイムシフト》によって変化した筈の『女帝』と『皇帝』の耐性を一切受け付けなかった。その為、相性関係無く攻撃できる飛鳥が斑鳩・葛城の後衛に付き、その支援を行っていた。

今、『皇帝』の動きを止めた《マグナ》がそうだ。

「ナイスだ飛鳥！ 止めは斑鳩に譲るぜ！ ティアマト、
《攻撃強化》アッ！」

「任せて下さい！ この一撃で切り裂きます、ヴィゾヴニル！」

召喚された斑鳩のペルソナ『ヴィゾヴニル』は、影時間の空に浮かぶ妖しい満月を背に、その刀を構える。

「《月影》ッ!!!」

月の光と陰りを帯びた刀身は、『皇帝』の身体を左腹部から真っ二つに切り裂く！ 一瞬のち、その身体は闇に溶ける様にして消え去るのであった。

「——これで、ラストオッツ!!!」

そしてほぼ同時に、『女帝』へと突貫する理の叫び声が轟く。召喚された『オルフェウス』の《突撃》によって凄まじい勢いで吹き飛ばされている為、傍目にはその姿を捉える事など出来はしないだろう。

両手剣を脇構えに携え、狙うは弱点たる首の付け根部分。そして、すれ違いざまに一閃——！ 『女帝』の首が呆気なく吹き飛び、その巨体は力を失って膝を付く。やがてその身体も、闇となって霧散するのだった。

そして辺りは静寂に包まれる。誰もが二体の大型シャドウを討伐したという達成感に身を任せ、その余韻に浸っている。理も地面に腰を降ろし、息を整えながらその時を待っていたのだった。

やがて、彼の傍で舞い踊る様に、二匹の『蝶』が現れる。理の下へと目指すようにして飛んできたそれらは、彼の差し出した掌に降り立つと、その手に浸み込むようにして消え去ってしまった。

それに驚いた様子も無い理は二匹の『蝶』が消えてしまった己の掌を見つめ、その存在を確かめる様に指を開閉する。そして自身の中に、新たに二つのアルカナを誕生を感じる。

ふと、ぽつりと呟く。

「……やっぱり、コレは——」

……しかし、誰にも聞かれない筈であったその呟きを、聞く者が居る——

「……………」

「……飛鳥？」

理の傍に立っていたのは、飛鳥。それに理は違和感を覚える。彼女は未だ慣れないペルソナ——と思しき——のスキルを使って疲弊していた筈であり、動けないとまでは行かずとも、ある程度の休息が必要な筈なのだ。

なのに今の飛鳥は、虚ろな目をした無表情で理を見下ろしており、その視線は『蝶』が消えてしまった彼の掌に向けられていた。理の想像が正しければ、彼以外には見えない筈のその『蝶』を追う様にして。その視線の意味に、結城理／■■■は危機感を覚えるのだった。

「……飛鳥、キミは——」

「……………これで、四つ」

「ッ?!」

突如として飛鳥——否、何者かの口から呟かれた言葉に理は戦慄し、その場から飛び退いて距離を取る。その様子に只ならぬモノを察した斑鳩達も、漸く飛鳥が纏う雰囲気の違いに気付くのだった。

「飛鳥さんっ?! まさか——」

「ちよっ、例の操られてるってヤツか?!」

「く、こんな時に……！」

「待ってっ！　まずはひばりが解析するよっ！」

斑鳩達は飛鳥の変貌が例の謎の存在による干渉だと判断し、まずは雲雀による《アナライズ》を試みるのだった。

しかし飛鳥——弁座上そう呼ぶことにする——は、そんな彼女達を嘲笑うかのように、攻撃を仕掛ける。斑鳩の剣閃よりも、葛城の蹴撃よりも、柳生の氷結弾よりも、雲雀の解析よりも、なお早くだ。

一瞬にして斑鳩達四人に肉薄した飛鳥は、彼女達を攻撃する。今や得体の知れぬ邪気を纏い変貌してしまった飛鳥の二刀、その妖しき刃の名は——

「……《ムラマサコピ》」

それはかつて、徳川幕府に数多の死と仇あだを呼び込んだ妖刀村正を——
否、その刀を討つべく為に打たれた、不吉と呪詛を絶つ刀、霧螺魔叉ムラマサを原典とするスキル。

飛鳥がこのスキルを使えるのは、その血筋ゆえだ。元々村正を担ったのは、かの偉大なる忍『服部半蔵』であり、おそらく祖父・半蔵にも飛鳥にもその血脈が受け継がれているのだから。

やがて霧螺魔叉は大正時代にとある一人の青年の手に渡り、彼の愛刀として振るわれる事となる。もしかしたらその彼と活躍した時代の近い半蔵は交流などが有ったのかもしれない。

そして、その忌まわしき妖刀が持つ能力は——

「ガハッ!?　これ、は……、身体が……っ！」

「何だよコレ……！　忍法が、使えねえ……！」

「ぐっ、忍法だけじゃない……ペルソナもだ！」

「そんな……これじゃあ、戦えないよお……！」

『忍法の封印』及び『ペルソナ能力の封印』、それが《ムラマサコピ》の持つ能力だ。忍達は本来、例えば刀で一太刀浴びたところで戦闘不能などになりはしない。

だがこの攻撃で忍法とペルソナが【封印】状態になったことにより、身体能力の低下、影時間の負担が襲い掛かり、彼女達は本来の年相応程度、或いはそれ以下の力しか発揮できなくなった。無論、戦闘など

もつてのほかである。

(……コイツの目的は俺だけか。その為に彼女達の能力を【封印】した)

しかし、飛鳥はそれ以降斑鳩達を追撃する様子が無く、冷たい眼で彼女体を一瞥した後、理の方へと身体を向けるのだった。

理は眉根を寄せる。今の飛鳥はその二刀を構えてすらいない。ただでさえ彼女に剣を向けるという事に気が進まないというのに、戦闘態勢を取らない相手ならばなおさらだ。

そのようにして攻めあぐねている理に対し、飛鳥は口を開くのだった。

「……結城、くん」

「っ、飛鳥!?! 意識が——」

口から漏れたその言葉は、洗脳などではない飛鳥自身の言葉だった。よもやあの存在を抑え込むことに成功したのかと思い、彼女に問い掛けるのだが——

「……わた、しを——止めてえッ!」

「なッ!?!」

次の瞬間、飛鳥の身体から悍ましい量の黒い泥、シャドウが溢れ出し、彼女を飲み込んでいく。この現象は、言うまでも無くシャドウの暴走だ。しかし飛鳥のソレは、今まで斑鳩達が引き起こしてきた暴走とは毛色の違うモノであった。

何より、斑鳩達は暴走によって己の影シャドウを顕現させたが、飛鳥の暴走はシャドウが現れていない。寧ろ、彼女の肉体そのものがシャドウと化してしまっている。今の彼女は、心の内より湧き上がるシャドウに飲み込まれてしまったのだ。

己のシャドウに喰らわれるというその現象の名は、『シャドウクライ』。

『我は影……、影——』

そして生まれたシャドウは、それは醜悪な姿だった。

圧倒的な巨体を誇る、腹這いになった真っ黒な身体をした醜い蟾蜍ヒキガエル。真っ赤に光る双眸はギョロギョロと忙しく蠢き、此方を見

据えてさえいるのかも不明だ。

大きく避けた口からは悪臭を放つ涎が滴り、床面を融かしていた。だらしなくはみ出した舌も粘液に濡れており、鞭のように振るわれるそれには注意が必要だろう。

そしてその背部からは、本体と思しき人間型の上半身が生えている。漆黒の身体をしていても、その豊満なラインは見覚えが有り、飛鳥の肉体を模している様だ。

しかしその両腕は、彼女の愛刀・柳緑花紅が取り込まれて同化してしまっている。それでもなお禍々しい邪気を放っている辺り、《ムラマサコピー》の能力は失われていないのだろう。

何よりも特徴的なのが、首から上が切断され断面からは紅い血が霞の様に漂い、彼女のトレードマークであったスカーフを模している、その無貌であった――

今まで見てきたどのシャドウよりも醜悪な姿をした『飛鳥の影』――いや、彼女自身がシャドウとなってしまうたが故に、その呼び方は正しくない。

一人の人間から乖離し、その影になるという、あやふやな存在ではない一つの在り方。それをあえて名付けるとすれば、『シャドウ飛鳥』と呼ぶのが適切であろうか。

そして理は『シャドウ飛鳥』の姿を見て、とある出来事を思い返していた。

かつて飛鳥と行った『秘伝動物召喚』の修行の際、彼女は自分がどのようなペルソナを召喚するのだろうかという疑問を持ったのだ。

彼女達忍がペルソナ能力に目覚めた際、秘伝動物に近い姿を取るのはいずれまでの経験で把握済みである。その為飛鳥がペルソナ能力に目覚めたときは、そのペルソナは蛙の姿を取るのだろうかという話し合っていた。

古今東西において蛙は、幸運や金運をもたらす縁起物とされ、多産や不老不死を象徴する、生と死の領域に近いところに生きる動物だとされてきた。神話でも、エジプト神話の『ヘケト』や、日本神話の『多邇具久』として信仰され名を残す様に、人と蛙は密接な関係にあつ

たのである。

だが、今日の前に居る『シャドウ飛鳥』は、それらとは全く違う禍々しきを感じさせる。それはさながら——

「……ツアトウグア、か？」

とある神話に名を残す、邪神の姿そのものであると、理は評したのだった。

『ア、アア——ゆう、き……く……』

「く……、飛鳥、今助け——」

そして、遂に戦闘は開始される。『シャドウ飛鳥』は《真影結界》を展開し、飛鳥という少女の心象世界を開示する。

しかしその風景は、普段と変わらぬ——赤黒い縞模様の空はそのままだが——半蔵学院という光景であり、それだけ彼女がこの場所を大切に思っているという証でもあった。

だが、だからこそ彼らは思う。この様に優しく、強い心を持つ飛鳥が、そう易々と己のシャドウに飲み込まれるのだろうか。この暴走は果たして、本当に飛鳥の心の弱さが招いたモノなのかと。

彼らの想像は、決して間違っていないかった——

『わ……私は、結城くんの事が、ずっと妬ましかった／憧れていた——』

「……え？」

『シャドウ飛鳥』の口から漏れる二つに重なる声。それはどちらも飛鳥のモノであるが、語られる内容は真逆だ。唐突な独白に理も意表を突かれてしまった。

しかしこの言動によつて、理はこのシャドウがどういった存在であるのかを察するのであった。

『妬んで／憧れて、畏れて／羨ましくて——だから私は、アナタを殺し、違うッ！ 私はああああああアアアツツツッ
!!!?』

「ッ、そういうことか！」

つまりこの現象は、他者からの干渉による強制的な暴走。かつて飛

鳥が『地変魔法』を覚醒させた時と同じなのだった。

そして、彼女が暴走させられた感情とは——

『大好き／大嫌いだよ、結城くん——』
これまでずっと、飛鳥が理shadoに抱cryいていた『愛憎』。
心の内に潜めてきた、陰なる痛みなのだった——

26話 覚悟と向き合う

……そう、今だから解る。私が彼に初めて抱いた明確な感情とは、『嫉妬』だったのだろうか——

あの運命の日、シャドウに襲われて命の危機に陥った私は、あの人——結城くんと出会い、助けられた。

そして、シャドウを圧倒的な力で以て迎撃し、蹂躪し、殺戮し、この私の命を救ってくれたのだ。それはまるで出来すぎた御伽噺であり、英雄譚であり、しかし間違いなく現実だった。

だから私は、あのペルソナという能力に憧れた。その力を使う彼の存在を理想にした。……結城理という少年に、■をした。——それらの淡い想いが反転するまでに、時間は掛からなかったのだが。

それは私が、飛鳥という忍が、落ちこぼれであったからだ。

『半蔵』という伝説の忍を祖父に持ちながらも、忍学科での私の成績はあまりパツとしない。訓練では何時も合格ラインギリギリであり、秘伝動物の召喚は上手く行かず、座学時には居眠りする始末だ。……うん、最後のは自分の不摂生が原因だよね。

対して、結城理という少年はどうであろう。ペルソナという忍法にも引けを取らない異能を持ち、それを十全に扱い、更には学業でもトップクラスである。面と向かつては言えないだろうが、容姿も端麗だ。……私好みに。

それは正に、完璧超人というに相応しいではないか。

だからこそ、落ちこぼれである自分とは何から何まで正反対なあの少年に、私は『嫉妬』をしたのだ。……それがみつともない勘違いであることを、すぐさま私は思い知っただけだね。

そうして結城くんと再開し、紆余曲折を経て、共同生活をする事になった。彼の事をもっと知る事が出来たのは僥倖だった。

そこで解ったのは、結城くんは決して完璧な存在などでない、かと言って普通でもない、ちよつと変わった男の子だったという事だ。

半蔵学院に来るまでは悲惨な人生を送っており、勉強が出来るのは劣悪な環境の所為であり、ペルソナという能力が目覚めたのにも何か

しらの理由が有りそうだった。

一方で、物欲や金銭欲に乏しいため仲間全員で趣味を作るようにと取り計らったり、作ってくれるご飯が美味しくてついついお代わりしちゃったり、ちよつとえつちなハプニングが有っても興味が無さそうでヘコむ羽目になったり。

……まあ、そんな風に何だかんだあつて、私達はお互いに歩み寄る事が出来たのだと思う。そうして私達は、私は、彼に惹かれていったのだ——



『———《中級地変魔法》！』

「ぐっ！」

結城理と『シャドウ飛鳥』との戦況は、殆ど一方的であつた。それは無論、『シャドウ飛鳥』が優勢という事だ。

『シャドウ飛鳥』というシャドウは、飛鳥本人を取り込んで構成された存在だ。下手に攻撃しようものなら、そのダメージが飛鳥に及ぶことは想像に難くない。最悪、そのまま死ぬ事に——

(そんな事、俺には出来な———っ?!)

『《広域地変魔法》！』

『シャドウ飛鳥』による《マグナス》、《マハマグナ》と、二種の『地変魔法』が理を襲う。大地を支配する魔法により隆起した地面が岩となり、鈍器となって彼へと迫る。

理はそれを持ち前の瞬発力によって、左右へと、或いは後方へと何とか回避するが、間髪入れず『シャドウ飛鳥』は追撃を掛ける。

『大地よ穿て！———《尖锐奇岩》———ッ！』

「ッ、地面が———」

続けざまに発動したのは、さらに上位の『地変魔法』。先の二つのスキルよりも広範囲・高威力に及ぶ魔法スキルであり、鋭く尖った岩が彼を刺し貫くようにして、地面から盛り上がった。それを回避する為に、今度は空中へと飛び上がるが———

「結城さんッ！ 前です！」

戦況を離れて見ている斑鳩から怒号が響く。彼女の言う通り、空中へと逃げた理を狙い定める様に、『シャドウ飛鳥』が此方に飛び掛かってきたのだ。その手に、妖しき刃を携えて。

このミスは、主に地面から襲い掛かる『地変魔法』に注目し続け、『シャドウ飛鳥』自身への警戒を怠ったツケだった。

『喰らえッ！ 《ムラマサコピー》ッ！』

理の下へと《ムラマサコピー》の刃は迫る。今の彼にそれを回避する術が――

「――はあッ！」

『何ッ!?!』

――実は、存在するのだ。理は何も無い筈の空中を踏みしめ、更に後方へと跳躍する。それによって《ムラマサコピー》は回避できたが、着地しようとしている地面もまた《尖鋭奇岩》によって針山状態となっていた。

だが、何と彼はその針の先端部に着地する。さながら水面に立つ聖者であるかのように。よくよく見れば、今の彼の足元に纏うMAGをマグネタイト認識できるであろう。そのスキルの正体をこの場に居る誰もが知っていた。

『……《チャクラの具足》、そういえば習得していたね』
「……………」

ここ一週間の間に理が新たに習得した忍法、それが歩法スキル《チャクラの具足》であった。足の裏にMAGを収束することで、あらゆる場所を走破する事を可能とするスキルであり、忍達はこれを使用して空中歩行や壁走り、水上歩行を行う。

理は先程これを使用して、空中での跳躍と針の上に立つという御業を起こしていたのだ。なお、本来はこのスキルをさらに極めることによって、空中戦闘スキル《飛翔乱舞》へと昇華させるのだが、今の彼ではまだその域には達していなかった。

しかし今の場合は、そのある程度の技でも有用であった。『地変魔法』はその攻撃力もそうだが、地面の操作による地形破壊という副産

物も厄介だからだ。もしも《チャクラの具足》というスキルが無ければ、この足場の悪さによつてすぐさま敗北していただろう。

『だけど、それが何だつていうの？ 結局キミは、私に攻撃できないのに』

「……っ」

『シャドウ飛鳥』のその挑発に、理は苦しそうな表情を浮かべながら漸く武器を構える。……尤も、やはり身が入っていない様であったが。

理は結局どう足掻こうとも、『シャドウ飛鳥』と戦わなくてはならないのだ。戦わなくては、飛鳥を救えない。自分が死ねば、飛鳥は助からない。

そんな血を吐くほどの激情を押さえ付けて、理は武器を握る。その顔は、全くの無表情だった。

『ふうん、やっと戦う気になったの？ でも、そんな覚悟で私を倒せるのかな？』

「……」

そんな『シャドウ飛鳥』の言葉に応える事も無く、ガンホルダーから召喚器を引き抜き、銃口をこめかみに押し当てる。

……そう、所詮この能力はこうして戦う事にしか使えない力なのだ。力により、暴威により、害意により、相手を傷付け、捻じ伏せ、そして■すしかできない愚かな能力。あの時と同じように——

そんな思考と共に、理の頭の中はドンドンと冷えていく。目の前に居るアイツを、ただ■すのみへと思考が拠っていく。勿論彼には、これが良くない兆候だと理解出来る。

傷つけたくないのに傷付けなくてはならない。倒したくないのに倒さねばならない。■したくないのに■さなければ——理はそこで、強制的に思考を打ち切る。荒れ狂いそうな心を無理矢理沈めながら、銃爪ひきがねに指を掛ける。

「……ペルソナ——」

頭蓋を打ち抜く衝撃と共に、意識が完全に切り替わる。今の彼は、目の前の敵を斃すだけの戦士となる。

——嗚呼、結城理よ。過去の『罪』という理コトワリに囚われた、愚かなる幽鬼ユウキよ。願たまわくばその魂たましいに、どうか安らぎを——



「……ぐっ、駄目ですか。このままわたくし達、見ているだけしか出来ないなんてッ！」

理が意識を切り替え、『シャドウ飛鳥』との戦闘に入る頃、斑鳩達は相変わらず見ているだけしか出来ないでいた。

どんなに力を込めても、その身体は年相応の少女程度の筋力しか発揮できず、扱う事に漸く慣れ始めてきたペルソナも使うことは出来ない。

その姿の何て無様であることか。ペルソナや忍法を使えなければ自分達が只の少女であることを、こんな形で知りたくなど無かった。

「おいヤベエぞ!? 結城の雰囲気が変わった、アイツマジでヤル気だ！」

「チツ、現状ではそれしか手が無いとはいえ、どうなるか分かったものじゃないぞ。飛鳥も、結城もだ……っ！」

同じく忍法が使えないことに歯噛みしている葛城と柳生だが、理が意識を切り替えて戦闘態勢に入った事には流石に狼狽する。それは主に、二人が戦う事によって双方が傷付く事にだ。それも、精神的である。

特に、理がこの手に関しては非常に繊細であることを誰もが理解している。普段から凶太い精神性を有している彼であるが、それは知人や仲間と言った近しい『絆』に依存しているモノだ。幼い頃に家族を喪い、それ以外の親類も悪意に満ちた者しかいなかった理にとって、この半蔵学院忍学科で得た『絆』は何物よりも代え難いモノなのだから。

無論、肉体的な損傷、最悪死ぬ事も問題なのだが、生き残っても彼らの心が傷付き、折れてしまえばどっちにしたって同じだ。だからこそ彼女達は、この重い身体を恨めしく思うのだが——

「……皆、落ち着いて」

「雲雀？」

それに待ったをかけるのは、蹲って目を伏せている雲雀であった。もしや自分達以上に体調が悪化しているのかと思いい、柳生が駆け寄るが、其処で雲雀は伏せていた顔を上げる。其処にあったのは彼女の異能、爛々と輝く《華眼》^{かがん}であった。

「今、ひばり達の忍法とペルソナ能力は【封印】されている。……けど、完全じゃないから、もう少しすれば解除されるよっ！」

雲雀の《華眼》は心を映す。即ち、ペルソナのステータスなども観る事が出来るのだ。『眼』という肉体そのものに宿るこの力だけは、《ムラマサコピー》による【封印】の状態異常に掛からなかったらしい。しかし、今はそのあと少しという時間さえもどかしいのだ。彼女の観立てでは、まだ数分程の時間が掛かるという。

とはいえ、この忌々しい【封印】が解けると分かり、残り時間が判明しただけでも僥倖だ。彼女達はすぐさま簡潔な作戦会議を行い、理の支援に回るのだった。

「……ギリギリか？ 結城がアタイらの支援無しで、あの飛鳥のシャドウの攻撃を捌ききれるか？」

「其処はもう結城さんを信じるしかありません。わたくし達は、わたくし達に出来る事をしましょう」

「ああ、手筈通りにいくぞ。……この状況で雲雀と離れるのは癪だが、致し方ない」

「合図はひばりが出すよっ。今度はひばり達が、結城さんを助ける番なんだからっ！」

雲雀の言う通り、彼女たちは今まで理に助けられてばかりでいた。シャドウ討伐でも、自身の影の出現であっても、彼の尽力がなければ誰一人として此処に居る事は無かっただろう。

だからこそ今、彼女達は結城理の力に頼らず、この逆境に抗わなければならぬ。ペルソナが使えないなどと関係無い。忍法が使えないなどと些細な事だ。今の自分達が只の少女でしかないなどと、それこそどうでもいい。

何時までも彼に頼り切り、おんぶに抱つこの状態では、それは対等な仲間などでなく、戦力的に彼に依存しているに過ぎないのだから。……そう、今こそ、その消えない鎖をこの手で壊すのだ——！
「行きます—！」

「二「おう—（ああ—）（うん—）」」



「タケミカツチ！ 《中級電撃魔法》 ツ！」

理が召喚したのは、【皇帝】アルカナに属するペルソナ『タケミカツチ』。髪を鬢型に結った、古代の装束に身を包んだ男性であり、その右手には剣を携え高々と掲げている。

このペルソナは日本神話『古事記』に登場する雷神にして武神『建御雷神』であり、また古代日本において地震を引き起こすとされた大鯨を鎮める存在としても崇められる為、『地変魔法』に対抗できるかと思ひ召喚したのだが、そう上手くはいかないようだ。

『残念ッ！ 効かないよオ！』

「チッ、耐性持ちか……」

《ジオンガ》が直撃しても【感電】状態にならず、大したダメージも無いようである為、この『シャドウ飛鳥』は『電撃耐性』を持つのだろう。また、これまでに様々な魔法をぶつけているが、その悉くに耐性を備えていた為、魔法そのものに対して強力な耐性を持つようだ。

もとより、この『シャドウ飛鳥』の原典である邪神ツアトウグアは、自らを信仰する魔導士エイボンに知恵を授けたこともあるという伝承からか、魔術神としての側面も持つ。この強固な耐性は、それ故の特性であるらしい。

理が持つ魔法スキルでは大したダメージは見込めない。ならば物理スキルで攻めようと思ひ、『タケミカツチ』が持つスキルで攻撃しようとするが——

『すうう……、ブッ!!』

「っ、来たか！ 《広域電撃魔法》！」

『シャドウ飛鳥』がその大きく避けた蛙の口で、突如として周りの空気を吸い込み始めたのを見て、理は身構える。そして、その口から射出されたそれを迎撃する為に、『マハジオ』を放つのだった。

放たれたのは、酸の涎にして溶解液、その悍ましき口内で生成された『あたり生唾』。凡そ三つほどの塊になって飛来するそれらを『マハジオ』で相殺しようとする。しかし、『電撃ブースタ』によって強化された『マハジオ』であっても、その全てを叩き落すことは出来なかったようだ。

『あたり生唾』の塊の一つが、此方へ向かってくる——！
「くっ……、せいっ！」

仕方が無く理はその手に持つ両手剣で『あたり生唾』を切り払うが、粘液状であるそれは斬撃の衝撃で飛び散り、飛沫となつて彼の顔面へと襲い掛かる。

咄嗟に腕で顔を庇うが、『あたり生唾』が付着した服の袖からはブスブスと焼け焦げる様な音が聞こえてきた。ほんの僅かな飛沫だけでこの威力だ、もしも眼球などに付着していれば失明は避けられなかつただろう。何よりこのスキルは、防ぐことの出来ない『万能属性』であるのだから。

そして、顔を腕で覆つた事により視界を閉ざした理は、『シャドウ飛鳥』の姿を一瞬見失う！

『捉えたッ！』『真・地雷撃』ッ！』
「しまっ——がアッ!？」

その蛙の巨体によって理のすぐ傍まで跳躍してきた『シャドウ飛鳥』は、腕の刀に岩石と雷撃を纏わせ、彼へと切り掛かる。咄嗟にそれを両手剣を盾にして受け止めようとするが、既に『あたり生唾』によつて殆ど融解していた刀身は盾として機能せず、それを半ばからへし折り理に『真・地雷撃』の一撃を喰らわせるのだった。

理は脇腹に重い一撃を叩きこまれ、血反吐を吐きながら大きく吹き飛ばされる。『真・地雷撃』は、『斬撃』『地変』『電撃』による複合属性の攻撃だ。この内『電撃』だけは降魔する『タケミカヅチ』によつて防ぐことは出来たが、それでも彼に多大なダメージを与えたことは

変わりない。闇に落ちそうな意識を何とか堪えながら、空中で体勢を立て直そうとするのだが――

(……クソツ、何とか着地を……ッ?!)

空中で身動きの取れない理へと向けて、小さな石礫――《マグナ》が飛来する。言うまでも無く『シャドウ飛鳥』から放たれたそれは、受け身を取るために地面へと伸ばされていた彼の右腕を、グシャ、と呆気なく押し折った。

(腕が……動かな……)

そうして絶望の淵へと沈まんとする理を、『シャドウ飛鳥』は愉快そうな雰囲気を浮かべて、此方を見据えているのだった。

――痛みは無かった。

一瞬に無限の隔たりを感じる。目の前の全てが過去になってしまったように思う。

俺はここで死ぬのか――？

『ふふ……、大したことなかったね♪』

(ダメか……!?)

理の身体が、地面に叩き付けられる――

「結城さん! (結城!)」

――その前に、彼の身体は二人の少女、斑鳩と葛城によって受け止められるのだった。

『チツ、《ムラマサコピー》の【封印】が解けていたみたいだね……!』

『シャドウ飛鳥』は舌打ちを響かせ、3人を攻撃しようとするが、それを許す彼女達ではない。

「皆さん、結城さんの治療の為、一旦引き離しますよ! ヴィゾヴニル、《アギラオ》!」

斑鳩は前線に立ち、理を逃がす為に『シャドウ飛鳥』を攻撃する。

「結城、アタイに捕まれ! 全速力で行くぞ! ティアマト、《スクカジヤ》だツ!」

葛城は理を背負い、少し離れたただけの位置に居る雲雀へと向かう為、《スクカジヤ》を自身に付与した。

「オトヒメ、《ブフ・ラテイ》だ! 凍れエツ!」

柳生は僅かでも『シャドウ飛鳥』の動きを止める為か、斑鳩とは反対方向に陣取り『氷結魔法』を連続して射出している。

「結城さん、今治すからね！ イナバ、《ティア》！ ……つ、駄目、もう一度《ティア》！」

雲雀は葛城によって運び込まれた理を治療する為、『回復魔法』を何度も掛け続けた。しかし、傷が深い為か何度《ティア》を施しても、理の右腕は元通りになろうとしない。

それでも一応、右腕以外の怪我は治癒され、ある程度は回復する。

「——がはッ、げほっ！ ハアー、ハアー……っ！」

「落ち着いてっ、結城さん。ゆっくり呼吸を整えてっ」

絶望からか、呼吸すらも忘れかけていた理は体力の回復によって漸くそれを想い出し、雲雀に背中を擦られながら息を整える。

なお、この呼吸法は単なる深呼吸ではなく、彼女達から教わり新たに習得した忍法系のスキル《勝利の息吹》だ。このスキルには、大気中のMAGを効率的に取り込む事によって生命力HPの回復を促進させる効果が有る。

《勝利の息吹》によって更に体力を回復させた理は、痛む右腕を押さえながらも立ち上がり、『シャドウ飛鳥』とそれに抗う少女達を見据えるのだった。

その戦いに身を投じる少女達を一言で表すのなら、『華麗』と言うのだろう。迷いながら戦っていた自身とは比べるまでも無く、その戦いぶりは信念に溢れている。

それはまるで出来すぎた御伽噺であり、英雄譚であり、しかし間違いない現実だった。だからこそ結城理は、彼女達に憧れる——

少女達は決して『シャドウ飛鳥』に近寄ろうとしない。忍法・ペルソナを封じる《ムラマサコピ》こそが最も脅威である以上、遠距離戦闘を取るのは必然だ。

各々のペルソナを召喚して、遠方からの物理・魔法スキルによる攻撃。チマチマとした鬱陶しい戦術ではあるが、確かに効果的ではあるだろう。

だがその全ては、決して『シャドウ飛鳥』に届く事は無い——

『ふうん……鬱陶しいけど、少しはダメージを受けたかな？ なら、コレを使うよ』

『シャドウ飛鳥』は斑鳩達の猛攻により、僅かに傷付いた身体を一瞥すると、再び息を吸い込む。

何かしらの行動を取るのだと気付いた彼女達は一旦引いて、何が有ってもいい様に身構えるのだった。

「くっ、何をしようとも、これだけ距離を取れば対応は——」

しかし、彼女達の思惑は敢無く潰える。

『……ウガアクトウンユフ クトウアトウル グプ ルフブグ
フグ ルフ トク——』

「なッ!? あ、ガあつ?!」

『シャドウ飛鳥』の口から唱えられたのは、悍ましき異形の呪文。耳にするだけで精神を汚染する異界の言語。その言葉を直に聞いてしまった斑鳩達は、激痛の走る頭を抱え、耳を塞いで蹲ってしまった。

無論、この忌まわしき呪いの言葉は理にも届いており、堪らず膝を付いている。だが、その苦痛は彼女達と比べれば幾分かはマシな様であり、どうやら抵抗レジストに、もしくは正気度ロール判定に成功しているらしい。

『グルイヤ ツアトウグア イクン ツアトウグア——』

それは正に《邪神の蛮声》。本来は回復系のスキルであるのか、その呪文を唱えるだけで『シャドウ飛鳥』が負っている傷が回復していく。しかし同時に、精神を蝕む悪意の言霊によって攻撃系のスキルとしての特性も併せ持っているのだ。

『イア イア グノスユタツガハ イア イア ツアトウグア
!』

やがて呪文を唱え終わると、その身に付いていた全ての傷は消え去り、完全に回復しているようであった。

こうして振出しに戻ってしまった訳ではあるが、まだ戦闘そのものが終わった訳ではない。

『……へえ、まだ耐えるんだ』

「ぐっ……まだ、だ！」

そう言つて真つ先に立ち上がったのは柳生だった。《邪神の蛮声》による精神破壊攻撃を耐えきり、ふらつきながらも番傘の先を『シャドウ飛鳥』に突き付ける。正気度は削れたが、その心がまだ折れてはいないことを示したのだ。……ペルソナや秘伝動物が海産物だからSAN値チエックに成功したのだろうか？

それは兎も角として、柳生のみならず斑鳩、葛城、雲雀も、その眼に闘志を宿してまた立ち上がる。既に圧倒的な実力差を示されながらも、彼女達は戦う事を諦めようとしなない。そんな彼女達の様子に、流石に『シャドウ飛鳥』は訝しむのだった。

『理解出来ないね、どうしてそこまで頑張れるの？』

『シャドウ飛鳥』が抱いた疑問は、理にとつても同じであった。今の彼は一度大きなダメージを受けたことで頭が冷え、激情に流されるままに戦っていた戦闘時とは全く違うベクトルでの冷静さを取り戻している。

彼が危惧したように、シャドウに取り込まれ融合状態にある今の飛鳥を攻撃したところで元に戻る保証は無い。彼女の身体にかかる負担も膨大だろう。なのに何故、彼女達はそうして戦うことが出来るのか。

そしてその答えは呆気なく、少女達の口から零されるのだった。

「そんなの、信じているからですよ」

『……は？』

そう呟いた斑鳩の言葉を、葛城が、柳生が、雲雀が引き継いでいく。「ああ、斑鳩の言う通りだぜ。飛鳥がオマエみたいな心の闇に飲み込まれる筈が無いんだよ」

「つまりは、貴様を叩きのめせば飛鳥は必ずその呪縛を解き放つて、己のシャドウを抑え込む筈だ」

「ひばりには分かるよっ、飛鳥ちゃんは今でもアナタの中に居て、必死で抗ってるのをっ！」

「だから戦う！ オマエを斃して、飛鳥を取り戻す為にっ！！」

それは、余りにも単純な答え。彼女達が戦えるのは、今まで築いた

『絆』の賜物に過ぎなかったのだ。理が抱いていた懸念など微塵も感じず、飛鳥という仲間を心の底から信じているのだ。

そして、そんな少女達の『絆』が奇跡を起こす——！

『……………ぐっ?! あアアッ!／＼……………皆、ありがとう! 私も頑張るから、早くこの子をやっつけちゃって!／＼……………くおっ! おのれエっ!!』
何と『シャドウ飛鳥』が悶え苦しむと、本体である飛鳥の意識が表層に現れたのか、彼女自身の意志でシャドウを討伐しよう宣言される。

尤も、その意識はすぐさま抑え込まれてしまったようだが、それでもこれは、忍学科の少女達が飛鳥を信じた結果に他ならない。

(……………俺は、飛鳥を、彼女達を信じていなかったのか? だったら、信じられなかったその理由は——)

……………そう、今だから解る。俺が彼女達に初めて抱いた明確な感情とは、『嫉妬』だったのだろう——

孤独であった自身では持ち得なかった、『絆』というオタカラを持っていた少女達は彼にとって、憧れであり、妬みの対象であったことを今更ながらに自覚する。奇しくもそれは、飛鳥が理に抱いた感情と同一であることを彼は知る由も無い。

知る由も無いのだが——、結城理は今初めて、飛鳥という少女を、そして忍学科で得た仲間達を理解し、心の底から信頼することが出来たのは間違いないのだった。成ればこそ、彼が取るべき行動は——

「……………俺も、戦う」

並び立つ少女達の間を縫うようにして歩み、理もまた前線に立つ。彼もまた奮い立つ事を信じていた少女達はしかし、未だ折れた腕を押しさえているのを見て引き留めようとする。

「結城さん……………しかし貴方は、まだ負傷が——」

「問題無いです。……………リヤナンシー、《ティアアラマ》」

とはいえ、其処は突出したペルソナ能力を持つ理だ。召喚したのは【女帝】アルカナ、リヤナンシー。長い金髪を垂らした妖艶な美女という容姿をしているペルソナだ。このペルソナの原典はアイルランド

に伝わる妖精であり、その名前には『妖精の恋人』という意味がある。

そうして唱えたスキルは、斑鳩や雲雀では及びもしない高ランクの回復スキル《ディアラマ》。只の《ディア》では回復できなかった筈の腕の骨折が瞬く間に治癒し、もはや呆れるほどの能力だと彼女達は畏怖するのだった。

そしてすぐさま戦闘に入る心算だったのだが、ふと湧いた疑問を柳生は聴いてみる。

「……それで、どうする？ 打つ手はあるのか？」

これは単なる確認であり、先程まで押されるだけであつた理に弱点を見つけていられるとは彼女も流石に思っていない。……思っていないかつたのだが――

「ああ、既に弱点は見つけている」

「「「……………」」」

『なん……、だと……？』

まさかの宣言に、忍学科のメンバーはおろか『シャドウ飛鳥』ですら言葉を失っていた。

「……俺が其処を付くから、キミ達は補助を頼む。合図をしたら――」

そして、理から彼女達に向けてその『作戦』が指示される。彼の見つけた弱点というモノには納得が出来たが、それを付く為には彼が極限まで『シャドウ飛鳥』に接近しなければならない。

下手に近付けば《ムラマサコピー》や《マグナ》等のスキルで攻撃されるのは言うまでも無く、それを補助する為に理は斑鳩達にも指示を与えた。

「一度だけでいい。たった一度だけでも攻撃を防げれば、アイツに接近できる」

しかし、その作戦内容に斑鳩達は若干の不安を覚える。

「ですが、その作戦が上手く行くとはまだ決まった訳では……………」

「理屈は分かるけどよ…………。結城抜きって言うのは不安だぜ」

「……チャンスは一度、しくじれば次は無いだろう。他に良い手は無

いのか？」

「そのっ……、何だか結城さんらしくない様な？ 普段はもつと慎重なのに……」

皆が皆、口々に後ろ向きな発言をする。事が飛鳥の命に係わる以上失敗は許されず、勿論理や彼女達が死ぬ事も許されない。

彼女達の言う通り、成功は保証されず、自身の補助も行うことが出来ず、ならばもつと別の手立てを模索するという、いつも通りの慎重さを持つべきなのかもしれない。

しかし、それでも結城理は――

「……俺も飛鳥の様に、キミ達の様に、『仲間』を信じる事にする。……だから俺の命を、キミ達に預けるよ」

「……っ！」「」

彼女達と同じように、消えない鎖を壊し、彼女達と真の『絆』を紡ぐ為――！

『ぐ、おおおッ！／＼、駄目、これ以上押さえきれない！』

そして、これまで『シャドウ飛鳥』が悠長に彼らの作戦タイムを妨害できずにいたのは、飛鳥の尽力によるものだった。精神力と気合と根性によってシャドウを押さえ付けていたようだがそれも限界らしく、『シャドウ飛鳥』は飛鳥の意識を跳ね除け、遂に攻撃を開始する。

無論理達もそれを迎え撃つ為に、飛鳥を救う為に、その作戦を開始するのだった。

「行くぞッ!!!」

「ええ、任せて下さい！ わたくし達が、あなたを守りますから！」

「ハハッ、アタイも腹括ったぜ！ ブチかましてやれ、結城イ！」

「迷わず突っ込め！ オマエを必ず、飛鳥の下へと届かせてやるッ！」

「必ず成功させてみせるよっ！ 飛鳥ちゃんの為にも、結城さんの為にもっ！」

理からの決意を受け取った少女達は、『シャドウ飛鳥』に向けて突撃する彼へと声援を送る。

その言葉を受けた理もまた一層速度を上げ、彼と対峙する『シャドウ飛鳥』も彼へと攻撃を開始する。

『押し潰れるッ！ 《上級地変魔法》ッ！』

放たれるのは間違いなく『シャドウ飛鳥』にとって最大級の攻撃スキルであろう《マグダイン》だった。隆起した膨大な土塊が空中で塊となり、巨大な岩石となって理に向かって飛来してくる。

しかしそれと同時に少女達は、理と『シャドウ飛鳥』を取り囲むように四方に散開する。彼女達のスキルによって、彼を飛鳥の下へと送り届ける為に。

彼女達の背後には、各々の力の証であるペルソナが浮かび上がり、そのスキルを唱えるのだった。

「ティアマト、《風の壁》！」

「ヴィゾヴニル、《火の壁》！」

「オトヒメ、《氷の壁》！」

「イナバシロウサギ、《雷の壁》！」

それは、まさしく『結界』。中国の天文学・占星術を源典とするこのスキルは、その伝承通り四聖獣の加護を必要とするのだが、彼女達はそれを各々のペルソナで補い、強引に発動させたのだ。本来ならば、今まで合体スキルを発動する為に必要としていた理の補助を以てしても発動できず、勿論彼女達の力だけでも発動しなかっただろう。

それが今、少女達の固い絆、仲間である理と飛鳥を想う気持ちによつてカタチを成した。不完全であれど、ただ一度だけであれど、その合体スキル《二十八宿の守護》にじゅうはっしよく しゆくは、確かに理を守り抜いた。

結城理の周囲には四重にも及ぶ防御壁が浮かび上がり、彼の身体を余す事無く覆っている。『シャドウ飛鳥』の《マグダイン》は其れに阻まれ、決して届く事は無い――！

『そんなッ!?!』

「捉えたッ！」

『シャドウ飛鳥』に肉薄するまでに接近した理は『シャドウ飛鳥』の下半身、蛙形態へと変貌したその頭に飛び乗り、その手に召喚器を構え既に何時でもペルソナを呼び出せる体勢を取っている。このままペルソナ能力による攻撃を行うのだと判断した『シャドウ飛鳥』は、殆ど反射的にそれを繰り出す。

『くッ！ 《ムラマサコピー》ッ!!』

——それこそが、結城理が見つけた自身の弱点であると気が付きもせずに！

『……………な……………?』

『シャドウ飛鳥』は一瞬、何が起きたのかわからなかった。

何故、《ムラマサコピー》は奴の身体を貫いていない？

なぜ、全身の力が抜け、己の身体が崩れ落ちていく？

なぜ、この手の《ムラマサコピー》は、自身を貫いている!?

「……………力の“意味”を履き違えるな」、「“力”って言うのは“剣と盾“だ”」

『……………それはっ!』

ぽつりと紡がれた理の声に反応したのは、間違いなく飛鳥だ。彼はそのまま彼女に語り掛ける様に、ゆつくりと言葉を紡いでいく。

「……………俺にそう教えてくれたのはキミだ、飛鳥。だからこそ、“力”だけしかないコイツの能力を利用することが出来た」

理が行った事は至極単純、迫り来る《ムラマサコピー》の刃を躲し、その勢いのままに《ムラマサコピー》を蛙頭に突き刺しただけに過ぎない。

「いや、その言葉だけじゃない。忍法や、戦い方や、『仲間』というモノをキミに教えて貰ったからこそ、俺は此処に居る。……………今こそ、その借りを返す時だッ!」

そして理は、最後の作戦を実行に移す。《ムラマサコピー》が突き立ち、ダウン状態となった『シャドウ飛鳥』から飛び降りると、己が最大の力を発動させる！

「……………ペルソナアッ!」

理は銃爪ひきがねを引く。召喚されるペルソナは『オルフェウス』。彼が最初に覚醒したペルソナであり、彼が最も信頼を寄せるペルソナだ。そうして『オルフェウス』は彼の意を示す。

「響け、謳え、奏でろ、オルフェウスッ! 俺達の想いを、飛鳥に届けるためにッ!!!」

古代ギリシアに名立たる吟遊詩人オルフェウス。神から受け賜わ

りし豎琴で奏でるその旋律は、人や動物は勿論、森の木々や石すらも魅了し、冥府の亡者達も苦しみから解放されたという。

理の意思を受けたオルフェウスは、彼ら全員の心の叫びを聞き、それを増幅して放つ。腹部のスピーカーだけでなく、周囲の空中に更にスピーカーを召喚してアンプとして扱い、その叫びを轟かせる。

それこそが、理が立てた最後の作戦だ。ペルソナ自身が持つスキルではない、オルフェウスの伝承からなるこの旋律は、理や少女達の想いを乗せて、飛鳥へと向けて響き渡る。

先程まで飛鳥はシャドウに囚われていても、彼らの呼びかけによつて断片的にはあるが意識を浮上させていた。ならばこそ理だけではなく、忍少女達の想い、『心』を乗せたその旋律は飛鳥の意識を完全に覚醒させることが出来る筈だ！

「目を覚ませ、飛鳥あーーーーーっ!!!」

27話 覚醒

——ペルソナは、心の力だ。

そしてシャドウとは、ペルソナと表裏一体の存在。両者の違いは、ただその力が制御出来ているか出来ていないか、その程度の差ではない。

故に、今ペルソナ／シャドウの力を露出させている飛鳥は、理からの膨大な力を浴びたことにより、彼の心ペルソナへと触れる。

結城理の想いを受けた飛鳥はその奔流に吞まれ、彼の過去の記憶を覗き見る。……覗き見てしまう——

(……此処は——?)

飛鳥が居たのは、何処かの橋の上。ふと視線を向ければその先に、大破した乗用車から出火した紅蓮の炎に照らされ、アスファルトの地べたに座り込んだ結城理が居る。

まだほんの幼く、6〜7歳程度であろう少年の姿をした結城理——飛鳥はそこで、この光景が過去の記憶であると気付いた——は、しかしその身体は血に塗れ、眼には現在の彼と変わらぬ絶望を宿し、生きる意志を失ってしまったている。

それは何故か？ 飛鳥は思う、この光景こそが、結城理の精神性を決定付けた瞬間、彼の人生を変えてしまった『十年前の事故』の場面であるのだろうと。

(……なら、あの人は?)

そして、この場にはもう一人の存在が有る。地面にへたり込んでいる理の目の前には、一人の女性の姿があった。

炎に照らされ浮かび上がる容姿は、まるで精巧に出来た人形のように美しく、人間離れしている。銀髪のボブカットに青い帽子をかぶせ、青いノースリーブのワンピースを着込み、腕には青い手袋を嵌め、その手で一冊の大きな本を抱えている。

そんな青一色の女性は、闇の中でも一層輝く黄金の双眸を持ち、ゾツとするような妖艶さを備えていた。

そして何よりも特徴的なのが、彼女の背後に浮かぶ『死神』。黒衣を

纏い、手には鋭い直刀を携え、鎖で繋がれた九つの棺桶を背負っている。

それは一見してペルソナともシャドウとも付かぬ不気味さと破滅さを湛え、直視した物に容易く『死』のイメージを浮かばせるだろう。事実、この『死神』を眼にした飛鳥は、完全に体が硬直してしまっていた。

「——ようやく、見つけました……」

青の女性は口を開く。その声に含まれる感情は、喜悦であり、歓喜であり、心底待ち望んでいたという悦楽の色。しかしその眼は、目の前に居る筈の結城理を捉えていない。少年の彼を通して、此処に居ない誰かを見据えている。

「幾星霜の時を超え、数多の次元を渡り、無数のあなたと出会い——遂に見つけ出しました。『彼』の復活に相応しき依代、ドリー・カドモンを」

女性が呟いた言葉の意味など、飛鳥には分からない。ただ解るのは、何か途轍もなく不味い事が起ころうとしているという事だけだった。

「同じ身体、同じ精神、同じ魂、……そして、同じ『経験』。この依代こそまさに、『彼』を馴染ませるに相応しいでしょう」

そうして女性が差し出した右掌の上に、彼女が召喚していた『死神』のペルソナが青い炎となって集まっていく。その今にも消えてしまいうような小さな揺らぎこそが、彼女の言う『彼』の魂なのだろうか。

女性はその魂を持って、幼い結城理へと近づいていく。おそらくその『魂』を、理の中へと封じる為に。だが、今の彼の中にはれっきとした彼自身の魂が有る筈だ。そうやってしまえば、果たして結城理の魂は——

（そんなの駄目ッ、結城くん！ 動け、動け、動け——！）

飛鳥は、動かぬ体に動けと叱責する。無意味だとは分かっている。現代で理が無事な以上この蛮行は失敗したのかもしれない。それでも飛鳥は、あの青い女性を止めようとする。

「始めましょう——祭儀、《英雄合体》を！」

差し出された魂が、理の胸に吸い込まれ――

「駄目………っ!!!」

「ッ!」

その時、飛鳥の身体が動き、叫ぶ。死への恐怖を、未知への畏怖を押しさえつけ、ただ、己が愛した人の為に身体を動かしたのだ。

その声に反応したのか、女性は此方へ視線を投げ掛ける。その瞬間、彼女の手に入った『彼』の魂は、『十三個』のカケラへと分裂する。そのうち一つのカケラだけが理の胸の中に吸い込まれ、ショックからか彼はぱったりと倒れてしまった。残りの十二個のカケラは、女性の周りで漂っている――

「………これは、それに貴女は………?」

青き女性は呆然と此方を見つめ、何が起こったのか分からないといった風であった。尤もそれは、飛鳥も同じであるのだが。――
何故、過去の光景の中で、己の身体が動いたのか?

兎に角、最悪の事態だけは避けられたようだ。飛鳥は、ぐったりと倒れ伏している理の傍へと近寄っていく。その合間にも、女性は何かしら言葉をぶつぶつと呟き、此方を気にしてさえない。

「………失敗? —— いえ、これこそが『運命』………? 確かにこの事象は、『彼』の歩みを『再現』している………!」

其処で漸く女性は何かを納得した様であり、改めて此方に向き直る。その顔に浮かぶのは、先程まで悍ましい祭儀を執り行おうとしていた等と思えぬ程に晴れ晴れとした表情を浮かべていた。

「ふ、ふふ………! そういう事なのですな■■■■様! あなたに再び会い見えるには、嘗てのあなたと同じ道を歩まねばならないのだと!」

女性は興奮した様子で、『彼』の名前を叫ぶ。しかし飛鳥には、その名前の部分だけにノイズが掛かり聞き取ることが出来なかった。そうして女性は、此方に向けて恭しく頭こづかを垂れる。

「分かりました、■■■■様。この依トリー・カドモン代トリー・カドモンにあなたと同じ『試練』を与える事で、■■■■様の復活を執り行いましょう」

そうして、周囲に浮遊する十二のカケラは青い女性の意思に従い、

その形を変えていく。そして出来上がったその形を、飛鳥が見間違える筈も無い。

そこあったのは、シャドウの『仮面』。【魔術師】まじゅつしから【刑死者】けいししやまでの十二の仮面が発する雰囲気はまさしく、あの大型シャドウのモノに他ならないではないか。

つまり、現代において理を襲ってきた大型シャドウの正体とは、この女性の手によって差し向けられた■■■■の魂の片鱗『オワリノカケラ』であったのだ。

「残り十二の『オワリノカケラ』を全て取り込んだとき、■■■■様はこの依代ドリイ・カドモンを新たな肉体として蘇る。今はその時を待つ事にしましよう」

その物言いから、恐らくこの女性は理の事を只の生贄程度にしか考えていない。結城理の事を見据えてはいても、その眼は理を通して『彼』に注がれているのが飛鳥にはありありと分かる。

飛鳥はその視線から守る様に理の身体に覆いかぶさり、目線は女性を睨みつける。大した意味は無いだろうが、それが飛鳥に出来る唯一の抵抗だった。其処で女性は彼女に興味を移したのか、その黄金の瞳で此方を見据えてくる。

「ああ……そういえば貴女も居ましたね。嘗ての世界では存在しなかったイレギュラー。とは言え、未来において貴女もまた、この依代ドリイ・カドモンの力となるだろう存在。運命に導かれたのなら、貴女とも再び会い見える事になるでしょう」

青き女性は、謳う様にして言葉を紡いでいく。その様はまるで高尚な演劇の様に美しく、同時に人々を絶望へと貶める呪詛の様でもあった。

「では、十年後の約束の日まで、御機嫌よう——」

そう言つて青き女性は踵を返し、闇の中に消えていく。飛鳥は、その後ろ姿を呆然と見つめることしか出来ない。

これが、結城理の運命を決定付けた『十年前の事故』の真実。その片鱗を知った飛鳥は打ちのめされていた。

(……)こんなの、酷過ぎる。結城くんが、誰かの為の生贄だなんて——

——
そうして、絶望に沈みそうになる飛鳥の心を反映するかのようになり、周囲の景色が薄れていく。どうやら此処で記憶が途切れ、飛鳥は現実へと回帰する様だ。

浮上するような感覚の中で、飛鳥は無理やりに意識を切り替え、迎えるであろう決戦に向けて覚悟を決める。

(……兎に角今は、私のシャドウを速く——)

しかし、その覚悟すらも無為にする存在が居るのだ——

『——なるほど、ペルソナ能力のぶつかり合いによって発生する記憶の共有、大変興味深い事例です』

(えッ?!)

突如として聞こえてきた声に、飛鳥が狼狽えるのも無理はない。此処は正に飛鳥という少女の『意識と無意識の狭間』、其処に彼女以外の何物かが存在できるなど、想像出来る筈が無い。

(……いや、違う！ この人は、私に干渉してきた事件の犯人！ だったら、私の意識の中に入り込むなんて——)

『そう、この私にとっては造作も無い事』

同時に、自身の心が掌握されるという悍ましい感覚を感じながら、飛鳥の意識は再び闇の中へと落ちていく。言うまでも無くこの存在の仕業だろう。飛鳥へと再び干渉を施す心算の様だ。

(どうして……こんな?!)

喪失しそうな意識を必死で手繰り寄せながら、飛鳥はこの存在——おそらく、『十年前の事故』にて理へと干渉した『彼女』なのだろう——へと問いかける。

何故、飛鳥という少女へと干渉したのか。

結城理を贄として、■■■■という存在を復活させるといふ事に飛鳥は納得も賛同も出来ないが——理解は出来る。他の何者をも犠牲にしてまで誰かへと捧げるその『想い』を、彼女は決して否定出来ない。否定させない。

その想いは、飛鳥自身もまた結城理へと抱いた想いと同一であるのだから。

『だからこそ、なのですよ。その思いこそが、私達を繋いだのですから』

しかし、真実は残酷だった。彼女が言うには、飛鳥が理へと抱いた想いが、彼女が■■■■に抱いた想いと共感し、干渉の隙を創り出したのだという。

確かにそれは繋がりとはいえど『絆』コミュニケーションと呼べるモノではなく、『共犯』と呼ぶべきモノであり、飛鳥に許容できる筈が無い。

尤も、そんな違いなど彼女にとっては些末事だ。所詮飛鳥は■■■■復活の為の手駒に過ぎず、今こうして語り掛けているのも、その働きに対しての応答という気紛れから来る要らぬ御節介に過ぎないのだから。

『さて、無駄話はここまでです。このまま貴女の眼を、貴方の心を通して、彼の行く末を見定めるとしましょう』

(ツ！ や、め——！?)

彼女の宣言と共に、飛鳥への干渉の強さが一層増す。精神が侵食される、心が侵される、魂が掌握される。それこそ、飛鳥には抗えない程に。飛鳥の意識など、一欠けらも残さないとばかりに。

(う、あ……！ 嫌、だアっ?!)

消えていく、堕ちていく、死んでいく。『飛鳥』という存在が、消失していく——

(たす、け……、みんな……)

最後に思うのは、心から焦がれる、その人だった。

(……結城、くん——)



「——ぐっ……!?’

理は、少女達は、必死に呼びかけていた。飛鳥を取り戻す、ただそれだけの為に。

しかし、オルフェウスの旋律によって確かに繋がれていた筈の彼女との繋がりが、突如として断ち切られる。

召喚されていたオルフェウスは掻き消え、強制的な断絶による精神ダメージを受け、理は堪らず膝を付く。その傍に慌てて駆け寄ろうとする斑鳩達だが、彼はそれを手で押し留める。

「何か……変だ、多分……また、干渉が……」

途切れ途切れに紡がれる理の言葉を受け取り、斑鳩達は『シャドウ飛鳥』の方へと向き直った。そこには、先程までオルフェウスの旋律を聞き、悶えていた姿は無い。だらりと両腕を下げながらも、超然とした様子で佇む『シャドウ飛鳥』が——いや、アレは本当に飛鳥の影シヤドウなのだろうか？

そういった疑問を抱いた少女達だが、理は違う。彼は正しく、アレが飛鳥ではないという事に気が付いている。最早何度目になるのかもわからない、何者かによる飛鳥への干渉。今回またそれが行われ、彼との繋がりを断ち切ったのだろう。

やがて、『シャドウ飛鳥』が——否、その暴走を促した『彼女』が、理達に語り掛けてくる。

『ああ……素晴らしいですわ!』

「……何?」

それが先ず告げたのは、罵倒でも、恨み辛みでもなく、称賛だった。まるで場違いなその言葉に、理達は困惑する。

『まだ4つとは言え、私の力に抗ってくるその力——それこそが、待ち望んだ『彼』の復活の兆し!』

「っ、馬鹿を言うな! 僕は——ツ?!」

発した言葉の真意は斑鳩達には分からなかったが、理には理解できた——否、彼自身がその言葉を発した事に驚愕し、自分の口を押えている。

『フフ……大分馴染んできた御様子。それでこそ、貴方に試ヴァイジョンクエスト練を施した甲斐が有ったというモノ』

その言葉の意味はやはり斑鳩達には理解出来ないが、理には通じたようだ。飛鳥との繋がりを感じた際、彼もまた『十年前の事故』の詳細を思い出しており、目の前の存在が何者であるのかを彼はハッキリと認識していた。

それと同時に理は、飛鳥と同じ様にペルソナ・シャドウの接触を通じて、彼女の過去、暴走までの経緯、そしてその感情の正体を掴み取っている。

城理という少年への、助けてくれた事による一目惚れの様な『愛情』、結落ちこぼれという劣等感から来る『憎悪』。そうした相反する二つの感情は『愛憎』として、『シャドウ飛鳥』となつて暴走した。

……それら全ての原因は、今眼の前に在る——
「……飛鳥を、どうしたんだ？」

絞り出すようにして漏らされた理の吐露は、その場に居る全員の疑問を代弁していた。先程まで存在していた『シャドウ飛鳥』の意識は、暴走こそしていたものの飛鳥の側面であることは変わりない。

だからこそ、今こうして『彼女』が此方へと語りかけている以上、飛鳥へと何かしらの干渉が行われたと彼ら全員が考えるのは、当然の事だった。

『ええ、彼女はまだ此処に居ますよ』

『彼女』はそう言つて、右手で胸を——刃に変化した腕である為、傍目にはかなり危ない——示した。だが、彼らが安堵したのはほんの一瞬の事。今『彼女』は、まだと答えたのだから。

「まだ、ですって？　ならば、飛鳥さんは——」

『無論、このまま私をこのシャドウの器に宿したままならば、彼女の意識は掻き消える事になるでしょう』

「なッ?!　テメエ何言つてやがる！　さっさと飛鳥から離れやがれ！」

「……同感だな。様は、コイツを叩きのめせばいいのだろう！」

「飛鳥ちゃんを返してっ！」

「っ、止せッ！」

つらつらと、まるで何でもない様にとんでもない事をのたまう『彼女』に対し、少女達は激昂する。

まずは率先して葛城が飛び出し、それに追随するように柳生、雲雀、斑鳩が飛び出す。対して理は動かず、彼女達を制しようとした。

……だが、もう遅い。少女達は気付かず、目を背けていたのだ。こ

の『彼女』が、『シャドウ飛鳥』とは比べ物にならない程のバケモノであることを――

『――貴女達に、私と戦う資格はございません』

冷たく、『彼女』は宣言する。そして『彼女』の意に従い、白色に輝く三つの光球となつて、彼女達の上空で膨大な力が収束していく。

「……これはッ?!」

それは、神の炎たる万能なる魔法。最終戦争にも匹敵する火力で以て敵を一掃し終グラウンドファイナレ焉を告げる、『彼女』の最大最強のスキル。

激情から飛び出した斑鳩達もその圧倒的なまでの威力に一気に顔色を青くさせ、一斉に反転して逃走態勢に入るが、最早間に合いはしない。『彼女』が宣言したとおり、この攻撃は少女達が己に立ち向かう資格が無い事を示す為の攻撃であるのだから。

『いぎ――、《メギドラオン》でございます――!』

三つの光球が混じり合い、膨張し、地面に落下する。その内に蓄えられたエネルギーは周囲へと拡散し、その一切合財を焼き尽くす。

それは勿論、少女達も例外ではない。塵すら残さず消滅する事になるだろう。そんなことが理に許容出来る筈が無い。だが、今の彼にこれを防ぐだけの力は無いのだ。

――そう、結城理には。

『……遅かったね、長い間キミを待っていたよ――』
「ッ?!」

目の前の光景がスローモーションの様に流れていく中、突如として理の脳裏に謎の声が響き渡る。

いや、それは謎などではない。激しい頭痛と共に語り掛けてくるその声は、理の声と同一の声色で有り、自分自身の内に在る“もう一人の自分”の声であるのだ。

声は再び語り掛けてくる。『諦めるのか?』と。

「……っ、諦めるワケ、……ないだろう――!」

理は吼える。そう、諦められるワケが無い。今此処で諦めれば、彼女達は死ぬ。

即ちそれは、彼女達と築いた絆は無意味となる。彼女達と得た戦果

は無駄となる。彼女達が歩んできた人生は無価値となる。

そうすれば、これまでしてきた事は、一体何だったというのだ。

『だったら、抗うんだ。ここから先に進むなら、此処に契約を——』

「ぐっ、……そんなの、言われるまでも——ア、ぐあッ?!」

内なる声に従い、反逆の意思を高めれば高めるほど頭痛は酷くなる。こんな状況でなければ、地面でのたうち回っていただろう。

『尤も、キミは既に契約をしていたよね。我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん』って』

「それは……あの時の、契約書……っ! キミが……!」

『確かに、時は全ての物に結末を運んでくる。たとえ目と耳を塞いでいても——』

「……だけど——」

それでも、理は膝を屈しない。己の二本足で立ち、目の前の光景を見据え、砕けぬ意志を持ってこそ、この逆境に抗う資格が与えられるのだから!

「——このまま、終われないッ! それが俺の『選択』だ!」

『……そうだね』

そんな理の宣言と共に、彼を苦しめていた頭痛が消え去る。そうして彼の内に、新たな力が宿る。

……自分の中の、何かがハジけた——

『——《インフィニティ》』

「え?」

もはやこれまでと諦めかけていた少女達の前に、不可視の障壁が展開される。それは、全てを焼き尽くす筈の神の炎ですら阻み、斑鳩達の命を救った。あまりの事に命が助かった事よりも、困惑の方が勝る斑鳩達であるが、振り返って理の方へと眼を向けた時、その困惑はさらに加速するのだった。

「……結城、さん？」

「いや……、誰だ？」

其処に居たのは、結城理であつて結城理ではなかつた。

姿形は同一だが、纏う雰囲気は圧倒的に違う。雲雀の《華眼》に頼るまでも無く、誰もが目の前の存在を「異質」であると断じる。

圧倒的に、根本的に、絶対的なまでに、『彼』はそういう存在であるのだと、彼女達は理解したのだった。

『……エリザベス——』

『彼』は唐突に、その名を呼ぶ。結城理の身体を用いて紡がれたその言葉に込められた感情を、彼女達は窺い知る事は出来ない。

対して名を呼ばれた『彼女』、エリザベスは猛烈な歓喜を隠そうともせず『彼』の言葉を迎え入れる。そんな歪な彼らのやり取りを、少女達はただ見ているしか出来ないでいた。

『フフ、お久しぶりですね。私はこの時を、ずっと待ち望んでいました』

『……僕は待ち望んでいなかったよ。それどころか、こんな時が来るなんて思いもしなかつた』

理は——否、『彼』は目の前の光景を否定するかのよう、片手で頭を押さえている。歓喜の雰囲気を見せるエリザベスとは対照的に、この状況に悲観し、絶望している様であつた。

「オイ、お前は何物だ？ お前もあのシャドウの様に結城を乗っ取つたというのなら、容赦はしないぞ」

その剣呑な雰囲気呑まれぬよう、柳生は一步踏み出て己の獲物を突き付ける。

「や、柳生ちゃん、駄目だよ……。この人は多分、そんなに悪い人じゃ……」

雲雀はそんな柳生を諫めようとするが、その顔には怯えが張り付いている。彼女の《華眼》には、果たして何が見えているのだろうか。

……しかし——

『……大丈夫だ』

『彼』は、そんな彼女達を安心させるように、ゆっくりと吐露する。

「俺は、ちゃんとここに居る。だから、心配しなくていい」

そう言つて『彼』は、薄く、本当に薄く、笑う。ほんの少し口角を上げるだけという、凡そ笑顔とは言えない僅かな表情の変化を見て、

——ああ、この『彼』は確かに結城理であるのだと、彼女達に気付かせるには十分だった。

まるで慣れていない、少女達への不器用な気遣いの仕方。その性格こそ、ここ数か月の付き合いを通して知り得た、結城理という人間の心の在り方であるのだから。

始めて見る、普段の理であればとてもとても魅力的になつただろうその笑顔は、少女達の胸を僅かに高鳴らせその場に縫い止める。

そして此処から先は少女達の手出しが出来ない、『彼』の領域だ。そうして『彼』は、エリザベスと対峙する——

『……エリザベス、キミらしくも無いな、こんなやり方は。……僕が知るキミは、決してこんなことをしなかつたらうに』

『……………』

『彼』は何処か失望感を滲ませながら、エリザベスを貶す。『彼』とエリザベスにどのような関係があつたのかは定かではないが、少なくとも『彼』の知るエリザベスは、この様な方法などを好んで行うような性格ではないのは確からしい。

対してエリザベスも、『彼』のその言葉に返答することが出来ない様で、口を噤んでいる。そんな彼女を見て、『彼』は、ぽつりと呟く。

『……一体、誰に何を吹き込まれた？』

その射抜く様な言葉と視線を受け、エリザベスは僅かにたじろぐ雰囲気を見せる。

エリザベスのそんな様子を見た『彼』は合点がいったとばかりに嘆息し、再び言葉を紡いだ。

『……キミは気が付いているのか？ その『選択』こそが、キミを自滅へと導く事に——』

『……それでも私は、貴方を取り戻すのだと『選択』したのですから』

二人は僅かな言葉を交わしただけで、互いの心の中を読み取つた様だ。『彼』と『彼女』の心には確かな繋がり、『永劫』にも続く絆が

存在するというのに、決して分かりあう事は無い。それは果たして、どれ程の悲しみであるのだろうか。

『……そうか。なら僕は、キミを止めるといふ『選択』をしよう。それが俺と交わした『契約』でもあるしね』

『彼』はそう呟いて、遂に戦闘態勢を取る。右手に召喚器を構え、ゆっくりと米神に押し付け、銃爪ひきがねに指を掛ける。

今の理の中で荒れ狂う感覚は、かつて初めてペルソナを召喚した時とは比べ物にならない程に強い。普通にペルソナを召喚するのに必要な、迫り来る『死』を想い、受け入れ、抗うという意志だけでは、決してエリザベスに届く事はないだろう。

しかし、今此処に居る結城理には、共に在る『彼』が居る。飛鳥を助けたい理と、エリザベスを止めたい『彼』という想い。それら調和する2つは、完全なる1つに優るのだから。

そして、ゆっくりと銃爪が引かれる。その頭蓋を打ち抜く衝撃と共に『彼』の身体は大きくよろめき、その身体から膨大な力が放たれる！

「……う、おおおおおおおおおつっつ!!」

『彼』のその身体から放たれた力は、荒れ狂う青白い閃光となって美しく輝く。普段ペルソナを召喚する時とは比べ物にならない程の力が放出されているのだ。

そして、その経緯を見守っている少女達からは、この力の奔流があるとある現象に酷似している事に気が付いた。

「この感覚は……、もしかや《忍転身》？ ……いえ、この力はあまりに強すぎる……！」

斑鳩の口からは畏れる様な声が漏れ、しかしすぐさま目の前の現象を否定する。今『彼』が行おうとしているモノは《忍転身》のような変身術に近いモノと推察できるが、その力があまりにも強すぎるのだ。

それこそ、己の身体に莫大な負担を掛けるために禁術指定されたという禁伝忍法、《深淵血壊》しんえんけつかいにすら匹敵、ともすれば凌駕しかねない程に。

結城理は「向こう側」のもう一人の自分、『彼』という根源アイトマに通じ、飛鳥を救う／エリザベスと戦う為の力をその身に宿す。

無論、その身に掛かる負担など度外視の上だ。彼女を救う為ならば、いくらでもこの身を捧げよう。

そんな、まるで神か悪魔に捧げられる贅の様に、己が身を転じるといふ理だけの変身スキル。

その名を、《アバタール・チューナー転生》——

今の結城理は正に、「向こう側」に居たもう一人の自分、『有里湊ありさとみなと』の化身なのだ。

光が晴れたその場には、姿を一変させた結城理が立っている。身に纏うのは、先程まで身に付けていた半蔵学院の制服ではなく、別の学校の制服だ。あれこそが、今の彼の忍装束なのだろうか。

「あれは……たしか『月光館学院』の制服……？　なぜあの制服を……」

斑鳩のふと湧いた疑問に答える者はいない。その装束は「向こう側」に居た有里湊が着ていた衣装を再現・構築しただけだ。斑鳩は鳳凰財閥を通じて、「こちら側」の桐条グループ傘下に在る『月光館学院』についての知識を持っていた。

そうして『結城理』は、ゆつくりと言葉を紡ぐ。その背に新たに召喚したペルソナ、『死神タナトス』を従えながら。

「我僕は汝俺、汝俺は我僕——。……約束の時だ、エリザベス——」

『ええー！　この『最強なる者』である私を、見事討伐せしめて御覧なさい！　それが、嘗ての貴方と交わり、果たされなかった約束なのですから！』

真夜中の月の下、今此処は彼らの闘技場アリーナと化す。

……さあ、はじまるよ——

28話 Overdrive

「……タナトス」

理は短く、己の半身に命令を下す。その意を受けたタナトスは瞬時に攻勢へと移る。その獣の頭蓋の口蓋に、破滅の光を蓄え、放つ。

一点収束されビーム状となった《メギドラオン》は、『シャドウ飛鳥』——その^{カラダ}軀を乗っ取っているエリザベスを貫かんとする。

『フフ……』

対してエリザベスは、心底嬉しそうに笑い、その攻撃を避けようともしない。それを血迷ったなどと思う輩はこの場に存在せず、しかし次の瞬間その行動に誰もが度肝を抜かれた。

「……あ、あの攻撃を……切った!？」

なんとエリザベスは、その手の《ムラマサコピー》によって、放たれた《メギドラオン》を切り払ったのだ。

《ムラマサコピー》には元よりシャドウやペルソナに対して絶大の特攻能力を誇っているが、そのあまりの絶技は、同じ刀剣使いの斑鳩が恐れをなす程に馬鹿げている。

とはいえ、嘗て『向こう側』で絆を育み、その在り方を知っている^湊理にとつては別段驚くような事ではない。何よりも彼女は、湊の『力の管理者』であつただから。

「なら……、《ブレイブザッパー》ッ!」

その為、理はさして気にすることも無く次の行動へ移る。今度は物理スキルの指示を出すと、次の瞬間タナトスは眼にも止まらぬ速度でエリザベスに接近し、その手に持った直刀で切り掛かる。

当然、振るわれた直刀をエリザベスは《ムラマサコピー》で迎撃する。激しい轟音と火花が散り、《ブレイブザッパー》は受け止められたのだが、間髪入れず理は畳みかける。

「全て切り裂けッ! 《空間殺法》オ!!!」

再びタナトスが剣を振るうと、彼らを取り巻くように無数の剣閃が奔り、エリザベスを切り裂く。単純な剣の攻撃ではなく、周囲の空間ごと切り裂く範囲攻撃ならば流石に受け止めることは出来ない。尤

も、大したダメージにはなっていない様だが。

理の攻撃は続く。タナトスを引込め、今度は彼自身が打つて出る事にしたようだ。

既に両手剣という武器を失ってはいたが、懐から予備武器である苦無を二本取り出すと、地面を圧倒的なスピードで駆けてエリザベスに肉薄する。その動きは、忍である斑鳩達が一瞬見失う程洗練されていた。

「ふッ！ はアッ！ せいやあッ！」

『フッッ！ アハハハハハ!!』

苦無二刀流による連続攻撃。地を掛け足を斬り、目や腹を突き、飛び上がって切り掃う。巨大な体格差など有ってない様に切り結ぶその技量は、今までの理とは比べ物にならない。

あまつさえ、『万能属性』と『封印』の効果を持つ《ムラマサコピー》とさえ打ち合えるその剣技は一体どういうことなのだろうか？

そして、今の理の能力はそれだけに留まらない。

『背後ががら空きですよ！』

「ッ！」

その巨体に見合わない速度により、一瞬にして理の背後を取ったエリザベスは、その背に向けて《ムラマサコピー》を振るう。「危ない！」と少女達が叫ぶが、彼はそれに構う事無く召喚器を取り出し、その銃爪を引いた。

ガギン！ と鉄を打ち鳴らす音が響く。《ムラマサコピー》は、理が召喚したそのペルソナが担う刀剣によって受け止められていた。

『ほう、これは……』

「……《ヨシツネ見参》、ってね」

召喚されたのは、【塔】アルカナ『ヨシツネ』。またの名を源義経、或いは牛若丸。端麗な容姿をした、二本の刀を携えた平安時代末期の武将。

その刀の銘は『薄緑』^{うすみどり}であり、数多の怪異を討ち払った業物であるこの刀によって、《ムラマサコピー》を受け止めることが出来たのだ。

そして、このペルソナ召喚もまた《アバター・チューナー転生》の能力だ。本来ならば大型シャドウを打ち倒すことによつて、そのアルカナのペルソナを召喚できるようになる理であったが、湊の力を獲得した今の理は、全てのアルカナのペルソナを召喚できるようになった。

そうして召喚されたヨシツネは、この状況を打破するに相応しい能力を持っている！

「《はっそうと八艘飛び》ツ！」

『くッ!?!』

理とヨシツネは、共に地面を跳躍して各々の獲物でエリザベスを斬り付ける。物理攻撃に特化したスキル構成を持ち、『力』のステータスも高いヨシツネの攻撃によつて多大なダメージを与えられたようだ。

たまらず飛び退き、距離を取ったエリザベスだが、その隙を見逃す理ではない。だが今は攻勢に出るのではなく、その前段階だ。

「……《ヒートライザ全能力強化》」

ぼつりとスキル名を呟く理の周囲に、三色の光が立ち上る。《ヒートライザ》は全ての能力を一度に強化する最高峰の強化系スキルだ。これにより、理の能力はさらに強化される。

『フフ……良いですよ！ 私も段々と昂つてまいりました！』

相も変わらずエリザベスは、そんな理を見て歓喜の声を上げている。戦闘狂の気も同時に在るのだろう。その『シャドウ飛鳥』の身体からも、並ならぬ闘気を立ち昇らせている。

尤も、常人はおろか忍ですら尻込みしかねないその敵意を受けても、理が怯む事は無い。寧ろそんな敵意を受けて、更に自身の闘志を上げている。

「……チェンジ、ジークフリード」

再びペルソナを変更し、新たに降魔したペルソナは「剛毅」アルカナ『ジークフリード』。ドイツの叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の主人公たる勇者であり、バルムンクの剣を手に悪龍ファフニルを討ち、その血を浴びて半不死となる。

その逸話を反映して高い『物理耐性』と強力な『物理スキル』を持つが、今回使用するのはいそれらではない。

「《チャージ》！」

使用したスキルは《チャージ》。力を溜める事によって、次に使用する物理スキルの威力を倍以上に高めるスキルだ。そして――

『《ヒートライザ》に《チャージ》、そして『ジークフリード』ですか……。なるほど、貴方が使用するのは――』

「そうだ、僕俺の能力を、エリザベス、キミが知らない筈が無いだろうか？」

そう言った理は再び召喚器を構える。新たにペルソナを召喚するのだろうが、しかしその内に秘められたエネルギーは、《転生》の際と同じく膨大なモノだ。

「来いッ！ ジークフリード、アレス！」

そして召喚されたのは、今降魔している『ジークフリード』、そして【戦車】アルカナ『アレス』だ。ギリシャ神話に登場するトラキアの守護神で、オリュンポス十二柱神の一に数えられる。狼か猪を聖獣として従え、「城壁の破壊者」の二つ名を持つ軍神だ。

理はこの二体のペルソナを同時に召喚した。そうして発動するスキルこそ、有里湊が宿した究極の技巧、その一つなのだ。

『《紅蓮華斬殺》ッ！』

『ミックススレイド』、二体のペルソナを同時に召喚し、その能力を掛けあわせる事で発動するスキル。

それは古今東西、あらゆる平行世界のペルソナ使い、力の管理者達でさえ至る事の無かった、『彼』を究極のペルソナ使い足らしめる、その絶技。

今回発動した《紅蓮華斬殺》は、『ジークフリード』と『アレス』という共に武芸に通じた英雄二人が、八大地獄の1つ紅蓮華くれないれんげ地獄の如く相手を切り刻むという斬撃攻撃に特化したスキルだった。

《ヒートライザ》と《チャージ》によりさらに高められた威力で以て、エリザベスを攻撃する。それでも、エリザベスは倒れない――

『思った通りのその強さ……。私、大変嬉しく思います。どうぞそのまま、御遠慮なさらず、殺すつもりでお出で下さいませ』

「……………」

そのエリザベスの物言いに、理は小さな舌打ちを一つする。彼女が

この状況を心から楽しんでいるのだと伝わり、彼にはそれが面白くないのだから。

今、理と共に在る、有里湊にとってエリザベスとは、特別な関係にあった大切な存在であった。

大型シヤドウ、湊の記憶と魂の片鱗である『オワリノカケラ』。そのいくつかを取り込んだ理も湊の記憶を共有できている。尤も、取り込んでいるのが『愚者』から『皇帝』までの5つである為、未だ穴だらけであるのだが。

その中に居るエリザベスという女性は、まあ何と言うか、変な女性だった。絶世の美貌を持ちながらも、それに反して行動は奇想天外、支離滅裂、傍若無人。彼女にせがまれ、共に街中を巡った中で、それは遺憾なく発揮されていた。

しかし、そんな奇天烈な交流であっても、彼らは心を重ね合わせていく。

……だからこそ、『有里湊』は——

「く……、おおおおおおおおお!!!」

『さあ！ 参ります！』



「……これが、結城さんの《忍転身》の能力なんでしょうか?」

ぼつりと漏らされた斑鳩の疑問は、ある意味では正解だった。

結城理が覚醒した変身術《アバタール・チューナー転生》は、《向こう側》のもう一人

の自分、有里湊の力をその身に宿すスキルだ。それによって、理は『有里湊』の全盛期の能力を得ている。

極限にまで鍛え上げられた『身体』。それは例えるならば、レベル、生命^H力、精神^S力といった数値が全てカンスト状態にあるのだ。

さらなる高みへと至った『武芸』。元よりあらゆる武器格闘を心得ている彼だが、その技術はさらに洗練されている。

聡明な頭脳からなる『戦術論』。あらゆる戦況を見通し、如何なる状況からも勝利を掴みとる。

そして『ペルソナ』。数多の仮面ペルソナを従え、それらを十全に扱うあの在り方こそ、最高峰のペルソナ使いの証である。

そうして得た戦闘能力は、〝こちら側〟の忍にも比肩、或いは凌駕するのだ。

「理屈はよく分かんねえけど……、コイツが結城の全力つて事か？
これなら……！」

戦況を見守っている葛城からは、思わず期待する声が漏れる。確かに彼女の言う通り、今の理ならばエリザベスを斃す事も出来るかもしれない。だが――

「……駄目っ！」

その予想を、雲雀が覆す。

雲雀は頭を抱え、首を振り、しきりに「駄目、駄目」と繰り返している。顔色は真っ青になり、冷や汗が絶え間なく流れているという尋常でない様子だ。

「雲雀、どうしたんだ？ ああ結城が、このまま負けるといえるのか？」
柳生など駆け寄って介抱しつつも、その言葉を思わず否定する。彼女自身、理が負ける等微塵も考えていないという、信頼の表れが有るのだ。

だからこそ、その言葉を発したのが雲雀であつても信じられなかった。果たして、雲雀の『華眼』は、何を観たというのだろう。

「……アレは、結城さんのあの力は、結城さんのモノじゃないの……」
雲雀はゆっくりと語り始める。理が覚醒したスキル《転生》、その危険性について。

「ひばりにもよく分からないけど……、アレは忍転身でもペルソナでもない、もっと別の『力』だよ」

彼女に発現した、瞳術『華眼』。人を操る眼にして、心を見抜く瞳、《第三の眼》サードアイ。それによって彼女は今の理の状態を正しく捉えている。

『結城理』という人間に降魔した『有里湊』の魂。二人は平行世界の同位体なれど、しかし決して同じ存在ではない。

今でこそ理は湊の力を上手く扱っている様に見えるが、このままではいずれ破綻してしまうのが雲雀には理解できたのだった。

「そんな……！」

「け、けどどうすんだよ!? 今の結城の力じゃなきや、あの化け物を斃せねーんだぞ！」

破綻とはすなわち、結城理の人格の消滅。元より理の肉体は、湊の復活の為の依代としてエリザベスが選んだのだ。そんな展開は彼女の望むところだろう。

尤も幸いにして、エリザベス自身は彼との戦闘に夢中になっており、時間稼ぎと言った戦法を取っていない様ではある。だからと言って、事態が好転する訳でもないが。

だが、それでも――

「……信じるしか、ないだろう」

柳生は、絞り出すようにして告げる。

「元よりオレ達は、もうあの戦いに加わる事は出来ない。力も、ペルソナも、あの二人に及ばないからだ」

彼女は本当に悔しそうに語る。それだけではなく、既に余力を使い果たしている少女達では、戦闘に参加できないのだ。

理の助けになれないことが、飛鳥を助けるのに手を貸せないことが、堪らなく悔しい。それは彼女だけでなく、その場に居る全員の共通認識だ。

そして何より――

「あの二人にはきつと、譲れない『信念』が有る、だから戦っている。……それに横槍を入れるなど、オレには出来ない」

「……………」

斑鳩が、兄の為に飛燕に相応しき忍で有ろうとするように。

葛城が、両親の為に絶対なる強さを追い求めるように。

柳生が、亡くなった妹の為に約束を果たそうとするように。

雲雀が、家族の為にその眼を使いこなそうとするように。

信念、すなわち『心』の強さとは、大切な誰かという『絆』の為にこそ発揮される。

理とエリザベス、あの二人の強さも、その『絆』の為に有るのだから、少女達には痛いほど理解できる。

「……だから、勝つんだ結城！」

「っ、ああ！ そうだぜ、負けたら承知しねえぞ!!」

「勝って、結城さんっ！」

「結城さん、勝って下さい！ 飛鳥さんの為にも、貴方の為にも！」

だから少女達は、既に何ヶ月もの交流を通じて知り得た『結城理』という少年に全てを託した。

二人の信念がぶつかり合う、この決闘を。

少女達の大切な仲間である、飛鳥の命を。

勝負の行方は、まだ分からない――



「《雷神演舞》^{らいじんえんぶ} ツ！」

エリザベスが見せた一瞬の隙を付き、理は再びミックスレイドを発動する。

彼の傍らには二体のペルソナ『タケミカツチ』と『トール』が召喚されており、共に雷を司る神である彼ら二柱によって、強力な電撃属性魔法の行使を可能とした。

天へと向けて掲げられた理の手の先には雷太鼓が浮かび上がり、其処から幾重もの雷撃が迸る！

『く、ああああアアアアアアアアアアツツツ!!』

『トール』が持つ《電撃ハイブースタ》により強化された《雷神演舞》は、『シャドウ飛鳥』の強力な魔法耐性をも貫いてエリザベスに多大なダメージを与える。

それだけにとどまらず、この攻撃は相手を確実に【感電】状態にする特性も有り、それによってエリザベスの動きを封じようとしたのだ
が――

『アア……ア、あ、アハハハハハハッ!』

「っ?!」

エリザベスは、笑う、晒う、嗤う――

『ハハ、ハアツ……、ハアツ……! 素晴らしい、素晴らしいですわ！

この強さ……、それこそが私が求めた貴方の証ッ！
もうすぐ、もうすぐ貴方を取り戻すことが出来る！

ですが……まだ、まだ足りない……！ 貴方の強さはまだまだ上がある！ 4つの試練を乗り越えた貴方ならば、残りの試練をも達成し、さらなる高みへと至れる筈なのですから！』

「あの大型シャドウの襲撃は、そういう意味も……！」

そのエリザベスの言葉により、理は理解する。かねてよりの疑問であった、定期的に襲来する大型シャドウ『オワリノカケラ』、その存在意義を。

結城理を依ドリー・カドモン代とし、『向こう側』の『有里湊』を復活させる祭儀『英雄合体』えいゆうがったい。

そして『試練』とは、過去での彼女の発言により、理の中に核として存在する【愚者】と、【魔術師】から【刑死者】まで計十三個へと割かれた『有里湊』の魂を理の中に取り込ませることによって、彼の復活を執り行う祭儀である事が解っている。

しかし、何故それが大型シャドウというカタチを持って、理達と戦わせる事になるのかが分からなかったのだ。

だがそれは、彼の成長を促すモノでしかなかったという無常。その程度の『試練』さえ打倒できなければ、自身の下へと至る資格は無いというエリザベスの傲慢。

これまでの大型シャドウ襲撃の真実とは、ただそれだけであったのだ。

狂気——ただ、そうとしか言い表せない。エリザベスのその言葉には、完全な狂気が含まれていた。理はそれに恐怖する。そう言った感情を忘れかけて久しい彼がだ。

そうして恐怖して、戦慄して、畏れて、その後に彼が抱いた感情は

——『怒り』だった。

『……ふぎけるなよ、エリザベス』

そう憤りの声を上げるのは理ではなく、彼の中に居る『有里湊』。

『未だ記憶が揃っていない僕でも解る。……僕はあの選択を、あの結末を——受け入れている。それこそが、かつて僕がキミと結んだ

『契約』だったはずだ』

湊はその手に『召喚器』を、かつての『契約者の鍵』であり、〃こちら側〃で唯一無二の〃向こう側〃の物品となるそれを握りしめながら、血を吐き出す様に吐露する。

『死んだ人間は生き返らない、それが当たり前なんだ。……そうでなければ、僕と仲間達が辿った軌跡は、本当に無意味になってしまふ』
紡がれる言葉には果たして、如何なる程の激情が籠められているのか。

昏く濁るその銀灰色の瞳は、一体どれ程の絶望を覗てきたというのか。

異なる世界の身体に宿るその魂は、どのような死を迎えたというのか。

『なのにキミは、どうあつても僕を蘇らせようとしている。……そんなこと、僕は望んでなんかいない。キミにそんな愚かな事をして欲しくもない！』

湊は大声でエリザベスを怒鳴りつけ、彼女の思想を否定し、拒絶し、そして断罪する。

『目を覚ませエリザベス！ 僕と共にいたキミは——、其処まで弱かったのかッ！』

『っ！』

有里湊は、目の前に居る『シャドウ飛鳥』、引いてはエリザベス自身を、弱いと言いつつ切った。未だどちらも引かぬ攻防が続く中で、お互いの実力は拮抗しているというのに、彼女の心の弱さを湊は断じた。

その言葉こそが、エリザベスを動揺させて動きを封じた。そうして、彼の次なる一手へと繋げる事になる。理は二体のペルソナを引き連れ天へと跳躍し、新たなミックスレイドを発動させる！

「シヴァ、パールヴァティ！ 《アルダナ》！」

戦況を見守る少女達は次の瞬間、まるで太陽が出現したかのように錯覚した。それは理を中心にして現れた、燃え盛る巨大な炎。真夜中の影時間・影結界の中さえも明るく照らす、生命の権現だ。

結城理によって召喚された二体のペルソナ、インド神話の破壊神

『シヴァ』、その正妃神『パールヴァティ』。理の背後に浮かぶ彼らは重なり合う様にして融合し、その姿を新たなるペルソナ『アルダー』として昇華させる。

神話において完全なる神『アルダナーリーシユヴァアラ』ともされる『アルダー』は、その力で以て世界や万象の創造をもたらすとされる。今現出させた宇宙コスミック的熱量フレアでさえ、この両性具有の神の一側面ではないのだ。

「——行け」

太陽の中心で理が指示すると共に、炎はまるで龍、或いはプロミネンスの様にカタチを変貌させ、エリザベスに喰らい付こうとする。

対してエリザベスは「感電」、そして自失状態から立ち直ったのか、臆することなく《アルダナ》に立ち向かうのだった。

『……違う、私は——ッ!?!』

そんな悲しげな声と共に、迫り来る炎の龍を《ムラマサコピー》で切り払う。しかし同時に、困惑の声も漏らした。

『はあっ!』

無理もないだろう、《ムラマサコピー》によって切り払われた炎の先に、彼が居ただけだから。どうやら龍と化した《アルダナ》の炎に紛れ、突っ込んできたらしい。その両手に苦無を構え、エリザベスに攻撃する様だ。

その武器の向かう先は『シャドウ飛鳥』の胸部。彼は既に、今『シャドウ飛鳥』取り込まれている飛鳥を救う手段を見付けていたのだ。内容は至極単純、シャドウの体内に居る彼女を抉えぐり出せばいいだけの事。

元より、エリザベスの干渉により飛鳥とシャドウとの結合は緩まっている。後はそれを、物理的にも切り離せばいい。

無論、それを容易く通す彼女ではないだろう。これまでの戦闘で、《ムラマサコピー》による驚異的な近接戦闘能力を理は思い知っている筈だ。それ故に、急な突貫攻撃に転じた彼を少女達は訝しむのだった。

案の定、迫る彼に向けて《ムラマサコピー》を突き立てようとする

エリザベスだったが――

『つ、そんな単調な攻撃など――あ……』

……しかし、その光景に誰もが眼を疑う。エリザベスは彼を貫く筈であった《ムラマサコピー》ごと動きを完全に停止し、逆に苦無を突き立てられていたのだから。

今の今まで苛烈な攻撃を繰り返していたからこそ、目撃者である少女達はエリザベスの行動を信じられない。一体、何が彼女の動きを制したというのか。

「……あれ」

最早呼吸までもが億劫になるほどの異常な空間の中で、最も初めに声を出せたのは雲雀だった。震える指で指し示すのは、彼でもなく、エリザベスでもなく、その上空。つられて少女達も、その指先を追う。そうしてそれを認識した瞬間、少女達はやはり自分の眼が可笑しくなったのだと錯覚すらしてしまう。尤も、少女達が眼にしたそれは紛れもない現実だ。

何故なら其処には、もう一人の結城理が存在したのだから――

「……あれは、さっきまで結城さんが使っていた『力』そのもの。それを結城さんは、ペルソナとして召喚した――」

やはり彼女の『華眼』は、的確に状況を捉えていた。震える声でエリザベスを貫いた彼こそが、結城理の力であることを理解する。……しかし、先程から雲雀は完全な解説キアラになってしまっている。探知系能力者である故の弊害である。これからも頑張つて欲しい。

雲雀の解説通り、今エリザベスを貫いた彼は、結城理によつて召喚されたペルソナ『有里湊』だ。上空の理も《アバター・チューナー転生》として纏っていたこの力を解放したため、その姿も普段の半蔵学院制服に戻り、《チャクラの具足》によつて空中に立っている。

『ふっ！』

『ぐっ！』

そして、ペルソナ『有里湊』はその手に携えた苦無二刀を滑らせるように奔らせ、今度は『シャドウ飛鳥』の両腕を切断し《ムラマサコ

ピー』を封じた。

エリザベスは呻き声を上げながらも、何とか『有里湊』を突き飛ばす。しかし、もう既に遅い。甚大なダメージを受け、武器さえも失ったエリザベスは最早成す術がない。

そうして最後の止めの一撃は、理へと委ねられる——否、湊が委ねたのだ。

『……エリザベス、キミを止めるのが僕の役目だけど、飛鳥その子を助けるのはあくまで理の役目だ』

ペルソナと化した湊は、ダメージを受けたことによりその身体を霧散させ、理の心の海へと還っていく。その中で彼は、エリザベスにゆっくりと語り掛けた。

彼女は既に満身創痍で両腕を失いながら、それでも彼を求めようとする。最早みつともなく見えてしまうそれは、それでも譲れない『信念』がある事の証である。

だがここまでだ。伸ばした手が届く事は無く、彼女の願いは叶わない。

『……後は任せたよ、理』

『……ああ』

理はもう一人の自分有里湊の言葉にほんの短く応えると、《チャクラの具足》により空を強く踏みしめ、猛然と突っ込んでいった。

そしてエリザベスへと向けて、湊は最後の言葉を告げる。

『……エリザベス、キミはきつと、ここで負ける事になっても僕の事を諦めないだろう。キミはそういうヒトだったのを、僕は覚えている』
そんな中で、理はふと考える。彼自身、湊がエリザベスに何を見出したのかはそれ程理解した訳ではない。

『有里湊』はペルソナというもう一人の自分と云えど、人格も記憶も別である以上、それはもう一人の自分ではないのだから。

あくまでも湊の想いは湊だけの想いであり、理はそれに干渉する事を良しとしないでいた。

それでも、ただ一つだけハッキリとわかる事がある。

『……だけど、キミがどんな手段で以て来ようと、僕がそれを止める。

僕が此処に居るといふ『奇跡』は生き返る為じゃなく、きつとその為
に有る』

これから先、どんなことがあるとも有里湊は、エリザベスを止め
るために結城理に力を貸すだろう。何故なら彼は――

『僕は、キミの守護者だから――！』

ガーディアン

ガーディアン

『守護者』。それは、強い心を持つ人間が大切な『絆』を護る為に、そ
の魂をペルソナへと転生させた存在。『有里湊』というペルソナは、そ
の為に結城理と契約を交わし、此処に到ったのだ。

そうして、湊は再び理の方を見上げ、小さく呟く。

『……そう、理にもきつと――』

そんな言葉を残して、彼は理の心の海へと還っていった。

視点は理の方へと戻る。エリザベスを攻撃し、中に取り込まれた飛
鳥を救う為、今だ慣れない《チャクラの具足》を駆使し、彼は翔ける。

しかしながら、飛鳥を救うには少々手古摺りそうだ。今の理は武器
を喪失し、《転生》の補助も消え、余力も左程残っていない。そのくせ、
エリザベスはまだ足掻こうとする様だ。何処までも彼を想う故だろ
う。

それでも理は止まらない。エリザベスの湊への譲れない想いが相
手ならば、此方とて飛鳥への譲れない想いが存在する。湊にさえ託せ
ない飛鳥の救出という大事な役目を、此処で失敗する訳にはいかない
！

『……エリザベス、これだけは言っておくよ。俺は俺だ。『結城理』で、

『有里湊』じゃない』

放たれる魔法の乱れ撃ちを躲しながら、今度は理がエリザベスに語
り掛ける。それは彼女を知る湊の言葉ではなく、此処に生きる結城理
としての言葉だ。

『……俺はこの力を、この命を、彼女達の為に使うと誓ったから、此処
で死ぬ消えるわけにはいかない』

淡々とした口調ながらも、その言葉には強い想いが含まれている。

マジシャン

それは嘗て『魔術師』と相対し、このペルソナ能力を覚醒させると
共に手に入れた彼女達との確かな絆。

今この時まで、少女達と紡いだ心の在り方。

「飛鳥、斑鳩、葛城、雲雀、柳生——『忍』という在り方から、俺はそれを教わった。それこそがきつと、俺の『正義』なんだ。……だから——」

少女達『忍』が掲げる『正義』というモノを、高々己如きが言うべきではないのかもしれない。

それでも、この想いは間違いなく、少女達との出会いによって得たのだから。

理は、高らかに告げる。

「——結城理！ この胸の『正義』を、舞い謳う！」

その前口上は、少女達にあやかかって紡がれた、結城理の正義の宣誓だ。

今此処に『結城理』という一人の人間が、己の正義というその想いのまま、飛鳥という少女を救うという宣言だったのだ。

……だからこそ彼^{Overdrive}は、限界突破する——

「『ユージョ』『ランス、リブ』『トアー』」

それは果たして、如何なる力であるのだろう。少女達の見ている中で、理の纏う雰囲気はまたしても変わる。それも、忍でもペルソナでもない、全く異質な物。

しかしその能力は、彼の手の中へと得体の知れぬ力が収束し、新たなカタチを織り上げるといふ、嘗て葛城が理へと提案した『ペルソナの武器化』の筈だ。

理の手には、そうして武装化^{ライム}した新たな武器^ムが握られているのだから。だが——

「あれは……、『薙刀^{なぎなた}』？ 結城さんはあのような武器は使ったことが無い筈ですが……？」

事の次第を見守っていた斑鳩から疑問の声が漏れる。彼女の言う通り、理は器用さと長年の経験を駆使し、様々な武器を使いこなすことが出来る。刀剣や徒手に始まり、槍、斧、弓、等々だ。

だが、少女達は理との訓練の際、薙刀という武器を使ったのは見たことが無かった。強いて言えば槍に近いが、それでも使い方は違う筈

だ。何故彼は、あのような武器を使うのだろうか？

そして、その薙刀の形状も特異だ。虹色の羽根飾りという煌びやかな装飾が施されている。その銘を『孔雀御前』。〔星〕アルカナのペルソナ『カルティケーヤ』を^{エク}魂[■]として武装化された、至高の一品だ。

『《女^{ヴァ}■^{リー}■^{ライ}》、《受胎^{ホルテクス}・孔雀御前》』

弁座上、彼[■]が獲得したこのスキルの名を、《女^{ヴァ}■^{リー}■^{ライ}》——いや、^{ホルテクス}《受胎》と命名する。

ペルソナがその身に^{じゆたい}受胎し、一つの道具^{アイテム}を産み落とすという“向こう側”の有里湊の能力。これはそれと同じ、或いは全く別の能力かもしれない。

ただ一つ確かな事は、この能力によって彼[■]は、『シャドウ飛鳥』を貫く武器を手に入れたという事だった。

『「やあッ！」』

気合一閃、彼[■]はそんな掛け声と共に孔雀御前を『シャドウ飛鳥』の胸に突き立て、振り抜く。切り開かれて中身を曝け出し、その中に躊躇う事無く身体を突っ込んで、彼[■]は背部から飛鳥を抱えて飛び出す。

『「うん、バッチリ♪」』

そんな、理らしくない、紅い眼をした彼[■]らしい呟きと共に——

29話 絆

「——っ、飛鳥！」

『シャドウ飛鳥』を貫いて着地するとほぼ同時に、理は腕の中の飛鳥に呼びかけていた。

ふと気付くと、何時の間にか彼女を抱えているとか、シャドウの粘液に塗れているだとか、観たことも無い武器を握っているだとか、不可解な状況の真っ只中に居るといふのに。

尤も、理はそこに何の違和感も覚えないのでから、今はどうでもいいのだが。

「うん……、ゆうき……、くん？」

理のその声に反応したのか、飛鳥はゆつくりと目を覚ます。目は虚ろで言葉も覚束無いが、意識をちゃんと有る様だし、命に別状もないだろう。

彼女からしてみれば、自身の精神世界でシャドウを抑え込もうとし、エリザベスに妨害され失敗して意識を消失した後、理の顔が目の前に在るのだから多少の衰弱、混乱は必然である。

それでも、理という好意を寄せる少年に抱き寄せられ、目の前に顔があるというのは流石に彼女の理解を超えている様だ。段々と飛鳥の眼がぐるぐると回り始めている。

「……飛鳥、良かった……」

「わひっ?!」

そこに、感極まった理に更に抱きしめられでもすれば、混乱はさらに加速する。両腕で抱えるようにして抱き寄せられ、飛鳥の頭は理の胸元に密着するという体勢だ。

「(やばいやばい結城くんやばい抱きしめ良い匂いが華奢だけど固い筋肉が目の前に手付きが優しく背中がナデナデされてあばばばばば——)」

そんな風に飛鳥の混乱は頂点に達しているのだが、それを行っている当の理自身は露ほども気付かず、飛鳥を助けられたことを嬉しく思っているだけである。

周りの少女達からしてみれば、人誑しという何時もの悪癖——果たして『悪』と言つていいものか——が出たのだと、飛鳥に同情するのだった。……ついでに、ちよつと羨ましい。

尤も、そんなラブコメなど、長続きはしないのが今の状況であるのだが。

「……………っ」

理は突如として険しい顔をする、武装化[■]していた『孔雀御前』を破棄し、飛鳥を庇うようにして抱きしめながら、あらぬ方向を向く。眼を向けたのは、未だ妖しく輝く影時間の月。その様子に、飛鳥も斑鳩達も只ならぬ雰囲気を察し、全員でそちらの方向を向く。

理は気付いているのだ。あの禍々しき月こそが、全ての元凶である事を。大型シャドウ達が、そして彼女こそが、あの月から訪れるのだという事を——

「……………来たんだね、エリザベス」

彼らの目線の先には、上空からゆっくりと降りてくる女性、エリザベスの姿があつた。

ゾツとするような美貌、黄金の双眸、プラチナブロンドのボブカット、青一色に染められた衣装、その手に抱えられたペルソナ全書。

その全てが、かつて理が相對した十年前の彼女と何一つ変わりが無い。尤も、夢と現実、物質と精神の間に存在する彼女からしてみれば、時間の経過など大した障害ではないのだろう。ハッキリ言つて、老化や寿命の概念が有るかさえ疑わしい。

有里湊が知つていて、結城理が識つているエリザベスとは、そういう女性なのだ。

「……………」

エリザベスは全くの無表情のまま、結城理を見定めている。月からの逆光によつて表情は窺い知れないが、しかし其処に殺気や侮蔑などは存在せず、見下ろしてはいるが見下してはいない。

かつては有里湊の依代として選び、その為の存在でしかなかった筈の彼を、今はハッキリと視界に捉えている。

「私は……………力で自分を上回つたものに出会つた時、答えを得られる

……そのはずでした」

エリザベスはゆっくりと紡いでいく。そこに悲壮等は感じられず、淡々と自身に言い聞かせている様にも聞こえる。もしくは戸惑いだろうか。

「しかし、こうして今私を打ち破ったのは、あの方では無い……。そう、これこそが答え……」

……いや、違う。今のエリザベスの心の中を占めるのは、『結城理』という新たな道を見つけ出したという驚き。それに伴う、『希望』なのだ。

それでも、『有里湊』を追い求める彼女からしてみれば、未だ納得できずにいるのかもしれない。

俯くように伏せていた顔を上げると、其処にはキラキラと輝く黄金の双眸、何かしら決心を見せる、力強い視線だ。

そして、エリザベスの気配が増大する。それは敵意や殺気を纏わな
い、闘気を剥き出しにした、バトルジャンキー戦闘狂のそれだ。

手にしたペルソナ全書が開き、一枚のカードが浮かび上がる。描かれたアルカナは、『死神』。そして、其処から召喚されるペルソナは――

「来たれ、タナトス！」

「なッ?!」

それは、理が召喚するペルソナと、全く同一の姿形をしたペルソナ『タナトス』。有里湊の根源、『死』という力そのもの。

対して、エリザベスが召喚した『タナトス』は――

「エリザベス……ッ！ それは、有里湊僕の残滓か……!」

「その通りでございます。かつての湊様が辿り着いた、生と死の転換期、死のアルカナ、もう一人のアナタ。私と彼を繋ぐのに、最も相応しいペルソナです」

かつての十年前、結城理に有里湊の魂を封印した際も『タナトス』は現れていた。その『タナトス』は正しく、湊の魂そのものであったからだ。尤も、今エリザベスに操られる『タナトス』は、その抜け殻のようなモノでしかない。

そして、彼女が纏う気配がさらに増大し、ペルソナ全書からも溢れんばかりにカードが撒き散らされる。それらは彼女を取り巻くように一列の帯状に規則正しく並び、やがて高速で回転し始める。

それら蒼色に淡く発光するペルソナカード達はエリザベスの魔力を高め、彼女の最大最強のスキルを発動させるのだ。

「この魔法、さっきの《メギドラオン》ってヤツか!? 二発目だぞツ?!」
「チツ、化け物め! 加減を知らないのか!」

その光景を見ていた少女達にも動揺が走る。先に受けた《メギドラオン》の恐怖を思い出しているのか、エリザベスを罵り、足は竦みながらも、心は折れていない。それは斑鳩や雲雀は勿論、今背中に庇っている飛鳥も同様だった。

そんな少女達の姿を見て、理は本当に良い仲間を得たと、心から思う。喪ないたくないと、心が訴える。愛おしいと、心が震える。だからこそ――

「……もう一度、力を貸してくれ、湊! —— 《アバタール・チューナー転生》っ!」

己の愛しき人たちを護らんとする為、理はその力を解放する。

理は一瞬にして決断すると、再び《アバタール・チューナー》を発動し、蒼炎を立ち昇らせて装束月光館学院制服を身に纏う。

同時に、多数のミックスレイドの行使による精神S力を忍学科から提供された薬——それも虎の子である『ソーマ』で——で回復しつつ、《インフィニティ》による防御を試みる。

……だが――

「ツ?! が、はっ!」

「結城くん!」

突如として、理が崩れ落ちる。背後に庇われていた飛鳥が慌てて助け起こすが、その身体に触れた際、彼の尋常でない様子に気付いてしまふ。

一人では起き上がれない程の体力の低下だけでなく、発汗や発熱。あまつさえ飛鳥のしている前で嘔吐する等、明白な体調不良だ。

「駄目、結城さんっ! それ以上その力を使ったら、結城さんの身体が持たないよっ!」

相変わらず、『華眼』によつてステータスを見抜く事が出来る雲雀の
声が届く。彼女の言う通り、理のこの症状は《アバタール・チュー
ナー》による反動だ。

より正確に言えば、異なる魂を身体に入れる事によつて起こる拒絶
反応。《転生》の二度目の行使は、彼の限界を超えていたのだつた。

尤も、その僅か二回で《アバタール・チューナー》のデメリットま
で把握しろと言うのも酷な話だ。崩れ落ちる理でさえ、この反動を
「悪阻つわりみたいだ……」等と馬鹿みたいな事を思っていたりする。

しかし、これによつて戦局は完全にエリザベス側に傾いた。

「いざ、本日のグランドファイナーレ！ 《メギドラオン》で御座います
！」

収束したエネルギーが、遂に解き放たれる。威力を微塵も減退させ
ず、この様な状況でなければどれ程馬鹿げた精神S力Pを備えているのか
と呆れていただろう。

最早、理の《インフィニティ》は使えない。《メギドラオン》を防ぐ
術は存在しない。このまま彼らは、なすすべなく吹き飛ばされるとい
うのか。

「……嫌だ」

「飛鳥……？」

そんな最中、理の背後で支えていた飛鳥が、ぽつりと漏らす。

その言葉は何時か聞いた——そう、あれは彼らの二度目の会合の時
だ。数多のシャドウを眼の前にし、『死』が目前に迫っても折れなかつ
た、飛鳥の心の叫びだ。

「私は……、私たちは死なない！ 絶対に死なない！ 忍の道を極め
るまでは！」

一言一句違わず漏らされる彼女の独白。しかし今回はそこに、新た
にもう一つの想いが加わる。

「結城くんも……死なせない。何があつても、私達と一緒に生きるた
めに！」

「……っ！」

『一緒に生きる』、傍から聞けば、愛の告白そのものな台詞を飛鳥は

羞恥も臆面も無く言い放つ。

おそらく無意識の賜物であろうその言葉は、しかし彼女の純粋な想いであり、果てしなく理の心を揺らす。

そんな彼女の想いこそが、この試練を打破する一手となるのだ。

「——来て、『ヘカテー』！」

そうして召喚されるは、飛鳥のペルソナ。今までカタチを結ばなかった彼女の力は、此処に初めて現出した。

飛鳥のペルソナ『ヘカテー』。アルカナは【魔術師】。ギリシア神話に謳われる地母神の一柱とされる女神だ。その二つ名に『魔術の神』『死の女神』『永遠なるもの』と、様々な名を関している。

また同時に、月の女神『アルテミス』、冥府の女王『ペルセポネ』とも同一視されるトリプル・ゴッデス三相女神でもあった。

その姿は、飛鳥の秘伝動物でもある蛙が反映されているのか、頭に大きな帽子をかぶり、それはデフォルメされた蛙のカタチを模している。

身体には真っ白なドレスを身に付け、スタイルは勿論豊満。その手には【魔術師】らしい魔杖を携えている。顔立ちは飛鳥に近く、彼女を大人びさせたものだろうか、絶世の美女であった。

「結城くん、行くよ！」

「ああ！」

そして、飛鳥は既に自分がどうすればいいのかを察していた。『ヘカテー』の力を以てして、目の前の驚異に立ち向かうのだという事を！

飛鳥は『ヘカテー』の召喚を維持したまま、理の身体を背中から抱きしめ、互いの手を重ねる。理には飛鳥の体温と、身体の柔らかさと、そしてペルソナ能力の覚醒によって発現した、新たなスキルの繋がりが感じられる。

それは、『ヘカテー』の持つ地母神としての権能。大地と魔術と生死を司るこの力を、理のミックスレイド、あの《メギドラオン》にも匹敵するスキル《ハルマゲドン》と掛け合わせ、新たな合体スキルとして昇華させるのだ。

そうして誕生したスキルは、奥義のさらに上に位置するもの。飛鳥の大地の力と、理の万能の力が融合し、今此処に最強のスキルは誕生する。

いざ括目せよ、彼らが住まうこの大地は、正しく地母神の卓の上。其処に位置する獲物は、彼女の贅でしかないことを、このスキルは示すのだから！

「――喰らい尽くせ、《地母の晚餐》！」

重ねられた手を突き出し、その力を大地へと向けて解放する。そうして地の底から発生したエネルギーは大地を割り、上空から迫っていた《メギドラオン》とぶつかり合う。

大地が鼓動する。空間が震える。世界が揺れる。地に走る龍脈からの力も取り込んで、《地母の晚餐》はさらにその威力を高める。エリザベスの《メギドラオン》とも拮抗するほどに。

余談だが、龍脈にすら干渉できる能力などこの世界にはほとんど存在しない。辛うじて忍陣営には龍脈からの声を聴くことの出来る少女が居るのだが、彼女と関わり合うのはもう少し後の話だ。

そして、ぶつかり合う二つのスキルは双方にとつても、この闘争を終わらせる真正銘最後の一撃。

勝敗の付け方は至極単純。最後に、戦場に立っていた者の勝利だ。無論理も飛鳥も、ここで負ける心算など毛頭無い。

「おおおおおおおおおおおつっつっつ！！！！」

拮抗するかに見える《地母の晚餐》と《メギドラオン》。いや、本来ならば、此処まで来てもエリザベスに敵う事は無かっただろう。『力の管理者』とは、それ程までに強大な存在であるのだから。

それでも、理の傍には、仲間が居る。

「此処まで来て、負ける訳にはいきませんッ！」

理と飛鳥が劣勢の状況に陥ったことを把握した斑鳩の行動は迅速だった。忍学科内でも最速の運動能力を誇る彼女は一瞬にして二人の傍に駆け寄ると、その身体を支え援護しようとする。嘔吐物で身体が汚れようがお構いなしだ。

追隨して葛城、柳生と雲雀も集合する。皆が皆、二人の身体を支え

ようとしてもみくちやにの肉団子状態になりながらも、各々の役目を果たしていた。

「大丈夫か、結城、飛鳥！ 此処が正念場だ、踏ん張れよ！」

「諦めるなよ、オレ達はまだ負けていないのだからな！」

「頑張つて、あと少しだよっ！」

それらは全て、大切な仲間である理と飛鳥を護る為だ。こんな絶対不利な状況であるのに、お互いを助け合うというこの状況に誰もが嬉しさを込み上げる。

そして、この絶望的なエネルギーを眼にしても揺るがないその決意を見て、エリザベスは唇を薄く釣り上げ、微笑む。

エリザベスは気が付いている筈だ。彼らのあの姿こそまさに、自身が求めうる『絆』の力そのものであると。

それら絆の力が、絶対強者を打ち破る事に何の異論があるだろうか？

《地母の晩餐》が《メギドラオン》を打ち破ったその時も尚、エリザベスは微笑んでいた——

「……お見事です——」

全てを出し切り、今度こそ地面へと倒れ伏していく——少女達がその身体を抱き支えていた——理には、エリザベスのその言葉が届いていた。

その言葉に含まれる感情は、歓喜であり、喜悅であり、そして希望に満ちたモノ。

彼女はとうとう見つけたのだ。この世界を取り巻く絶望を打破するに相応しき、『救世主^{メサイア}』という存在を——

「貴方ならばきつと、あの『混沌』すらも——」

そんな言葉が耳に届くと同時に、理はついに意識を喪失するのだった。

長い夜がようやく終わりを迎える。理も、少女達も、よくぞここまで持ったものだ。

この夜だけで色々な事が起こりすぎた。二体の大型シャドウに始まり、飛鳥のシャドウとの連戦、新たなスキルの獲得、そしてエリザベスとのぶつかり合い。

それでも、それらの出来事を通して得たものは、限りなく大切なモノだったと胸を張って言える。

新たなアルカナ、【女帝】じよていと【皇帝】こうてい。有里湊の魂の力を得る
アバタール・チューナー 転 生。ペルソナを武装化ライする 受胎ホルテクス。

そして、それら新しい力よりもずっと大切だと言える、飛鳥からの
想い——

それでも今は、少しばかりの休息をとる事にしよう。

少女達のぬくもりに抱かれ、今はただ翼をたたんで、ゆっくり眠ろう。

そうして微睡んでいく理を少女達は柔らかに受け止め、微笑みながら見つめているのだった。